

七日市陣屋跡・七日市古墳群 小原遺跡 上佐烏明神前遺跡(前橋市 0934 遺跡)

県立学校施設整備事業(富岡・甘楽地区新高校整備、
吾妻地区新高校整備、前橋商業高等学校第二グラウンド
移転整備)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2019

群馬県教育委員会事務局管理課
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

本書は平成28年度富岡高等学校弓道場移設工事及び平成29年度県立学校整備事業に伴って発掘調査した遺跡の報告書です。

県立学校整備にかかる平成29年度の発掘調査は、台遺跡(館林特別支援学校改築整備事業)、七日市陣屋跡・七日市古墳群(富岡・甘楽地区新高校整備事業)、小原遺跡(吾妻地区新高校整備事業)、上佐鳥明神前遺跡(前橋商業高等学校第二グラウンド移転整備事業)の4件があり、本書にはその内の3遺跡(七日市陣屋跡・七日市古墳群、小原遺跡、上佐鳥明神前遺跡)の調査成果を掲載しています。

七日市陣屋跡・七日市古墳群は、旧七日市藩陣屋跡内の調査のほか、七日市古墳群の一画で新たに古墳1基を確認しました。

小原遺跡では、中之条盆地の吾妻川左岸の南向き緩斜面にあり、近世～近代とみられる溝を3条検出しました。

上佐鳥明神前遺跡は、開発対象区域のうち道路部分について発掘調査を行ない、浅間山の天仁元年(1108年)噴火に伴う降下火山灰等の下から検出された水田跡を調査しました。本遺跡の周辺では、同じ平安時代末期の水田跡を検出した遺跡が多数あり、本遺跡は新しい事例を追加しています。

それぞれの遺跡の調査では、遺跡近隣地域の方々をはじめ、地元の教育委員会、群馬県教育委員会事務局管理課・同文化財保護課の協力を得て進められました。ここに深く感謝申し上げます。

本書が地元の歴史とともに、群馬県の歴史について理解する一助となるよう活用していただければ幸いです。



平成31年3月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 中野三智男

例 言

- 1 本書は、平成28年度富岡高等学校弓道場移設工事及び平成29年度県立学校施設整備事業(富岡・甘楽地区新高校整備、吾妻地区新高校整備、前橋商業高等学校第二グラウンド移転整備)に伴う七日市陣屋跡・七日市古墳群、小原遺跡、上佐鳥明神前遺跡(前橋市0934遺跡)の発掘調査報告書である。
- 2 対象となった各遺跡の所在地は、第1章に示す。
- 3 事業主体 群馬県教育委員会事務局管理課
- 4 調査主体 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 発掘調査及び整理に関わった体制と期間は、第1章に示す。
- 6 石器石材同定については飯島静男氏(群馬地質研究会会員)をお願いした。
- 7 石器の観察と器種認定は津島秀章(資料第2課長)、縄文土器・弥生土器の観察及び型式認定は石坂茂(専門調査役)、土師器・須恵器・陶磁器の観察と時期認定は大西雅弘(専門調査役)が行った。
- 8 発掘調査の記録資料と出土遺物は、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 9 人骨の分析鑑定については、楢崎修一郎氏(大妻女子大学博物館)に委託した。
- 10 発掘調査においては以下の関係機関から有益な助言と指導を賜った。記して感謝の意を表します。
群馬県教育委員会文化財保護課、富岡市教育委員会、中之条町教育委員会、前橋市教育委員会。

凡 例

- 1 本書で使用した遺構平面図の座標は、すべて世界測地系(日本測地系2000平面直角座標系第IX系)を用いた。挿図中の方位記号は座標北を示す。
- 2 等高線・遺構断面図等に記した数値は、海拔標高を示す。
- 3 挿図縮尺は各図中に記載してあり、単位は遺構図がメートル、遺物図がセンチメートルで示してある。
- 4 遺構名称は原則として発掘調査時点で付けられたものを用いたが、一部を変更している(変更した場合は、各遺構記述に旧名称を付している)。また、遺構断面測量基準点となるアルファベット名は、報告書掲載の都合上で振り替えたものもある。
- 5 遺構の計測は、全容が計測できない遺構については残存値()で表記した。
- 6 土層の色調表記には、「新版標準土色帖2005年版」(農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所 色票監修)を用いた。
・使用スクリーン トーン 遺構図  攪乱 遺物実測図  ガラス化
- 7 遺物観察表での表現および記載法は、おおむね以下の通りである。
 - ・遺物観察表は遺構毎とし、章の後ろにまとめて掲載した。
 - ・遺物計測位置の表現は、陶磁器類は 口径:口、底径:底、器高:高、高台径:台と略記し、他の遺物についても、長さ:長、幅:厚さ:厚、高さ:高、外径:径、孔径:孔、重さ:重と略記した。
 - ・計測値の単位はcmとし、重量はgで表記している。
 - ・欠損した遺物の計測値には、()で現存値を記した。
- 8 本書で使用した地形図は下記の通りである。
第2章 七日市陣屋跡ほか
国土地理院地形図 1:50,000「富岡」(平成7年発行)
国土地理院の電子地形図 25,000を掲載
第3章 小原遺跡
国土地理院地形図 1:25,000「中之条」「群馬原町」(平成9年発行)
第4章 上佐鳥明神前遺跡
前橋市都市計画図1:2,500 昭和43年に加筆した。
第一軍管地方迅速測図1:20,000「前橋」「高崎」明治18年に加筆した。
国土地理院1:25,000地形図「前橋」平成22年を拡大した。
- 9 本文中で用いたテフラの略名称は町田洋・新井房夫1992『火山灰アトラス』(東京大学出版会)に従い、以下のとおりとした。
As-A---浅間A軽石 天明三年(1783年)の浅間山噴火に伴う軽石
As-B---浅間Bテフラ 天仁元年(1108年)の浅間山噴火に伴うテフラ
Hr-FP---榛名二ツ岳伊香保テフラ 6世紀中ごろの榛名山二ツ岳の噴火に伴うテフラ
Hr-FA---榛名二ツ岳渋川テフラ 6世紀初め頃の榛名山二ツ岳の噴火に伴うテフラ
As-C---浅間山C軽石 3世紀後半～4世紀初め頃の浅間山噴火に伴うテフラ
As-YP---浅間山 板鼻黄色軽石

序	
例言	
凡例	
目次	

第1章 各遺跡の位置と概要

1 七日市陣屋跡・七日市古墳群―富岡・甘楽地区新高校整備事業	3
2 小原遺跡―吾妻地区新高校整備事業	3
3 上佐鳥明神前遺跡―前橋商業高等学校第二グラウンド移転整備事業	3

第2章 七日市陣屋跡・七日市古墳群

第1節 調査に至る経緯、方法と経過	6
第2節 遺跡の立地と周辺遺跡	10
第3節 遺跡の基本層序	17
第4節 検出された遺構と遺物	18
第5節 出土人骨の分析	61
第6節 調査成果とまとめ	63
遺構一覧	66
遺物観察表	71

第3章 小原遺跡

第1節 発掘調査実施の経緯と経過	82
第2節 周辺の地形と歴史的環境	84
第3節 検出された遺構と遺物	88
第4節 まとめ	95

第4章 上佐鳥明神前遺跡

第1節 調査に至る経過	98
第2節 立地と環境	98
第3節 調査の方法と経過	103
第4節 検出された遺構と遺物	104
第5節 まとめ	108

報告書抄録	109
写真図版	

挿図目次・表目次・写真図版目次

第1章 各遺跡の位置と概要

挿図目次

第1-1図	各遺跡所在の市町	2
第1-2図	七日市陣屋跡・七日市古墳群の富岡市内位置	3
第1-3図	小原遺跡中之条町内位置	3
第1-4図	上佐鳥明神前遺跡の前橋市内位置	3

第2章 七日市陣屋跡・七日市古墳群

挿図目次

第2-1図	遺跡位置図	6
第2-2図	調査範囲図	7
第2-3図	調査区・グリット設定図	8
第2-4図	富岡市域の地形区分	10
第2-5図	周辺遺跡位置図	13
第2-6図	基本土層模式図	17
第2-7図	第1地点全体図	18
第2-8図	第1地点1～3号土坑、1号溝 平・断面図	19
第2-9図	第2地点全体図	22
第2-10図	第2地点1号掘立柱建物 平・断面図	23・24
第2-11図	第2地点2号掘立柱建物 平・断面図	25
第2-12図	第2地点1～5・8～11号土坑 平・断面図	33
第2-13図	第2地点12～14・16～20号土坑 平・断面図	34
第2-14図	第2地点21～31号土坑 平・断面図	35
第2-15図	第2地点32～34号土坑 平・断面図	36
第2-16図	第2地点35・36号土坑 平・断面図	37
第2-17図	第2地点37A・B号土坑 平・断面図	38
第2-18図	第2地点土坑出土遺物面図(1)	39
第2-19図	第2地点土坑出土遺物面図(2)	40
第2-20図	第2地点土坑出土遺物面図(3)	41
第2-21図	第2地点土坑出土遺物面図(4)	42
第2-22図	第2地点土坑出土遺物面図(5)	43
第2-23図	第2地点土坑出土遺物面図(6)	44
第2-24図	第2地点土坑出土遺物面図(7)	45
第2-25図	第2地点土坑出土遺物面図(8)	46
第2-26図	第2地点1～3号墓 平・断面図、出土遺物	47
第2-27図	第2地点1号柵 平・断面図、出土遺物	48
第2-28図	第2地点1・2号井戸 平・断面図、出土遺物	50
第2-29図	第2地点1号溝 平・断面図、出土遺物	51

第2-30図	第2地点1～6耕作溝 平・断面図、出土遺物	55
第2-31図	第2地点7～12耕作溝 平・断面図	56
第2-32図	第2地点13～17耕作溝 平・断面図	57
第2-33図	第2地点遺構外出土遺物(1)	58
第2-34図	第2地点遺構外出土遺物(2)	59
第2-35図	第2地点遺構外出土遺物(3)	60
第2-36図	七日市古墳群の分布図	63
第2-37図	前田丹後守御殿中	64
第2-38図	七日市前田家廃藩時旧廓絵図	65

表目次

第2-1表	周辺遺跡一覧	14
第2-2表	掘立柱建物一覧	66
第2-3表	土坑一覧	66
第2-4表	墓一覧	67
第2-5表	柵列一覧	67
第2-6表	ピット一覧	67
第2-7表	井戸一覧	69
第2-8表	溝一覧	70
第2-9表	耕作溝一覧	70
第2-10表	第2地点1号土坑出土遺物観察表	71
第2-11表	第2地点5号土坑出土遺物観察表	71
第2-12表	第2地点9号土坑出土遺物観察表	71
第2-13表	第2地点12号土坑出土遺物観察表	71
第2-14表	第2地点18号土坑出土遺物観察表	71
第2-15表	第2地点21号土坑出土遺物観察表	71
第2-16表	第2地点25号土坑出土遺物観察表	71
第2-17表	第2地点28号土坑出土遺物観察表	71
第2-18表	第2地点31号土坑出土遺物観察表	72
第2-19表	第2地点32号土坑出土遺物観察表	72
第2-20表	第2地点33号土坑出土遺物観察表	72
第2-21表	第2地点34号土坑出土遺物観察表	72
第2-22表	第2地点36号土坑出土遺物観察表	73
第2-23表	第2地点37A・B号土坑出土遺物観察表	73
第2-24表	第2地点1号墓出土遺物観察表	77
第2-25表	第2地点2号墓出土遺物観察表	77
第2-26表	第2地点3号墓出土遺物観察表	77
第2-27表	第2地点1号柵出土遺物観察表	77
第2-28表	第2地点1号井戸出土遺物観察表	77

第2-29表	第2地点2号井戸出土遺物観察表	78
第2-30表	第2地点1号溝出土遺物観察表	78
第2-31表	第2地点2号耕作溝出土遺物観察表	78
第2-32表	第2地点遺構外出土遺物観察	78

写真図版目次

P L. 2-1	1	第1地点1区(平成28年度調査) 調査区全景	南から
	2	第1地点2区(平成28年度調査) 調査区全景	南から
P L. 2-2	1	第1地点1号土坑	全景 東から
	2	第1地点2号土坑	全景 北から
	3	第1地点3号土坑	全景 北から
	4	第1地点1号溝	全景 南から
	5	第1地点1号溝	全景 南西から
P L. 2-3	1	第2地点(平成29年度調査) 調査区全景	北東から
	2	第2地点(平成29年度調査) 調査区南半全景	北東から
P L. 2-4	1	第2地点1号掘立柱建物	全景 南東から
	2	第2地点1号掘立柱建物	北辺 北東から
	3	第2地点1号掘立柱建物	東辺 南から
	4	第2地点2号掘立柱建物	全景 西から
	5	第2地点1号土坑	全景 北東から
	6	第2地点2号土坑	全景 東から
	7	第2地点3号土坑	全景 南から
	8	第2地点4号土坑	全景 東から
P L. 2-5	1	第2地点5号土坑	全景 南から
	2	第2地点8号土坑	全景 西から
	3	第2地点10(左)・11(中)・13(右)号土坑	全景 北東から
	4	第2地点10号土坑	全景 北東から
	5	第2地点11号土坑	全景 北東から
	6	第2地点12号土坑	全景 北から
	7	第2地点13号土坑	全景 北から
	8	第2地点14号土坑	全景 南から
P L. 2-6	1	第2地点15号土坑	全景 西から
	2	第2地点8(右)・16(左)号土坑	全景 西から
	3	第2地点16号土坑	全景 西から
	4	第2地点17号土坑	全景 北から
	5	第2地点18号土坑	全景 東から
	6	第2地点19号土坑	全景 西から
	7	第2地点21号土坑	全景 南から
	8	第2地点22号土坑	全景 北から

P L. 2-7	1	第2地点23・24(左下)号土坑	全景 南から
	2	第2地点25号土坑	全景 西から
	3	第2地点26号土坑	全景 南から
	4	第2地点27~29号土坑	全景 西から
	5	第2地点27号土坑	全景 西から
	6	第2地点29号土坑	全景 西から
	7	第2地点30号土坑	全景 東から
	8	第2地点31号土坑	磔出土状況 西から
P L. 2-8	1	第2地点31号土坑	全景 西から
	2	第2地点32号土坑	全景 東から
	3	第2地点33号土坑	全景 西から
	4	第2地点34号土坑	全景 西から
	5	第2地点35号土坑	全景 北から
	6	第2地点36号土坑	全景 南から
	7	第2地点36号土坑	南側集石状況 南から
	8	第2地点36号土坑	南側集石状況 南から
P L. 2-9	1	第2地点37A・B号土坑	土層断面 北東から
	2	第2地点37A・B号土坑	全景 南から
	3	第2地点1号墓	全景 北から
	4	第2地点1号墓	人骨出土状況 北から
	5	第2地点2号墓	全景 東から
	6	第2地点2号墓	磔出土状況 東から
	7	第2地点2号墓	人骨出土状況 南から
	8	第2地点3号墓	全景 北から
P L. 2-10	1	第2地点1号柵	全景 南東から
	2	第2地点1号井戸	全景 東から
	3	第2地点2号井戸	全景 南から
	4	第2地点1号溝	土層断面 南から
	5	第2地点1号溝	全景 北東から
	6	第2地点1~6号耕作溝	全景 東から
	7	第2地点1・2号耕作溝	全景 南から
P L. 2-11	1	第2地点3号耕作溝	全景 南から
	2	第2地点4号耕作溝	全景 南から
	3	第2地点5号耕作溝	全景 南から
	4	第2地点6号耕作溝	全景 東から
	5	第2地点7~12号耕作溝	全景 南から
	6	第2地点13号耕作溝	全景 西から
	7	第2地点15号耕作溝	全景 西から
	8	第2地点16(右)・17(左)号耕作溝	全景 西から

- P L. 2-12 土坑出土遺物(1)
- P L. 2-13 土坑出土遺物(2)
- P L. 2-14 土坑出土遺物(3)
- P L. 2-15 土坑出土遺物(4)
- P L. 2-16 墓、柵、井戸、溝、耕作溝、遺構外出土遺物(1)
- P L. 2-17 遺構外出土遺物(2)

第3章 小原遺跡

挿図目次

- 第3-1図 調査位置図 82
- 第3-2図 遺跡位置図 83
- 第3-3図 基本層序A-A' 84
- 第3-4図 基本層序B-B' 84
- 第3-5図 周辺の遺跡 86
- 第3-6図 遺構分布全体図 88
- 第3-7図 1～4号溝、8～10号土坑 89
- 第3-8図 1～4号溝、8～9号土坑断面 90
- 第3-9図 1～7号土坑 91
- 第3-10図 8～10号土坑 92
- 第3-11図 ピット平面図と断面図(1) 93
- 第3-12図 ピット平面図と断面図(2) 94

表目次

- 第3-1表 小原遺跡遺構一覧 95

写真図版目次

- P L. 3-1 1 調査区全景 西から
- 2 調査風景 南東から
- P L. 3-2 1 1号溝 土層断面 南から
- 2 1号溝 全景 南から
- 3 1号溝～4号溝 全景 南から
- P L. 3-3 1 3号溝南壁 土層断面 北から
- 2 1号溝・4号溝 土層断面 南から
- 3 10号土坑・4号溝土層断面 東から
- 4 10号土坑・4号溝 全景 東から
- 5 1号土坑 全景 南から
- 6 2号土坑 土層断面 南から
- 7 3号土坑 全景 南から
- 8 4号土坑・ピットP8 土層断面 南から

- P L. 3-4 1 5号土坑 土層断面 西から
- 2 6号土坑 全景 南から
- 3 7号土坑 土層断面 東から
- 4 8号土坑 全景 西から
- 5 10号土坑 遺物出土状態 南から
- 6 ピットP1 全景 東から
- 7 ピットP2 土層断面 南から
- 8 ピットP2 全景 南から
- P L. 3-5 1 ピットP3 全景 南から
- 2 ピットP4 全景 南から
- 3 ピットP5 全景 南から
- 4 ピットP6 全景 南から
- 5 ピットP7 全景 南から
- 6 ピットP8 全景 南から
- 7 ピットP9 全景 北から
- 8 ピットP10 全景 南から
- P L. 3-6 1 ピットP11 全景 南から
- 2 ピットP12 全景 南から
- 3 ピットP13 全景 南から
- 4 ピットP16 全景 東から
- 5 ピットP17 全景 南から
- 6 ピットP18 全景 南から
- 7 ピットP19 全景 南から
- 8 ピットP20 全景 南から
- P L. 3-7 1 ピットP21 全景 南から
- 2 ピットP22 全景 南から
- 3 ピットP23 全景 南から
- 4 ピットP24 全景 東から
- 5 ピットP26 全景 南から
- 6 調査区全景 東から
- 7 標準土層北壁 南から
- 8 トレンチ南壁 基本土層土層断面 南から

第4章 上佐鳥明神前遺跡

挿図目次

第4-1図	高崎-前橋付近の地形区分	99
第4-2図	陸軍迅速図 明治18年	99
第4-3図	前橋市都市計画図 昭和43年	100
第4-4図	開発区域図	100
第4-5図	調査区域図	100
第4-6図	ごく近傍の遺跡	101
第4-7図	基本土層	103
第4-8図	1面全体図、水田土層、出土遺物	105
第4-9図	1面1・2号溝 平面図、断面図	106
第4-10図	2面全体図、第2・3トレンチ図、出土遺物	107

表目次

第4-1表	ごく近傍の遺跡一覧表	101
第4-2表	遺物観察表	108

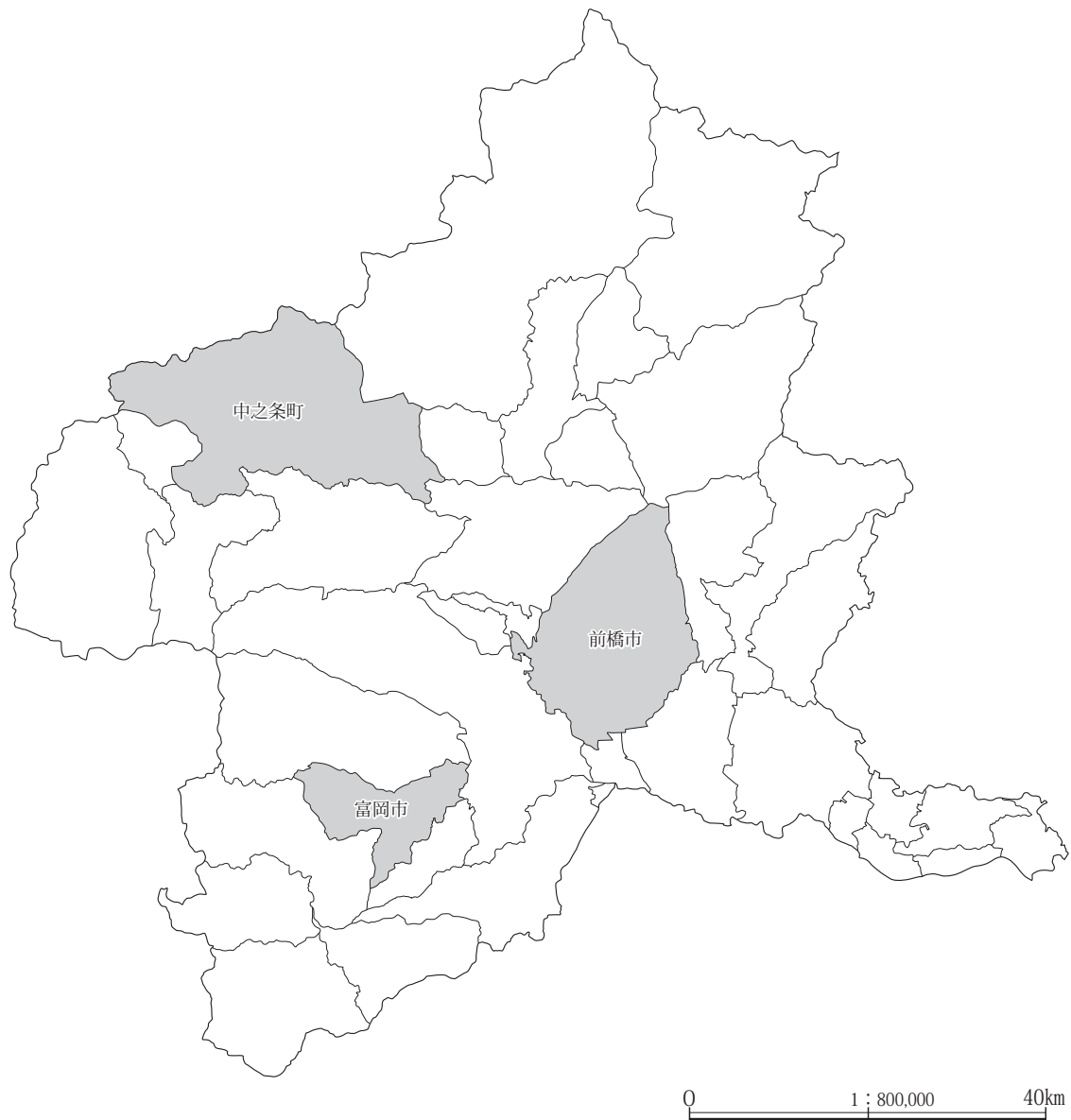
写真図版目次

P L . 4-1	1	1面	1号溝	全景	南東から
	2	1面	1号溝	南土層断面A	南から
	3	1面	1号溝	土層断面B	南東から
	4	1面	1号溝	土層断面	南東から
	5		測量作業		
P L . 4-2	1	1面	2号溝	全景	南東から
	2	1面	2号溝	土層A	東から
	3	1面	2号溝	土層B	南から
	4	1面	2号溝	付近の調査	西から
	5	1面	2号溝	遺物出土状態	南東から
P L . 4-3	1	1面	As-B下水田		東から
	2	1面	As-B下水田		南西から
	3	1面	As-B下水田土層A		南から
	4	1面	As-B下水田土層B		北から
	5	1面	As-B下水田土層C		西から
	6	1面	As-B下水田の調査		
P L . 4-4	1	2面	1トレンチ	全景	東から
	2	2面	2トレンチ	全景	東から
	3	2面	3トレンチ	全景	Hr-FA堆積 西から
	4	2面	4トレンチ	全景	西から
	5	2面	4トレンチ	南壁土層	北から
	6	1面	出土土師器		
	7	1面	2号溝出土須恵器		
	8	2面	1トレンチ出土弥生土器		

第 1 章 各遺跡の位置と概要

第1章 各遺跡の位置と概要

本書に掲載した3遺跡(平成28年度富岡高等学校弓道場移設に伴う発掘調査を除く)の調査原因は、「県立学校施設整備事業」で共通するが、各遺跡の関連性は低いことから、個別遺跡の位置と調査体制等についてはここに示すことにした。



第1-1図 各遺跡所在の市町

1 七日市陣屋跡 なのかいちじんやあと・七日市古墳群 なのかいちこふんぐん

所在地 富岡市七日市1003、1454-1、1456、1509、1526-1番地、無籍地

調査面積 平成28年度79㎡ 平成29年度1,858㎡

<発掘調査>

平成28年度 平成28年度富岡高等学校弓道移設

調査担当 新井 仁(群馬県教育委員会事務局文化財保護課指導主事)

地上測量委託 アコン測量設計株式会社 遺構写真撮影 新井 仁

発掘調査期間 平成28年8月16日から平成28年8月31日

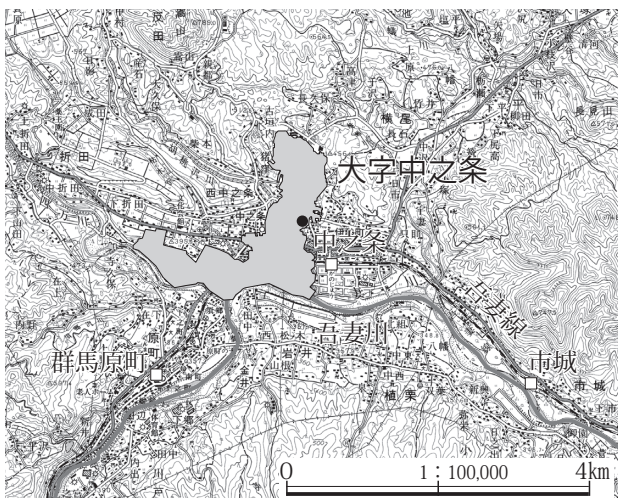
平成29年度

調査担当 飛田野正佳(専門調査役)、 間庭 稔(専門調査役) 遺跡掘削請負工事 毛野考古学研究所

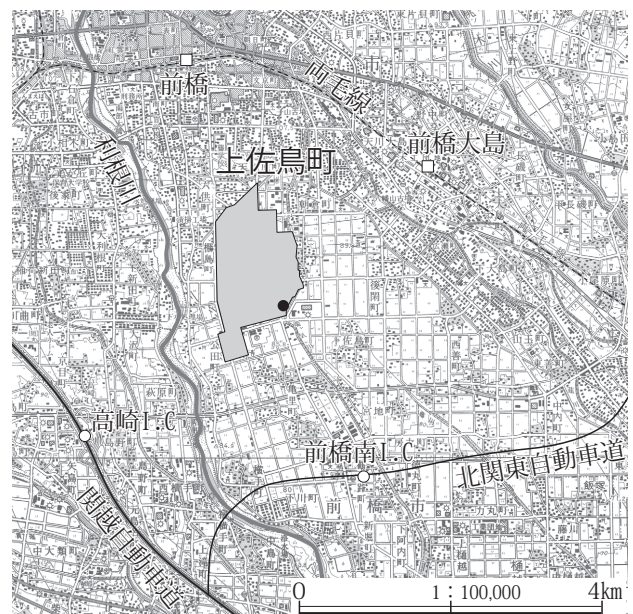
地上測量委託 アコン測量設計株式会社 遺構写真撮影 飛田野正佳(専門調査役)



第1-2図 七日市陣屋跡・七日市古墳群の富岡市内位置



第1-3図 小原遺跡の中之条町内位置



第1-4図 上佐鳥町神前遺跡の前橋市内位置

第1章 各遺跡の位置と概要

調査履行期間 平成29年4月1日から平成29年7月31日

発掘調査期間 平成29年4月1日から平成29年5月31日

<整理>

整理担当 谷藤保彦(専門調査役) 整理履行期間 平成30年8月1日から平成31年3月31日

整理期間 平成30年9月1日から平成30年11月30日 デジタル編集 齋田智彦(主任調査研究員・資料統括)

2 小原遺跡 こばらいせき

所在地 吾妻郡中之条町大字中之条1303

調査面積 778㎡

<発掘調査>

調査担当 桜岡正信(専門調査役) 遺跡掘削請負工事 株式会社歴史の杜

地上測量委託 技研コンサル株式会社 遺構写真撮影 桜岡正信(専門調査役)

調査履行期間 平成29年4月1日～平成29年6月30日

発掘調査期間 平成29年4月1日～平成29年4月30日

<整理>

整理担当 大木紳一郎(専門調査役) 整理履行期間 平成30年8月1日～平成31年3月31日

整理期間 平成30年8月1日～平成30年8月31日 デジタル編集 齋田智彦(主任調査研究員・資料統括)

3 上佐鳥明神前遺跡 かみさとみょうじんまいいせき

所在地 前橋市下佐鳥町428、429-2

調査面積 426㎡

<発掘調査>

調査担当 飯田陽一(専門調査役) 遺跡掘削請負工事 技研コンサル株式会社

地上測量委託 技研コンサル株式会社 遺構写真撮影 飯田陽一(専門調査役)

調査履行期間 平成29年12月1日から平成30年3月31日

発掘調査期間 平成30年1月1日から平成30年1月31日

<整理>

整理担当 関 晴彦(専門調査役) 整理履行期間 平成30年8月1日から平成31年3月31日

整理期間 平成30年12月1日から平成31年1月31日 デジタル編集 齋田智彦(主任調査研究員・資料統括)

第2章 七日市陣屋跡・七日市古墳群

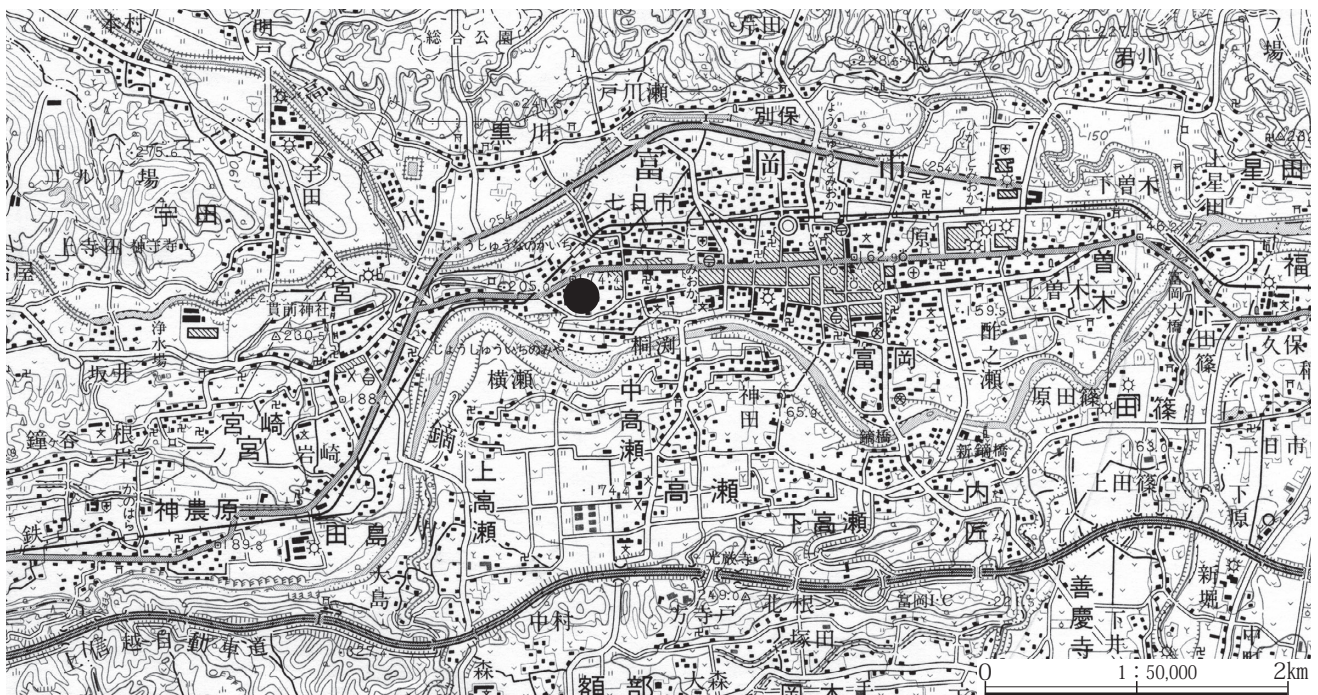
第2章 七日市陣屋跡・七日市古墳群

第1節 調査に至る経緯、方法と経過

第1項 調査に至る経緯

平成28年度富岡高等学校弓道場移設工事および平成29年度富岡・甘楽地区新高校整備事業に伴い、平成27年10月19日に群馬県教育委員会管理課から当該地の埋蔵文化財包蔵地の状況について県教育委員会文化財保護課に事業照会があり、同年12月28日に県教育委員会文化財保護課は県教育委員会管理課に対し、富岡市の遺跡台帳に登録されている包蔵地(富岡市遺跡番号T002・T198)であることから試掘・確認調査または立会調査が必要であることを回答した。平成28年度富岡高等学校弓道場移設工事箇所については、平成28年1月15日に県教育委員会文化財保護課による確認調査が行われ、同年1月19日付けで県教育委員会管理課に対し確認調査による遺構検出の結果から発掘調査の必要を通知した。協議の結果、工事の変更が不可能なことから、発掘調査による記録保存の措置が講じられることとなり、県教育委員会文化財保護課

による発掘調査が平成28年8月16日から同年8月31日まで行われた。また、平成29年度富岡・甘楽地区新高校整備事業の予定地に関しては、平成28年2月26日に県教育委員会文化財保護課による確認調査が行われ、同年3月1日付けで県教育委員会管理課に対し確認調査による遺構検出の結果から発掘調査の必要を通知した。協議の結果、工事の変更が不可能なことから、発掘調査による記録保存の措置が講じられることとなった。発掘調査は、群馬県教育委員会文化財保護課の指導のもと、群馬県教育委員会を委託者、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団を受託者として委託契約を平成29年4月1日付けで締結し、発掘調査事業が実施されることになり、平成29年4月1日から同年5月31日までの2ヶ月間実施された。



第2-1図 遺跡位置図 「富岡」国土地理院 地勢図 平成7年4月1日発行



第2-2図 調査範囲図

第2項 調査区とグリッドの設定

本遺跡の発掘調査は、平成28年度の県教育委員会文化財保護課による調査、平成29年度の群馬県埋蔵文化財調査事業団による調査の2ヶ年度に跨がって進められ、平成28年度調査では調査箇所を1区と2区に区分し、平成29年度調査では区名等の呼称はしていなかった。この両年度の調査箇所は大きく地点が異なることから、本報告では平成28年度の調査箇所を第1地点、平成29年度の調査箇所を第2地点として報告する。

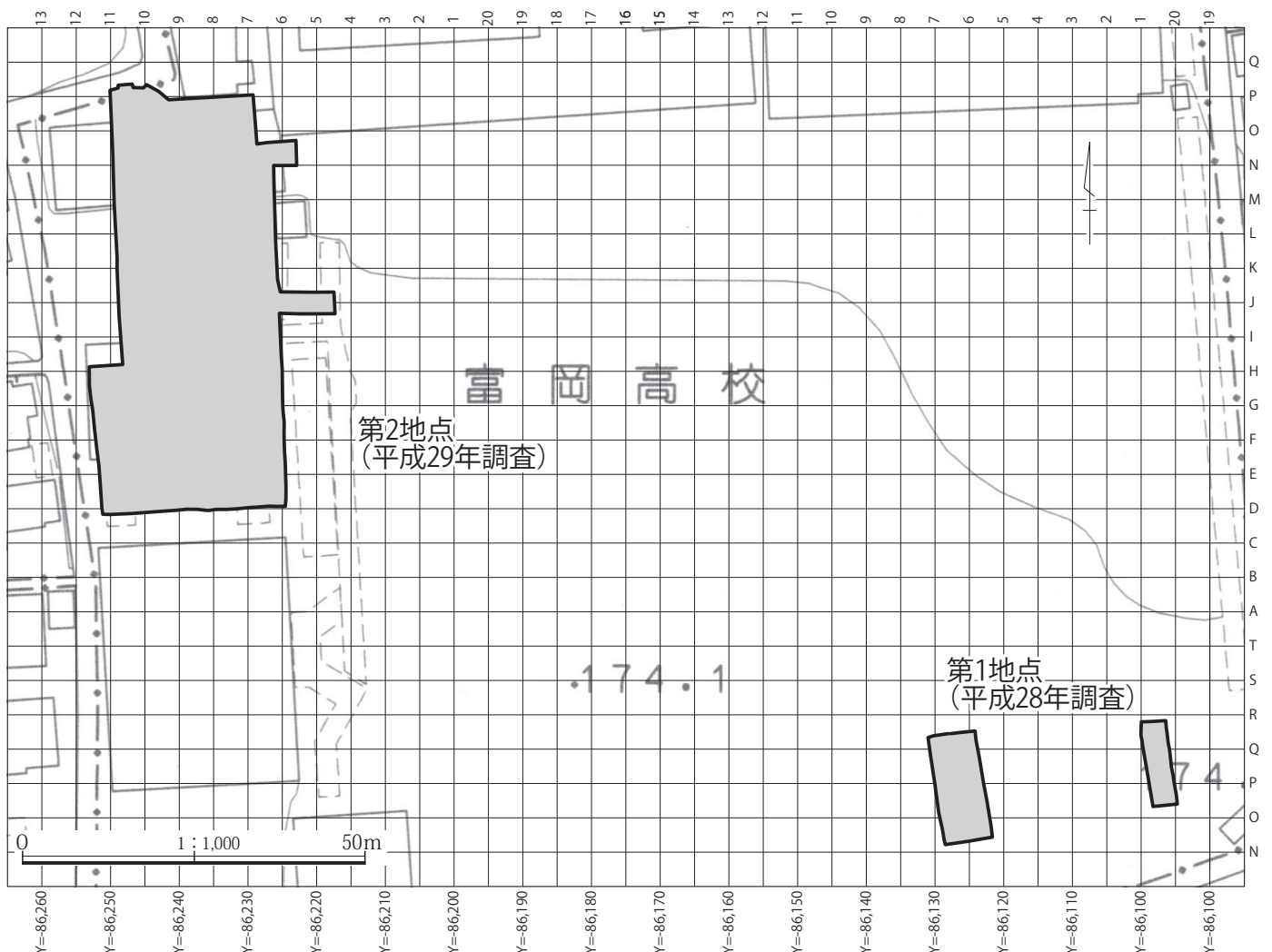
平成28年度調査となる第1地点は、富岡高校敷地内の南側にあたる校庭東南端に位置し、世界測地系(日本測地系2000平面直角座標系第IX系)の $X=28,765\sim 28,785$ 、 $Y=-86,090\sim 86,135$ の範囲に収まる。この第1地点の西側を1区(長さ15.5m、幅7.0m)、東側を2区(長さ12.3m、幅3.8m)として調査し、グリッドの設定はしていない。

平成29年度調査となる第2地点は、富岡高校敷地内の

西側の一面に位置し、世界測地系(日本測地系2000平面直角座標系第IX系)の $X=28,810\sim 28,880$ 、 $Y=-86,215\sim 86,255$ の範囲に収まる。グリッドの設定は調査地点をカバーできるように、世界測地系(日本測地系2000平面直角座標系第IX系)の $X=28,800$ 、 $Y=-86,200$ を基点として、1区画5m四方のグリッドを割り付けた。基点からX軸となる南から北へA~R、Y軸となる東から西へ1~14を付し、各グリッドを呼称した(第2-3図)。

第3項 発掘調査の方法

発掘調査は、各調査地点における土層確認を先行させ、表土除去に重機を使用し、表土除去後の各作業は発掘作業員により実施した。遺構確認作業はジョレンを用いて行い、面的な遺構の把握に努めた。遺構確認は各調査地点ともに、ローム層上面を確認面として遺構検出を行った。検出された遺構の種類には、中・近世の掘立柱建物、数多くの土坑およびピット、墓坑、溝等がある。その後、ローム土を対象に、旧石器時代の遺構・遺物を確認する



試掘としてトレンチ調査を行った。

各遺構の調査は、土坑やピットでは半裁して土層観察を行う等、それぞれに適した方法を用いた。遺構名は、各調査地点ごとに、遺構種別に通し番号で標記した。遺構等の測量は、全ての測量図面を測量業者に委託して調査期間の短縮を図った。縮尺は1/20を基本とし、各調査地点の全体図は1/100、1/200を基本に作成した。

写真撮影は、中判カメラでの白黒フィルム、デジタル撮影データの2種類を基本とした。調査区の全景写真は、調査の進展に合わせて行った。なお、撮影した写真のデジタルデータは、HDやDVD-ROM等のメディアに保存し、データのファイル名は、調査区・遺構略号・番号・撮影方向・内容を数値化したものに置き換えるリネーム作業を行った。

第4項 発掘調査の経過

発掘調査は、県教育委員会文化財保護課が行った平成28年8月16日から同年8月31日までの半月間、群馬県埋蔵文化財調査事業団が行った平成29年4月1日から同年5月31日までの2ヶ月間の計2ヶ月半を要した。

以下に、発掘調査の経過概要を記す。

平成28年(第1地点調査)

- 8月16日 重機による表土掘削を開始する。
- 8月17日 重機による掘削、併せて作業員による1・2区の遺構検出作業を開始する。
- 8月18日 各遺構の掘削作業と写真・測量等の記録作業を開始する。
- 8月23日 2区の遺構掘削を終了し、全景写真撮影、平面測量を行う。
- 8月24日 1区の遺構掘削を終了し、全景写真撮影、平面測量を行う。併せて、旧石器時代を対象とした2区へのトレンチ調査を開始する。
- 8月25日 1・2区の旧石器トレンチ掘削を行い、終了後に写真・測量等の記録作業を行う。
- 8月26日 重機による埋戻し作業を完了させ、現地調査を終了する。

平成29年(第2地点調査)

- 4月6日 現地打ち合わせ。調査範囲、残土置き場、安

全策設置位置等の確認。

- 4月8日 現地安全策の設置。
- 4月12日 重機による表土掘削、併せて作業員による遺構検出作業を開始する。
- 4月14日 現地調査事務所の設営。
- 4月18日 土坑等の各遺構調査を開始する。
- 5月12日 富岡高校校舎3階より調査区全景写真撮影を行う。
- 5月15日 旧石器時代を対象としたローム土へのトレンチ調査を開始する。
- 5月19日 旧石器時代の試掘掘削が終了し、写真・図面等の記録を行い、調査を終了する。
- 5月22日 埋め戻し作業を開始。
- 5月26日 機材等の撤収準備を開始する。
- 5月31日 現地調査事務所の解体、安全策の撤去を終え、現地調査を終了する。

第5項 整理事業の経過

整理事業は、平成30年9月1日から同年11月30日までの3ヶ月間を予定して行った。

遺物整理にあたっては、出土遺物の分類後、各種別毎に資料化を図った。縄文時代と古墳時代の土器・埴輪類、中世遺構の陶磁器類に分別し、接合・復元の作業を進め、報告書への掲載遺物の選別を行った。そして掲載遺物の写真撮影、拓本および実測・トレース作業へと移行した。石器・石製品についても、同様な選別と掲載遺物の写真撮影、実測・トレース作業を行った。金属製品については、錆落とし等の処理後、図化作業へと移行した。さらに、これら掲載遺物についての観察記録と観察表作製を併行して行った。

検出された各種遺構については、各遺構の確認、計測、遺構台帳の整備といった基礎作業を先行させ、その後に掘立柱建物・土坑等の遺構種別に図面修正、デジタル編集作業を行った。併せて遺構写真の確認および掲載写真の選定、本文執筆を行った。その後、報告書版下のレイアウト作成、全体のデジタル編集作業およびデジタル組版を行った。また、整理した遺物や写真等については、管理台帳を作成し、活用し備えて遺物や資料類の収納作業を行い、すべての整理業務を完了した。

第2節 遺跡の立地と周辺遺跡

第1項 遺跡の立地

本遺跡のある群馬県富岡市は、関東平野の北西隅にあたる群馬県の南西部に位置し、世界文化遺産「富岡製糸場」を擁し、市の北西には奇岩怪石が林立する「妙義山」が日本三奇勝の一つに数えられている。市の周囲は、北側を安中市、東側を高崎市、南東側を甘楽町、西側を下仁田町と接している。河川では、本県下仁田町と長野県佐久市の境界付近にある物見山を源とする延長58.8km、流域面積632km²の利根川水系一級河川の鎚川が市のほぼ中央部を西から東へと流れ、高崎市内で利根川一次支流の烏川に合流する。また、妙義山中腹を源とする高田川は延長21.6kmの一級河川で、市の北西から東へと流れ、市内東端で鎚川へ合流している。

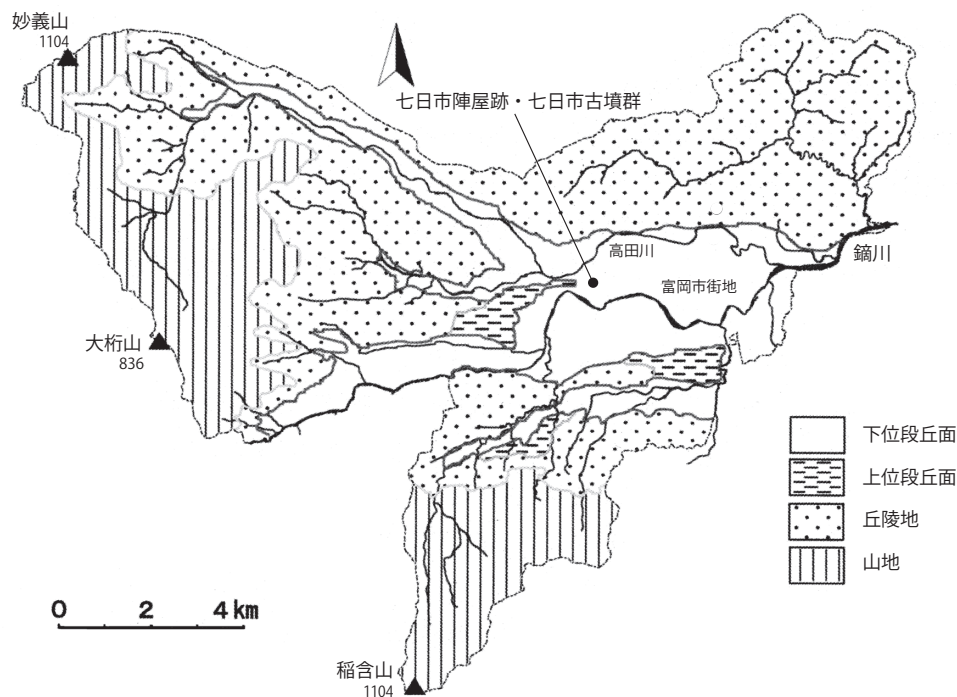
鎚川流域は、古くから「甘楽の谷」「鎚の谷」と称され、流域を西進して上信国境となる内山峠を経て長野県佐久市に至る、信州(長野県)と上野(群馬県)を結ぶ重要な交通路であった。現在でも、東京都文京区から埼玉県・群馬県を經由して長野県松本市へと至る国道254号は、この地域では鎚川に沿い、同様に上信電鉄が高崎一下仁田間を結んでいる。

富岡市域の北側となる高田川以北は、東西に長く延びる平坦な丘陵地で、安中市の横野台地・岩野谷丘陵と呼ばれる碓氷川右岸の上位段丘面にあたり、高崎市の観音山丘陵へとつながる。この高田川と鎚川は、富岡市街地の西側でかなり接近し、その東側には鎚川の両岸に下位段丘面が広がり、そして高田川が鎚川へと合流する。高田川と鎚川が接近する西側には、貫前神社の鎮座するあたりが上位段丘面、その西側に続く丘陵地、さらに妙義山へと続く山地となる。また、市域の南側も一部に上位段丘面を残しつつ丘陵地が東西に延び、さらに南側は多野山地へと繋がっていく。

本遺跡地は鎚川と高田川に挟まれた市街地の下位段丘(富岡段丘)上にあり、この段丘面の鎚川左岸の一画に位置している。

第2項 周辺遺跡

群馬県西部に位置する鎚川流域は、旧石器時代を含めた各時代の数多くの遺跡が知られている。中でも富岡市においては、江戸時代に発見された旧石器時代のオオツノシカ化石骨や、明治27年(1894年)に発掘された北山茶臼山古墳の墳頂部粘土槨から出土した銅鏡(三角縁竜虎画像鏡:宮内庁所蔵)が著名。また、中世城郭はもちろんのこと、近世に至っては前田利孝を藩祖とした七日市藩が立藩され明治4年(1871年)の廃藩置県まで続く。



第2-4図 富岡市域の地形区分

以下、周辺の遺跡位置図と一覧を第2—5図・第2—1表に示し、各時代ごとに記す。

(1) 縄文時代の遺跡

縄文時代の集落としては、本遺跡が位置する鎭川と高田川に挟まれた市街地の富岡段丘上には少なく、むしろ貫前神社の西側に続く丘陵地や安中市と接する丘陵地、鎭川右岸の丘陵上で多くの遺跡が見つっている。

鎭川左岸段丘(富岡段丘)上では、本遺跡地の北側に位置する七日市観音前遺跡(52)から中期の集落、同丘陵上の高田川右岸に位置する富岡小沢西遺跡(50)でも中期の集落、さらに東の富岡清水遺跡(『富岡清水遺跡 富岡城跡』2012 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第552集)では後期初頭の集落が知られている。鎭川右岸丘陵上には、前期の集落を主とした鞆戸原Ⅰ・Ⅱ遺跡(27)や西平原遺跡(30)、内匠諏訪前遺跡(44)、中高瀬観音山遺跡(39)が、後期の集落として内匠上之宿遺跡(『内匠上之宿遺跡』1993 財団群馬県埋蔵文化財調査事業団)がある。対する高田川左岸には、前期後半から後期初頭にかけての小塚遺跡(54)がある。さらに、高田川左岸から碓氷川右岸に挟まれた上位段丘には、妙義地区に中里下里遺跡(『中里下原遺跡Ⅱ 中里中原遺跡Ⅱ 中里宮平遺跡 中里中原遺跡』2017 富岡市教育委員会)や上高田社宮子原遺跡(『上高田社宮子原遺跡』2014 富岡市教育委員会)等で中期から後期にかけての集落や環状列石が知られ、安中市の中野谷地区所在の中野谷松原遺跡(『中野谷松原遺跡』1998 安中市教育委員会)や三本木遺跡(『落合Ⅱ遺跡 平塚遺跡 三本木Ⅱ遺跡 三本木Ⅲ遺跡』2016 安中市教育委員会)では前期の集落、同地区の中島Ⅰ・Ⅱ遺跡(『中野谷地区遺跡群2』2004 安中市教育委員会)等で後期の集落、同地区の中野谷天神原遺跡(『中野谷地区遺跡群』1994 安中市教育委員会)で晩期の集落等の多くの遺跡が知られている。一方、貫前神社の西側に続く丘陵地では、その東端に位置する一ノ宮本宿遺跡(61)で前期から後期の集落、さらに西側となる丹生地区には上丹生屋敷山遺跡(『丹生地区遺跡群』2009 富岡市教育委員会)や上丹生早道場遺跡、上丹生赤子Ⅱ遺跡等で前～後期の集落が見つっている。

(2) 弥生時代の遺跡

弥生時代の遺跡としては、本遺跡が位置する富岡段丘上にもみられ、貫前神社の西側に続く丘陵地や安中市と接する丘陵地、鎭川右岸の丘陵上で多くの遺跡が見つっている。

富岡段丘上の高田川右岸には、中期を主とした集落として七日市観音前遺跡(52)が知られている。高田川左岸および段丘上には、黒川伽蘭堂遺跡(53)で後期の集落、黒川小塚遺跡(54)で中期の集落、黒川東八木遺跡(55)や富岡城での後期の集落がある。対する鎭川右岸丘陵上には、後期の集落として著名な中高瀬観音山遺跡(39)、中期から後期の内匠日影周地遺跡(43)がある。一方、貫前神社の北側となる高田川右岸に阿曾岡・権現堂遺跡(12)での中期から後期の集落が知られ、貫前神社の西側に続く丘陵地に上丹生屋敷山遺跡、上丹生赤子Ⅰ遺跡、上丹生赤子Ⅱ遺跡、下丹生簾ノ上遺跡等で後期の集落が見つっている。

(3) 古墳時代の遺跡

まず古墳群では、本調査地点の所在する七日市古墳群(七日市地内:2)が鎭川左岸の段丘縁辺に展開し、東側には同じ段丘上の縁辺に富岡市最多数の芝宮古墳群(富岡・曾木地内:33)があり、同じ鎭川左岸に位置する一ノ宮古墳群(一ノ宮地内:15)は七日市古墳群の西側、さらに西側に神農原古墳群悪沢支群(13)がある。鎭川右岸の段丘上には横瀬古墳群(上高瀬地内:16)、桐瀬古墳群(中高瀬地内:34)、井戸澤古墳群(内匠井戸沢地内:64)、さらに南側の丘陵上に神人竜虎画像鏡を出土した北山茶白山古墳(南後箇地内:35)、その西側に方格規矩鏡を出土した北山茶白山古墳に先行する4世紀後半の北山茶白山西古墳といった、多くの周知の古墳が点在している。七日市古墳群については、『上毛古墳総覧』(1938)に7基の古墳の存在が記載され、1972(昭和47)年の『群馬県立博物館研究報告 第7集 富岡5号墳』(1972)には「…前略…現在七日市地内を歩いてみると、…中略…墳丘のあるもの12、残痕程度のもの6、破壊消滅したことが明らかなもの8の計26基を算えるが、ほかにも消滅したものがあつたと聞いているので、おそらく総数30基以上から成る古墳群であつたことは間違いないであろう。…後略…」との記述と古墳の位置図が掲載されている。

古墳時代の集落としては、富岡段丘上の高田川右岸に後期の七日市観音前遺跡(52)が知られている。高田川左岸および段丘上には、黒川伽蘭堂遺跡(53)で後期の集落、黒川小塚遺跡(54)で前期の集落と方形周溝墓・前方後方墳、黒川東八木遺跡(55)で後期の集落がある。対する鍋川右岸の段丘上および丘陵上には、前期から後期の集落到上高瀬境谷戸遺跡(17)、中島遺跡(18)の後期の集落、前期の集落および方形周溝墓を検出した鞆戸原Ⅰ・Ⅱ遺跡(27)、中期を主とした集落の中高瀬観音山遺跡(39)、前・後期の集落と古墳7基および埴輪窯2基が調査された下高瀬上之原遺跡(41)、前期から後期の内匠日影周地遺跡(43)、後期を主とした集落の内匠諏訪前遺跡(44)といった各遺跡がある。一方、貫前神社の北側となる高田川右岸に阿曾岡・権現堂遺跡(12)での前期から後期の集落および方形周溝墓・古墳、そして南東側となる鍋川左岸に中期および後期に激増する集落と一之宮古墳群を擁する一ノ宮本宿遺跡・郷土遺跡(61)が知られる。さらに、貫前神社の西側に続く丘陵地では、上丹生屋敷山遺跡で前期～後期の集落と祭祀遺構(鉄鋌出土)および鍛冶遺構が、上丹生赤子Ⅱ遺跡で後期の集落や方形周溝墓および古墳、下丹生簾ノ上遺跡や下丹生前畑遺跡等の各遺跡で後期の集落が調査されている。

(4) 奈良・平安時代の遺跡

奈良時代から平安時代の遺跡は、本遺跡が位置する富岡段丘上をはじめ、周囲の各段丘および丘陵上に散在している。各遺跡における集落規模には差があるようではあるが、古墳時代から継続する遺跡や、中世まで継続する遺跡、さらには時期的に偏る遺跡もある。特に、上野国一之宮(貫前・抜鉾神社)が鎮座する地であり、神社との関係を彷彿とさせる様な遺跡も所在している。

まず、富岡段丘上には、墨書・刻書土器を多く出土させた富岡坪之内遺跡(49)での奈良時代の集落、富岡小沢西遺跡(50)や七日市六反田遺跡(51)で平安時代の集落、七日市観音前遺跡(52)で奈良・平安時代の集落、富岡清水遺跡で平安時代の集落が知られている。高田川左岸および段丘上には、黒川小塚遺跡(54)の平安時代の集落、黒川東八木遺跡(55)の平安時代の集落がみつまっている。対する鍋川右岸の段丘上および丘陵上には、奈良時代の集落として上高瀬境谷戸遺跡(17)、中島遺跡(18)や

鞆戸原Ⅱ遺跡(27)および中高瀬観音山遺跡(39)での平安時代の集落、「甘楽郡湍上郷」の群郷名が表記された刻書土器や「王」の刻書土器を多く出土させた下高瀬上之原遺跡(41)での奈良時代の集落、内匠日影周地遺跡(43)がある。一方、貫前神社の北側となる高田川右岸に阿曾岡・権現堂遺跡(12)の平安時代の集落、そして南東側となる鍋川左岸に一ノ宮本宿遺跡・郷土遺跡(61)が知られている。この一ノ宮本宿遺跡・郷土遺跡では、一之宮古墳群と共に古墳時代後期100軒余、奈良時代61軒、平安時代93軒もの竪穴住居がこれまでに調査されてきた。さらに、貫前神社の西側に続く丘陵地では、上丹生赤子Ⅰ遺跡、上丹生早道場遺跡、下丹生簾ノ上遺跡、下丹生中山Ⅱ遺跡、下丹生前畑遺跡等の各遺跡で集落が調査されている。他に、水田等の遺構が調査された遺跡として、富岡段丘上の高田川右岸に位置する七日市六反田遺跡(51)、富岡清水遺跡、貫前神社の西側に続く丘陵地の下丹生小川遺跡でのAs-B下水田が知られている。

(5) 中世の遺跡

中世の代表的な遺跡である城館には、鍋川右岸丘陵のさらに南側となる丘陵上に戦国期の小幡氏の居城である大城郭「国峰城」がある。西上州は北条氏・上杉氏・武田氏の勢力が拮抗する地であり、甘楽の谷は長く小幡氏の支配下となっていた。そのため鍋川を挟んだ南北の両丘陵周辺には多くの城址群が点在する。以前に調査・報告された内匠城(『内匠上之宿遺跡』1993 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団)や富岡城(『富岡清水遺跡・富岡城』2012 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団)をはじめ、鍋川の北側となる左岸丘陵には西から黒川城跡(10)、高林城跡(11)、十王山塁跡(4)、鍋川の南側となる右岸丘陵には塩之入城遺跡(36)、西原城跡・大島上城跡(31)、茶白山砦跡(32)、さらに阿弥陀堂遺跡(59)が知られ、他にも鞆戸原Ⅰ遺跡(27)や黒川東八木遺跡(55)での調査において堀・土塁等の遺構が検出されている。

一方、本遺跡地の北側に位置する七日市観音前遺跡(52)では、竪穴建物4軒、墓1基等が調査で検出されている。貫前神社の南東側となる鍋川左岸にある一ノ宮本宿遺跡・郷土遺跡(61)では、多くの竪穴建物や掘立柱建物、墓、土坑、井戸、集石等の各種遺構が調査されている。また、貫前神社の西側に続く丘陵地の丹生東城では、掘



第2-5図 周辺遺跡位置図 国土地理院の電子地形図 25,000を掲載

第2章 七日市陣屋跡・七日市古墳群

第2-1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	市町村遺跡番号	所在地	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考	文献
1	七日市陣屋跡	T002	富岡市七日市1401他							○	○	当該遺跡 中・近世	1・2
2	七日市古墳群	T198	富岡市七日市1331他				○			○	○	当該遺跡 古墳、中・近世	2
3	富岡陣屋跡	T001	富岡市富岡1-34他								○		
4	十王山墓跡	T024	富岡市下黒岩149							○		城館	
5	遺跡名なし	T027	富岡市下黒岩382他		○							散布地	
6	遺跡名なし	T028	富岡市下黒岩333-1他				○					散布地	
7	遺跡名なし	T031	富岡市黒川939他			○						集落	
8	遺跡名なし	T032	富岡市黒川523他		○	○						集落	
9	遺跡名なし	T033	富岡市黒川813他		○	○			○			集落	
10	黒川城跡	T034	富岡市黒川292他							○		城館	
11	高林城跡	T035	富岡市下黒岩1470他							○		城館	
12	阿曾岡・権現堂遺跡	T123	富岡市宇田351他		○	○	○	○	○			集落、古墳、墓その他。平成6年調査。	25
13	神農原古墳群悪沢支群	T126	富岡市神農原1079他				○					古墳	
14	神農原遺跡	T128	富岡市神農原1048他		○							散布地	
15	一ノ宮古墳群、堂山稲荷古墳、双子塚古墳、郷戸支群、双子塚古墳郷戸支群	T131	富岡市一ノ宮112他				○					古墳	
16	横瀬古墳群、高瀬4号古墳、高瀬5号古墳、高瀬6号古墳、高瀬A号古墳、高瀬B号古墳、高瀬C号古墳、高瀬D号古墳、高瀬G号古墳、高瀬I号古墳	T133	富岡市上高瀬13他				○					古墳。昭和62・63年調査。	11
17	上高瀬境谷戸遺跡・中高瀬毛穴中遺跡	T150	富岡市上高瀬1122他				○	○	○			集落。平成23年調査。	43
18	中島遺跡	T151	富岡市中高瀬160他				○	○	○			散布地、集落。昭和62年調査。	7
19	高瀬2号古墳	T156	富岡市大島39				○					古墳	
20	遺跡名なし	T157	富岡市大島100他				○					散布地	
21	遺跡名なし	T158	富岡市上高瀬508他				○					散布地	
22	高瀬陣屋跡	T166	富岡市中高瀬2926他								○	城館	
23	遺跡名なし	T171	富岡市岡本1544他			○	○					集落	
24	遺跡名なし	T173	富岡市南後箇294他		○	○						集落	
25	遺跡名なし	T174	富岡市岡本1695他		○	○						集落	
26	遺跡名なし	T175	富岡市岡本1861他				○					集落	
27	鞆戸原Ⅰ・鞆戸原Ⅱ遺跡	T182	富岡市野上2084他		○	○	○		○	○	○	集落、城館、古墳、墓。昭和63～平成2年調査。	17
28	遺跡名なし	T184	富岡市岡本740他			○	○					集落	
29	遺跡名なし	T188	富岡市南後箇250番地1		○	○						集落	
30	西平原遺跡	T189	富岡市野上1802番地		○							集落。平成2年調査。	17
31	西原城跡、大島上城跡	T191	富岡市大島320他							○		城館。昭和62・63年調査。	9
32	茶白山砦跡	T192	富岡市南後箇80他							○		城館	
33	芝宮古墳群、富岡8号～99号古墳、大國塚1号古墳、大國塚2号古墳	T197	富岡市富岡78他				○					古墳。昭和58年、平成2～4年、平成2年、平成6年、平成8～9年、平成9～10年調査。	16・26
34	桐湖古墳群	T199	富岡市中高瀬26他				○					古墳。昭和45～46年調査。	
35	北山茶白山古墳	T205	富岡市南後箇99				○					古墳	3
36	塩之入城遺跡	番号なし	富岡市野上1567他				○			○		古墳、城館。昭和63年調査。	13
37	野上塩之入遺跡	番号なし	富岡市野上1591他		○				○	○		集落、生産遺跡。昭和63年調査。	13
38	北山茶白山西古墳	番号なし	富岡市南後箇169他				○					古墳。昭和61・62年調査。	9
39	中高瀬観音山遺跡	T206	富岡市中高瀬1039-2他		○	○	○	○	○	○		集落、城館、墓、その他。平成元年・2年3年調査。	19・24
40	岡本下北之根遺跡	T207	富岡市岡本862他			○						集落。平成2年・3年調査。	
41	下高瀬上之原遺跡	T208	富岡市下高瀬3813他				○	○	○			集落、古墳、生産遺跡。昭和63～平成2年調査。	21
42	内匠日向周地遺跡	T209	富岡市内匠98他				○	○	○			散布地。平成2年・3年調査。	23
43	内匠日影周地遺跡	T210	富岡市内匠219他			○	○					集落、墓、その他。昭和63～平成元年調査。	18
44	内匠諏訪前遺跡	T211	富岡市内匠338他		○	○				○		集落。昭和63～平成2年調査。	18
45	下高瀬向山遺跡	T213	富岡市下高瀬3802				○					集落	
46	岡本大森遺跡	T217	富岡市岡本523番地他						○	○		集落	
47	遺跡名なし	T218	富岡市岡本681他			○	○					散布地	
48	南後箇菅原遺跡	T219	富岡市南後箇1159他		○	○						散布地	

第2節 遺跡の立地と周辺遺跡

番号	遺跡名	市町村遺跡番号	所在地	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考	文献
49	富岡坪之内遺跡	T 230	富岡市富岡1623他						○			集落。平成4年調査。	42
50	富岡小沢西遺跡	T 231	富岡市富岡494番地他		○		○			○		集落。昭和62年調査	10・33・35・44
51	七日市六反田遺跡	T 232	富岡市七日市字六反田177番地1		○	○	○		○			散布地、集落、その他。昭和60年、平成20年・25年調査。	8・37・40・41
52	七日市観音前遺跡	T 234	富岡市七日市41他		○	○	○	○	○	○		集落、墓、その他、生産遺跡。昭和61年～平成2年・4年調査。	22
53	黒川伽蘭堂遺跡	T 235	富岡市黒川1277他			○	○	○	○		○	集落、墓、その他。平成11年調査。	28
54	黒川小塚遺跡	T 237	富岡市黒川677他		○	○	○		○	○		集落。昭和59年・60年調査。	12・29・36
55	黒川東八木遺跡	T 239	富岡市黒川161番地他			○	○	○	○	○		集落、城館。平成4年～6年調査。	27
56	遺跡名なし	T 241	富岡市上黒岩1108他		○							散布地	
57	遺跡名なし	T 250	富岡市一ノ宮372他							○		城館	
58	一ノ宮引戸遺跡	T 251	富岡市一ノ宮370他						○			集落	
59	阿弥陀堂遺跡	T 252	富岡市一ノ宮1274他							○		城館	
60	遺跡名なし	T 255	富岡市宮崎70他		○		○	○	○			集落	
61	一ノ宮本宿・郷土遺跡	T 289	富岡市一ノ宮96他		○		○	○	○	○	○	集落、城館、社寺、古墳、墓、その他。昭和53～54年、平成10～11年、13、15年調査。	5・30・31
62	黒川伽蘭堂Ⅱ遺跡	T 290	富岡市黒川1230他			○	○					集落	28
63	一ノ宮山下遺跡	T 294	富岡市一ノ宮440番地他				○					集落	
64	井戸澤古墳群	T 301	富岡市内匠井戸沢195他				○					古墳	
65	下高田押出遺跡	M001	富岡市妙義町下高田3839他				○	○	○		○	散布地、生産遺跡。	
66	下高田稲荷谷Ⅰ遺跡	M002	富岡市妙義町下高田甲3430他				○	○	○			散布地	
67	下高田西明戸遺跡	M003	富岡市妙義町下高田甲3709他							○		墓その他	
68	下高田白山遺跡	M004	富岡市妙義町下高田3596他				○	○	○			散布地	
69	金毘羅山遺跡	M130	富岡市妙義町下高田3809-1他								○	城館	
70	遺跡名なし	417	安中市中野谷大上原822他		○		○	○	○			散布地、集落、その他。平成9・12・13、10・11・12・13調査。	
71	遺跡名なし	420	安中市中野谷明戸1162他		○			○	○			散布地、集落、その他。平成12・13・18、14調査。	
72	遺跡名なし	421	安中市中野谷東明戸2502		○				○			散布地	
73	遺跡名なし	422	安中市中野谷南田2501他		○			○	○			散布地、その他。平成3年調査。	
74	遺跡名なし	426	安中市中野谷東南田・南田2650他		○				○			散布地	
75	遺跡名なし	423	安中市中野谷細田2537他		○				○			散布地。平成3年調査。	
76	遺跡名なし	424	安中市中野谷下宿・南上宿2212他		○				○			散布地	
77	遺跡名なし	425	安中市中野谷下宿東2174他		○			○	○			散布地、集落、その他。平成元年調査。	
78	遺跡名なし	427	安中市中野谷下向原・東南田2709他		○							散布地	

周辺遺跡文献一覧

- 1 『富岡高校75年史』1971 群馬県立富岡高等学校
- 2 『群馬県立博物館研究報告 第7集 富岡5号墳』1972 群馬県立博物館
- 3 『北山茶白山』『群馬県史』1981 群馬県
- 4 『稲荷森遺跡発掘調査報告書』1981 富岡市教育委員会
- 5 『本宿・郷土遺跡発掘調査報告書』1981 富岡市教育委員会
- 6 『富岡市史 自然編、原始・古代・中世編』1987 富岡市
- 7 『中島遺跡』1987 中島遺跡調査会・富岡市教育委員会
- 8 『小塚・六反田・久保田遺跡』1987 富岡市教育委員会
- 9 『大島上城遺跡、北山茶白山西古墳』1988 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 10 『小沢西遺跡』1989 富岡市教育委員会
- 11 『横瀬古墳群』1990 富岡市教育委員会
- 12 『小塚遺跡Ⅱ』1990 富岡市教育委員会
- 13 『野上塩之入遺跡、塩之入城遺跡』1991 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 14 『中野谷地区遺跡群概報2(東畑・金井谷戸・下宿東・北東・堤下・乙北原遺跡)』1991 安中市教育委員会
- 15 『大國塚2号墳』1992 富岡市
- 16 『芝宮古墳』1992 富岡市教育委員会
- 17 『鞆戸原Ⅰ・Ⅱ、西平原遺跡』1992 富岡市教育委員会
- 18 『内匠諏訪前遺跡 内匠日影周地遺跡』1992 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 19 『中高瀬観音山遺跡範囲確認調査報告書』1993 富岡市教育委員会
- 20 『中野谷地区遺跡群概報4(下宿東・和久田・細田・東向原遺跡)』1993 安中市教育委員会
- 21 『下高瀬上之原遺跡』1994 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 22 『七日市観音前遺跡』1994 富岡市教育委員会
- 23 『内匠日向周地遺跡、下高瀬寺山遺跡、下高瀬前田遺跡』1995 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 24 『中高瀬観音山遺跡』1995 群馬県埋蔵文化財調査事業団。
- 25 『東八木遺跡、阿曾岡・権現堂遺跡』1997 富岡市教育委員会
- 26 『芝宮古墳』1997 富岡市教育委員会
- 27 『東八木遺跡、阿曾岡・根源同遺跡』1997 富岡市教育委員会
- 28 『黒川伽蘭堂遺跡』1999 富岡市教育委員会
- 29 『黒川小塚遺跡Ⅲ』2001 富岡市教育委員会
- 30 『一ノ宮本宿・郷土遺跡Ⅱ 一ノ宮古墳群』2001 富岡市教育委員会
- 31 『一ノ宮本宿・郷土遺跡Ⅲ』2003 富岡市教育委員会
- 32 『中野谷地区遺跡群2』2004 安中市教育委員会
- 33 『天神林遺跡・砂押Ⅱ遺跡・大道南Ⅱ遺跡・向原Ⅱ遺跡』2004 安中市教育委員会
- 34 『向原Ⅲ遺跡』2007 安中市教育委員会
- 35 『七日市小沢西遺跡Ⅱ』2007 富岡市教育委員会
- 36 『黒川小塚遺跡Ⅳ』2008 富岡市教育委員会
- 37 『七日市六反田遺跡Ⅱ』2008 富岡市七日市六反田遺跡調査会
- 38 『富岡清水遺跡』2010 富岡市教育委員会
- 39 『安中市遺跡分布地図-市内遺跡詳細分布調査報告書-』2011 安中市教育委員会
- 40 『七日市六反田遺跡Ⅲ』2013 社会福祉法人一峰会・(有)毛野考古学研究所
- 41 『七日市六反田遺跡Ⅳ』2014 富岡市教育委員会
- 42 『富岡坪ノ内遺跡』2014 富岡市教育委員会
- 43 『上高瀬境谷戸遺跡』2017 富岡市教育委員会
- 44 『七日市小沢西遺跡Ⅲ』2017 富岡市教育委員会

立柱建物や竪穴状遺構および井戸等の各遺構。さらに、下丹生中山Ⅱ遺跡では屋敷跡が調査されている。他にも、黒川小塚遺跡(54)で中世墓が調査されている。

(6)近世の遺跡

元和2年(1616年)に七日市藩の藩祖として前田利孝(加賀国、前田利家の五男)が封ぜられ(十八ヶ村一万十四石)、以来、12代利昭までの260年もの長きにわたって前田家が命脈を保った。この七日市藩の藩邸が本遺跡である七日市陣屋跡であり、その正殿が現在も富岡高校に「御殿」として残されている。藩邸は、その敷地六千四百八歩。正面に枡形を設け、左右に高さ六尺の石垣を積み、その上に五尺の塀を築き、全面は東を向く。南北の幅およそ六十間、東北には水濠、西・南には空堀を巡らせ、その中に御殿と藩士の邸宅が並び立つといった、陣屋の形態を成していたようである。他に、陣屋跡として富岡陣屋跡(3)や高瀬陣屋跡(22)が知られている。一方、近世屋敷としては、内匠諏訪前遺跡(44)で天

明三年の浅間山噴火火山灰(As-A)の降下前後の屋敷跡が2箇所検出されている。富岡清水遺跡からは、As-Aを混在する近世建物がみついている。また、近世墓の調査例もあり、阿曾岡・権現堂遺跡(12)、黒川伽蘭堂遺跡(53)、下高瀬上之原遺跡(41)、中高瀬観音山遺跡(39)、黒川東八木遺跡(55)、が挙げられる。さらに、中高瀬観音山遺跡(39)では、天明三年の浅間山噴火に伴うAs-A下の畠も検出されている。

(7)近代の遺跡

富岡陣屋跡(3)には、平成26年(2014年)に世界遺産として登録された「富岡製糸場」がある。この富岡製糸場は、日本の近代化のために、明治政府が模範器械製糸場として明治5年(1872年)に設立した様式の官営工場であり日本初、しかも当時の製糸工場としては世界最大規模でもあった。現在は、繰糸所、西置繭所、東置繭所の3棟が「国宝」となっている。

第3節 遺跡の基本層序

本遺跡の基本土層については、第1地点および第2地点の両地点の土層断面を第2-6図に示した。調査地点によって表土の状態が異なり、整地造成等による盛土あるいは攪乱が著しい状況にあった。調査にあたっての遺構確認面は、天明三年(1783年)の浅間山噴火に伴う噴出軽石であるAs-Aならびに天仁元年(1108年)のAs-Bの明瞭な堆積がなかったことから、第1・2地点共にローム上面を遺構確認面として調査を行った。また、ローム上面での遺構調査後、旧石器時代の試掘と兼ねてロームの堆積状況を確認した。

第1項 第1地点の層序

平成28年度の調査となる第1地点では、西側の1区と東側の2区の両東壁で層序の確認、その記録については南端部で行った。層序の確認の結果、盛土の違いが若干あるものの、その下層の堆積状況は両区共にほぼ同様であることから、本稿では2区東壁南端部の層序を代表させて記す。なお、両区での遺構確認面は、V層の黄褐色土上面である。

以下、堆積する各層について記述する。

〈2区東壁南端部〉

I層：盛土(グラウンド造成土)

- II層：暗褐色土 ロームブロック・砂礫を含む。盛土。
- III層：黒褐色土 やや暗く、白色粒子を微量含む。
- IV層：黒褐色土 やや明るく、ロームブロック・ローム粒を少量含む。
- V層：黄褐色土 ローム層。

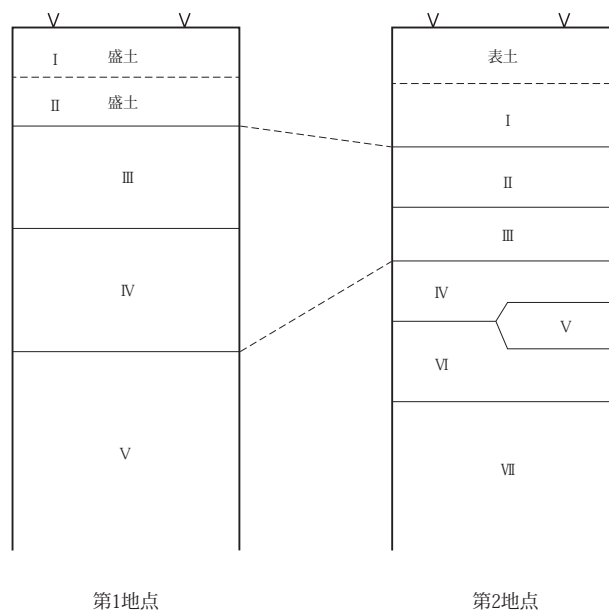
第2項 第2地点の層序

平成29度の調査となる第2地点では、調査範囲の各所で層序の確認をしたが、範囲内の随所に攪乱が著しい状況にあったことから、その記録については南西隅付近の南壁を代表させて行った。なお、両区での遺構確認面は、V層の黄褐色土上面である。

以下、堆積する各層について記述する。

〈南壁〉

- I層：黒色土 灰白色粒を微量含む。
- II層：黒褐色土 灰白色・褐色粒を微量含む。
- III層：黒褐色土 灰白色・褐色粒を少量含み、固くしめる。
- IV層：鈍い黄橙色土 下位に板鼻黄色軽石(As-YP)を含む。
- V層：黄色軽石 As-YPと思われる。部分的に認められる。
- VI層：明黄褐色土 粒がやや大きく、やや粘質。
- VII層：鈍い黄褐色土 粘質で、上位より下位がわずかに柔らかい。



第2-6図 基本土層模式図

第4節 検出された遺構と遺物

第1項 第1地点(平成28年度調査)の遺構と遺物

本調査地点は、富岡高校敷地内の南側にあたる校庭東南端に位置し、七日市陣屋跡および七日市古墳群の範囲内に収まる。調査は、2箇所に分かれる調査箇所の西側を1区、東側を2区として行った。調査における遺構確認面は基本層序第V層となる黄褐色土(ローム土)上面とし、土坑3基、ピット26基、溝1条を検出した。その後、ローム層への旧石器時代の確認調査を行ったが、遺構・遺物は出土していない。

以下、検出された遺構種ごとに記述する。

1. 土坑

1 A号土坑(第2-8図、第2-3表、PL. 2-2)

調査時は一つの土坑として扱ったが、ここでは重複する2基の土坑(1 A・B号土坑)として記述する。

位置：2区の北側に位置し、東側に1号溝が近接する。

座標値：X=28,781 Y=-86,097

重複：南側に1 B号土坑が重複するが、新旧は不明。

検出状況：平面形は不整な形状で確認され、底面の浅い1 B号土坑と、深い1 A号土坑とに分別できる。遺物等の出土はない。

形状：不定形

規模：長軸1.62m 短軸1.16m 深さ31cm

長軸方向：N-65°-W

埋没土：As-Aを混在する黒褐色土と、底面付近の黄褐色土とに分層できる。

所見・時期：As-Aを混在することから、時期は近世(天明三年)以降と考えられる。

1 B号土坑(第2-8図、第2-3表、PL. 2-2)

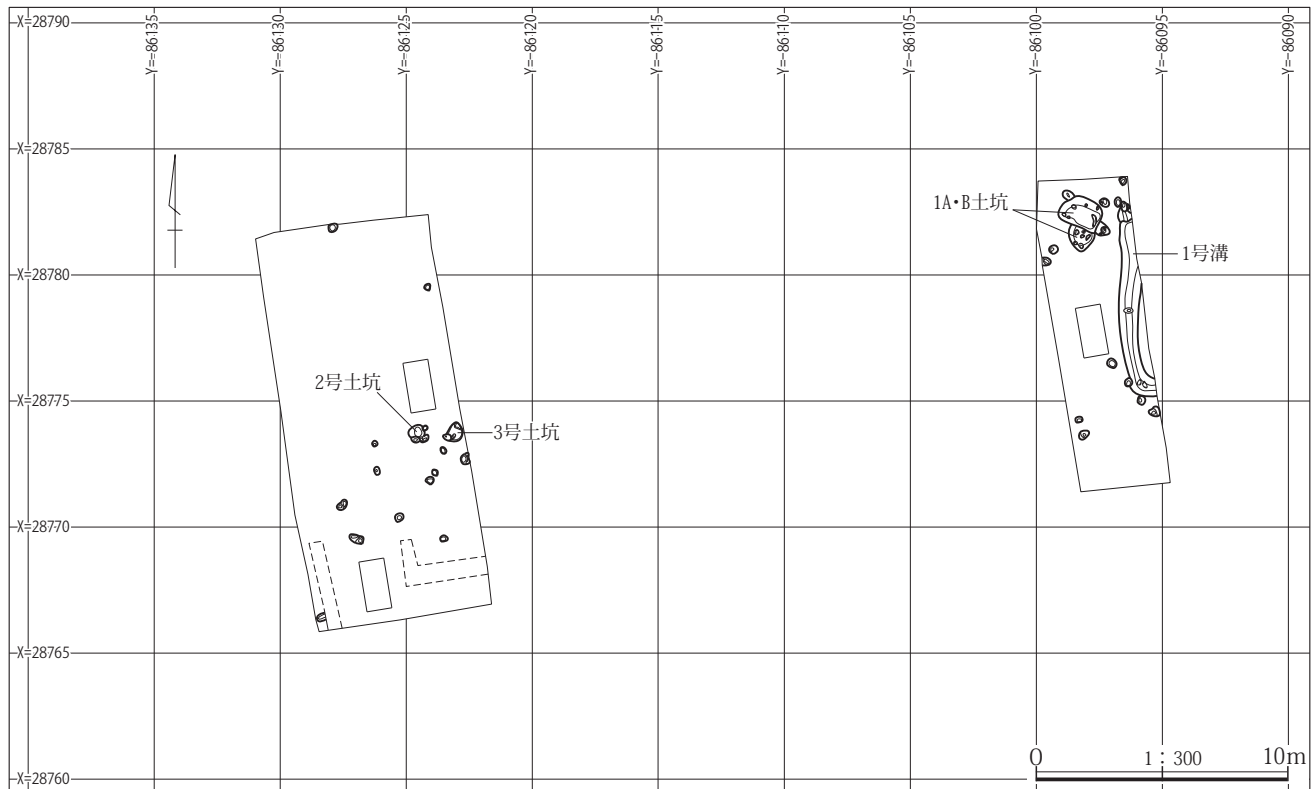
位置：2区の北側に位置し、東側に1号溝が近接する。

X=28,781 Y=-86,097

重複：北側を1 A号土坑と重複するが、新旧は不明。

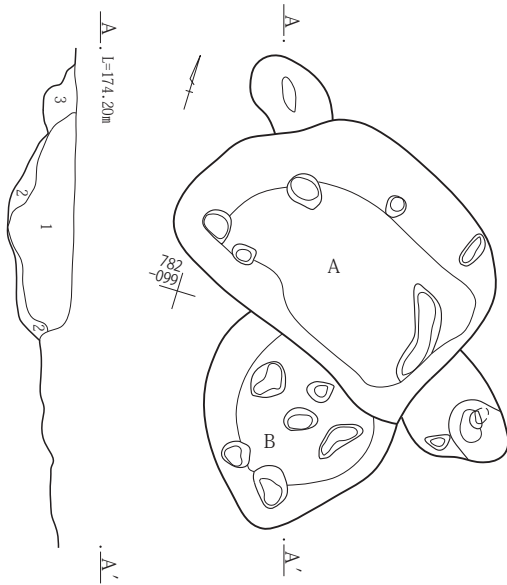
検出状況：平面形は不整な形状で確認され、底面の浅い1 B号土坑と、深い1 A号土坑とに分別できる。遺物等の出土はない。

形状：不定形



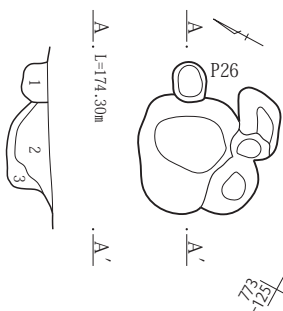
第2-7図 第1地点全体図

1 A・B号土坑



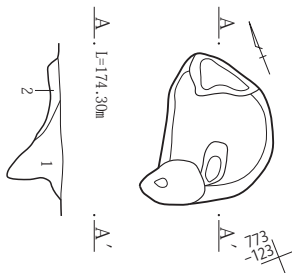
- 1 黒褐色土 ローム中ブロックを多量含む。As-A少量混在。(1 A号土坑)
- 2 黄褐色土 崩れたローム。(1 A号土坑)
- 3 黒褐色土 ローム小ブロックを微量含む。

2号土坑



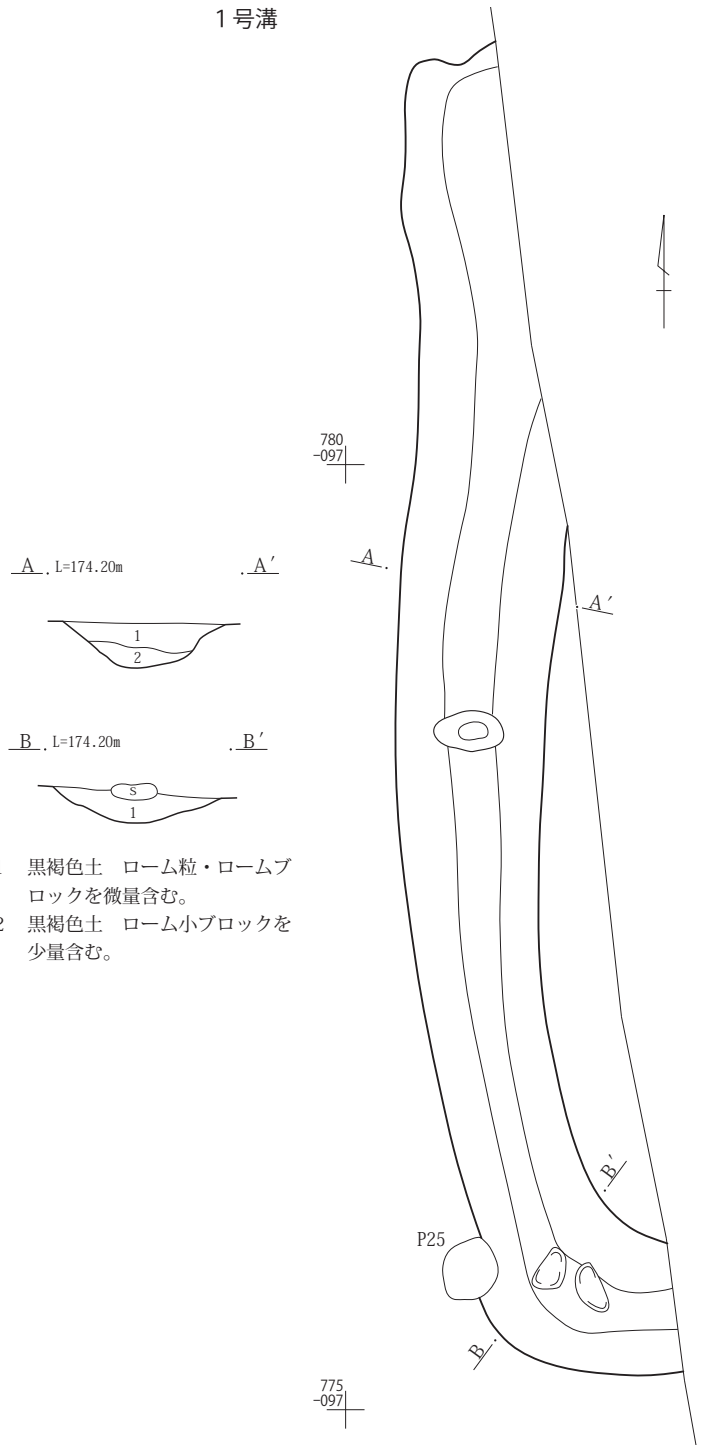
- 1 黒褐色土 白色粒・ローム粒を少量含む。(26号ピット)
- 2 黒褐色土 白色粒を少量含む。(2号土坑)
- 3 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒を中量含む。(2号土坑)

3号土坑

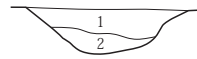


- 1 黒褐色土 白色粒を少量含む。
- 2 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。

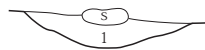
1号溝



A. L=174.20m .A'



B. L=174.20m .B'



- 1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロックを微量含む。
- 2 黒褐色土 ローム小ブロックを少量含む。

第2-8図 第1地点1~3号土坑、1号溝 平・断面図

規模：長軸(0.93)m 短軸1.08m 深さ4cm

長軸方向：N-5°-E

所見・時期：時期等は不明。

2号土坑(第2-8図、第2-3表、PL.2-2)

位置：1区の中央東寄りに位置し、東側に3号土坑が近接する。

座標値：X=28,773 Y=-86,124

重複：南側に14号ピット、東側を26号ピットと重複するが、新旧は本土坑の方が古い。

形状：不定形

規模：長軸0.64m 短軸(0.5)m 深さ26cm

長軸方向：N-79°-E

埋没土：黒褐色土を主体とするが、混入物から2層に分層できる。

所見・時期：時期等は不明。

3号土坑(第2-8図、第2-3表、PL.2-2)

位置：1区の中央東壁際に位置し、西側に2号土坑が近接する。

座標値：X=28,773 Y=-86,122

検出状況：底面西側のピットは重複する別遺構の可能性をもつが、詳細は不明。遺物等の出土はない。

形状：不定形

規模：長軸0.77m 短軸0.57m 深さ13cm

長軸方向：N-12°-E

埋没土：黒褐色土を主体とするが、混入物から2層に分層できる。

所見・時期：時期等は不明。

2. ピット

1区に11基、2区に15基の計26基のピットを検出した。ピットのあり方は調査範囲全体に散漫に分布し、掘立建物等を想定できる様子はない。また、各ピットの埋没土も黒褐色土を主体とするものがほとんどで、僅かにAs-Bを含むものも存在する。しかし、大方の時期は不明である。(第2-6表参照)

3. 溝

1号溝(第2-8図、第2-8表、PL.2-2)

位置：1区の東壁際に位置する。

座標値：X=28,775~28,782 Y=-86,095・86,096

検出状況：1区の東壁際に不整な弧状を描く状態で検出された。溝の立ち上がりはやや緩やかなものの、内側の一部では急な箇所がある。底面はほぼ一様で、南側にやや大型の円礫が数点出土している。遺物の出土はない。

規模：長さ7.3m 幅0.87~0.63m 深さ27cm

断面形状：緩いU字状

走行方向：不整な弧状

埋没土：黒褐色土を主体とするが、混入物から2層に分層できる。

所見・時期：不整な弧状を描くことから、溝の内径7~8mの円形となる可能性をもち、周囲に円墳が点在していることからすれば、古墳の周溝の一部である可能性が高い。また、埋土にAs-Bが含まれていないことから、As-B降下以前の溝であることは明らかである。

第2項 第2地点(平成29年度調査)の遺構と遺物

本調査地点は富岡高校敷地内の西側に位置し、七日市陣屋跡範囲内の一画にあたる。調査における遺構確認面は基本層序第IV層となる鈍い黄橙色土(ローム土)上面とし、掘立柱建物2棟、土坑37基、墓3基、柵1列、ピット105基、井戸2基、溝1条、耕作溝17箇所を検出した。その後、ローム層への旧石器時代の確認調査を行ったが、遺構・遺物は出土していない。

以下、検出された遺構種ごとに記述する。

1. 掘立柱建物

1号掘立柱建物(第2-10図、第2-2表、PL.2-4)

位置：調査範囲の中央南西寄りに位置し、東側に2号掘立柱建物が隣接する。多くの耕作溝および土坑と重複する。

座標値：X=28,830 Y=-86,239

重複：3・4・11号耕作溝および9・36号土坑と重複するが、その新旧は不明。

検出状況：計12基の柱穴で構成され、平面形は長方形であるが、短軸となる両端二辺の中間にある柱穴はやや外側に位置することから、六角形状を呈する。また、一部の柱穴は、重複する各遺構の底面下で確認した。遺物等の出土はない。

形状：長方形(六角形状)

規模：桁行4間(9.20m) 梁行2間(4.50m)

桁行方向：N-72°-E

柱穴：桁行方向となる南北両縁の各柱間距離は2.3~2.4mとほぼ同間で、梁行方向となる東西両縁での柱間距離は2.3~2.4mを測る。また、各柱穴は円形を呈し、その規模は径30~40cm、深さ25~44cmを測る。

所見・時期：時期等は不明であるが、中世以降の建物の可能性が高い。

2号掘立柱建物(第2-11図、第2-2表、PL.2-4)

位置：調査範囲の中央南寄りに位置し、西側に1号掘立柱建物が隣接する。複数の土坑と重複する。

座標値：X=28,831 Y=-86,235

重複：36号土坑と重複するが、その新旧は不明。

検出状況：計6基の柱穴で構成され、平面形は長方形を呈する。また、一部の柱穴は、重複する遺構の底面下で確認した。遺物等の出土はない。

形状：長方形

規模：桁行2間(4.33m) 梁行1間(3.19m)

桁行方向：N-17°-W

柱穴：桁行方向となる東西両縁の各柱間距離は2.2~2.6mとほぼ同間で、梁行方向となる南北両縁での柱間距離は3.2mを測る。また、各柱穴は円形を呈し、その規模は径22~34cm、深さ15~34cmを測る。

所見・時期：時期等は不明であるが、中世以降の建物の可能性が高い。

2. 土坑

1号土坑(第2-12・18図、第2-3・10表、PL.2-4・12)

位置：調査範囲南西隅の南壁際に位置し、南半は調査区外へ続く。

座標値：X=28,814 Y=-86,247

検出状況：平面形は長楕円形と思われ、底面の北端に段をもつ。出土遺物には、金属製品2点がある。

形状：長楕円形

規模：長軸(1.64)m 短軸1.00m 深さ56cm

長軸方向：N-27°-W

出土遺物：1・2は鉄製品の釘の一部である。

所見・時期：時期等は不明。

2号土坑(第2-12図、第2-3表、PL.2-4)

位置：調査範囲の中央西側に位置し、東側を3号土坑と僅かに重複する。

座標値：X=28,833 Y=-86,247

重複：1・2号耕作溝と大きく重複するが、その新旧は本土坑の方が古い。また、3号土坑との重複の新旧は不明。

検出状況：1・2号耕作溝の底面下に確認され、本土坑の方がより深く、底面も平坦である。遺物等の出土はない。

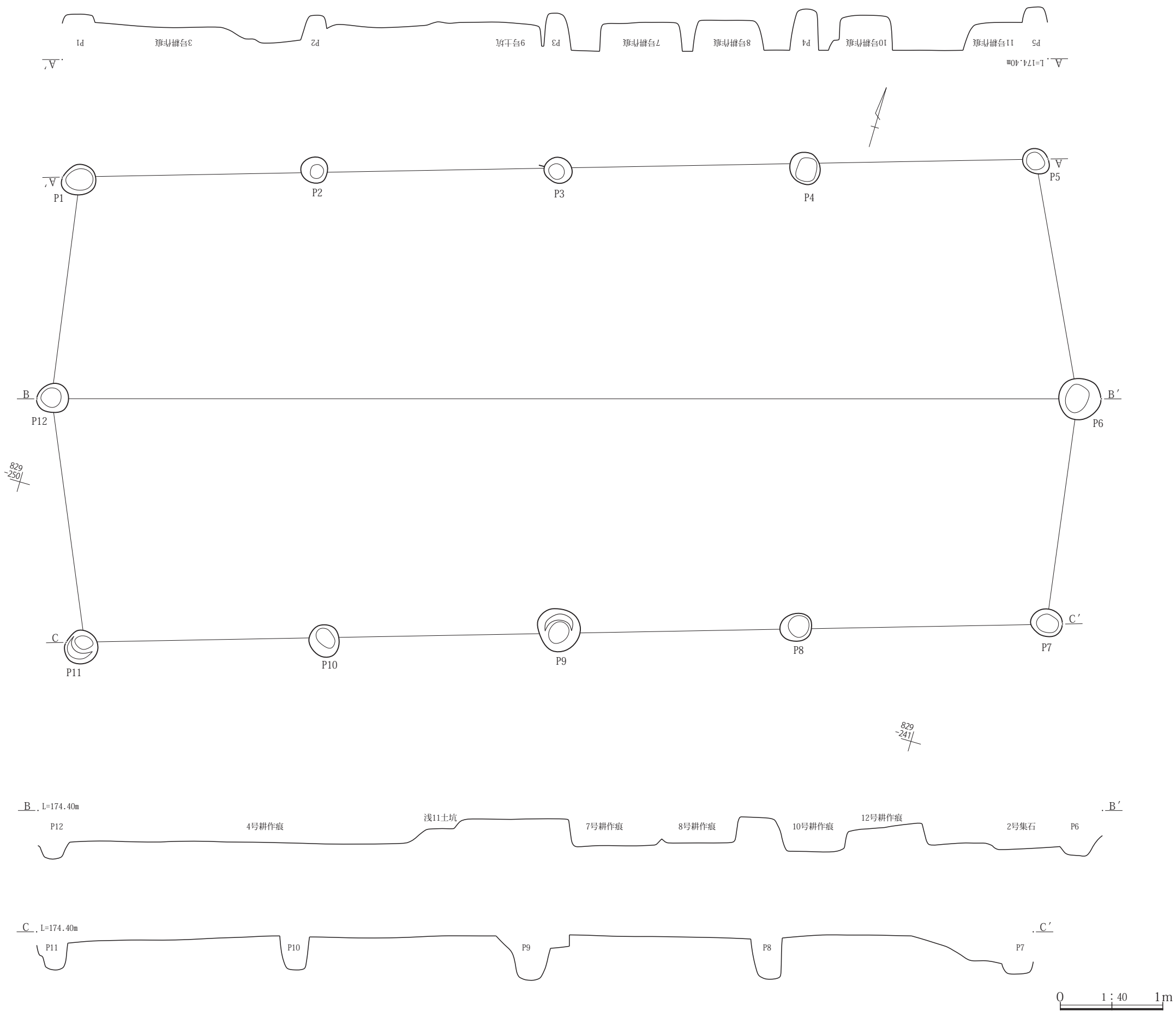
形状：円形

規模：径1.08m 深さ58cm

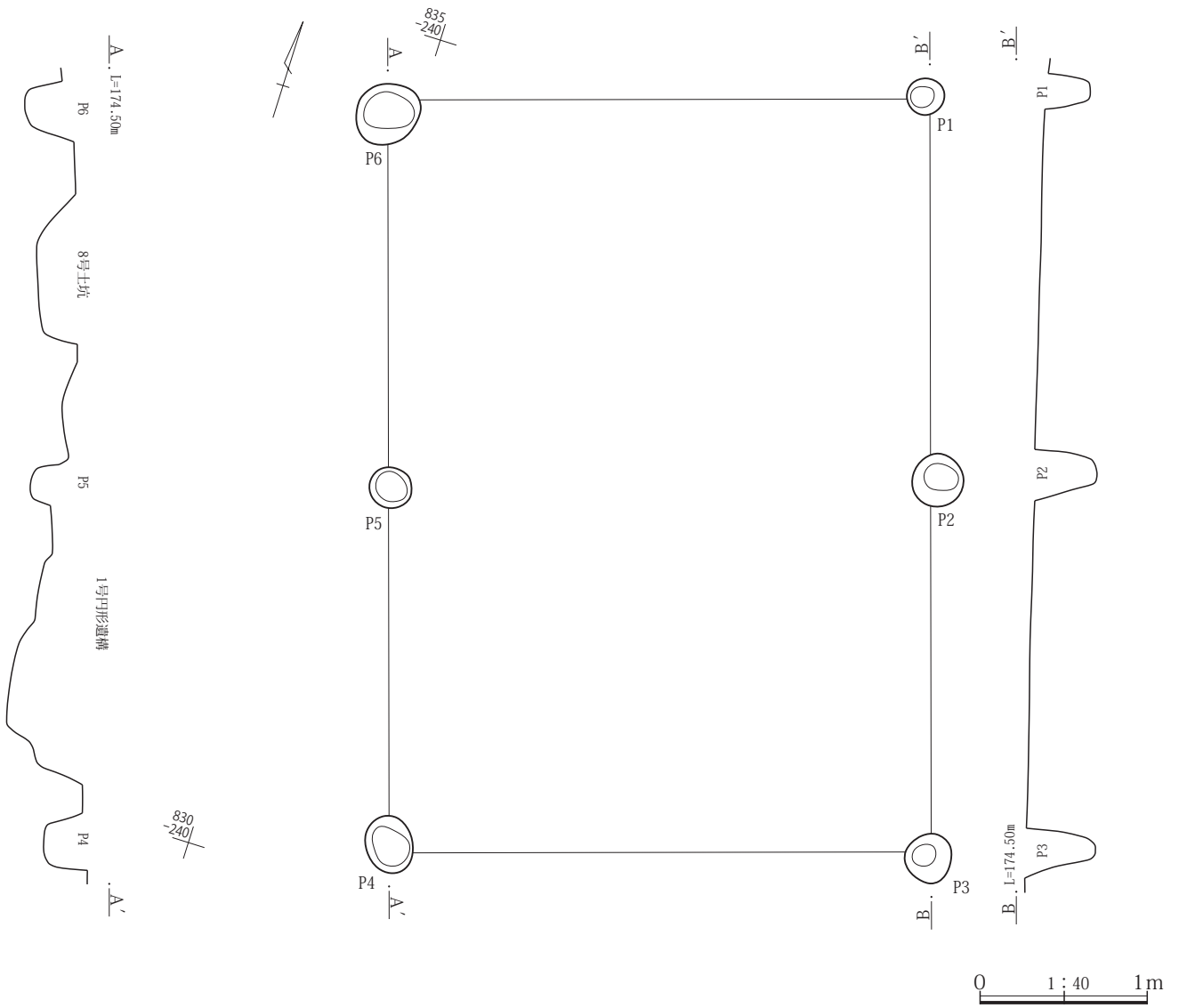
埋没土：ロームブロックを主体とする明黄褐色土で、混



第2-9図 第2地点全体図



第2-10图 第2地点1号掘立柱建物 平·断面图



第2-11図 第2地点2号掘立柱建物 平・断面図

第2章 七日市陣屋跡・七日市古墳群

入物から2層に分層できる。

所見・時期：1・2号耕作溝より古いことから、時期は中世以降と考えられる。

3号土坑(第2-12図、第2-3表、PL.2-4)

位置：調査範囲の中央西側に位置し、西側を2号土坑と僅かに重複する。

座標値：X=28,833 Y=-86,247

重複：1・2号耕作溝と大きく重複し、新旧は本土坑の方が古い。また、2号土坑との新旧は不明。

検出状況：1・2号耕作溝の底面下に2号土坑と共に確認され、本土坑の方が深く、底面も平坦。遺物等の出土はない。

形状：円形

規模：長軸0.80m 短軸(0.73)m 深さ17cm

埋没土：黒褐色土を主体とするが、混入物から2層に分層できる。

所見・時期：1・2号耕作溝より古いことから、時期は中世以降と考えられる。

4号土坑(第2-12図、第2-3表、PL.2-4)

位置：調査範囲の中央南側に位置し、東側に1号墓が隣接する。

座標値：X=28,823 Y=-86,242

検出状況：平面形は不整な円形で確認されたが、底面は平坦。遺物等の出土はない。

形状：不整円形

規模：長軸0.68m 短軸0.66m 深さ27cm

長軸方向：N-54°-W

埋没土：黒褐色土を主体とする砂質土。

所見・時期：時期等は不明。

5号土坑

(第2-12・18図、第2-3・11表、PL.2-5・12)

位置：調査範囲の中央南側に位置し、東側に34号土坑、西側に36号土坑が近接する。

座標値：X=28,829 Y=-86,236

検出状況：平面形は不整な円形で確認されたが、底面は平坦。出土遺物には、火打石1点がある。

形状：不整円形

規模：長軸1.48m 短軸1.38m 深さ45cm

長軸方向：N-43°-W

埋没土：黒褐色土を主体とするが、混入物から2層に分層できる。埋土下位に中型の円礫を多く含む。

出土遺物：4は石英製の火打石である。

所見・時期：時期等は中世以降と考えられる。

8号土坑(第2-12図、第2-3表、PL.2-5・6)

位置：調査範囲の中央南側に位置し、北端を16号土坑、南端を36号土坑と僅かに重複する。

座標値：X=28,833 Y=-86,239

重複：16・36号土坑と重複するが、新旧は不明。

検出状況：底面はおおむね平坦。遺物等の出土はない。

形状：楕円形

規模：長軸1.25m 短軸0.68m 深さ25cm

長軸方向：N-21°-E

埋没土：砂質な暗褐色土を主体とする。

所見・時期：時期等は不明。

9号土坑(第2-12・18図、第2-3・12表)

位置：調査範囲の中央南西寄りに位置し、6号耕作溝と重複する。

座標値：X=28,832 Y=-86,245

重複：6号耕作溝との新旧は、本土坑の方が古い。

検出状況：6号耕作溝より本土坑の底面は深く、底面は平坦である。埋土中に在地系土器の皿片が1点出土している。

形状：長方形

規模：長軸1.05m 短軸0.68m 深さ27cm

長軸方向：N-81°-E

埋没土：上位の暗褐色土と下位の黒褐色土分層できる。

出土遺物：5は在地系土器の皿で、口縁部が内湾する。

所見・時期：重複および出土遺物から、時期は中世以降と考えられる。

10号土坑(第2-12図、第2-3表、PL.2-5)

位置：調査範囲の中央南端付近に位置し、北端を11号土坑と僅かに重複する。

座標値：X=28,819 Y=-86,232

重複：11号土坑との新旧は不明。

検出状況：攪乱下に、重複する多くの土坑と共に不整形な形状で確認された。遺物等の出土はない。
 形状：長楕円形
 規模：長軸4.42m 短軸1.14m 深さ35cm
 長軸方向：N-64°-W埋没土：黒色土を主体とする。
 所見・時期：時期等は不明。

11号土坑(第2-12図、第2-3表、PL. 2-5)
 位置：調査範囲の中央南端付近に位置し、南端を10号土坑、北端を13号土坑と僅かに重複する。
 座標値：X=28,820 Y=-86,234
 重複：10・13号土坑との新旧は不明。
 検出状況：攪乱下に、重複する多くの土坑と共に不整形な形状で確認された。遺物等の出土はない。
 形状：楕円形
 規模：長軸4.42m 短軸1.06m 深さ31cm
 長軸方向：N-64°-W
 所見・時期：時期等は不明。

12号土坑(第2-13・18図、第2-3・13表、PL. 2-5・12)
 位置：調査範囲の中央南東隅付近に位置する。
 座標値：X=28,821 Y=-86,228
 検出状況：攪乱によって東半は不明であるが、掘込みは深く、底面は平坦。埋土中の上位から、瓦片が1点出土している。
 形状：楕円形
 規模：長軸1.18m 短軸0.74m 深さ74cm
 長軸方向：N-60°-E
 埋没土：ロームブロックを含む黒褐色土を主体とし、下部にローム塊が多い。
 出土遺物：6は鬼瓦で、表面周囲に猪目1カ所、裏面に龍頭1カ所を貼付けている。
 所見・時期：時期等は不明。

13号土坑(第2-13図、第2-3表、PL. 2-5)
 位置：調査範囲の中央南端付近に位置し、南端を11号土坑と僅かに重複する。
 座標値：X=28,820 Y=-86,236
 重複：11号土坑との新旧は不明。
 検出状況：攪乱下に、重複する多くの土坑と共に不整形な

形状で確認された。遺物等の出土はない。
 形状：不整形
 規模：長軸2.15m 短軸1.78m 深さ33cm
 長軸方向：N-5°-E
 所見・時期：時期等は不明。

14号土坑(第2-13図、第2-3表、PL. 2-5)
 位置：調査範囲の南端中央付近に位置する。
 座標値：X=28,815 Y=-86,234
 検出状況：掘込みは浅く、底面はおおむね平坦。遺物等の出土はない。
 形状：円形
 規模：径1.00m 短軸0.90m 深さ10cm
 埋没土：黒色土を主体とする。
 所見・時期：時期等は不明。

15号土坑(第2-3表、PL. 2-6)
 位置：調査範囲の中央付近に位置し、攪乱によって西半を大きく壊され、東半は14号耕作溝と重複する。
 座標値：X=28,836 Y=-86,239
 重複：14号耕作溝との新旧は、本土坑の方が古い。
 検出状況：攪乱と重複により、残存状態は極めて悪い。遺物等の出土はない。
 形状：楕円形か
 規模：長軸1.25m 短軸0.58m 深さ18cm
 長軸方向：N-54°-E
 埋没土：褐色土を主体とするが、混入物から2層に分層できる。
 所見・時期：時期等は不明。

16号土坑(第2-13図、第2-3表、PL. 2-6)
 位置：調査範囲の中央付近に位置し、南端を8号土坑と僅かに重複する。
 座標値：X=28,834 Y=-86,238
 重複：8号土坑との新旧は不明。
 検出状況：攪乱下に確認され、底面はやや凹凸きみ。遺物等の出土はない。
 形状：楕円形
 規模：長軸2.84m 短軸2.07m 深さ12cm
 長軸方向：N-30°-E

埋没土：暗褐色土を主体とする。

所見・時期：時期等は不明。

17号土坑(第2-13図、第2-3表、PL.2-6)

位置：調査範囲南東隅の南壁際に位置し、南半は調査区外へ続く。

座標値：X=28,815 Y=-86,228

検出状況：上面は長方形で、底面は深く細長い。遺物等の出土はない。

形状：長方形

規模：長軸(0.95)m 短軸0.97m 深さ84cm

長軸方向：N-3°-W

埋没土：暗褐色土を主体とする。

所見・時期：時期等は不明。

18号土坑(第2-13・18図、第2-3・14表、PL.2-6)

位置：調査範囲の中央北寄りに位置する。

座標値：X=28,848 Y=-86,231

検出状況：掘込みは浅く、底面は平坦。出土遺物には在地系土器の内耳鍋片がある。

形状：楕円形

規模：長軸1.62m 短軸1.34m 深さ18cm

長軸方向：N-27°-W

埋没土：黒褐色土を主体とする。

出土遺物：7は在地系土器の内耳鍋で、内面上部に緩い段差をもち、燻し焼成である。

所見・時期：出土遺物から、時期は中世以降と考えられる。

19号土坑(第2-13図、第2-3表、PL.2-6)

位置：調査範囲中央の攪乱内に位置する。

座標値：X=28,841 Y=-86,232

検出状況：攪乱下に確認され、北側は壊されている。底面は平坦。遺物等の出土はない。

形状：長方形

規模：長軸1.42m 短軸0.77m 深さ46cm

長軸方向：N-4°-E

埋没土：黒褐色土を主体とする。

所見・時期：時期等は不明。

20号土坑(第2-13図、第2-3表)

位置：調査範囲の中央西寄りに位置する。

座標値：X=28,841 Y=-86,241

検出状況：攪乱により南側は壊され、不明な点が多い。遺物等の出土はない。

形状：長方形

規模：長軸(1.10)m 短軸1.34m 深さ36cm

長軸方向：N-20°-W

埋没土：黒褐色土を主体とする。

所見・時期：時期等は不明。

21号土坑(第2-14・18図、第2-3・15表、PL.2-6)

位置：調査範囲の中央北寄りに位置し、東側に23・24号土坑が近接する。

座標値：X=28,850 Y=-86,239

検出状況：整った円形で、底面は平坦。出土遺物には在地系土器の片口鉢片がある。

形状：円形

規模：径1.37m 深さ22cm

埋没土：黒褐色土を主体とする。

出土遺物：8は在地系土器の片口鉢で、片口の縁部外面に浅い凹線を1条もち、口縁部は玉縁状をなす。

所見・時期：出土遺物から、時期は中世以降と考えられる。

22号土坑(第2-14図、第2-3表、PL.2-6)

位置：調査範囲の中央に位置し、西側に25・26号土坑が近接する。

座標値：X=28,846 Y=-86,239

検出状況：攪乱により一部を壊されるが、底面は平坦。遺物等の出土はない。

形状：長方形

規模：長軸(2.18)m 短軸1.00m 深さ16cm

長軸方向：N-83°-E

埋没土：黒褐色土を主体とする。

所見・時期：時期等は不明であるが、近世以降の可能性が高い。

23号土坑(第2-14図、第2-3表、PL.2-7)

位置：調査範囲の中央北寄りに位置し、24号土坑と重複する。

座標値：X=28,850 Y=-86,236

重複：24号土坑との新旧は不明。
 検出状況：底面は24号土坑と同じ高さであり、両土坑とも平坦。遺物等の出土はない。
 形状：長方形
 規模：長軸2.89m 短軸1.06m 深さ24cm
 長軸方向：N-84°-E
 埋没土：黒褐色土を主体とする。
 所見・時期：時期等は不明。

24号土坑(第2-14図、第2-3表、PL.2-7)
 位置：調査範囲の中央北寄りに位置し、23号土坑と重複する。
 座標値：X=28,849 Y=-86,238
 重複：23号土坑との新旧は不明。
 検出状況：底面は23号土坑と同じ高さであり、両土坑とも平坦。遺物等の出土はない。
 形状：長方形
 規模：長軸(0.70)m 短軸0.55m 深さ23cm
 長軸方向：N-7°-E
 埋没土：黒褐色土を主体とする。
 所見・時期：時期等は不明。

25号土坑(第2-14・18図、第2-3・16表、PL.2-7)
 位置：調査範囲の中央西寄りに位置し、北側に26号土坑が隣接する。
 座標値：X=28,844 Y=-86,241
 検出状況：攪乱により一部を壊されるが、底面はおおむね平坦。出土遺物には在地系土器の内耳鍋片がある。
 形状：楕円形
 規模：長軸1.07m 短軸0.83m 深さ26cm
 長軸方向：N-48°-E
 埋没土：黒褐色土や粘質ローム、暗褐色土からなり、分層できる。
 出土遺物：9は在地系土器の内耳鍋で、内面段差部分の耳を欠損する。
 所見・時期：出土遺物から、時期は中世以降と考えられる。

26号土坑(第2-14図、第2-3表、PL.2-7)
 位置：調査範囲の中央西寄りに位置し、南側に25号土坑が隣接する。

座標値：X=28,845 Y=-86,242
 検出状況：底面は平坦で、遺物等の出土はない。
 形状：円形
 規模：長軸0.68m 短軸0.63m 深さ13cm
 埋没土：暗褐色土を主体とする。
 所見・時期：時期等は不明であるが、近世以降の可能性が高い。

27号土坑(第2-14図、第2-3表、PL.2-7)
 位置：調査範囲の中央付近に位置し、28号土坑と重複する。
 座標値：X=28,843 Y=-86,239
 重複：28号土坑との新旧は、本土坑の方が古い。
 検出状況：土坑の西半を28号土坑と重複するが、円形を呈すると考えられる。遺物等の出土はない。
 形状：円形
 規模：長軸1.18m 短軸1.17m 深さ27cm
 埋没土：黒褐色土と暗褐色土の2層に分層できる。
 所見・時期：時期等は不明であるが、中世以降の可能性が高い。

28号土坑(第2-14・18図、第2-3・17表、PL.2-7・12)
 位置：調査範囲の中央付近に位置し、27・29号土坑と重複する。
 座標値：X=28,841 Y=-86,239
 重複：27・29号土坑との新旧は、いずれの土坑よりも本土坑の方が最も新しい。
 検出状況：底面は27・29号土坑と同じ高さであり、いずれの土坑も平坦。出土遺物には、龍泉窯系青磁の碗片、在地系土器の内耳鍋片、銭貨2枚がある。
 形状：長方形
 規模：長軸(3.07)m 短軸1.28m 深さ24cm
 長軸方向：N-23°-W
 埋没土：上位にAs-Aを含む黒褐色土を主体とする。
 出土遺物：11は龍泉窯系青磁の碗で、外面に鎬蓮弁文をもつ。10・12は在地系土器の内耳鍋である。銭貨には、13の「嘉祐通寶」、14の「永樂通寶」がある。
 所見・時期：埋土にAs-Aを含むことから、時期は近世以降と考えられる。

29号土坑(第2-14図、第2-3表、PL. 2-7)

位置：調査範囲の中央付近に位置し、28号土坑と重複する。

座標値：X=28,842 Y=-86,240

重複：28号土坑との新旧は、本土坑の方が古い。

検出状況：東側の大半を28号土坑と重複するが、円形を呈すると考えられる。遺物等の出土はない。

形状：円形

規模：長軸(1.34)m 短軸(0.36)m 深さ17cm

埋没土：黒褐色土を主体とする。

所見・時期：時期等は不明であるが、中世以降の可能性が高い。

30号土坑(第2-14図、第2-3表、PL. 2-7)

位置：調査範囲の中央北側に位置する。

座標値：X=28,855 Y=-86,239

検出状況：土坑の西側を攪乱により壊されるが、楕円形を呈するものと考えられる。底面は平坦で、遺物等の出土はない。

形状：楕円形

規模：長軸(1.44)m 短軸1.28m 深さ27cm

長軸方向：N-70°-E

埋没土：As-Aを含む黒褐色土を上層に、土坑の主体は黒褐色土とAs-Bを多く含む暗褐色土の2層に分層できる。

所見・時期：時期等は不明であるが、中世以降の可能性が高い。

31号土坑

(第2-14・18図、第2-3・18表、PL. 2-7・8・12)

位置：調査範囲の中央北側に位置し、北側に2号井戸がある。

座標値：X=28,862 Y=-86,233

検出状況：攪乱で南側の一部を壊されるが、底面は平坦。出土遺物には在地系土器の片口鉢片がある。

形状：長方形

規模：長軸(2.10)m 短軸1.16m 深さ26cm

長軸方向：N-18°-W

埋没土：黒褐色土を主体とする。

出土遺物：15～17は在地系土器の15世紀前半頃の片口

鉢で、いずれも体部内面は使用により器表が平滑となっている。

所見・時期：出土遺物から、時期等は中世以降と考えられる。

32号土坑

(第2-15・19図、第2-3・19表、PL. 2-8・12)

位置：調査範囲中央付近の西壁際に位置し、西側は調査区外へ続く。また、土坑の北側は1号溝と重複する。

座標値：X=28,852 Y=-86,248

重複：1号溝との新旧は、本土坑の方が古い。

検出状況：長方形を呈する土坑と考えられ、底面は平坦。出土遺物には常滑陶器と思われる片口鉢片がある。

形状：長方形

規模：長軸2.25m 短軸(0.90)m 深さ38cm

長軸方向：N-16°-W

埋没土：黒褐色土を主体とするが、混入物から4層に分層できる。

出土遺物：18・19は常滑片口鉢のI類で、18の口縁部は肥厚する。

所見・時期：出土遺物から、時期等は中世以降と考えられる。

33号土坑

(第2-15・19図、第2-3・20表、PL. 2-8・12)

調査時に1号竪穴状遺構として調査した遺構である。

位置：調査範囲の中央南側に位置し、西側を34号土坑と重複する。

座標値：X=28,833 Y=-86,233

重複：34号土坑との新旧は、本土坑の方が古い。

検出状況：底面は平坦となるが、長軸の両端に径22～28cm、深さ54cmのピットを有する。出土遺物には、在地系土器の皿と内耳鍋片がある。

形状：長方形

規模：長軸4.28m 短軸1.66m 深さ26cm

長軸方向：N-27°-W

埋没土：黒褐色土を主体とするが、混入物から2層に分層できる。

出土遺物：20は口縁部から体部が外反する在地系土器の皿。21～25は16世紀と考えられる在地系土器の内耳

鍋である。

所見・時期：出土遺物から、時期等は中世以降と考えられる。

34号土坑

(第2-15・19図、第2-3・21表、PL. 2-8・12)

調査時に2号竪穴状遺構として調査した遺構である。

位置：調査範囲の中央南側に位置し、東側を33号土坑と重複する。

座標値：X=28,832 Y=-86,234

重複：33号土坑との新旧は、本土坑の方が新しい。

検出状況：底面は平坦となるが、長軸の両端に径50cm、深さ80cmのピットを有する。出土遺物には、在地系土器の内耳鍋片と焙烙片がある。

形状：長方形

規模：長軸3.06m 短軸1.46m 深さ32cm

長軸方向：N-11°-W

埋没土：黒褐色土を主体とするが、混入物から2層に分層できる。

出土遺物：26～28は16世紀と考えられる在地系土器の内耳鍋。29は16世紀と考えられる在地系土器の焙烙で、口縁端部が小さく外反し、体部外面は篋削りとなる。

所見・時期：出土遺物から、時期等は中世以降と考えられる。

35号土坑(第2-16図、第2-3表、PL. 2-8)

調査時に1号不定形土坑として調査した遺構である。

位置：調査範囲の中央東端に位置する。

座標値：X=28,844 Y=-86,223

検出状況：攪乱により大きく壊され、形状は不明確であるため不整形とした。底面はおおむね平坦。遺物等の出土はない。

形状：不整形

規模：長軸(4.76)m 短軸1.14m 深さ13cm

長軸方向：N-57°-W

埋没土：黒褐色土を主体とする。

所見・時期：時期等は不明であるが、時期等は中世以降と考えられる。

36号土坑(第2-16・19図、第2-3・22表、PL. 2-8・12)

調査時に1号円形状遺構として調査した遺構である。
位置：調査範囲の中央南側に位置し、北側に8号土坑および11号耕作溝が重複する。

座標値：X=28,830 Y=-86,238

重複：8号土坑・11号耕作溝と新旧は、いずれの遺構よりも本土坑の方が新しい。

検出状況：形状は不明な点も多いが、大型の楕円形を呈すると考えられる。底面はおおむね平坦であるが、若干の凹凸がある。また、北側と南側に、円礫が集中した径1.0m前後、深さ10cmの円形の穴を有する。出土遺物には、在地系土器の皿片がある。

形状：楕円形

規模：長軸(3.22)m 短軸2.82m 深さ16cm

長軸方向：N-18°-W

埋没土：As-Aを含む黒褐色土を主体とする。

出土遺物：30・31は在地系土器の皿底部である。

所見・時期：埋土にAs-Aを含むことから、時期は近世以降と考えられる。

37A号土坑(第2-17・19～25図、第2-3・23表、PL. 2-9・12～15)

調査時に1号集石土坑として調査した遺構である。調査時は一つの土坑として扱ったが、ここでは重複する2基の土坑(37A・B号土坑)として記述する。

位置：調査範囲の北西隅付近に位置し、南東の一部を1号溝と重複する。

座標値：X=28,862 Y=-86,243

重複：37B号土坑との新旧は、本土坑の方が新しい。

検出状況：平面形は楕円形と思われるが、不明な点もある。また、土坑内の中位以下には、大小の礫が多量に詰まっていた。出土遺物については37A・B号土坑の区別がつかないため、ここに記す。上絵盃や瑠璃釉小碗、染付小碗、染付小丸碗、染付碗等の多くの磁器が出土している。

形状：楕円形

規模：長軸4.64m 短軸4.00m 深さ115cm

長軸方向：N-49°-W

埋没土：As-Aを多く含む暗褐色土を上層に、下層は大小の礫が詰まる。

出土遺物：37A・B号土坑から出土したものには、製作

地不詳磁器に32～37の上絵盃、45の染付小碗、瀬戸・美濃磁器に56の染付碗、43・44・46・47・48の染付小碗、41の瑠璃釉小碗、42の小碗、39の小杯、肥前磁器に38の染付重、49の染付小丸碗、40の染付小碗、さらに肥前磁器と思われる50の染付碗がある。石製品類としては、137の粗粒輝石安山岩製の磨石、141の梵字(キリーク)と連座が刻まれた緑色片岩製の板碑で、140は黒色片岩製の板碑である。白類には、138の粗粒輝石安山岩製の茶白(下白)、139の牛状砂岩製の石白(上白)がある。他に、硯として頁岩製の140があるが、図示以外にも珪質粘板岩製、細粒輝石安山岩製、輝緑岩製の硯片がある。

所見・時期：埋土にAs-Aを含むことから、時期は近世以降と考えられる。また、37B号土坑とあまり時間差のない可能性がある。

37B号土坑

(第2-17・19～25図、第2-3・23表、PL. 2-9・12～15)

位置：調査範囲の北西隅付近に位置し、南東の一部を1号溝と重複する。

座標値：X=28,862 Y=-86,243

重複：37A号土坑との新旧は、本土坑の方が古い。

検出状況：平面形は楕円形を呈し、底面は平坦となる。土坑内には、大小の礫が少量混入する。

形状：楕円形

規模：長軸4.64m 短軸4.00m 深さ115cm

長軸方向：N-49°-W

埋没土：As-Aを多く含む暗褐色土を主体とするが、混入物から数層に分層できる。

所見・時期：埋土にAs-Aを含むことから、時期は近世以降と考えられる。また、37A号土坑とあまり時間差のない可能性がある。

3. 墓

1号墓(第2-26図、第2-4・24表、PL. 2-9・16)

位置：調査範囲の中央西寄りに位置し、6・7号耕作溝と重複する。

座標値：X=28,834 Y=-86,245

重複：6・7号耕作溝との新旧は、本土坑の方が古い。

検出状況：壙の西半と南東側を6・7号耕作溝に壊され、残存状態は悪い。埋土中には、人頭大の円礫が二石含まれていた。底面は平坦となる。壙の北側からは人骨の一部と歯が出土しており、他の出土遺物には銭貨6枚がある。

形状：長方形

規模：長軸0.95m 短軸0.54m 深さ27cm

長軸方向：N-15°-W

埋没土：黒褐色土を主体とし、人頭大の円礫を含む。

出土遺物：銭貨が6枚あり、1は「太平通寶」、2は「元豊通寶」、3は「開元通寶」、4は「天聖元寶」、5は「祥符元寶」、6は「皇宋通寶」である。

所見・時期：出土した銭貨から、時期等は中世と考えられる。

2号墓(第2-26図、第2-4・25表、PL. 2-9・16)

位置：調査範囲の中央南西側に位置し、西側に4号土坑が隣接する。

座標値：X=28,827 Y=-86,241

検出状況：埋没土上位には多くの大型扁平礫が塞ぐようになり、その状況は中央がより落ち込むような形であった。壙の掘込みは深く、底面は平坦となる。壙の北側には人骨の頭部が出土しており、他の出土遺物には銭貨1枚がある。

形状：長方形

規模：長軸0.96m 短軸0.67m 深さ48cm

長軸方向：N-12°-W

埋没土：黒褐色土を主体とし、大型扁平礫を多く含む。

出土遺物：銭貨の7は「熙寧元寶」と思われる。

所見・時期：出土した銭貨から、時期等は中世と考えられる。

3号墓(第2-26図、第2-4・26表、PL. 2-9・16)

14号耕作溝と重複し、人骨の出土もなく不明な点も多いが、銭貨の出土から墓とした。

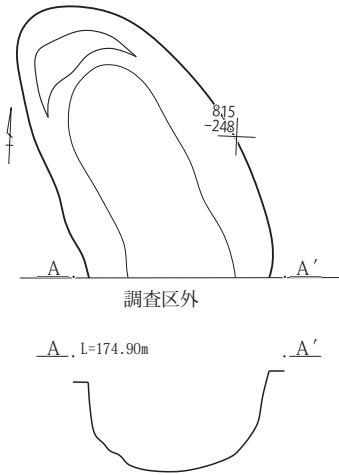
位置：調査範囲の中央に位置し、壙の大半を14号耕作溝と重複する。

座標値：X=28,836 Y=-86,236

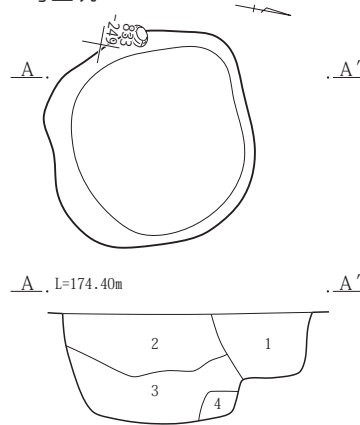
重複：14号耕作溝との新旧は、本土坑の方が古い。

検出状況：壙の大半を14号耕作溝に壊され、残存状態は

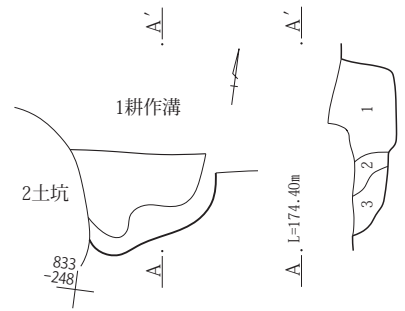
1号土坑



2号土坑



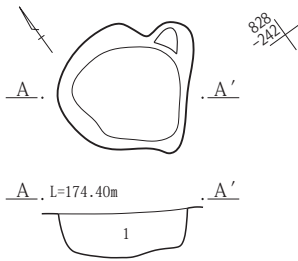
3号土坑



- 1 黒褐色土 As-B含む。ロームブロックを少量含む砂質土。(1号耕作溝)
- 2 黒褐色土 As-B含む。ロームブロックを含むやや砂質土。(2号耕作溝)
- 3 明黄褐色土 粘質ローム中ブロックを主体とする。(2号土坑)
- 4 明黄褐色土 粘質ローム塊。(2号土坑)

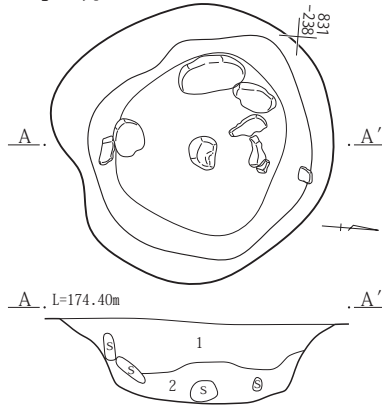
- 1 黒褐色土 As-B含む。ロームブロックを少量含む砂質土。(1号耕作溝)
- 2 黒褐色土 ローム粒、灰白色粒を少量含む砂質土。(3号土坑)
- 3 黒褐色土 1層にローム大ブロックを含む。(3号土坑)

4号土坑



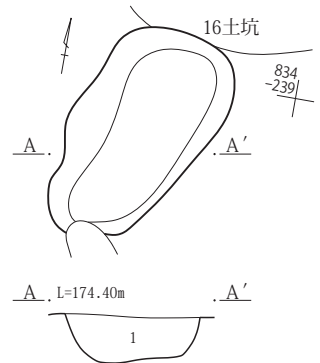
- 1 黒褐色土 ローム中ブロックを斑点状に含む砂質土。

5号土坑



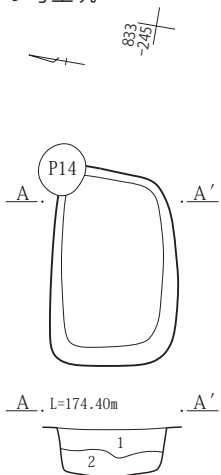
- 1 黒褐色土 ローム中ブロックを含む砂質土。
- 2 黒褐色土 1層よりロームブロックを多く含む。

8号土坑



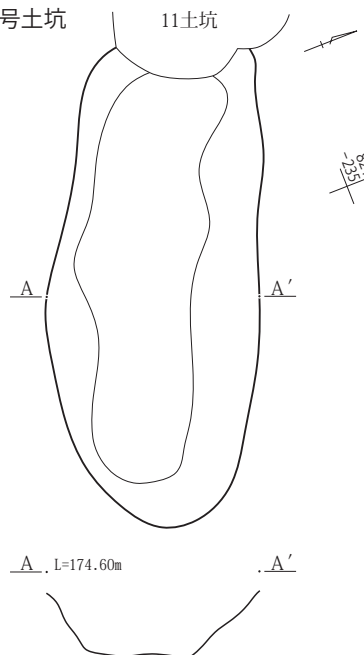
- 1 暗褐色土 ローム大ブロックを多く含む砂質土。

9号土坑

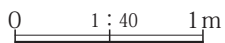
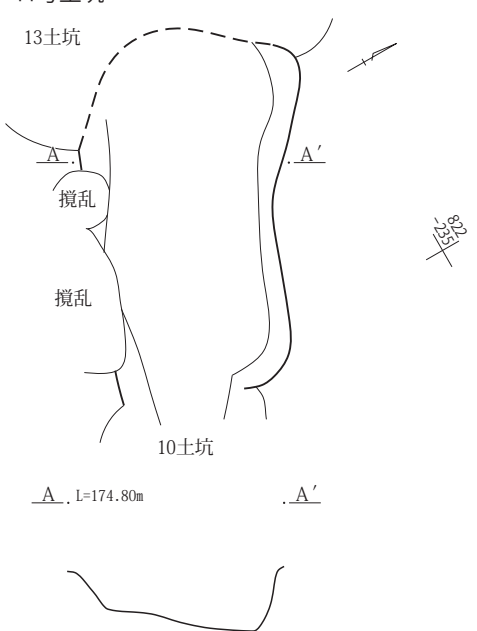


- 1 暗褐色土 ロームブロックを含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒・ローム小ブロックを多く含む。

10号土坑

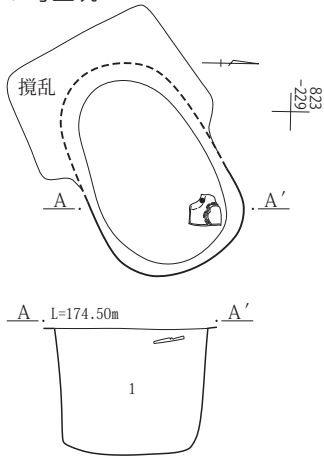


11号土坑



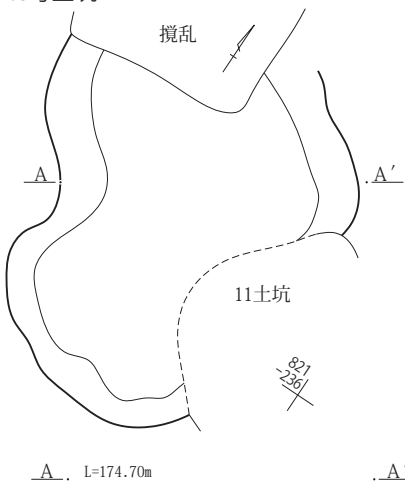
第2-12図 第2地点1～5・8～11号土坑 平・断面図

12号土坑

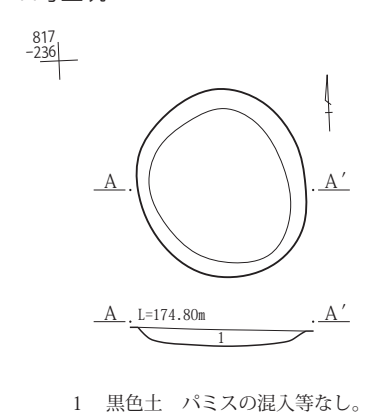


1 黒褐色土 ローム大ブロックを含み、下部にローム塊が多い。

13号土坑

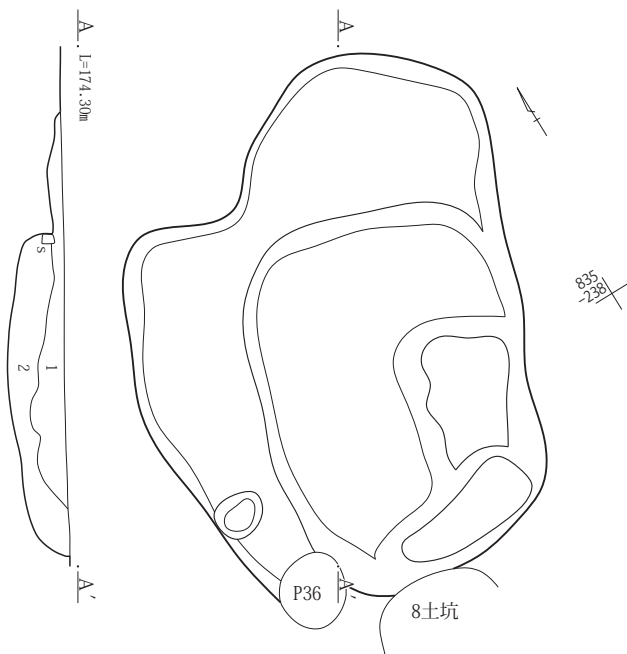


14号土坑



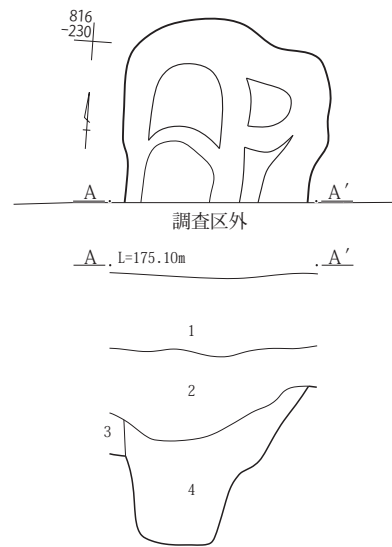
1 黒色土 パミスの混入等なし。

16号土坑



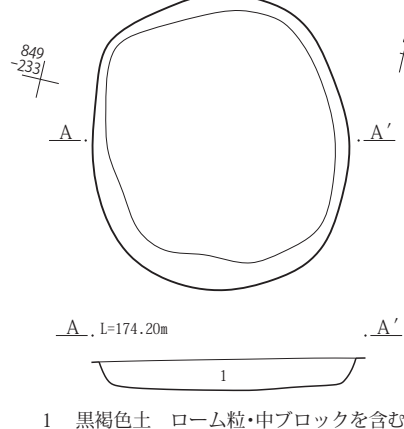
1 黒褐色土 (攪乱)
2 暗褐色土 ローム粒、ローム中ブロックを含む。(16号土坑)

17号土坑



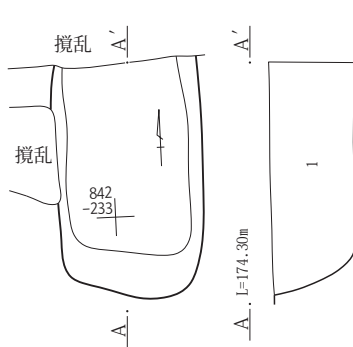
1 表土
2 黒褐色土 ローム中ブロックを多く、大型礫を少量含む。
3 黒褐色土 中型礫を含む。
4 暗褐色土 ローム粒を多く含み、上面に薄い炭化物層。(17号土坑)

18号土坑



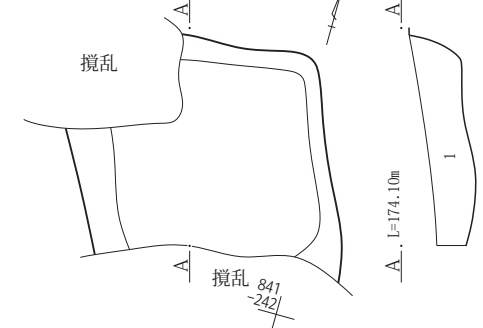
1 黒褐色土 ローム粒・中ブロックを含む。

19号土坑

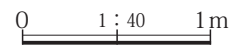


1 黒褐色土 ローム粒・中ブロックを少量含む。

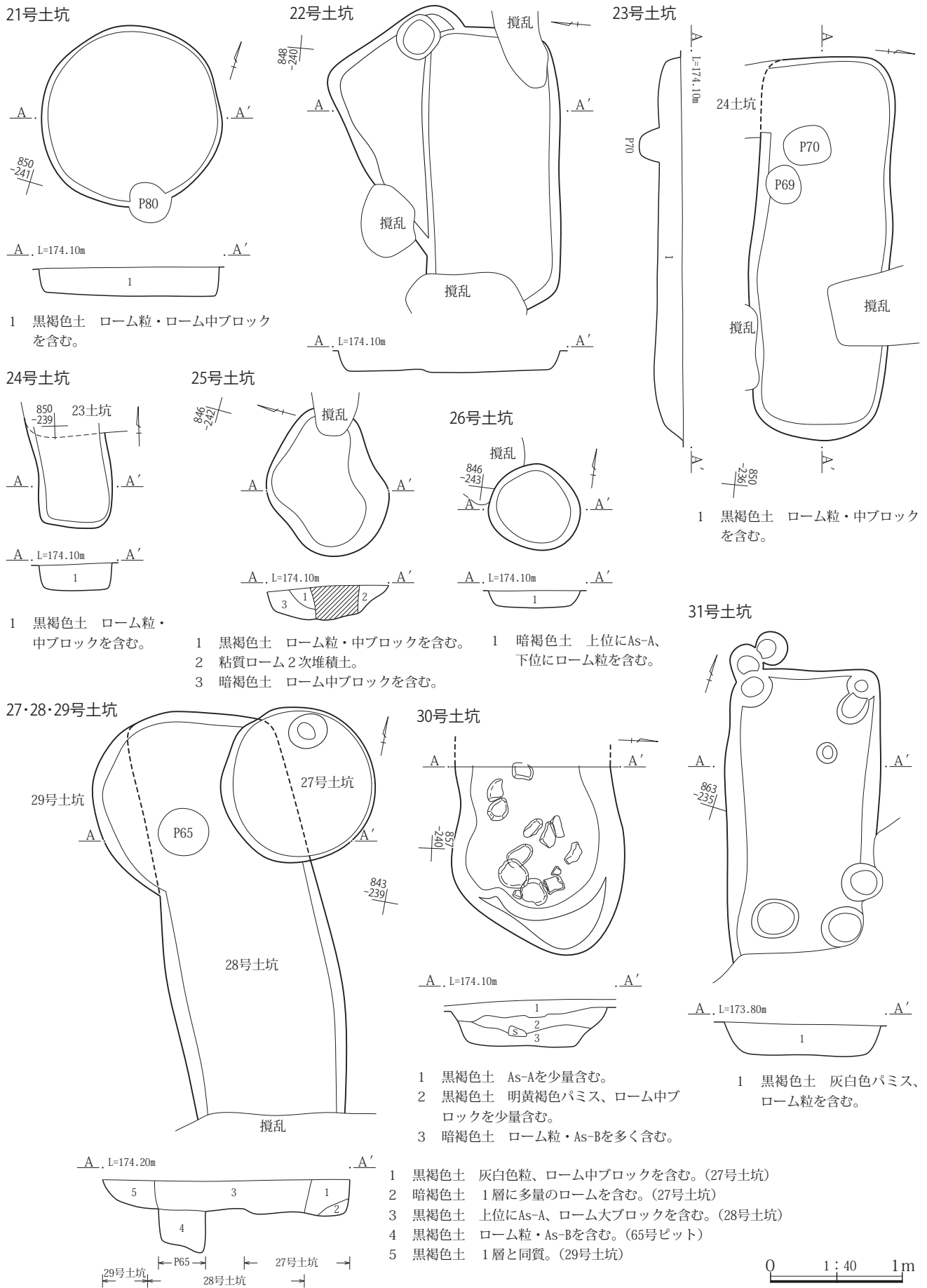
20号土坑



1 黒褐色土 ローム粒を少量、大ブロックを多く含む。

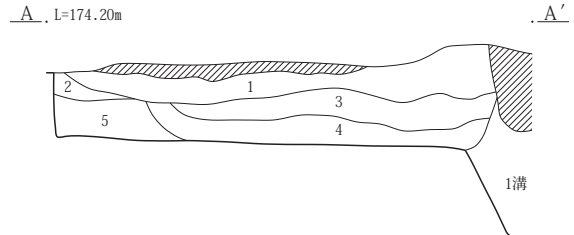
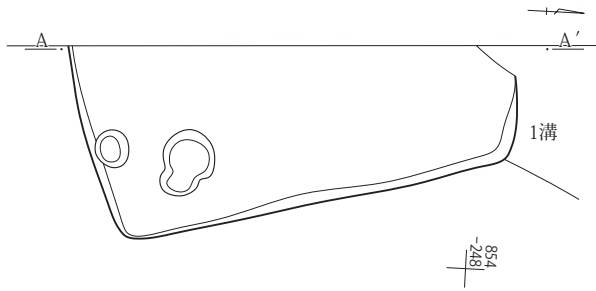


第2-13図 第2地点12～14・16～20号土坑 平・断面図



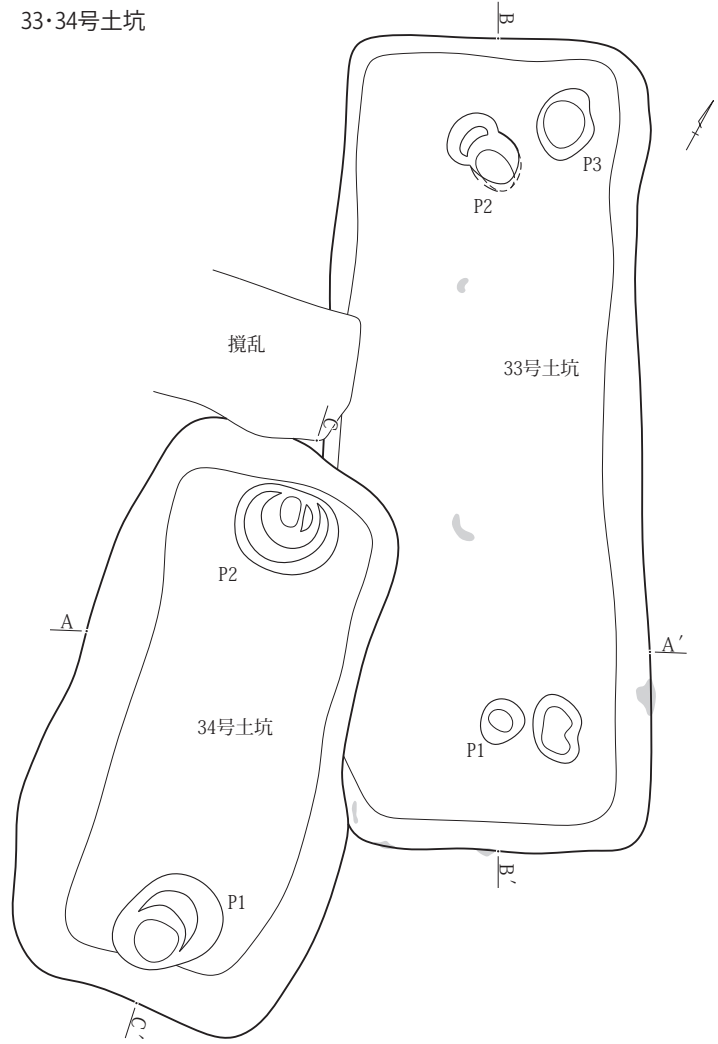
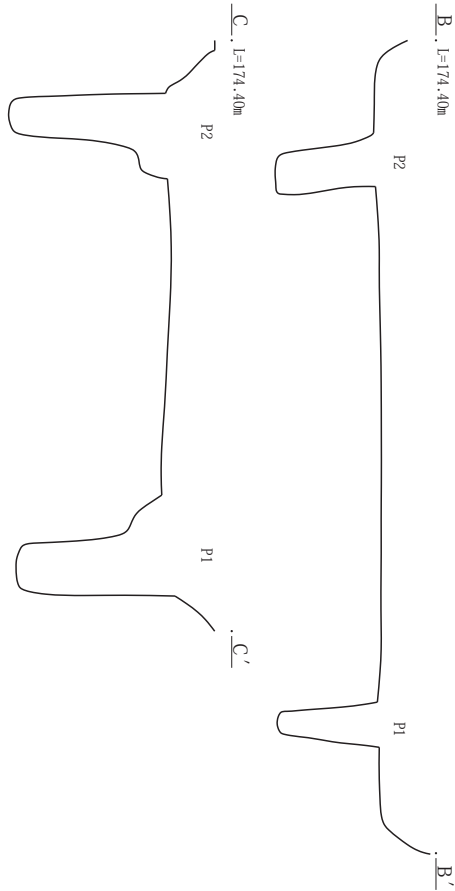
第2-14図 第2地点21～31号土坑 平・断面図

32号土坑



- 1 黒褐色土 As-Aを含む(攪乱)
- 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを多く含む粘質土。
- 3 黒褐色土 灰白色粒を含む粘質土。
- 4 黒褐色土 3層にローム中ブロックを含む。
- 5 黒褐色土 灰白色粒を微量含む粘質土。

33・34号土坑

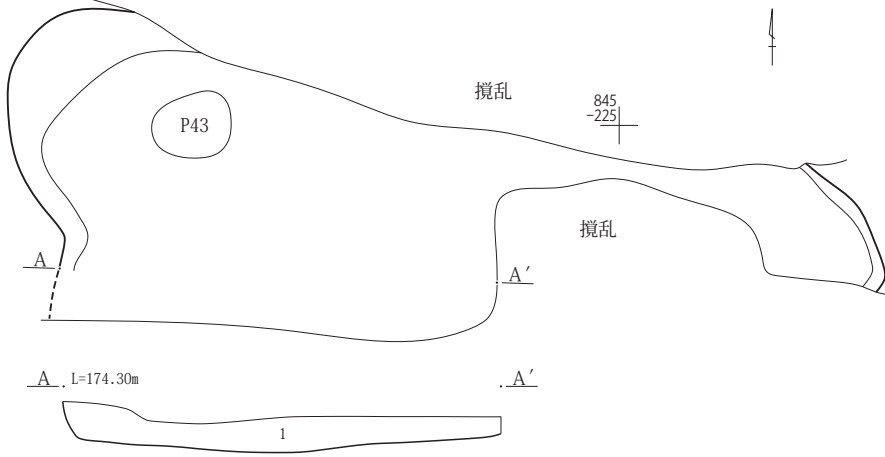


- 1 黒褐色土 炭化物を微量含む。(34号土坑)
- 2 黒褐色土 1層にローム小ブロック・ローム粒を含む。(34号土坑)
- 3 黒褐色土 炭化物を多く含む。(33号土坑)
- 4 黒褐色土 3層にロームブロック・ローム粒を多く含む。(33号土坑)

0 1:40 1m

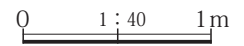
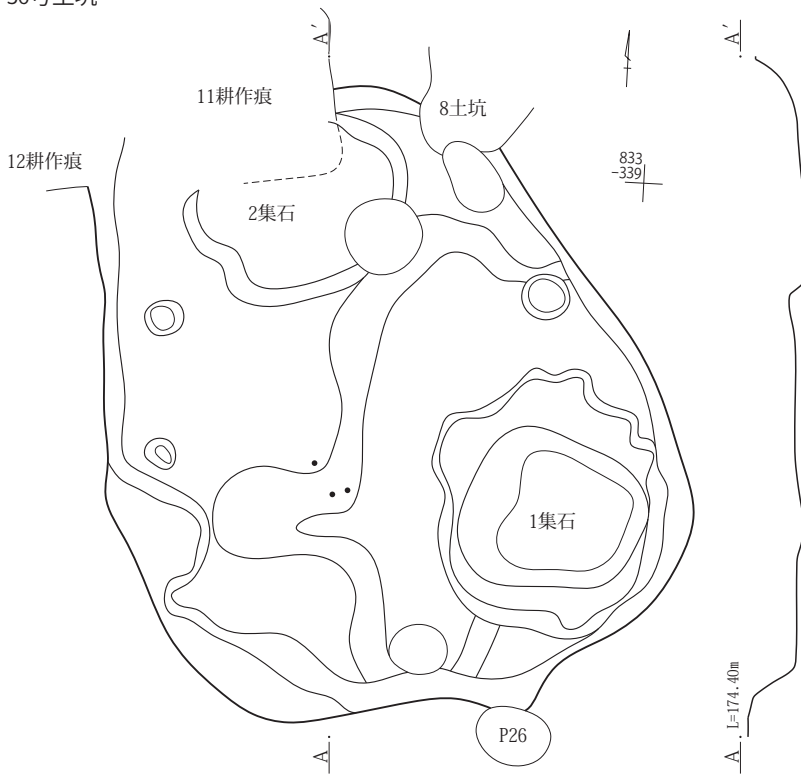
第2-15図 第2地点32～34号土坑 平・断面図

35号土坑



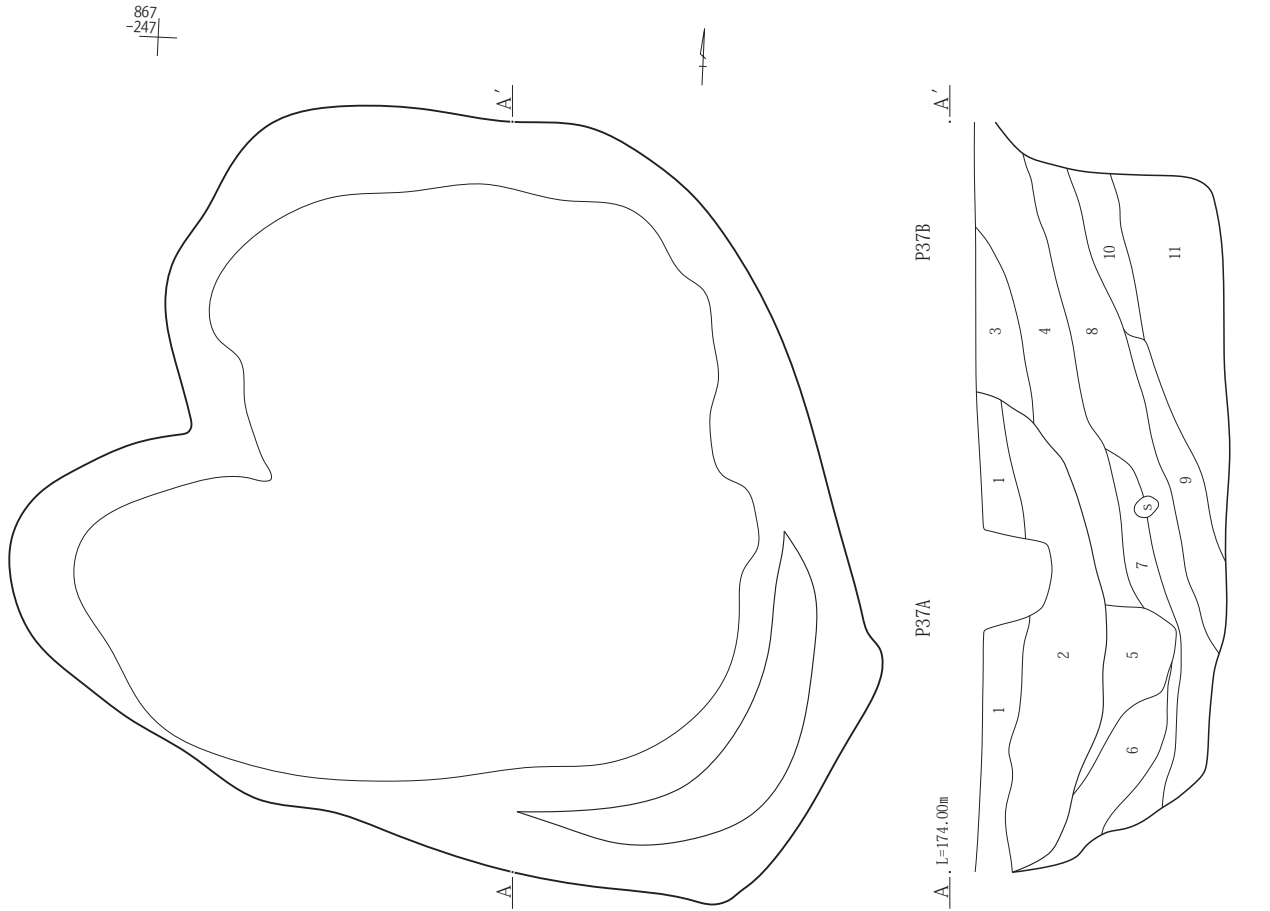
1 黒褐色土 ローム粒・ローム中ブロックを含む。

36号土坑



第2-16図 第2地点35・36号土坑 平・断面図

37A・B号土坑



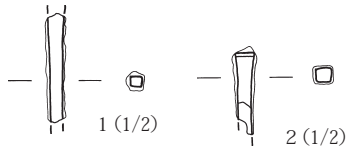
- 1 暗褐色土 As-Aを多く、中型礫を少量含む。(37A号土坑)
- 2 中型礫を主体とする。(37A号土坑)
- 3 暗褐色土 1層に近似する。As-Aの混入少ない。(37B号土坑)
- 4 黒褐色土 As-A、大型礫を含む。(37B号土坑)
- 5 黒褐色土 As-Aを少量、大型礫を含む。(37B号土坑)
- 6 黒褐色土 As-Aを少量含む。(37B号土坑)
- 7 黒褐色土 4層にローム中ブロックを含む。(37B号土坑)
- 8 黒褐色土 4層より円礫の混入少なく、As-Aを含む。(37B号土坑)
- 9 ロームブロックを主体とする。(37B号土坑)
- 10 黒褐色土 As-Aの混入ない。小礫を含む。(37B号土坑)
- 11 黒褐色土 10層に近似。黒色味強く、粘性あり。(37B号土坑)

0 1:40 1m

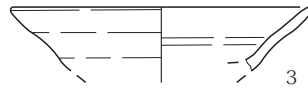
第2-17図 第2地点37A・B号土坑 平・断面図

第4節 検出された遺構と遺物

1号土坑

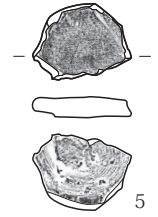


5号土坑

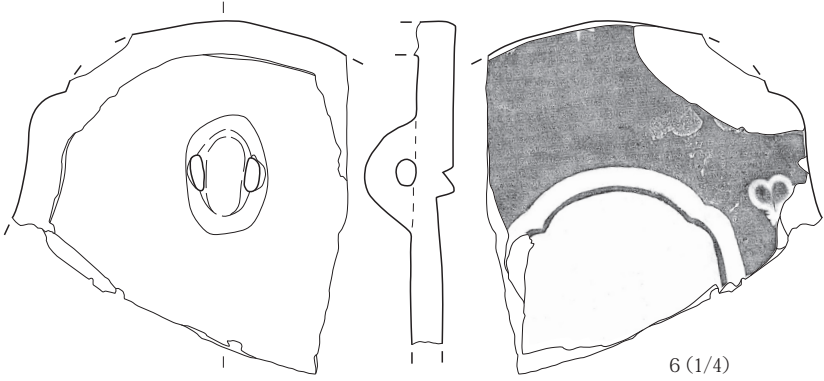


4 (1/2)

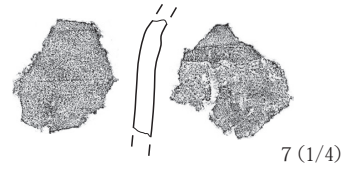
9号土坑



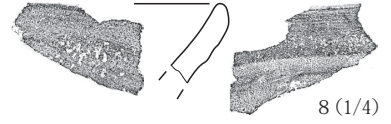
12号土坑



18号土坑



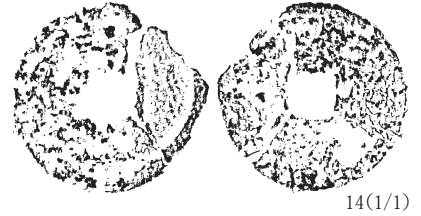
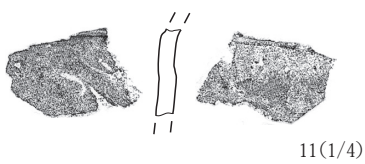
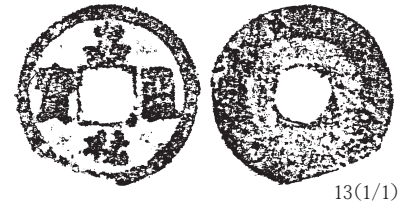
21号土坑



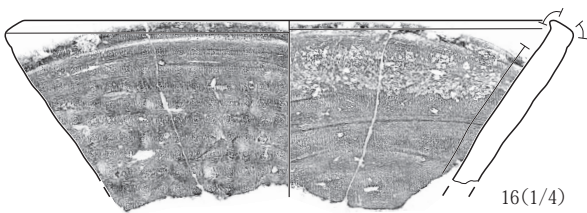
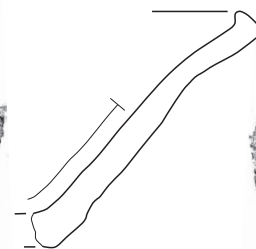
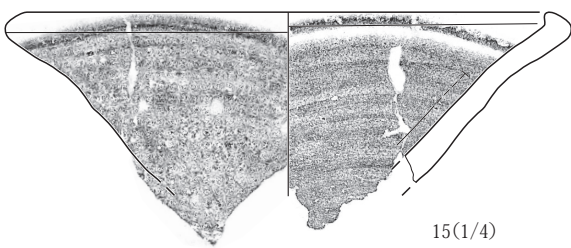
25号土坑



28号土坑



31号土坑



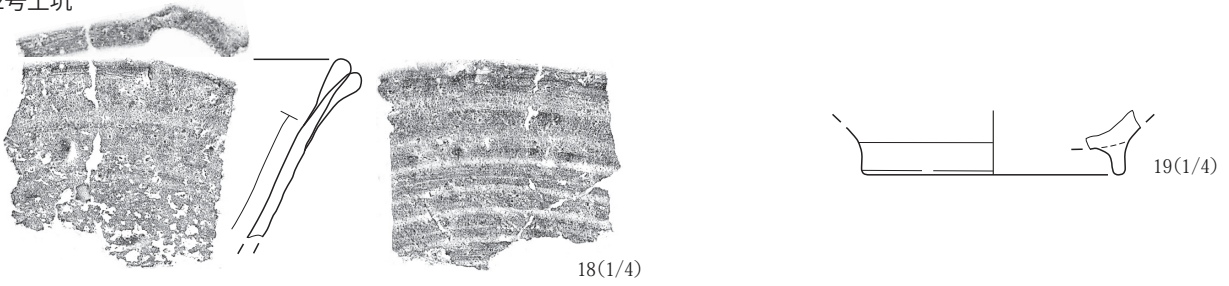
0 1:2 5cm

0 1:4 10cm

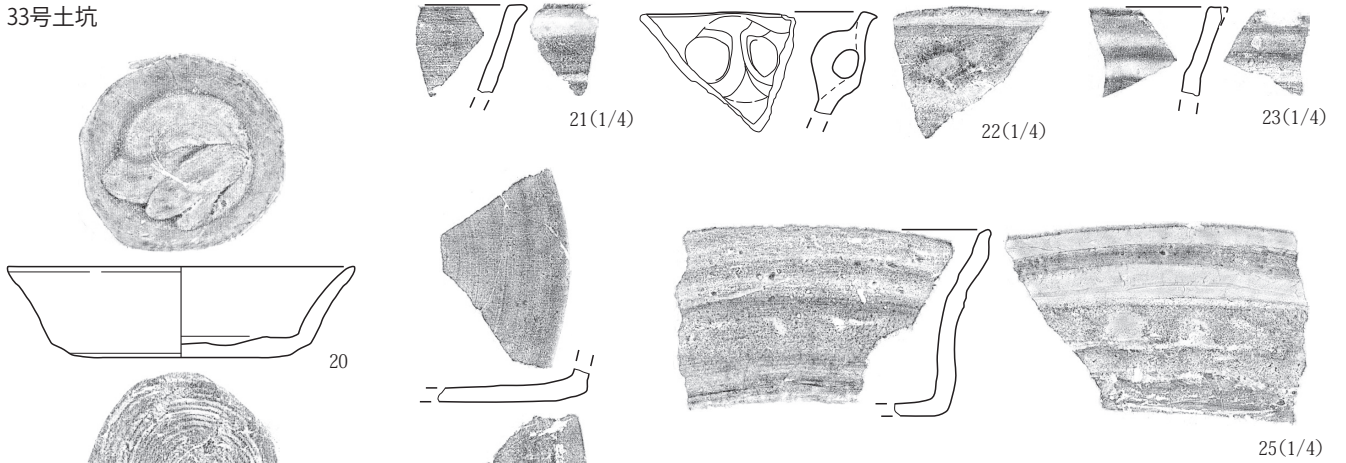
0 1:3 10cm

第2-18図 第2地点土坑出土遺物(1)

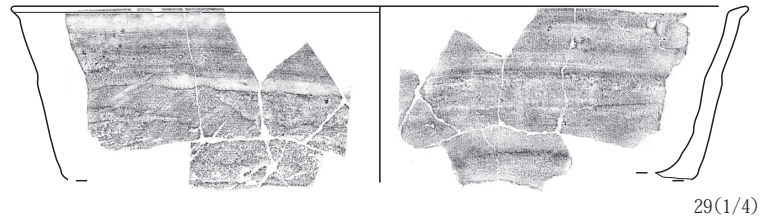
32号土坑



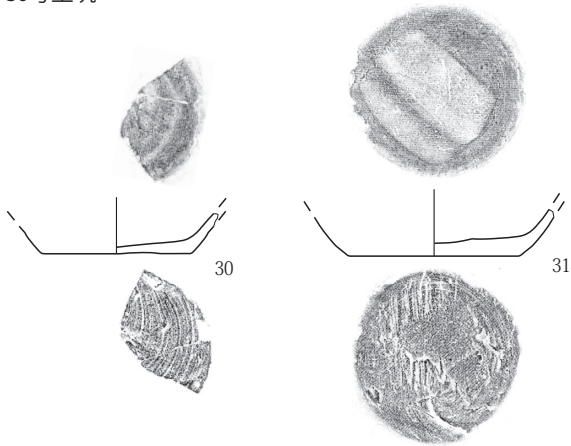
33号土坑



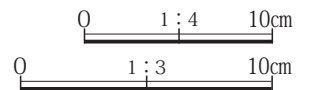
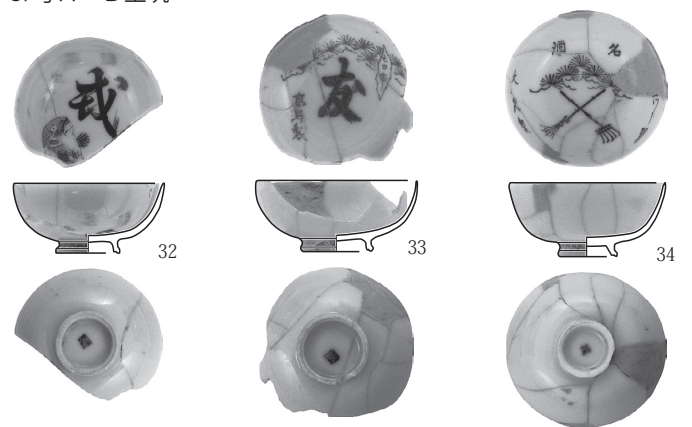
34号土坑



36号土坑

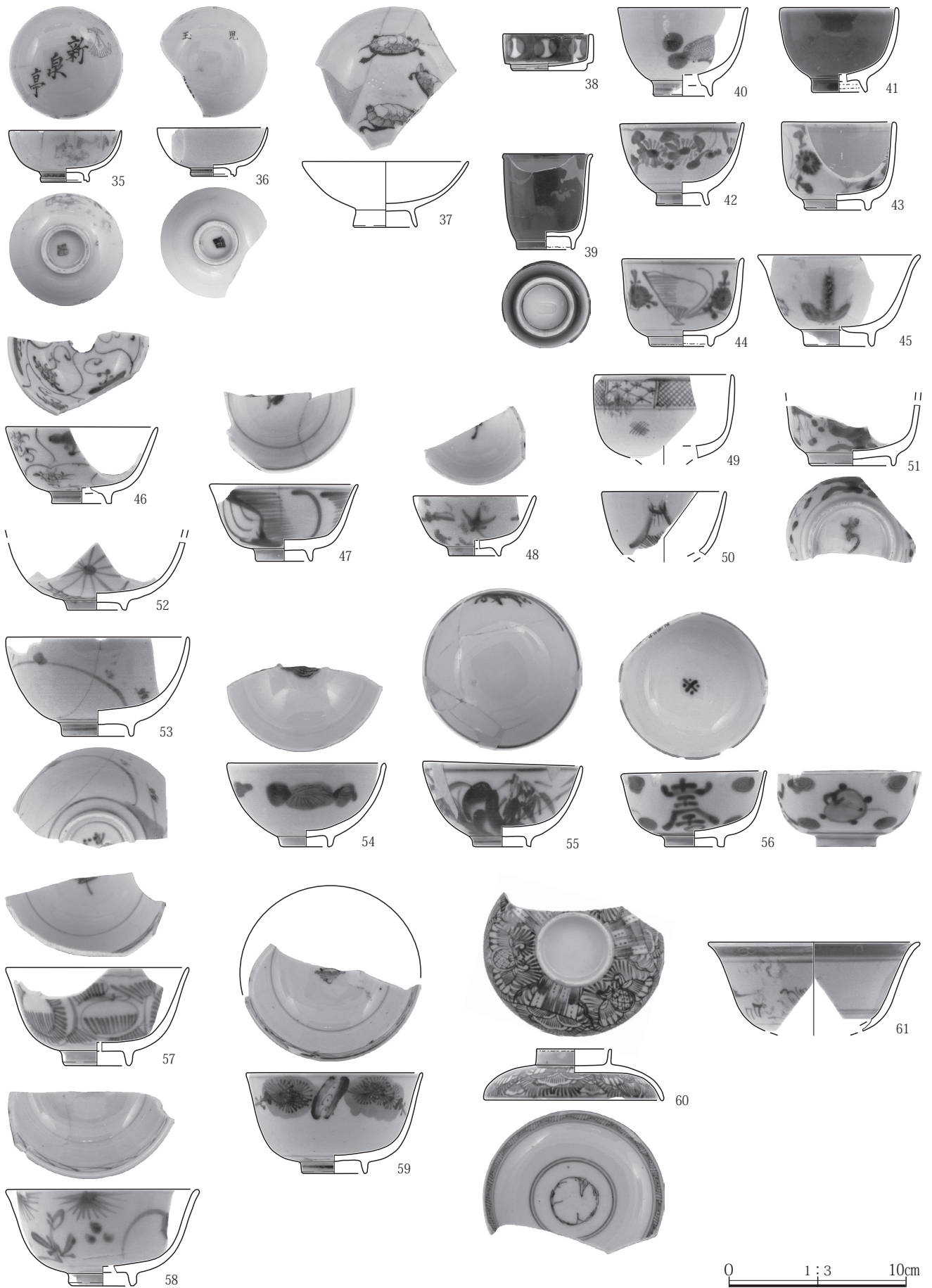


37号A・B土坑

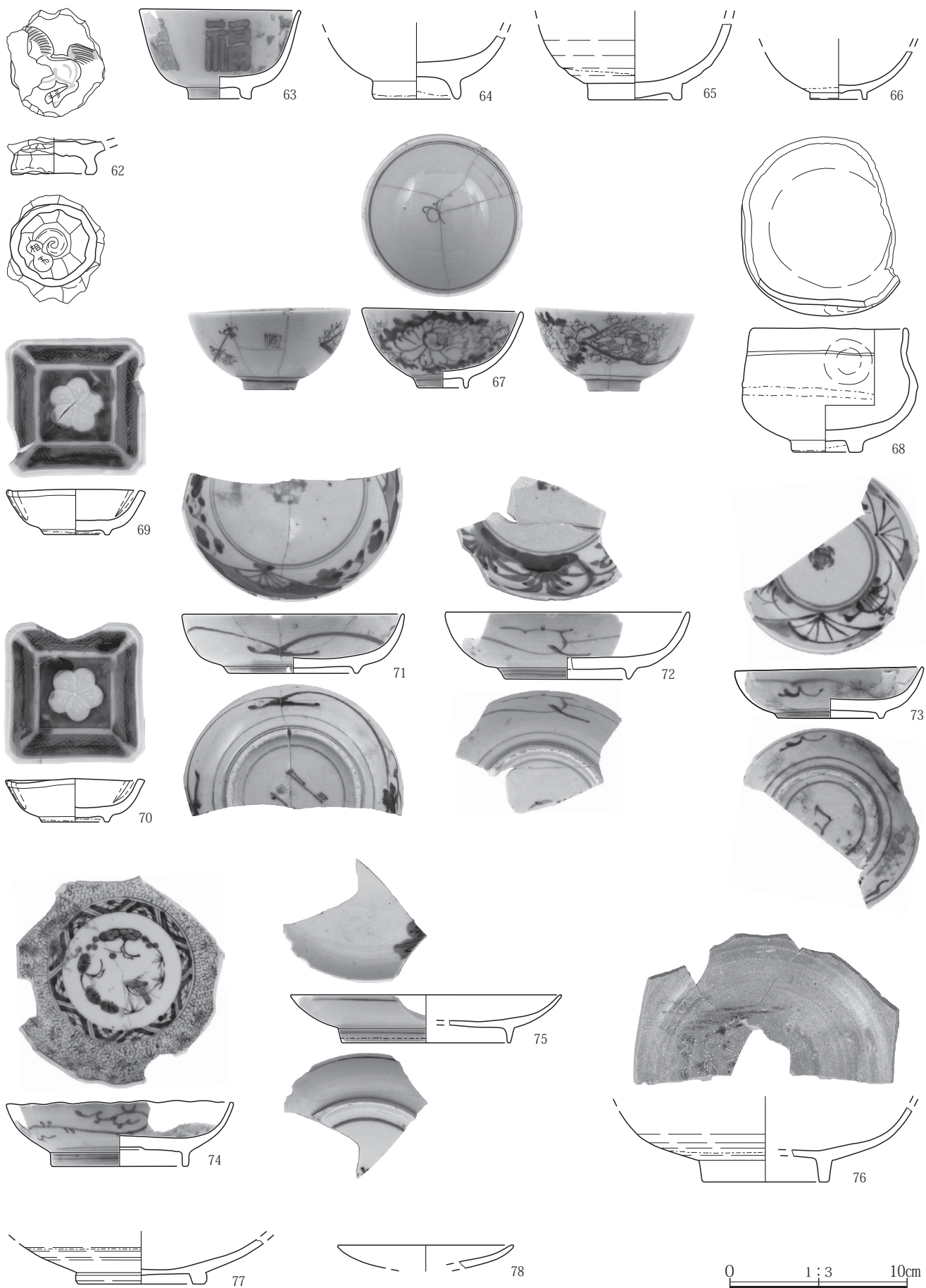


第2-19図 第2地点土坑出土遺物(2)

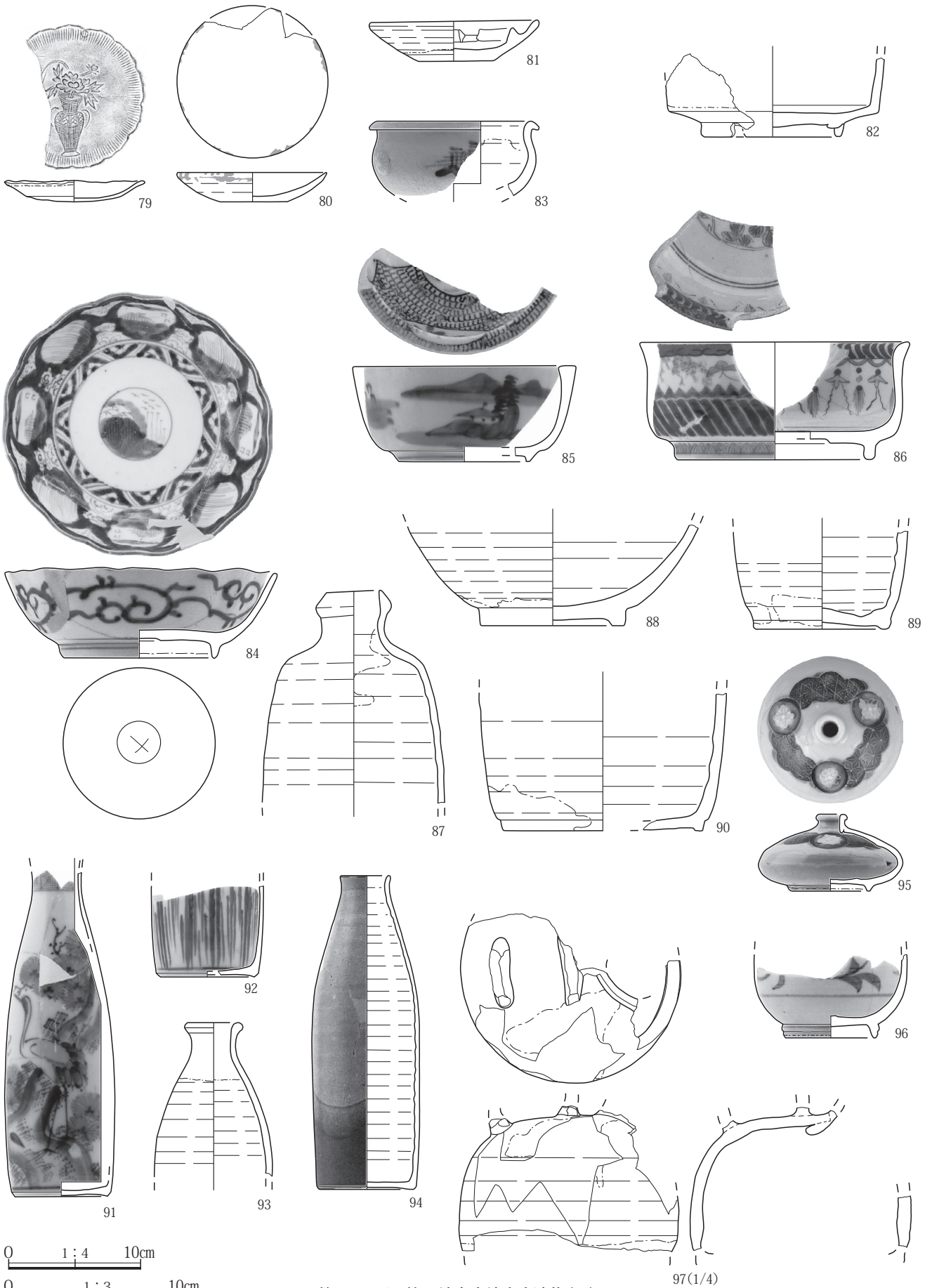
第4節 検出された遺構と遺物



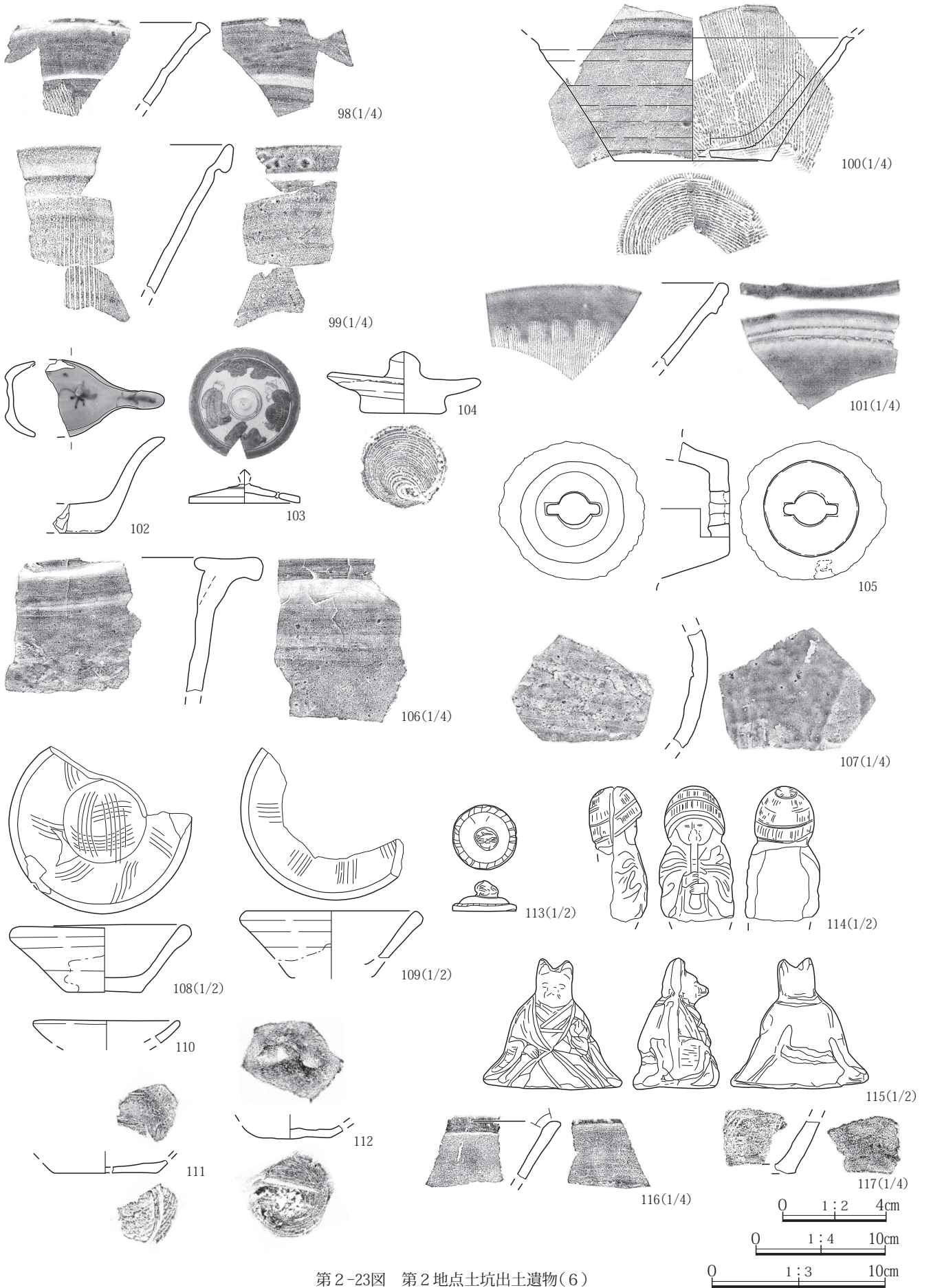
第2-20図 第2地点土坑出土遺物(3)



第2-21図 第2地点土坑出土遺物(4)

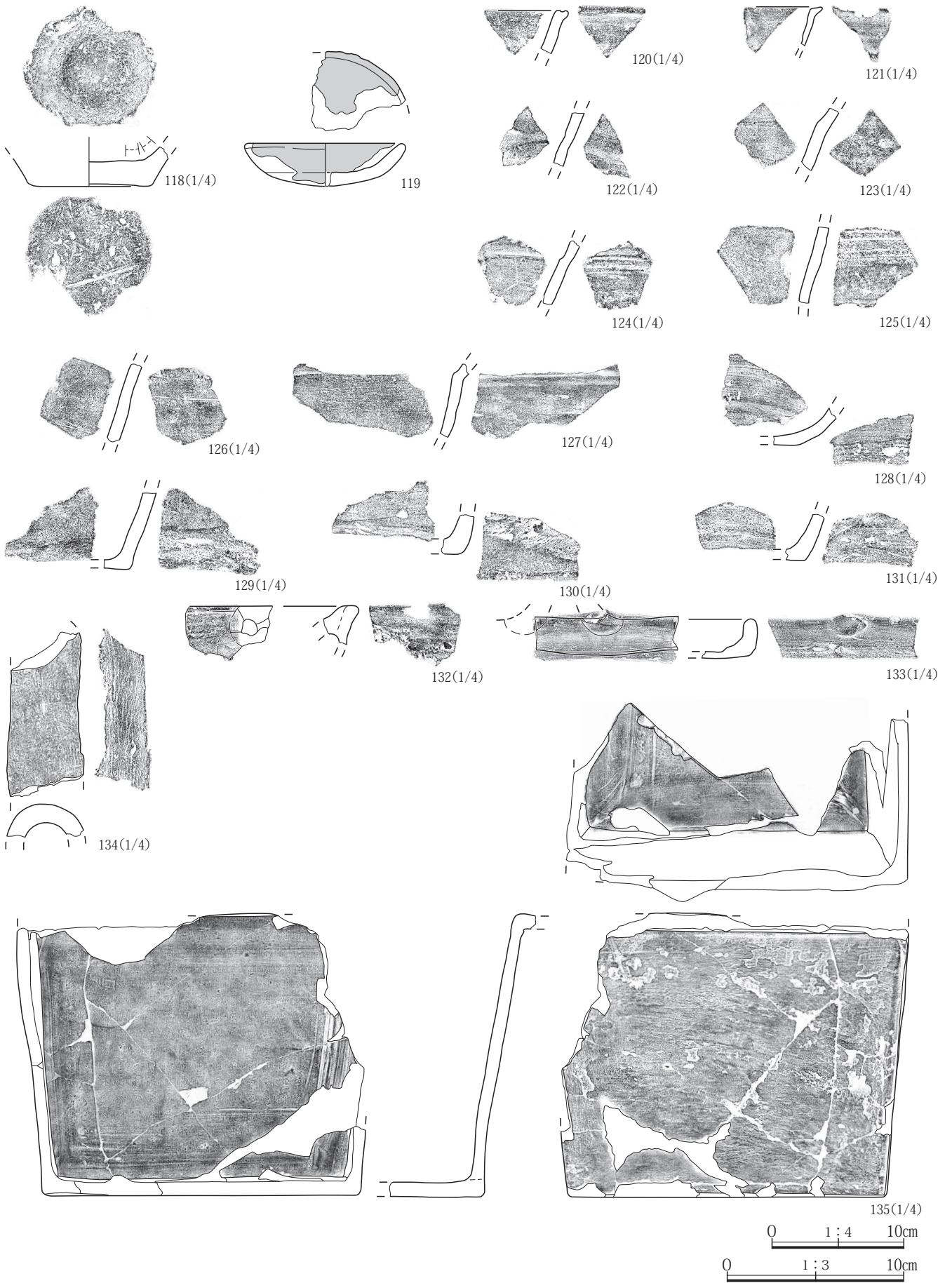


第2-22図 第2地点土坑出土遺物(5)

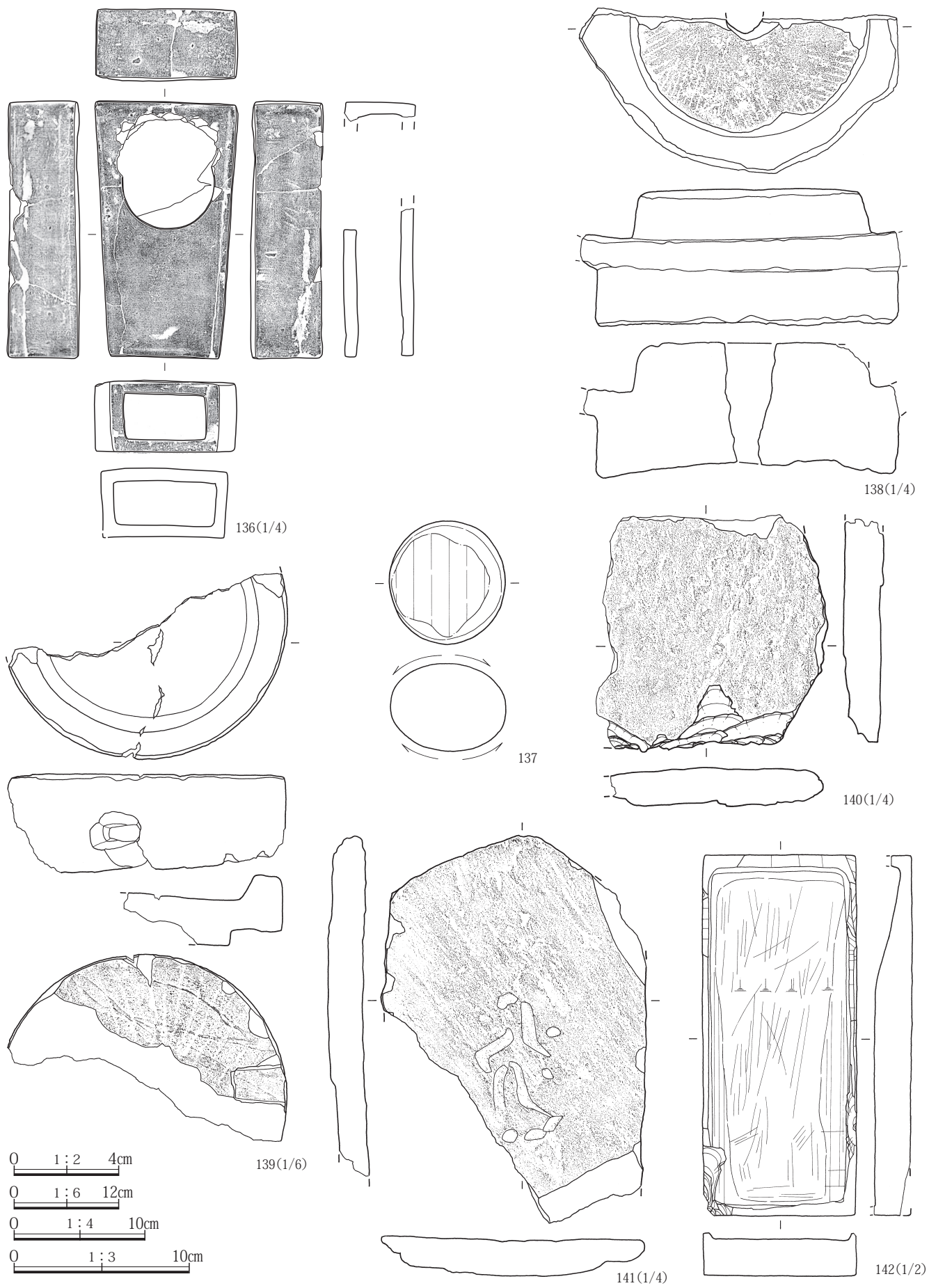


第2-23図 第2地点土坑出土遺物(6)

第4節 検出された遺構と遺物

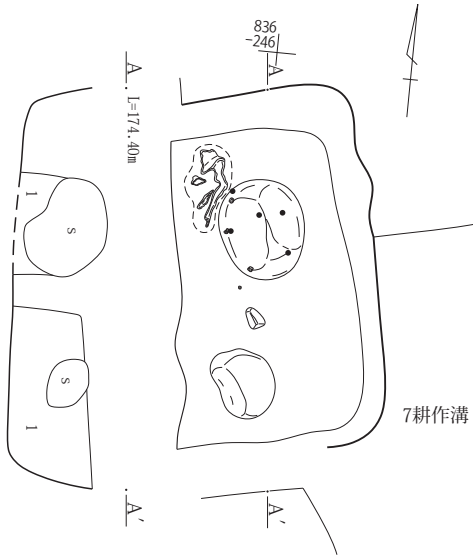


第2-24図 第2地点土坑出土遺物(7)

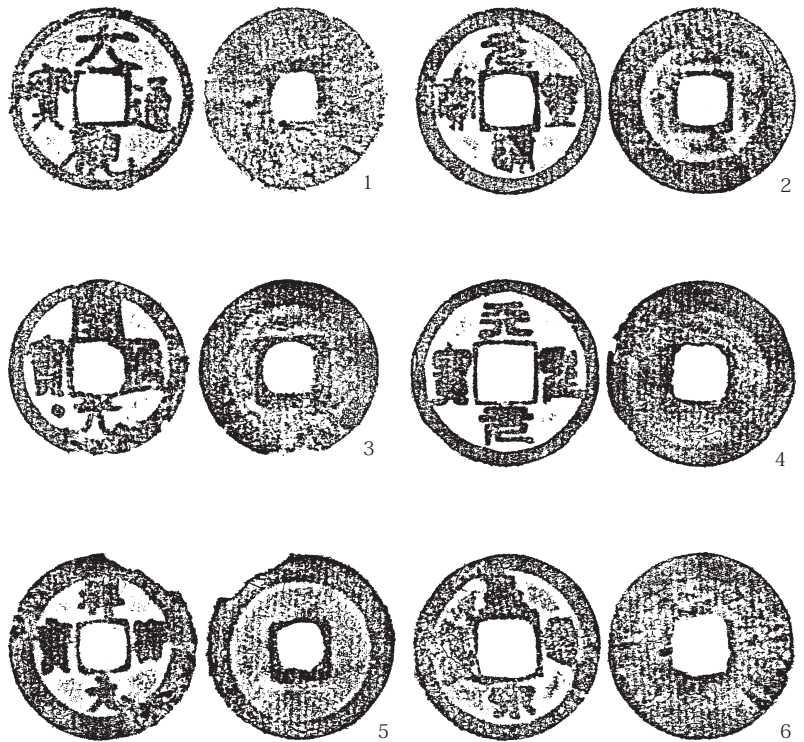


第2-25図 第2地点土坑出土遺物(8)

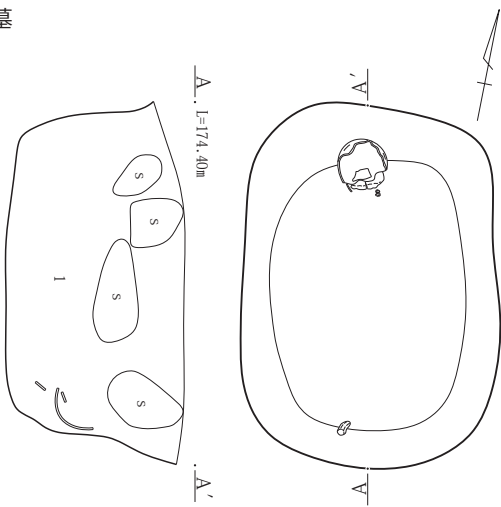
1号墓



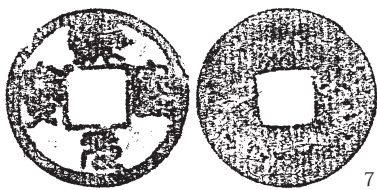
1 黒褐色土 灰白色粒、ローム中ブロックを少量含む。



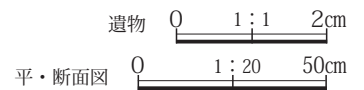
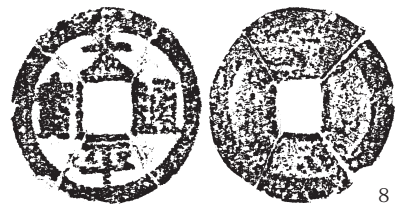
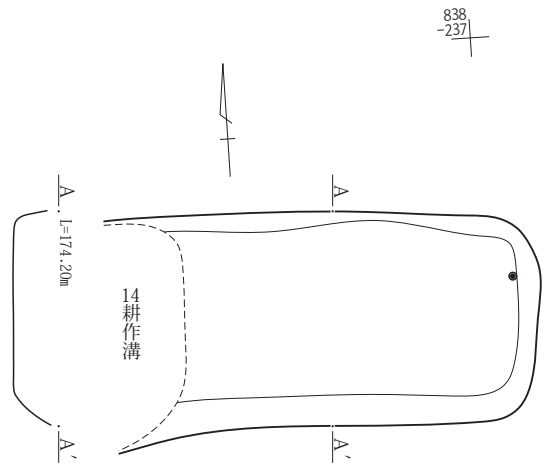
2号墓



1 黒褐色土 灰白色パミス、ローム大ブロックを含む砂質土。



3号墓



第2-26図 第2地点1～3号墓 平・断面図、出土遺物

極めて悪い。底面は平坦と思われる。人骨の出土はないが、銭貨1枚が出土している。

形状：長方形

規模：長軸(0.94)m 短軸0.50m 深さ14cm

長軸方向：N-89°-W

出土遺物：銭貨の8は「太平通寶」である。

所見・時期：出土した銭貨から、時期等は中世と考えられる。

4. 柵

1号柵(第2-27図、第2-5・27表、PL. 2-10・16)

南北方向に直線的に延びる柱穴列に、掘立柱建物として対応する東西両側の柱穴を検出できなかったことから、単独の柵とした。

位置：調査範囲の中央西側に位置する。

座標値：X=28,841 Y=-86,245

検出状況：計6基の柱穴で構成され、ほぼ等間隔に柱穴が配置される。P2の柱穴内から、砥石1点が出土している。

規模：柱間5間(6.39m)

柵方向：N-16°-W

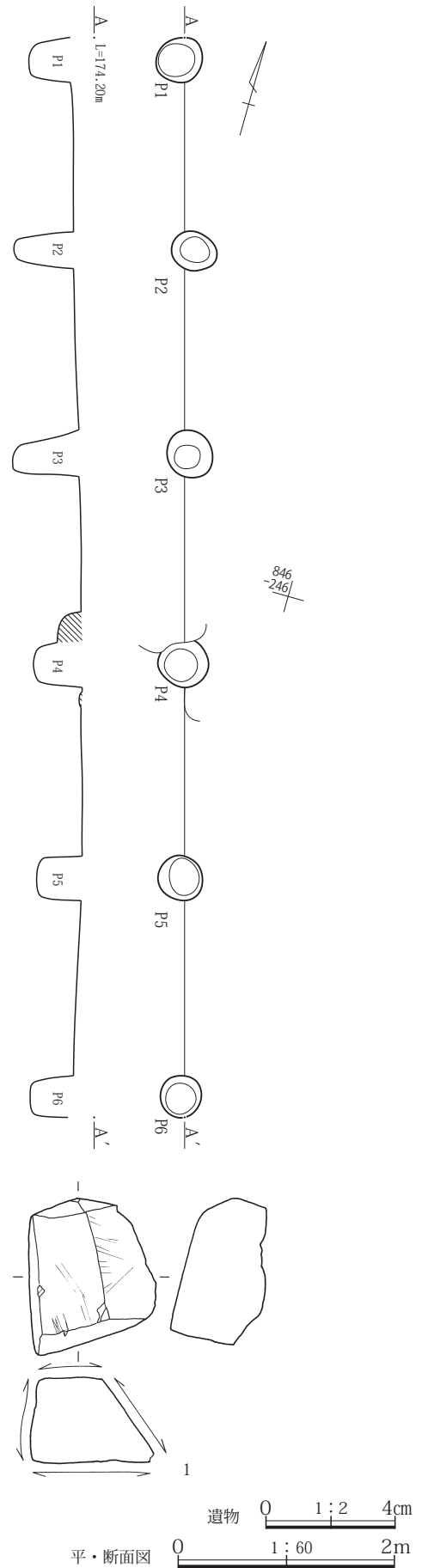
柱穴：南北方向に延びる各柱間距離は1.8~2.0mで、各柱穴の規模は径35~40cm、深さ40~60cmを測る。

出土遺物：出土した1の砥石は、砥沢石製である。

所見・時期：時期等は不明であるが、中世以降の可能性が高い。

5. ピット105基

計105基のピットを検出したが、この中には1・2号掘立柱建物や1号柵の柱穴も含まれる。ピットのあり方は調査範囲全体に散漫に分布するが、攪乱が多いことから全体把握が難しい。現状の状況からは、調査範囲の北側での分布は極めて少なく、中央付近に多くみられる。また、各ピットの規模は径25~40cm前後のものが多く、埋没土も黒褐色土を主体とするものがほとんどで、僅かにAs-Bを含むものも存在する。しかし、大方の時期は不明。(第2-6表参照)



第2-27図 第2地点1号柵 平・断面図、出土遺物

6. 井戸2基

1号井戸(第2-28図、第2-7・28表、PL. 2-10・16)
位置：調査範囲の北西隅に位置し、南側に37A・B号土坑が近接する。

座標値：X=28,868 Y=-86,245

検出状況：井戸の上部には、長方形に面取りされた大型の石が井戸を塞ぐように埋め込まれていた。縦坑はほぼ垂直で、壁面には扁平礫を小口積みし、その裏込めに黄褐色粘土を用いている。

形状：円形

規模：径1.04m 深さ1.70m以上

出土遺物：1は信楽陶器の縹糸鍋である。

所見・時期：時期等は近世以降の可能性が高い。

2号井戸(第2-28図、第2-7・29表、PL. 2-10・16)

位置：調査範囲の北側に位置し、南側に31号土坑が近接する。

座標値：X=28,866 Y=-86,234

検出状況：井戸はあまり深くなく、縦坑は若干の膨らみをもつがほぼ垂直で、壁面の途中に大きな抉りがある。

形状：円形

規模：径1.20m 深さ1.90m

埋没土：As-Bを含む黒褐色土を主体とするが、混入物から2層に分層できる。

出土遺物：2は常滑陶器の甕である。

所見・時期：時期等は中世以降の可能性が高い。

7. 溝

1号溝(第2-29図、第2-8・30表、PL. 2-10・16)

位置：調査範囲の北西側に位置し、32号土坑および37A・B号土坑と重複する。

座標値：X=28,850～28,870 Y=-86,245～86,235

重複：32号土坑および37A・B号土坑との新旧は、いずれの土坑よりも本溝の方が古い。

検出状況：溝は、調査範囲の西壁中央付近から北壁中央へと、直線的に走行した後に湾曲して北方向に延びる。攪乱等により一部を壊されるが、残存状態は比較的良い。溝の断面形は、上面幅に比べ底面幅のかなり狭い葉研堀状を呈し、底面は北方向へと緩く低くな

る。埋土中からは、製作地不詳の磁器や在地系土器が少量出土し、他に鉄製品が出土している。

断面形状：V字状

規模：上幅1.40～1.10m 底面幅0.30～0.20m 深さ89cm

走行方向：N-35°-E

埋没土：黒褐色土を主体とするが、混入物から数層に分層できる。

出土遺物：製作地不詳磁器として、1の小杯、4の灯火受台、2の灯火受皿、3の灯火皿、5の瓶があり、在地系土器に6・7の内耳鍋がある。また、鉄製品には釘の一部である8がある。

所見・時期：何らかの区画に関わる溝と考えられるが、近世の陣屋に関わる溝とは考え難い。時期は不明であるが、重複の状態や断面形状から中世に遡る可能性もある。

8. 耕作溝

耕作に関わる長い溝状の遺構であり、計17基を検出した。その多くは調査範囲の中央南西側に集中し、1～5号耕作溝は東西方向に並列するようにあり、6～11号耕作溝は南北方向に並列する。

1号耕作溝(第2-30図、第2-9表、PL. 2-10)

位置：調査範囲中央南西側の西壁寄りに位置し、2・3号土坑および2・6号耕作溝と重複する。

座標値：X=28,833 Y=-86,245

重複：重複する遺構との新旧は、2・3号土坑よりも本耕作溝の方が旧く、さらに2号耕作溝よりも古い。6号耕作溝との新旧は不明。

検出状況：底面はおおむね平坦で、遺物の出土はない。

形状：長方形

規模：長軸5.86m 短軸0.44m 深さ41cm

長軸方向：N-82°-E

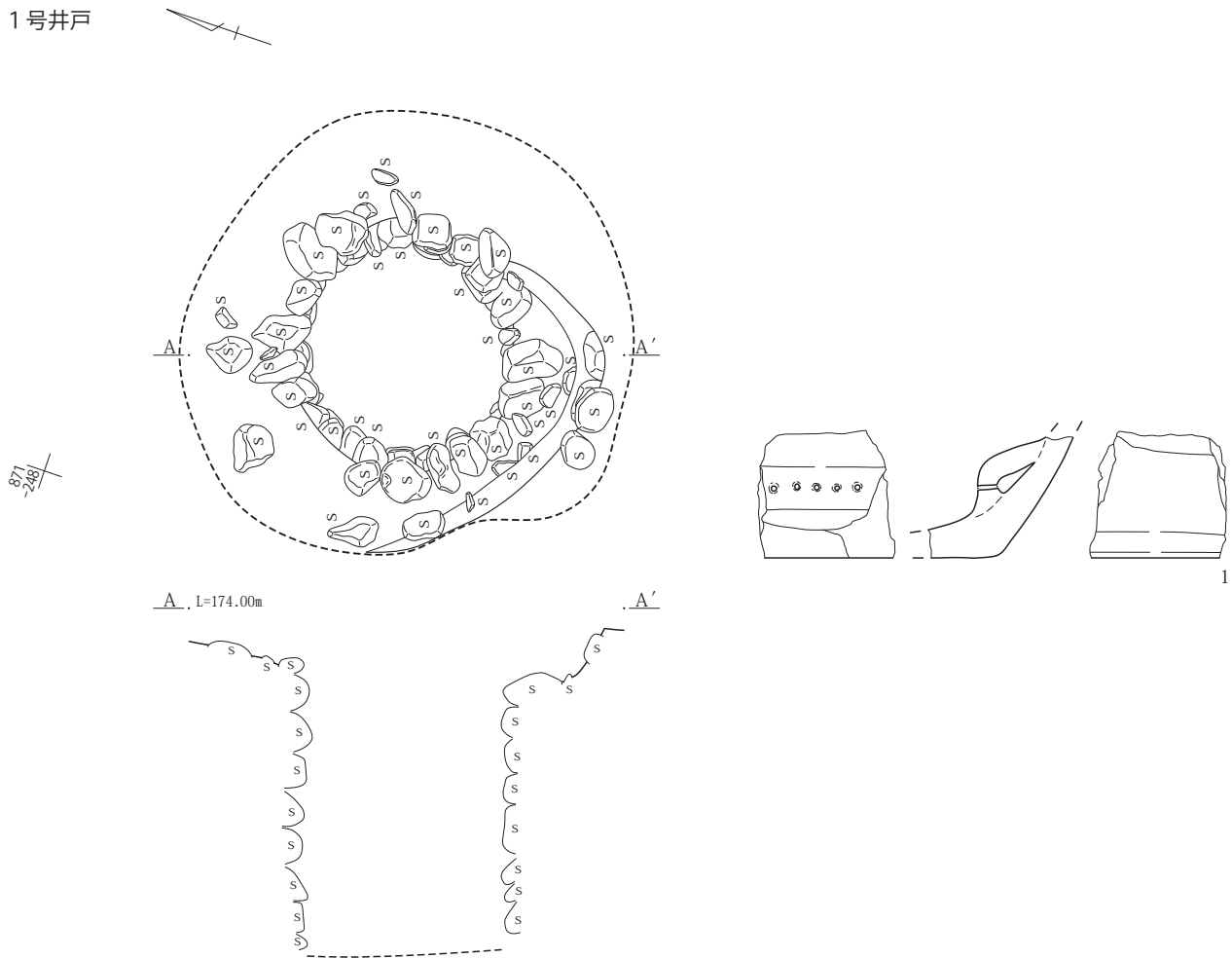
埋没土：As-Bを含む黒褐色土を主体とする。

所見・時期：埋土にAs-Bを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

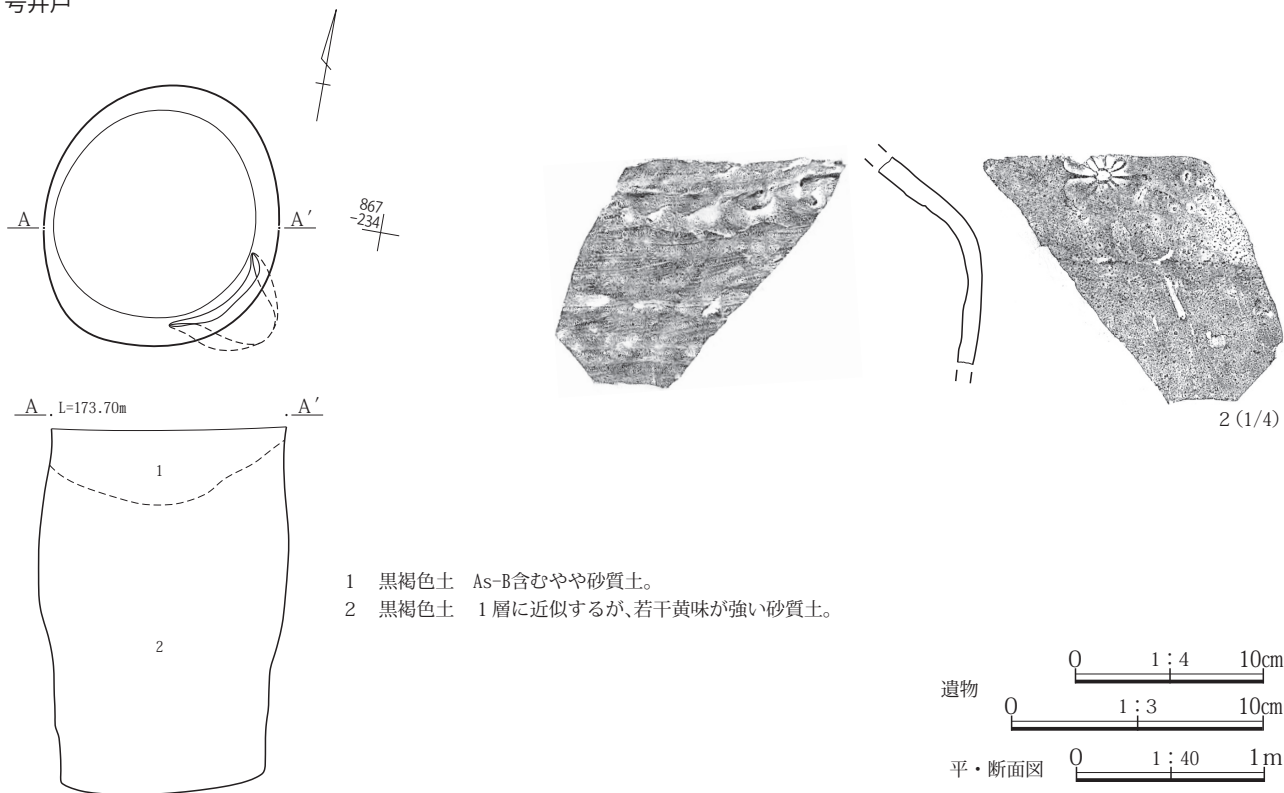
2号耕作溝(第2-30図、第2-9・31表、PL. 2-10・16)

位置：調査範囲中央南西側の西壁寄りに位置し、2・3

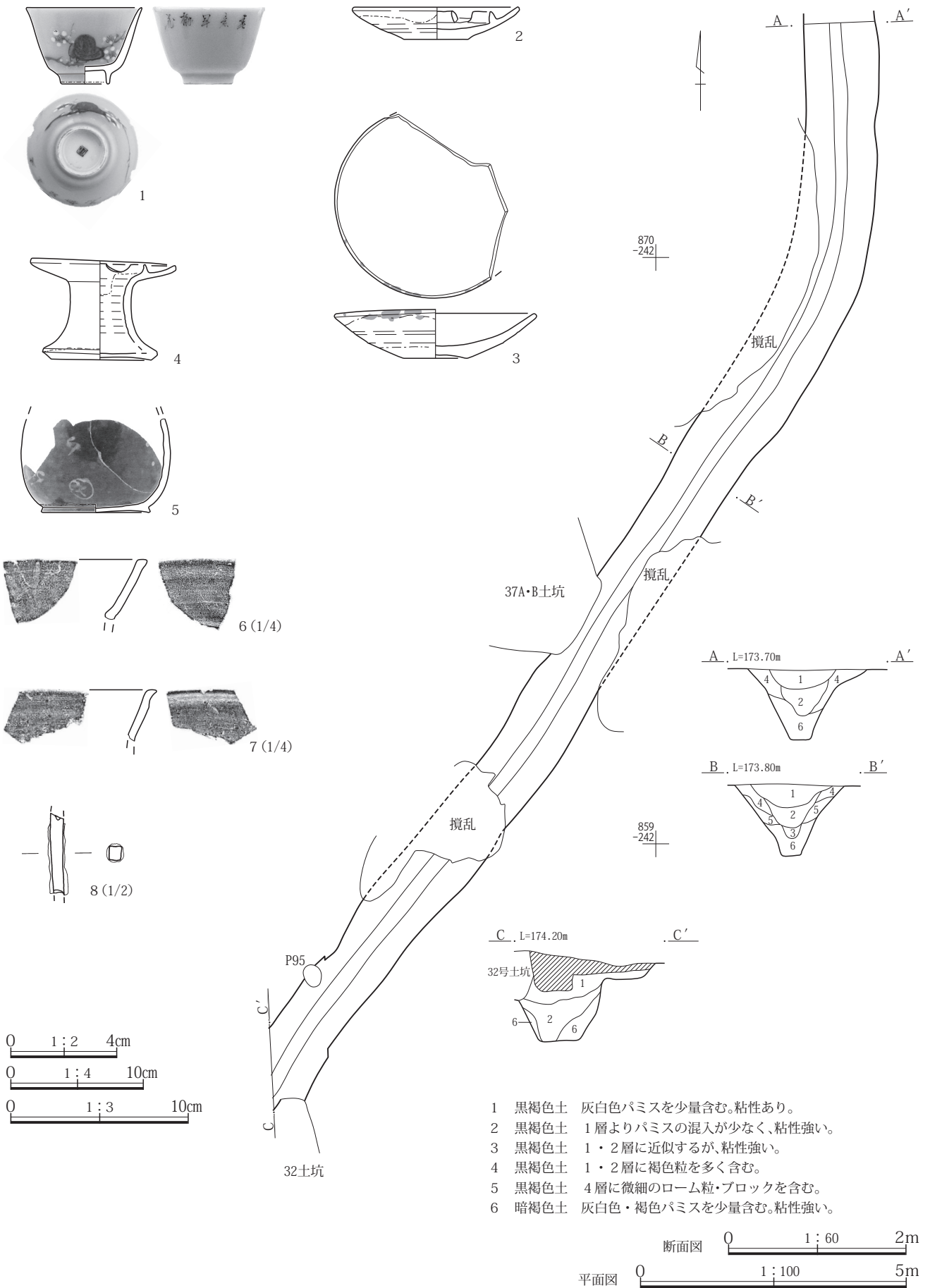
1号井戸



2号井戸



第2-28図 第2地点1・2号井戸 平・断面図、出土遺物



第2-29図 第2地点1号溝 平・断面図、出土遺物

号土坑および1号耕作溝と重複する。

座標値：X=28,832 Y=-86,248

重複：重複する遺構との新旧は、2・3号土坑よりも本

耕作溝の方が古く、1号耕作溝よりは新しい。

検出状況：底面はおおむね平坦で、遺物が1点出土している。

形状：長方形

規模：長軸(4.27)m 短軸0.78m 深さ19cm

長軸方向：N-75°-E

埋没土：As-Bを含む黒褐色土を主体とする。

出土遺物：1は在地系土器の皿。

所見・時期：埋土にAs-Bを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3号耕作溝(第2-30図、第2-9表、PL.2-10・11)

位置：調査範囲中央南西側の西壁寄りに位置し、1号掘立柱建物および6号耕作溝と重複する。

座標値：X=28,831 Y=-86,247

重複：重複する遺構との新旧は不明。

検出状況：底面はおおむね平坦で、遺物の出土はない。

形状：長方形

規模：長軸5.32m 短軸0.92m 深さ19cm

長軸方向：N-78°-E

埋没土：As-Bを含む黒褐色土を主体とする。

所見・時期：埋土にAs-Bを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

4号耕作溝(第2-30図、第2-9表、PL.2-10・11)

位置：調査範囲中央南西側の西壁寄りに位置し、1号掘立柱建物と重複する。

座標値：X=28,830 Y=-86,245

重複：1号掘立柱建物との新旧は不明。

検出状況：底面はおおむね平坦で、遺物の出土はない。

形状：長方形

規模：長軸4.72m 短軸0.76m 深さ24cm

長軸方向：N-83°-E

埋没土：As-Bを含む黒褐色土を主体とする。

所見・時期：埋土にAs-Bを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

5号耕作溝(第2-30図、第2-9表、PL.2-10・11)

位置：調査範囲中央南西側の西壁寄りに位置する。

座標値：X=28,828 Y=-86,247

検出状況：底面はおおむね平坦で、遺物の出土はない。

形状：長方形

規模：長軸3.94m 短軸0.98m 深さ17cm

長軸方向：N-80°-E

埋没土：As-Bを含む黒褐色土を主体とする。

所見・時期：埋土にAs-Bを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

6号耕作溝(第2-30図、第2-9表、PL.2-10・11)

位置：調査範囲の中央南西側に位置し、1号墓および1・3号耕作溝と重複する。

座標値：X=28,831 Y=-86,246

重複：重複する遺構との新旧は、1号墓より本耕作溝の方が新しく、他の耕作溝とは不明。

検出状況：底面はおおむね平坦で、遺物の出土はない。

形状：長方形

規模：長軸3.52m 短軸0.70m 深さ17cm

長軸方向：N-6°-W

埋没土：As-Bを含む黒褐色土を主体とする。

所見・時期：埋土にAs-Bを含み、1号墓より新しいことから、時期は中世以降と考えられる。

7号耕作溝(第2-31図、第2-9表、PL.2-11)

位置：調査範囲の中央南西側に位置し、1号墓および1・12号耕作溝と重複する。

座標値：X=28,830 Y=-86,244

重複：重複する遺構との新旧は、1号墓より本耕作溝の方が新しく、12号耕作溝とは本耕作溝の方が古い。

検出状況：東側の8号耕作溝西辺と接するように近接し、部分的に不明な点もある。底面はおおむね平坦で、遺物の出土はない。

形状：長方形

規模：長軸5.46m 短軸0.80m 深さ29cm

長軸方向：N-8°-W

埋没土：暗褐色土を主体とするが、混入物から2層に分層できる。

所見・時期：1号墓より新しいことから、時期は中世以

降と考えられる。

8号耕作溝(第2-31図、第2-9表、PL. 2-11)

位置：調査範囲の中央南西側に位置し、9・12号耕作溝と重複する。

座標値：X=28,830 Y=-86,243

重複：重複する遺構との新旧は、12号耕作溝より古く、9号耕作溝とは不明。

検出状況：北端を攪乱に壊され、西側の7号耕作溝東辺と近接し、北東部を9号耕作溝と重複することから不明な点がある。底面はおおむね平坦で、遺物の出土はない。

形状：長方形

規模：長軸(6.80)m 短軸0.70m 深さ32cm

長軸方向：N-8°-W

埋没土：暗褐色土を主体とするが、混入物から2層に分層できる。

所見・時期：時期は中世以降と考えられる。

9号耕作溝(第2-31図、第2-9表、PL. 2-11)

位置：調査範囲の中央南西側に位置し、8号耕作溝と重複する。

座標値：X=28,834 Y=-86,243

重複：8号耕作溝との新旧は不明。

検出状況：北端を攪乱に壊され、8号耕作溝と重複することから不明な点がある。底面はおおむね平坦で、遺物の出土はない。

形状：長方形

規模：長軸(2.98)m 短軸1.20m 深さ34cm

長軸方向：N-8°-W

埋没土：黒褐色土を主体とする。

所見・時期：時期は中世以降と考えられる。

10号耕作溝(第2-31図、第2-9表、PL. 2-11)

位置：調査範囲の中央南西側に位置し、12号耕作溝と重複する。

座標値：X=28,831 Y=-86,242

重複：12号耕作溝との新旧は、本耕作溝の方が古い。

検出状況：底面はおおむね平坦で、遺物の出土はない。

形状：長方形

規模：長軸5.00m 短軸0.52m 深さ25cm

長軸方向：N-6°-W

埋没土：黒褐色土を主体とする。

所見・時期：時期は中世以降と考えられる。

11号耕作溝(第2-31図、第2-9表、PL. 2-11)

位置：調査範囲の中央南西側に位置し、36号土坑および12号耕作溝と重複する。

座標値：X=28,833 Y=-86,240

重複：重複する遺構との新旧は、36号土坑より本耕作溝の方が新しく、12号耕作溝とは不明。

検出状況：底面はおおむね平坦で、遺物の出土はない。

形状：長方形

規模：長軸(4.50)m 短軸1.00m 深さ25cm

長軸方向：N-8°-W

埋没土：黒褐色土を主体とする。

所見・時期：時期は中世以降と考えられる。

12号耕作溝(第2-31図、第2-9表、PL. 2-11)

位置：調査範囲の中央南西側に位置し、36号土坑および7・8・10・11号耕作溝と重複する。

座標値：X=28,832 Y=-86,241

重複：重複する遺構との新旧は、いずれの遺構より本耕作溝の方が新しいが、11号耕作溝とは不明。

検出状況：底面はおおむね平坦で、遺物の出土はない。

形状：長方形

規模：長軸(4.24)m 短軸0.84m 深さ25cm

長軸方向：N-80°-E

埋没土：黒褐色土を主体とする。

所見・時期：時期は中世以降と考えられる。

13号耕作溝(第2-32図、第2-9表、PL. 2-11)

位置：調査範囲の南西隅に位置する。

座標値：X=28,815 Y=-86,249

検出状況：底面はおおむね平坦で、遺物の出土はない。

形状：長方形

規模：長軸2.86m 短軸0.70m 深さ41cm

長軸方向：N-17°-W

埋没土：As-Bを含む黒褐色土を主体とする。

所見・時期：埋土にAs-Bを含むことから、時期は中世以

降と考えられる。

14号耕作溝(第2-32図、第2-9表)

位置：調査範囲の中央付近に位置し、15号土坑および3号墓と重複する。

座標値：X=28,836 Y=-86,237

重複：重複する遺構との新旧は、15号土坑より本耕作溝の方が新しく、3号墓とは不明。

検出状況：西側を攪乱に壊され、東端の3号墓との重複には不明な点もある。底面はおおむね平坦で、遺物の出土はない。

形状：長方形

規模：長軸(1.90)m 短軸0.62m 深さ13cm

長軸方向：N-87°-W

埋没土：暗褐色土を主体とする。

所見・時期：時期は中世以降と考えられる。

15号耕作溝(第2-32図、第2-9表、PL. 2-11)

位置：調査範囲の中央西側に位置する。

座標値：X=28,840 Y=-86,244

検出状況：底面はおおむね平坦で、遺物の出土はない。

形状：長方形

規模：長軸(2.45)m 短軸0.54m 深さ20cm

長軸方向：N-13°-W

埋没土：黒褐色土を主体とする。

所見・時期：時期は中世以降と考えられる。

16号耕作溝(第2-32図、第2-9表、PL. 2-11)

位置：調査範囲の中央西側に位置し、北側を17号耕作溝と重複する。

座標値：X=28,845 Y=-86,245

重複：17号耕作溝との新旧は、本耕作溝の方が新しい。

検出状況：底面はおおむね平坦で、遺物の出土はない。

形状：長方形

規模：長軸2.14m 短軸0.68m 深さ33cm

長軸方向：N-11°-W

埋没土：As-Bを含む黒褐色土を主体とするが、混入物から2層に分層できる。

所見・時期：時期は中世以降と考えられる。

17号耕作溝(第2-32図、第2-9表、PL. 2-11)

位置：調査範囲の中央西側に位置し、南側を16号耕作溝と重複する。

座標値：X=28,847 Y=-86,245

重複：16号耕作溝との新旧は、本耕作溝の方が古い。

検出状況：底面はおおむね平坦で、遺物の出土はない。

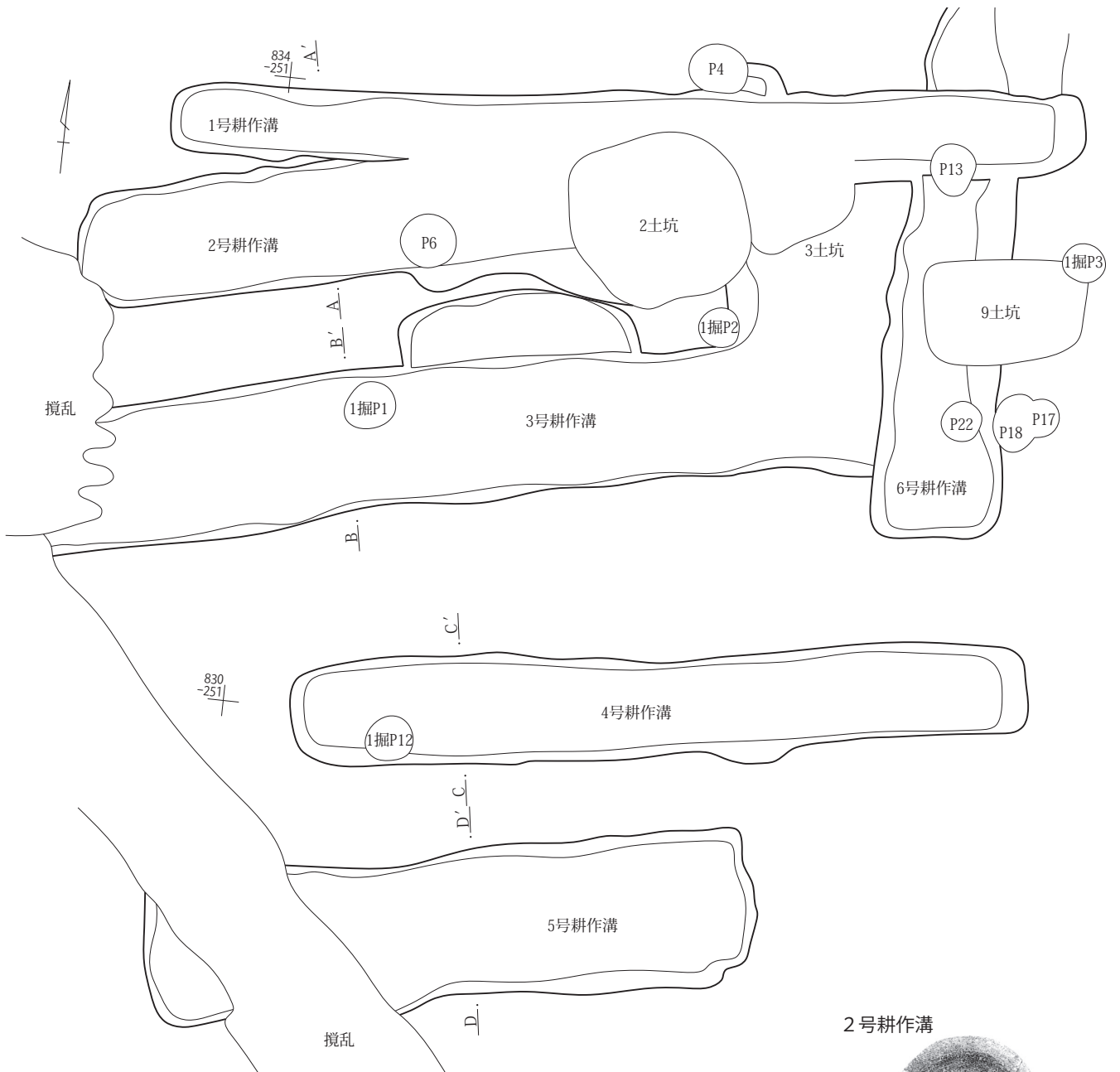
形状：長方形

規模：長軸3.54m 短軸0.82m 深さ34cm

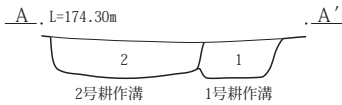
長軸方向：N-10°-W

埋没土：As-Bを含む黒褐色土を主体とする。

所見・時期：時期は中世以降と考えられる。

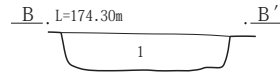


1号・2号耕作溝



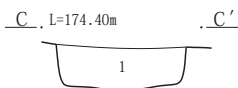
- 1 黒褐色土 As-B含む。ローム大ブロックを少量含む砂質土。(1号耕作溝)
- 2 黒褐色土 As-B含む。ローム大ブロックを含むやや砂質土。(2号耕作溝)

3号耕作溝



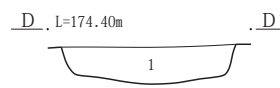
- 1 黒褐色土 As-B含む。ローム大ブロックを少量含む砂質土。

4号耕作溝



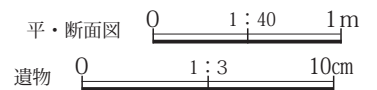
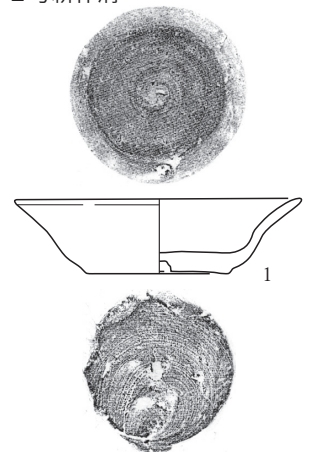
- 1 黒褐色土 As-B含む。ローム大ブロックを少量含む砂質土。

5号耕作溝

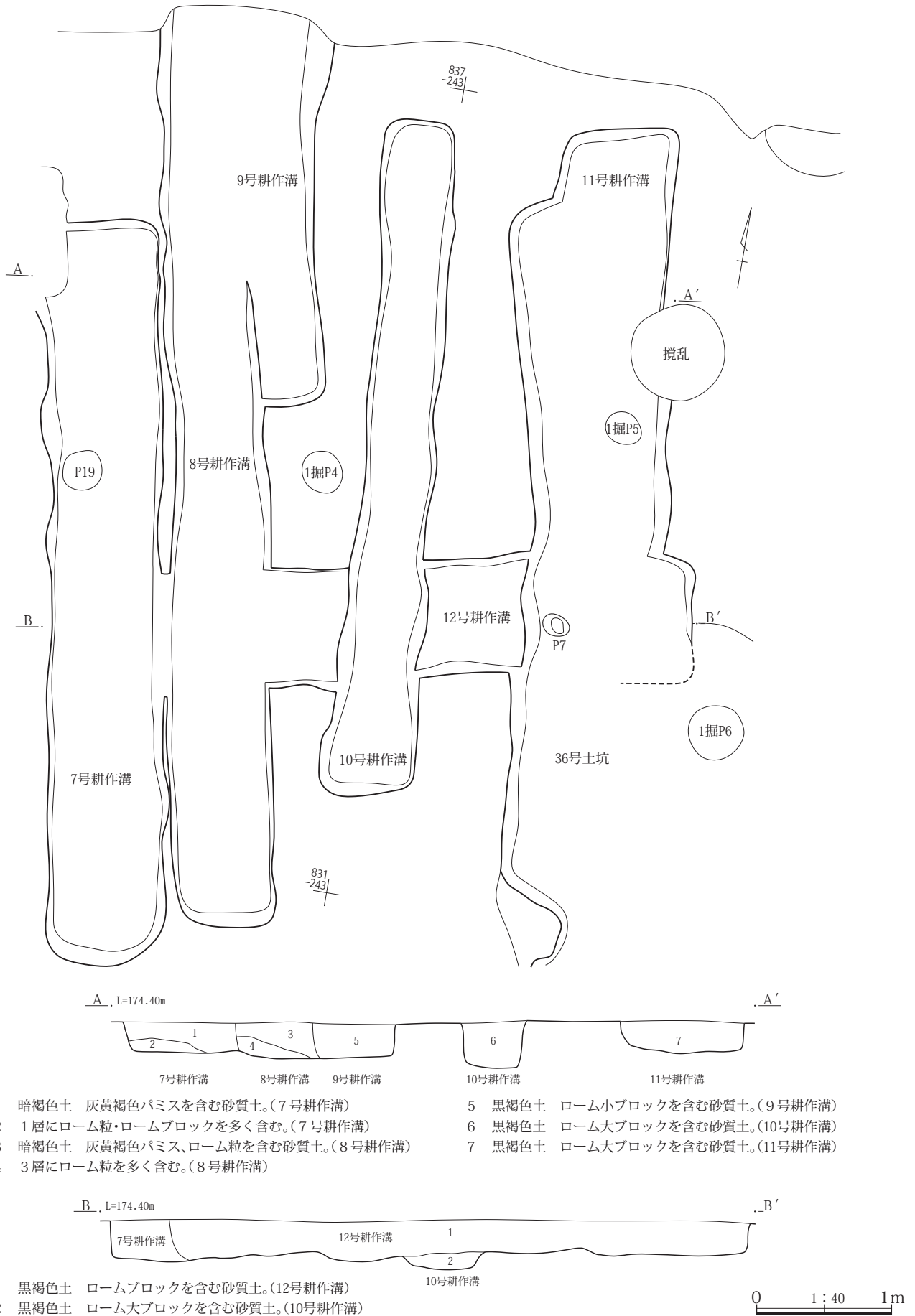


- 1 黒褐色土 As-B含む。ローム大ブロックを少量含む砂質土。

2号耕作溝

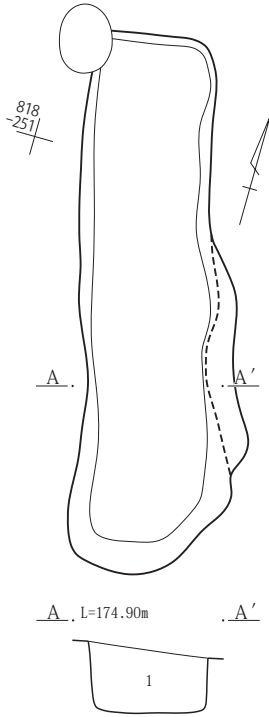


第2-30図 第2地点1～6号耕作溝 平・断面図、出土遺物



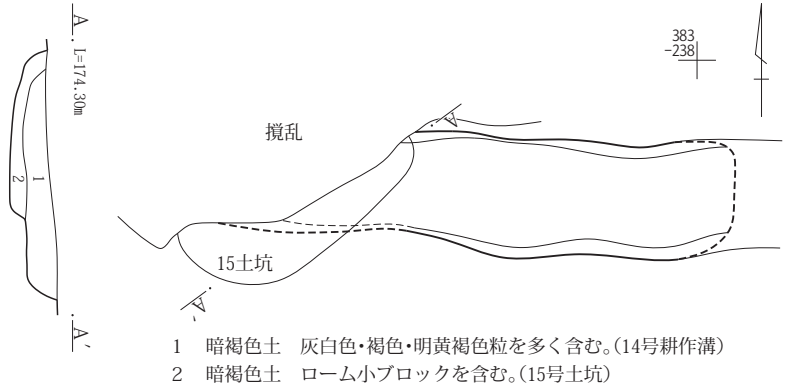
第2-31図 第2地点7～12号耕作溝 平・断面図

13号耕作溝



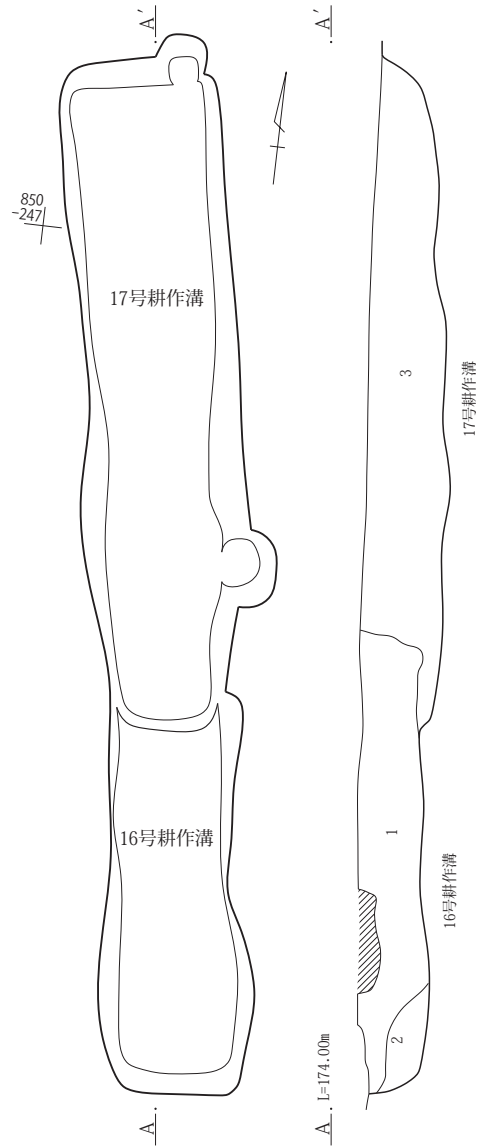
1 黒褐色土 As-B含む。底面付近にロームブロックを含む。

14号耕作溝



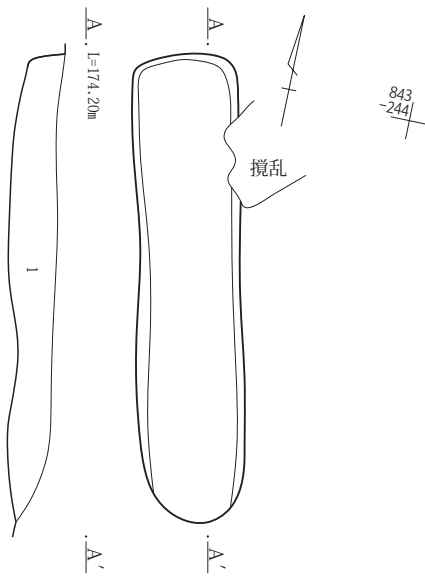
1 暗褐色土 灰白色・褐色・明黄褐色粒を多く含む。(14号耕作溝)
2 暗褐色土 ローム小ブロックを含む。(15号土坑)

16・17号耕作溝



1 黒褐色土 As-B・ロームブロックを含む。(16号耕作溝)
2 黒褐色土 ロームブロックを多く含む。(16号耕作溝)
3 黒褐色土 As-B・ローム中ブロックを含む。(17号耕作溝)

15号耕作溝



1 黒褐色土 ローム粒・ローム大ブロックを多く含む。



第2-32図 第2地点13～17号耕作溝 平・断面図

9. 遺構外出土遺物

(第2-33～35図、第2-32表、PL. 2-16・17)

第1地点での遺構外出土遺物はかなり希薄で、そのほとんどが第2地点からの出土遺物である。この第2地点からの出土遺物についても、中世以前の遺物は極めて少なく、僅かに縄文土器・石器片、埴輪片、土師・須恵器片がある。これらに比べ陶磁器類は多く、第2地点が中・近世を主体とした遺跡であることを暗示している。

縄文時代

僅かに土器片3点と、打製石斧片1点および剥片類13点がある。図示した1は、縄文を施した前期の諸磯b式土器の胴部片である。

古墳時代

七日市古墳群の一画でもあることから多くの遺物出土が予測されたが、意外と少ない。土師・須恵器の小片と埴輪片を少量出土している。これらの内、2～9の埴輪片8点を図示した。2は盾形埴輪と思われ、前面にヘラで鋸歯状文を施している。他は縦位に刷毛目をもつ円筒埴輪片であり、3・4は突帯貼付をもち、8・9は基部である。

他に、時期不明であるが、10は須恵器の壺の頸部片で外面にカキ目が施され、11は不明な土製品である。

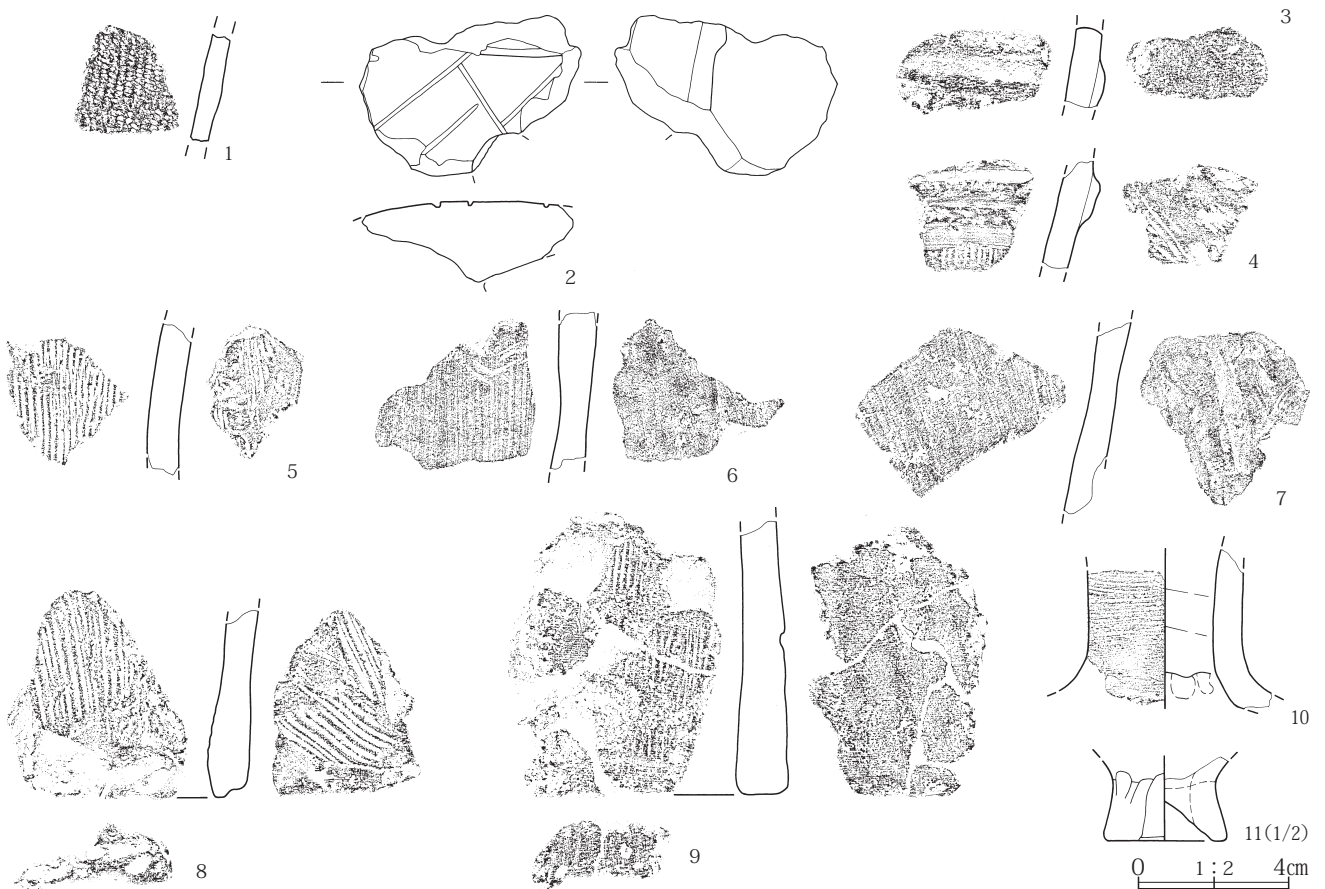
中・近世

最も多く出土したのが陶磁器類である。ここでは攪乱出土も含め陶磁器類25点、土製品5点、石製品2点、銭貨2点を図示した。

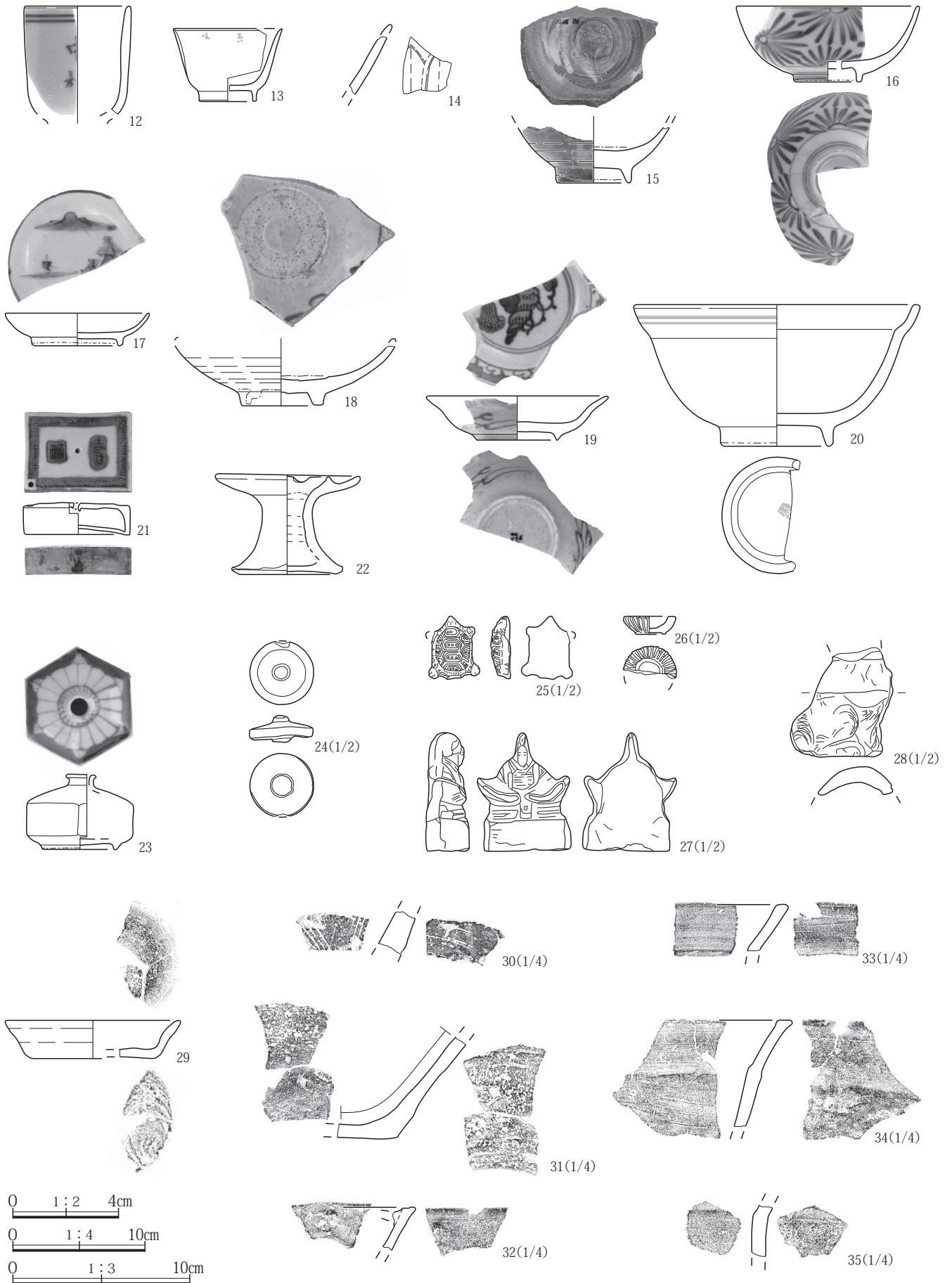
磁器には、14の龍泉窯系青磁碗、肥前磁器として17の染付小皿、18の染付皿、瀬戸・美濃磁器として16の染付丸碗、12の湯飲み、13の小杯、瀬戸磁器として20の染付井、製作地不詳磁器として21の水滴、19の染付皿がある。陶器には、15の肥前陶器の碗、22の製作地不詳陶器の灯火受台がある。さらに在地系土器には、29の皿、43の風口、30・31の片口鉢、32～39の内耳鍋、40の焙烙、41の植木鉢がある。

土製品として、ミニチュアの亀に25、ミニチュアの皿に26、不詳なミニチュア品に24があり、菅原道真の27、犬ないし猫の28がある。

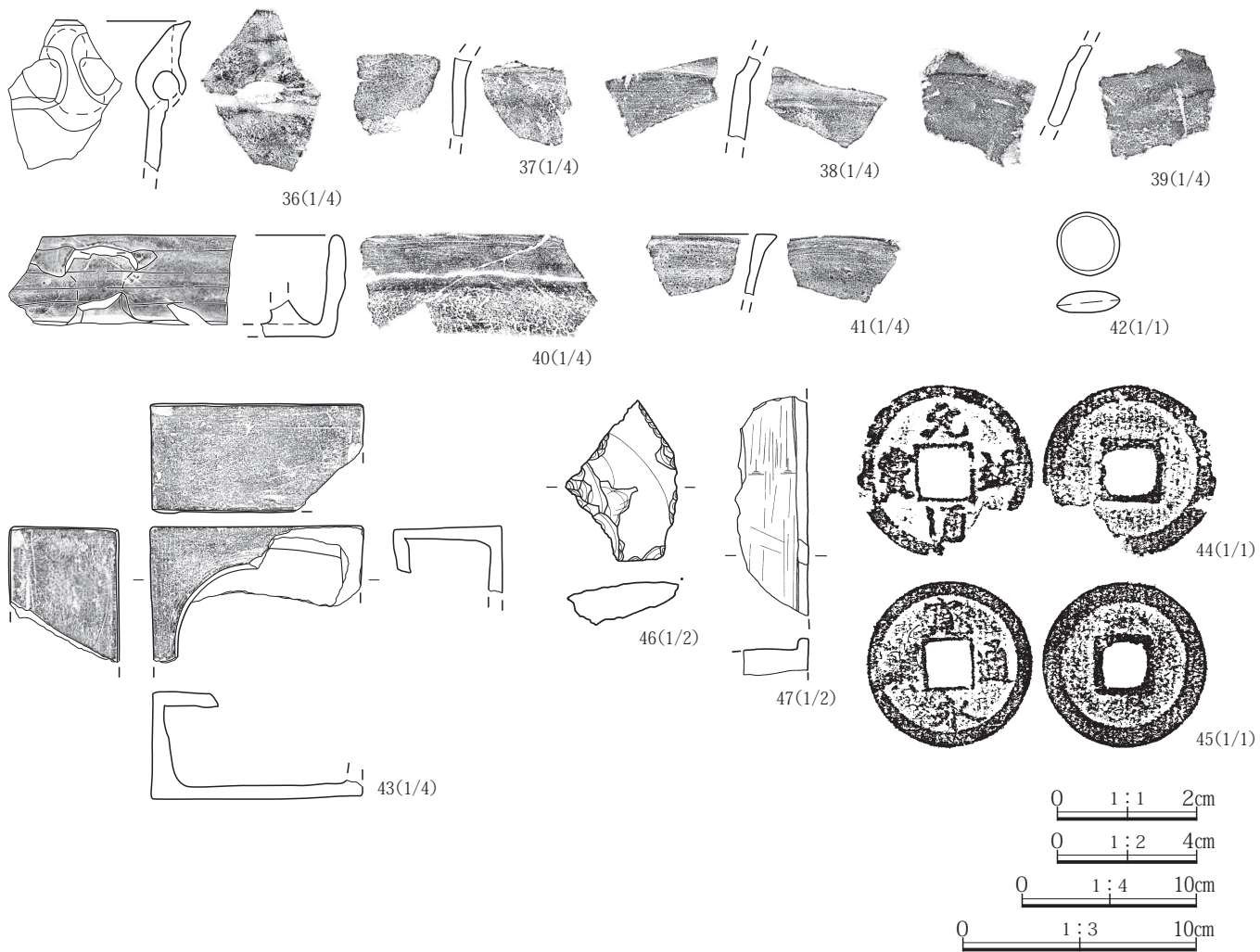
他に、46の石英製火打石、47の頁岩製硯、銭貨として44の「元祐通寶」、45の「寛永通寶」がある。



第2-33図 第2地点遺構外出土遺物(1)



第2-34図 第2地点遺構外出土遺物(2)



第2-35図 第2地点遺構外出土遺物(3)

第5節 出土人骨の分析

第2地点の調査において3基の中世墓が検出され、この内の2基から人骨が良好な状態で出土した。そのため、出土人骨の分析を大妻女子大学博物館の檜崎修一郎氏に委託して実施した。

分析の結果、1・2号墓から出土した人骨は、両墓ともに土葬であり、1号墓人骨は10代後半から20歳代の男性、2号墓人骨は30歳代から40歳代の男性。両墓内から北宋銭が出土していることから、中世の墓であることが明らかとなった。

以下、分析の報告を掲載する。

はじめに

本遺跡の1号墓及び2号墓から中世の人骨が出土したので、以下に報告する。なお、3号墓からも中世の人骨が検出されているが、わずかな骨片のみであるため、ここでは省略した。

1. 1号墓出土人骨

(1)人骨の出土状況

人骨は、長軸104cm・短軸54cm・深さ27cmの規模の長方形土坑から出土している。



写真1. 七日市陣屋跡1号墓出土人骨の出土状況

(2)被葬者の頭位と埋葬状態

人骨の残存状態が非常に悪いため、被葬者の頭位及び埋葬状態は不明である。

(3)副葬品

副葬品は、北宋銭の銭貨が2点検出されている。

(4)人骨の出土部位

残存状態は非常に悪く、遊離歯片及び四肢骨片が出土している。

(5)被葬者の個体数

出土人骨には、あきらかな重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

(6)被葬者の性別

出土遊離歯の歯冠計測値は比較的大きいため、被葬者の性別は男性であると推定される。

(7)被葬者の死亡年齢

出土歯の咬耗度を観察すると、エナメル質のみのマルチンの1度の状態である。したがって、被葬者の死亡年齢は10代後半から20歳代であると推定される。

2. 2号墓出土人骨

(1)人骨の出土状況

人骨は、長軸96cm・短軸66cm・深さ48cmの規模の楕円形土坑から出土している。なお、本土坑上部には礫が検出されている。



写真2. 七日市陣屋跡2号墓全景

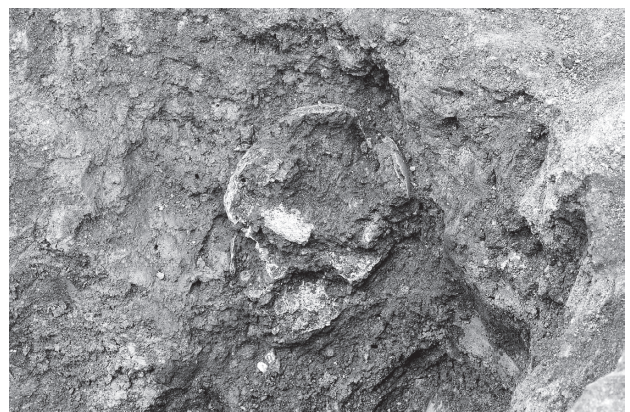


写真3. 七日市陣屋跡2号墓出土人骨の出土状況

(2)被葬者の頭位と埋葬状態

人骨の出土位置から、被葬者は頭位を北にして埋葬されたことが確かであるが、人骨の残存状態が悪いため埋葬状態は不明である。

(3)副葬品

副葬品は、検出されていない。

(4)人骨の出土部位

人骨の残存状態はあまり良くない。主に、頭蓋骨片・下顎骨・四肢骨片が出土している。

(5)被葬者の個体数

出土人骨には、あきらかな重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

(6)被葬者の性別

出土遊離歯の歯冠計測値は比較的大きいため、被葬者の性別は男性であると推定される。

(7)被葬者の死亡年齢

出土歯の咬耗度を観察すると、象牙質が点状に露出する程度のマルティンの2度の状態であるため、被葬者の死亡年齢は約30歳代から40歳代であると推定される。



写真4. 七日市陣屋跡2号墓出土下顎骨咬合綿観

まとめ

群馬県富岡市に所在する七日市陣屋跡の1号墓及び2号墓から、中世の人骨2体が出土した。

1号墓出土人骨は10代後半から20歳代の男性1体と、2号墓出土人骨は30歳代から40歳代の男性1体と鑑定された。

第6節 調査成果とまとめ

1. 七日市古墳群について

先述したように、七日市古墳群について最も詳しい記述は『群馬県立博物館研究報告第7集 富岡5号墳』(1972)で、その中に「…墳丘のあるもの12、残痕程度のもの6、破壊消滅したことが明らかなもの8の計26基…」とあり、さらに総数30基以上から成る古墳群であろうと結び、掲載されたその分布の位置を示した図が第36図である。

この分布図からすると、富岡高校敷地内のグラウンド南側には、7～13の大小の古墳が図示されている。7は富岡高校南西隅の敷地外に位置し、径30mの円墳で、墳丘上に前田家の宝篋印塔がある。8は富岡高校敷地内の南西隅に位置する『上毛古墳総覧』富岡2号墳であり、「御三社古墳」と称されていた古墳は、この2号墳の北側にあったという。昭和29年に校庭拡張に伴い調査がなされ、南開口の両袖形横穴石室内の床に埋込んだ組合式箱

形石棺をもち、前方部が西向きとなる規模不明(東西146尺、南北77尺、高さ9尺)な前方後円墳と思われる(1954年に調査後破壊)。9は富岡高校南側に隣接する蛇宮神社境内西側に位置する『上毛古墳総覧』富岡3号墳(御嶽塚)で、径10mの円墳。10は蛇宮神社の境内北側に位置し、規模の不明な円墳。11は蛇宮神社の境内南側に位置し、径10mの円墳。12も蛇宮神社境内の境内南側に位置し、11の東隣にある径10mの円墳。13は富岡高校南東隅の敷地外に位置した古墳で、残痕が確認されている。

さて、平成28年度調査となる第1地点は富岡高校のグラウンド南東隅に位置し、蛇宮神社の北隣にあたる。この第1地点1区の東壁際に検出された1号溝であるが、不整な弧状を描く状態で、その延長は東側へと続く。溝の状態から、弧状を描く溝の内径は7～8mを測るものと推定されよう。こうした1号溝のあり方は、第2-38図9～12(蛇宮神社境内)および13(富岡高校南東隅の敷地外)の分布状況から、これらの古墳と同規模な古墳の周溝の一部である可能性が極めて高い。また、位置関係からしても、13の古墳の西側に近接する古墳であることが想定される。



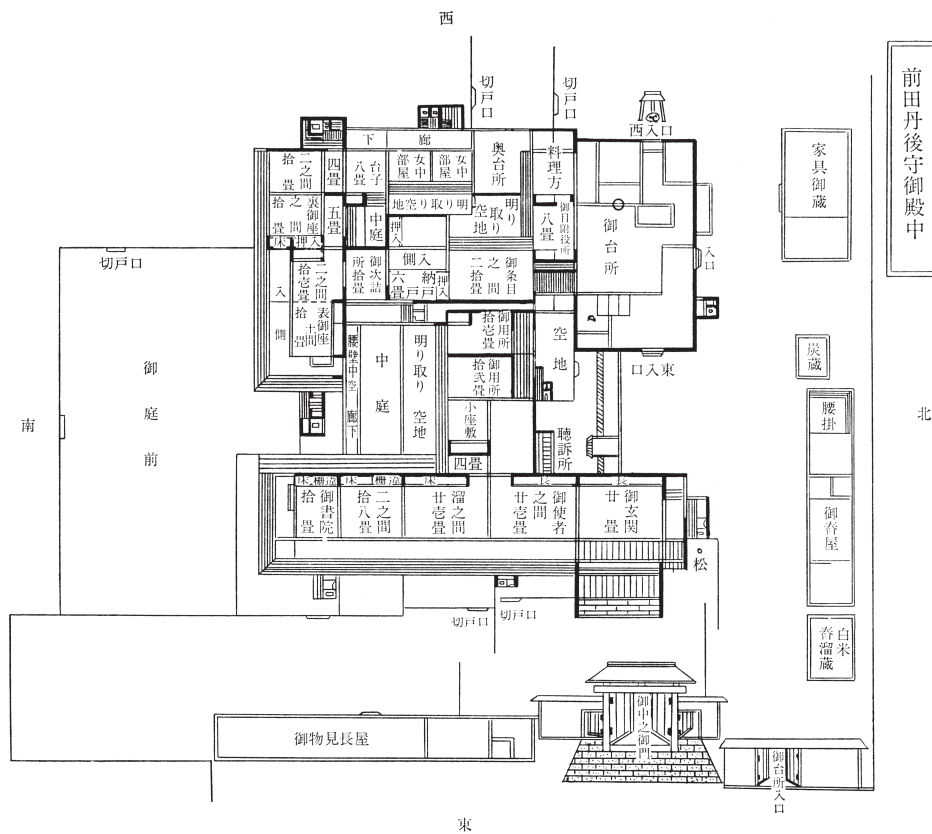
第2-36図 七日市古墳群の分布図

一方、今回の調査で少量ながら出土した埴輪片であるが、第2-36図8とした富岡高校南東隅にあった富岡2号墳(前方後円墳)の1954年調査時に、馬形埴輪や円筒埴輪の破片が出土していたとされていることからすれば、今回出土した埴輪片もこの御三社古墳に伴う埴輪である可能性が極めて高い。

2. 調査のまとめ

富岡高校は旧七日市藩邸に設置された学校として知られ、現在も正殿の一部が「御殿」として残され、学校の象徴ともなっている。昭和46年に刊行された『富岡高校75年史』(1971)に、第37図の前田丹後守御殿中、第2-38図の七日市前田家廃藩時旧郭絵図が掲載されている。併せて、七日市略図も掲載されている。

この第2-38図の旧郭絵図からすると、第1地点(平成28年度調査)は、御殿東側に面する道と御殿南側の蛇宮神社との交点付近となり、その部分には郭南側と蛇宮神社境内とを画する東西方向の空堀と土堤があったこととなる。しかし、第1地点の調査では、図示された東西方向の空堀はない。併せて、土堤の痕跡も確認できなかった。結果、東西方向の空堀と土堤は、調査地点よりも南に寄った神社境内との境に存在するものと考えられる。



第2-37図 前田丹後守御殿中

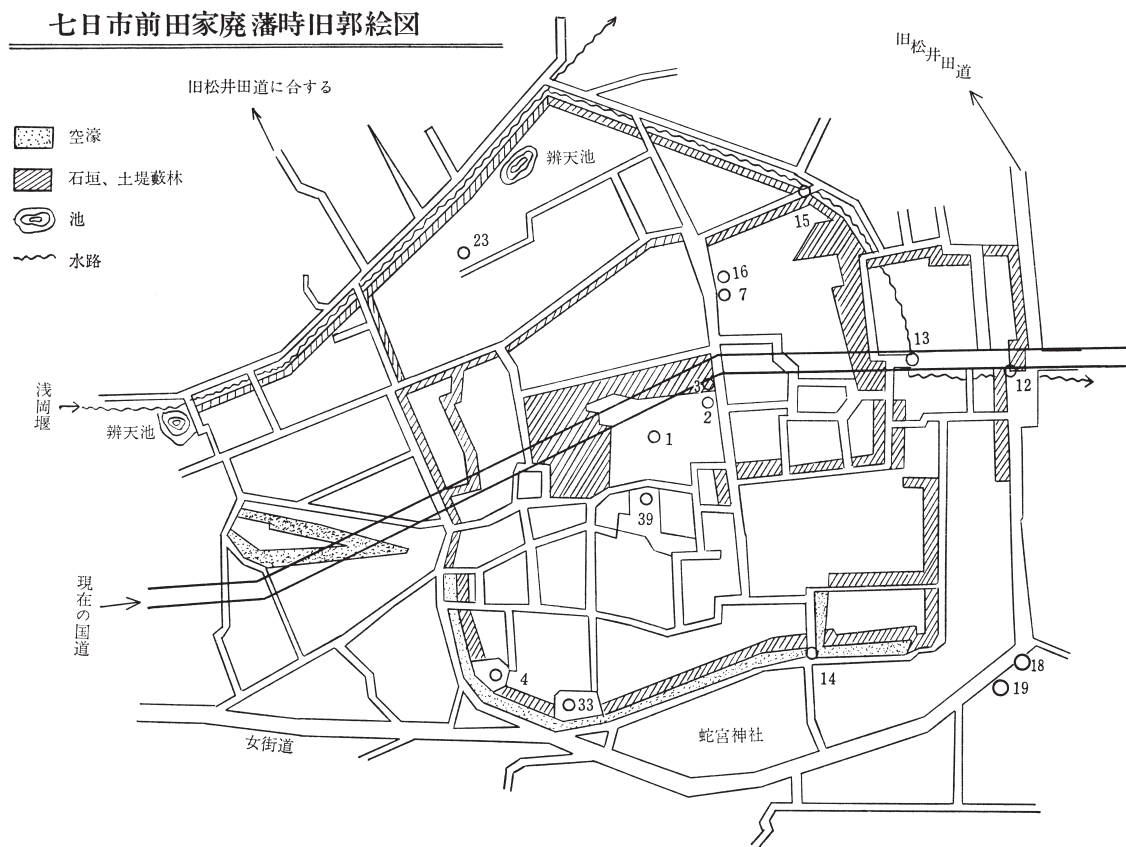
ただし、土堤は消滅している可能性もある。

第2地点(平成28年度調査)については、御殿の南西側のやや離れた位置となり、御殿に関わる遺構は存在しないものと考えられ、調査結果もそのことを物語っている。

一方、中世に属される遺構は多く、主な遺構に掘立柱建物や土坑、墓、溝、耕作溝等の遺構が確認された。また、出土したほとんどの陶磁器類も中世遺物である。こうした状況から、鎭川と高田川に挟まれた下位段丘(富岡段丘)上は、旧藩邸以前には富岡高校北側に位置する七日市観音前遺跡と共に、広い範囲に中世の活動痕跡がみとれる。

さらに遡ると、鎭川に面する丘陵の南淵一帯には多くの古墳が点在し、七日市古墳群として知られている。この古墳群には、『上毛古墳総覧』(1938)に記された富岡1号墳から富岡7号墳までが含まれ、富岡高校の南西隅付近には前田家の宝篋印塔が墳丘上に立つ大型古墳、その東側に富岡2号墳である前方後円墳(消滅)、蛇宮神社境内西端の富岡3号墳(御嶽塚)と連なり、さらに東側の市

立西小学校校庭に富岡4号墳(消滅)、市立西小学校校庭と市立富岡中学校校庭の間に富岡5号墳(物見塚、消滅)、さらに東の富岡6号墳、富岡7号墳へと続く。他にも小古墳は散在し、相当数の古墳からなることが予測されていた。こうした中、第1地点1区での1号溝の存在は、同古墳群における新規に確認された古墳の周溝と考えられ、先の『群馬県立博物館研究報告 第7集 富岡5号墳』(1972)での記述の通り、総数30基以上から成る七日市古墳群の一端を明らかにできたことは大きい。そして、未だ確認されていない新たな古墳の存在が、本古墳群の今後の解明へと繋がっていくことを確信する。



第2-38図 七日市前田家廃藩時旧郭絵図

第2章 七日市陣屋跡・七日市古墳群

第2-2表 掘立柱建物一覽

調査地点	遺構名	位置 座標値	平面形状	規模(m)				桁行方位	重複関係(古→新)	時期/備考
				桁行	梁行	床面積	柱間距離			
第2地点	1号掘立	X=28.830 Y=-86.239	長方形	4間	2間	14.27	桁行2.26~2.40	N-72°-E	9・36土、3・4・11耕溝	中世以降か
				9.20	4.50		梁行2.16~2.04			
第2地点	2号掘立	X=28.831 Y=-86.235	長方形	2間	1	42.84	桁行2.16~2.26	N-17°-W	36土	中世以降か
				4.33	3.19		梁行3.2			

第2-3表 土坑一覽

調査地点	遺構名	位置 座標値	平面形状	規模(m)			長軸方位	重複関係(古→新)	時期/備考
				長軸(径)	短軸	深さ			
第1地点	1-A号土坑	X=28.781 Y=-86.097	不定形	1.62	1.16	0.31	N-65°-W	1-A土B→1-A土A	近世(天明三年)以降
第1地点	1-B号土坑	X=28.781 Y=-86.097	不定形	(0.93)	1.08	0.04	N-5°-E	1-A土B→2-A土A	時期不明
第1地点	2号土坑	X=28.773 Y=-86.124	不定形	0.64	(0.5)	0.26	N-79°-E	2土→14ピ・26ピ	時期不明
第1地点	3号土坑	X=28.773 Y=-86.122	不定形	0.77	0.57	0.13	N-12°-E		時期不明
第2地点	1号土坑	X=28.814 Y=-86.247	長楕円形	(1.64)	1.00	0.56	N-27°-W		時期不明
第2地点	2号土坑	X=28.833 Y=-86.247	円形	1.08	1.12	0.58	—	2土→2耕溝→1耕溝、2・3土不明	中世以降
第2地点	3号土坑	X=28.833 Y=-86.247	円形	0.80	(0.73)	0.17	—	3土→2耕溝→1耕溝、2・3土不明	中世以降
第2地点	4号土坑	X=28.823 Y=-86.242	不整形円形	0.68	0.66	0.27	N-54°-W		時期不明
第2地点	5号土坑	X=28.829 Y=-86.236	不整形円形	1.48	1.38	0.45	N-43°-W		中世以降
第2地点	6号土坑	欠番							
第2地点	7号土坑	欠番							
第2地点	8号土坑	X=28.833 Y=-86.239	楕円形	1.25	0.68	0.25	N-21°-E	16・36土不明	時期不明
第2地点	9号土坑	X=28.832 Y=-86.245	長方形	1.05	0.68	0.27	N-81°-E	9土→6耕溝	中世以降
第2地点	10号土坑	X=28.819 Y=-86.232	長楕円形	4.42	1.14	0.35	N-64°-W	11土不明	時期不明
第2地点	11号土坑	X=28.820 Y=-86.234	楕円形	4.42	1.06	0.31	N-64°-W	10・13土不明	時期不明
第2地点	12号土坑	X=28.821 Y=-86.228	楕円形	1.18	0.74	0.74	N-60°-E		時期不明
第2地点	13号土坑	X=28.820 Y=-86.236	不整形	2.15	1.78	0.33	N-5°-E	11土不明	時期不明
第2地点	14号土坑	X=28.815 Y=-86.234	円形	1.00	0.90	0.10	—		時期不明
第2地点	15号土坑	X=28.836 Y=-86.239	楕円形か	1.25	0.58	0.18	N-54°-E	15土→14耕溝	時期不明
第2地点	16号土坑	X=28.834 Y=-86.238	楕円形	2.84	2.07	0.12	N-30°-E	8土不明、136ピ	時期不明
第2地点	17号土坑	X=28.815 Y=-86.228	長方形状	(0.95)	0.97	0.84	N-3°-W		時期不明
第2地点	18号土坑	X=28.848 Y=-86.231	楕円形	1.62	1.34	0.18	N-27°-W		中世以降
第2地点	19号土坑	X=28.841 Y=-86.232	長方形	1.42	0.77	0.46	N-4°-E		時期不明
第2地点	20号土坑	X=28.841 Y=-86.241	長方形	(1.10)	1.34	0.36	N-20°-W		時期不明
第2地点	21号土坑	X=28.850 Y=-86.239	円形	1.37	1.37	0.22	—	80ピ	中世以降
第2地点	22号土坑	X=28.846 Y=-86.239	長方形	(2.18)	1.00	0.16	N-83°-E		近世以降
第2地点	23号土坑	X=28.850 Y=-86.236	長方形	2.89	1.06	0.24	—	24土不明	時期不明
第2地点	24号土坑	X=28.849 Y=-86.238	長方形	(0.70)	0.55	0.23	N-7°-E	23土不明	時期不明
第2地点	25号土坑	X=28.844 Y=-86.241	楕円形	1.07	0.83	0.26	N-48°-E		中世以降
第2地点	26号土坑	X=28.845 Y=-86.242	円形	0.68	0.63	0.13	—		近世以降

調査地点	遺構名	位置		平面形状	規模(m)			長軸方位	重複関係(古→新)	時期/備考
		座標値			長軸(径)	短軸	深さ			
第2地点	27号土坑	X=28.843	Y=-86.239	円形	1.18	1.17	0.27	—	27土→28土	中世以降
第2地点	28号土坑	X=28.841	Y=-86.239							
第2地点	29号土坑	X=28.842	Y=-86.240	円形	(1.34)	(0.36)	0.17	—	29土→28土	中世以降
第2地点	30号土坑	X=28.855	Y=-86.239	楕円形	(1.44)	1.28	0.27	N-70°-E		中世以降
第2地点	31号土坑	X=28.862	Y=-86.233	長方形	(2.10)	1.16	0.26	N-18°-W		中世以降
第2地点	32号土坑	X=28.852	Y=-86.248	長方形	2.25	(0.90)	0.38	N-16°-W	32土→1溝	中世以降
第2地点	33号土坑	X=28.833	Y=-86.233	長方形	4.28	1.66	0.26	N-27°-W	33土→34土	中世以降
第2地点	34号土坑	X=28.832	Y=-86.234	長方形	3.06	1.46	0.32	N-11°-W	33土→34土	中世以降
第2地点	35号土坑	X=28.844	Y=-86.223	不整形	(4.76)	1.14	0.13	N-57°-W		中世以降
第2地点	36号土坑	X=28.830	Y=-86.238	楕円形	(3.22)	2.82	0.16	N-18°-W	8土・11耕溝→36土	近世以降
第2地点	37A・B号土坑	X=28.862	Y=-86.243	楕円形	4.64	4.00	1.15	N-49°-W	1溝	近世以降

第2-4表 墓一覽

調査地点	遺構名	位置		平面形状	規模(m)			長軸方位	重複関係(古→新)	時期/備考
		座標値			長軸(径)	短軸	深さ			
第2地点	1号墓	X=28.834	Y=-86.245	長方形	0.95	0.54	0.27	N-15°-W	7耕溝	中世
第2地点	2号墓	X=28.827	Y=-86.241	楕円形	0.96	0.67	0.48	N-12°-W		中世
第2地点	3号墓	X=28.836	Y=-86.236	長方形	(0.94)	0.50	0.14	N-89°-W	14耕溝	中世

第2-5表 柵一覽

調査地点	遺構名	位置		平面形状	規模(m)				桁行方位	重複関係(古→新)	時期/備考
		座標値			桁行	梁行	床面積	柱間距離			
第2地点	1号柵	X=28.841	Y=-86.245		5間	間		桁行1.80~1.20	N-16°-W		中世以降
					6.39			梁行			

第2-6表 ピット一覽

調査地点	遺構名	位置		平面形状	規模(m)			長軸方位	重複遺構	備考
		座標値			長軸(径)	短軸	深さ			
第1地点	1号ピット	X=28,776	Y=-86,096	楕円形	0.70	0.33	0.12	N-46°-W		
第1地点	2号ピット	X=28,773	Y=-86,097	楕円形	0.46	0.31	0.41	N-45°-E		
第1地点	3号ピット	X=28,774	Y=-86,095	楕円形	0.37	0.30	0.25	N-14°-W		
第1地点	4号ピット	X=28,774	Y=-86,095	不定形	0.46	0.40	0.20	N-57°-W		
第1地点	5号ピット	X=28,780	Y=-86,099	楕円形	0.36	0.25	0.27	N-47°-W		
第1地点	6号ピット	X=28,780	Y=-86,099	楕円形	0.35	0.35	0.36	N-25°-E		
第1地点	7号ピット	X=28,782	Y=-86,096	楕円形	0.37	0.25	0.22	N-2°-E		
第1地点	8号ピット	X=28,782	Y=-86,099	楕円形	0.36	0.34	0.32	N-44°-W		
第1地点	9号ピット	X=28,783	Y=-86,096	楕円形	0.34	0.27	0.29	N-7°-E		
第1地点	10号ピット	X=28,781	Y=-86,127	楕円形	0.40	0.34	0.20	N-43°-E		
第1地点	11号ピット	X=28,779	Y=-86,124	楕円形	0.25	0.23	0.31	N-21°-E		
第1地点	12号ピット	X=28,772	Y=-86,126	楕円形	0.23	0.23	0.25	N-10°-E		
第1地点	13号ピット	X=28,772	Y=-86,122	不定形	0.47	0.40	0.33	N-26°-E		
第1地点	14号ピット	X=28,772	Y=-86,123	楕円形	0.30	0.22	0.16	N-34°-W		
第1地点	15号ピット	X=28,772	Y=-86,123	楕円形	0.28	0.23	0.25	N-37°-W		
第1地点	16号ピット	X=28,772	Y=-86,123	楕円形	0.30	0.28	0.31	N-63°-W		
第1地点	17号ピット	X=28,772	Y=-86,126	楕円形	0.33	0.22	0.19	N-17°-W		
第1地点	18号ピット	X=28,770	Y=-86,127	楕円形	0.47	0.28	0.27	N-40°-E		
第1地点	19号ピット	X=28,769	Y=-86,126	楕円形	0.22	0.33	0.38	N-75°-W	20ピ→19ピ	
第1地点	20号ピット	X=28,769	Y=-86,126	楕円形	0.35	0.28	0.28	N-75°-W	20ピ→19ピ	
第1地点	21号ピット	X=28,770	Y=-86,125	楕円形	0.38	0.32	0.31	N-28°-E		
第1地点	22号ピット	X=28,770	Y=-86,123	楕円形	0.28	0.25	0.22	N-61°-E		

第2章 七日市陣屋跡・七日市古墳群

調査地点	遺構名	位置		平面形状	規模(m)			長軸方位	重複遺構	備考
		座標値			長軸(径)	短軸	深さ			
第1地点	23号ピット	X=28,766	Y=-86,128	楕円形	(0.36)	0.28	0.34	N-59°-E		
第1地点	24号ピット	X=28,774	Y=-86,098	楕円形	0.28	0.23	0.30	N-78°-E		
第1地点	25号ピット	X=28,775	Y=-86,096	楕円形	0.33	0.30	0.25	N-13°-E		
第1地点	26号ピット	X=28,773	Y=-86,124	楕円形	0.22	0.17	0.19	N-62°-E	2土	
第2地点	1号ピット	X=28,832	Y=-86,249	楕円形	0.34	0.30	0.06	N-64°-E		1掘立P 1
第2地点	2号ピット	X=28,829	Y=-86,249	楕円形	0.28	0.30	0.16	N-6°-E		1掘立P 12
第2地点	3号ピット	X=28,829	Y=-86,249	楕円形	0.30	0.24	0.25	N-28°-E		
第2地点	4号ピット	X=28,834	Y=-86,248	楕円形	0.37	0.30	0.34	N-79°-W		1掘立P 6
第2地点	5号ピット	X=28,832	Y=-86,247	楕円形	0.27	0.26	0.24	N-55°-W		1掘立P 2
第2地点	6号ピット	X=28,829	Y=-86,244	楕円形	0.30	0.23	0.27	N-90°-W		
第2地点	7号ピット	X=28,827	Y=-86,244	楕円形	0.44	0.34	0.26	N-17°-W		
第2地点	8号ピット	X=28,830	Y=-86,238	楕円形	0.34	0.28	0.26	N-35°-W		2掘立P 4
第2地点	9号ピット	X=28,822	Y=-86,233	楕円形	0.32	0.24	0.17	N-6°-E		
第2地点	10号ピット	X=28,822	Y=-86,233	楕円形	0.46	0.40	0.71	N-44°-E		
第2地点	11号ピット	X=28,822	Y=-86,232	楕円形	0.38	0.40	0.24	N-29°-E		
第2地点	12号ピット	X=28,835	Y=-86,247	楕円形	0.30	0.27	0.32	N-48°-W		
第2地点	13号ピット	X=28,833	Y=-86,246	楕円形	0.34	0.30	0.59	N-18°-W		
第2地点	14号ピット	X=28,833	Y=-86,245	楕円形	0.27	0.24	0.37	N-22°-W	9土・14ピ	1掘立P 3
第2地点	15号ピット	X=28,828	Y=-86,246	楕円形	0.34	0.28	0.33	N-33°-W		1掘立P 10
第2地点	16号ピット	X=28,832	Y=-86,249	円形	0.35	0.35	0.63	—		
第2地点	17号ピット	X=28,832	Y=-86,245	楕円形	0.37	—	0.42	N-6°-E	18ピ	
第2地点	18号ピット	X=28,832	Y=-86,245	楕円形	0.25	—	0.42	N-6°-E	17ピ	
第2地点	19号ピット	X=28,833	Y=-86,245	楕円形	0.28	0.28	0.26	N-14°-W		
第2地点	20号ピット	X=28,833	Y=-86,243	楕円形	0.32	0.30	0.41	N-7°-W		1掘立P 4
第2地点	21号ピット	X=28,834	Y=-86,241	楕円形	0.28	0.24	0.15	N-51°-W		1掘立P 5
第2地点	22号ピット	X=28,832	Y=-86,246	楕円形	0.25	0.25	0.19	N-30°-E		
第2地点	23号ピット	X=28,828	Y=-86,244	楕円形	0.42	0.40	0.44	N-62°-W		1掘立P 9
第2地点	24号ピット	X=28,829	Y=-86,242	楕円形	0.32	0.28	0.39	N-73°-E		1掘立P 8
第2地点	25号ピット	X=28,827	Y=-86,248	楕円形	0.33	0.32	0.26	N-11°-E		1掘立P 11
第2地点	26号ピット	X=28,829	Y=-86,239	楕円形	0.38	0.30	0.28	N-70°-E		
第2地点	27号ピット	X=28,830	Y=-86,235	楕円形	0.28	0.28	0.42	N-34°-W		2掘立P 3
第2地点	28号ピット	X=28,833	Y=-86,236	円形	0.32	0.30	0.37	—		2掘立P 2
第2地点	29号ピット	X=28,835	Y=-86,237	円形	0.32	0.32	0.27	—		2掘立P 1
第2地点	30号ピット	X=28,831	Y=-86,243	楕円形	0.33	0.28	0.20	N-65°-W		
第2地点	31号ピット	X=28,831	Y=-86,233	楕円形	0.41	0.25	0.21	N-53°-W		
第2地点	32号ピット	X=28,828	Y=-86,238	楕円形	0.23	0.20	0.20	N-20°-E		
第2地点	33号ピット	X=28,828	Y=-86,238	円形	0.25	0.25	0.24	—		
第2地点	34号ピット	X=28,816	Y=-86,236	楕円形	0.50	0.40	0.34	N-83°-W		
第2地点	35号ピット	X=28,816	Y=-86,233	楕円形	0.33	0.30	0.18	N-22°-W		
第2地点	36号ピット	X=28,934	Y=-86,239	楕円形	0.40	0.36	0.29	N-36°-E	16土	2掘立P 6
第2地点	37号ピット	X=28,823	Y=-86,235	不定形	0.37	0.31	0.08	N-74°-W		
第2地点	38号ピット	X=28,822	Y=-86,235	楕円形	0.32	0.29	0.28	N-32°-E		
第2地点	39号ピット	X=28,822	Y=-86,235	楕円形	(0.20)	0.34	0.19	N-73°-W		
第2地点	40号ピット	X=28,828	Y=-86,235	楕円形	0.55	0.35	0.77	N-8°-W	41土	
第2地点	41号ピット	X=28,828	Y=-86,235	楕円形	—	0.25	0.11	N-16°-W	40土	
第2地点	42号ピット	X=28,831	Y=-86,232	楕円形	0.36	0.31	0.31	N-72°-W		
第2地点	43号ピット	X=28,845	Y=-86,227	楕円形	0.43	0.33	0.19	N-84°-E		
第2地点	44号ピット	X=28,845	Y=-86,228	楕円形	0.30	0.29	0.27	N-43°-W		
第2地点	45号ピット	X=28,845	Y=-86,229	不定形	0.58	0.47	0.37	N-8°-E	46土	
第2地点	46号ピット	X=28,845	Y=-86,230	不定形	0.58	0.25	0.15	N-8°-E	45土	
第2地点	47号ピット	X=28,846	Y=-86,230	楕円形	0.24	0.21	0.19	N-52°-E		
第2地点	48号ピット	X=28,841	Y=-86,245	円形	0.38	0.38	0.40	—		1柵P 6
第2地点	49号ピット	X=28,845	Y=-86,233	円形	0.25	0.25	0.23	—		
第2地点	50号ピット	X=28,843	Y=-86,229	楕円形	0.52	0.47	0.43	N-53°-E		
第2地点	51号ピット	X=28,845	Y=-86,235	楕円形	0.37	0.32	0.18	N-31°-E		
第2地点	52号ピット	X=28,845	Y=-86,236	円形	0.30	0.30	0.18	—		
第2地点	53号ピット	X=28,848	Y=-86,235	楕円形	0.42	0.43	0.32	N-25°-W		
第2地点	54号ピット	X=28,848	Y=-86,234	楕円形	0.54	0.41	0.11	N-87°-W		
第2地点	55号ピット	X=28,846	Y=-86,234	楕円形	0.28	0.25	0.31	N-60°-W		
第2地点	56号ピット	X=28,847	Y=-86,231	楕円形	0.27	0.26	0.28	N-49°-E		

調査地点	遺構名	位置		平面形状	規模(m)			長軸方位	重複遺構	備考
		座標値			長軸(径)	短軸	深さ			
第2地点	57号ピット	X=28,847	Y=-86,229	楕円形	0.33	0.28	0.37	N-73°-E		
第2地点	58号ピット	X=28,844	Y=-86,231	楕円形	0.26	(0.22)	0.24	N-52°-W		
第2地点	59号ピット	X=28,846	Y=-86,230	不定形	0.65	0.47	0.30	N-10°-E	60土	
第2地点	60号ピット	X=28,846	Y=-86,229	不定形	0.65	0.62	0.34	N-5°-E	59土	
第2地点	61号ピット	X=28,850	Y=-86,232	円形	0.42	0.41	0.27	—		
第2地点	62号ピット	X=28,851	Y=-86,233	円形	0.25	0.25	0.19	—		
第2地点	63号ピット	X=28,851	Y=-86,232	円形	0.25	0.25	0.32	—		
第2地点	64号ピット	X=28,852	Y=-86,233	楕円形	0.26	0.20	0.25	N-46°-E		
第2地点	65号ピット	X=28,843	Y=-86,240	円形	0.37	0.36	0.29	—		
第2地点	66号ピット	X=28,848	Y=-86,234	円形	0.61	0.56	0.48	N-70°-W		
第2地点	67号ピット	X=28,848	Y=-86,243	円形	0.42	0.39	0.16	—		
第2地点	68号ピット	X=28,849	Y=-86,239	楕円形	0.39	0.37	0.20	N-63°-E		
第2地点	69号ピット	X=28,850	Y=-86,238	楕円形	0.29	0.28	0.27	N-69°-W		
第2地点	70号ピット	X=28,850	Y=-86,238	長方形	0.35	0.29	0.45	N-19°-W		
第2地点	71号ピット	X=28,852	Y=-86,237	楕円形	0.34	0.32	0.30	N-42°-W		
第2地点	72号ピット	X=28,850	Y=-86,235	楕円形	0.34	(0.27)	0.24	N-11°-E		
第2地点	73号ピット	X=28,851	Y=-86,244	楕円形	0.35	0.30	0.18	N-81°-W		
第2地点	74号ピット	X=28,852	Y=-86,242	円形	0.23	0.23	0.20	—		
第2地点	75号ピット	X=28,852	Y=-86,239	楕円形	0.35	0.32	0.28	N-46°-W		
第2地点	76号ピット	X=28,852	Y=-86,243	楕円形	0.43	0.36	0.32	N-47°-E		
第2地点	77号ピット	X=28,853	Y=-86,239	楕円形	0.24	0.23	0.16	N-47°-W		
第2地点	78号ピット	X=28,852	Y=-86,238	楕円形	0.42	0.30	0.35	N-85°-W		
第2地点	79号ピット	X=28,853	Y=-86,237	楕円形	0.27	0.24	0.22	N-15°-E		
第2地点	80号ピット	X=28,849	Y=-86,239	楕円形	0.34	0.33	0.24	N-39°-W	21土	
第2地点	81号ピット	X=28,854	Y=-86,245	楕円形	0.66	0.53	0.43	N-4°-W		
第2地点	82号ピット	X=28,852	Y=-86,237	楕円形	0.18	0.17	0.20	N-23°-W		
第2地点	83号ピット	X=28,852	Y=-86,238	楕円形	0.26	0.23	0.16	N-40°-E		
第2地点	84号ピット	X=28,843	Y=-86,246	円形	0.42	0.42	0.45	—		1 柵 P 5
第2地点	85号ピット	X=28,853	Y=-86,233	円形	0.25	0.24	0.19	—		
第2地点	86号ピット	X=28,849	Y=-86,243	楕円形	0.38	0.33	0.22	N-38°-W		
第2地点	87号ピット	X=28,846	Y=-86,247	楕円形	0.46	0.40	0.62	N-51°-W		1 柵 P 3
第2地点	88号ピット	X=28,848	Y=-86,247	楕円形	0.42	0.35	0.57	N-75°-W		1 柵 P 2
第2地点	89号ピット	X=28,850	Y=-86,248	楕円形	0.43	0.42	0.89	N-10°-E		1 柵 P 1
第2地点	90号ピット	欠番								
第2地点	91号ピット	X=28,847	Y=-86,244	円形	0.35	0.35	0.27	—		
第2地点	92号ピット	X=28,842	Y=-86,241	不定形	0.42	0.28	0.15	N-79°-E		
第2地点	93号ピット	X=28,848	Y=-86,241	円形	0.28	0.28	0.36	—		
第2地点	94号ピット	X=28,844	Y=-86,246	円形	0.45	0.45	0.45	—		1 柵 P 4
第2地点	95号ピット	X=28,856	Y=-86,248	楕円形	0.44	0.33	0.14	N-17°-W	1 溝	
第2地点	96号ピット	X=28,865	Y=-86,229	楕円形	0.49	0.40	0.42	N-53°-E		
第2地点	97号ピット	X=28,866	Y=-86,228	楕円形	0.46	0.42	0.28	N-36°-E		
第2地点	98号ピット	X=28,866	Y=-86,228	楕円形	0.42	0.40	0.39	N-8°-W		
第2地点	99号ピット	X=28,867	Y=-86,228	楕円形	0.77	0.66	0.26	N-47°-W		
第2地点	100号ピット	X=28,853	Y=-86,244	楕円形	0.34	0.28	0.24	N-5°-E		
第2地点	101号ピット	X=28,854	Y=-86,242	楕円形	0.32	0.29	0.11	N-13°-W		
第2地点	102号ピット	X=28,854	Y=-86,242	楕円形	0.28	0.27	0.15	N-12°-W		
第2地点	103号ピット	X=28,851	Y=-86,248	楕円形	0.35	0.33	0.39	N-16°-W		
第2地点	104号ピット	X=28,859	Y=-86,247	円形	0.38	0.36V	0.27	N-34°-W		
第2地点	105号ピット	X=28,856	Y=-86,246	円形	0.20	0.20	0.19	—		

第2-7表 井戸一覧

調査地点	遺構名	位置		平面形状	規模(m)			長軸方位	重複関係(古→新)	時期/備考
		座標値			長軸(径)	短軸	深さ			
第2地点	1号井戸	X=28.868	Y=-86.245	円形	1.04	—	1.70以上	—		近世以降
第2地点	2号井戸	X=28.866	Y=-86.234	円形	1.20	—	1.90	—		中世以降

第2章 七日市陣屋跡・七日市古墳群

第2-8表 溝一覧

調査地点	遺構名	位置 座標値	断面形状	規模(m)				走向方向	重複関係(古→新)	時期/備考
				長さ	上面幅	底面幅	深さ			
第1地点	1号溝	X=28.775 ~ 28.782 Y=-86.095 ~ -86.096	緩いU字状	7.3	0.87 ~ 0.63	0.35 ~ 0.15	0.27	弧状	25ピ	古墳時代 古墳の周溝
第2地点	1号溝	X=28.850 ~ 28.870 Y=-86.245 ~ -86.235	V字状	22.7	1.40 ~ 1.10	0.30 ~ 0.20	0.89	N-35°-E	32土、37A・B土、 96ピ	中世

第2-9表 耕作溝一覧

調査地点	遺構名	位置 座標値	断面形状	規模(m)				走向方向	重複関係(古→新)	時期/備考
				長さ	上面幅	底面幅	深さ			
第2地点	1号耕作溝	X=28.833 Y=-86.245	長方形	5.86	0.44	0.37 ~ 0.29	0.41	N-82°-E	2・3土、4・13ピ、 2・6耕作溝	中世以降
第2地点	2号耕作溝	X=28.832 Y=-86.248	長方形	(4.27)	0.78	0.68 ~ 0.64	0.19	N-75°-E	2・3土、16ピ、 1・6耕作溝	中世以降
第2地点	3号耕作溝	X=28.831 Y=-86.247	長方形	5.32	0.92	0.86 ~ 0.71	0.19	N-78°-E	1掘立、6耕作溝	中世以降
第2地点	4号耕作溝	X=28.830 Y=-86.245	長方形	4.72	0.76	0.59 ~ 0.48	0.24	N-83°-E	1掘立	中世以降
第2地点	5号耕作溝	X=28.828 Y=-86.274	長方形	3.94	0.98	0.86 ~ 0.75	0.17	N-80°-E		中世以降
第2地点	6号耕作溝	X=28.831 Y=-86.246	長方形	3.52	0.70	0.68 ~ 0.33	0.17	N-6°-W	1墓、1・3耕作溝	中世以降
第2地点	7号耕作溝	X=28.830 Y=-86.244	長方形	5.46	0.80	0.81 ~ 0.69	0.29	N-8°-W	1墓、19ピ、12耕作溝	中世以降
第2地点	8号耕作溝	X=28.830 Y=-86.243	長方形	(6.80)	0.70	0.68 ~ 0.51	0.32	N-8°-W	9・12耕作溝、19ピ	中世以降
第2地点	9号耕作溝	X=28.834 Y=-86.243	長方形	(2.98)	1.20	1.00 ~ 0.95	0.34	N-8°-W	8耕作溝	中世以降
第2地点	10号耕作溝	X=28.831 Y=-86.242	長方形	5.00	0.52	0.57 ~ 0.36	0.25	N-6°-W	12耕作溝	中世以降
第2地点	11号耕作溝	X=28.833 Y=-86.240	長方形	(4.50)	1.00	1.09 ~ 0.74	0.25	N-8°-W	36土、12耕作溝	中世以降
第2地点	12号耕作溝	X=28.832 Y=-86.241	長方形	(4.24)	0.84	0.83 ~ 0.71	0.25	N-80°-E	36土、7・8・10・11耕作溝	中世以降
第2地点	13号耕作溝	X=28.815 Y=-86.249	長方形	2.86	0.70	0.63 ~ 0.55	0.41	N-17°-W		中世以降
第2地点	14号耕作溝	X=28.836 Y=-86.237	長方形	(1.90)	0.62	0.55 ~ 0.44	0.13	N-87°-W	15土、3墓	中世以降
第2地点	15号耕作溝	X=28.840 Y=-86.244	長方形	(2.46)	0.54	0.47 ~ 0.44	0.20	N-13°-W		中世以降
第2地点	16号耕作溝	X=28.845 Y=-86.245	長方形	2.14	0.68	0.62 ~ 0.52	0.33	N-11°-W	17耕作溝	中世以降
第2地点	17号耕作溝	X=28.847 Y=-86.245	長方形	3.54	0.82	0.67 ~ 0.52	0.34	N-10°-W	16耕作溝	中世以降

第2-10表 第2地点1号土坑遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				縦 横	厚	重			
第2-18図 PL.2-12	1	鉄製品 釘	埋土 破片	縦 2.8 横 0.6	厚 0.5 重 —	—	//	釘体部。全体が錆で覆われ、釘の内部は腐食による劣化が見られる。	
第2-18図 PL.2-12	2	鉄製品 釘	埋土 破片	縦 2.3 横 0.7	厚 0.4 重 —	—	//	釘頭部。頭部が折れている様子がX線写真により確認できる。ほぼ全体が錆で覆われ、劣化が見られる。	

第2-11表 第2地点5号土坑遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 底	(11.8) 高	—			
第2-18図	3	在地系土器 皿	埋土 口縁部1/6	口 底 —	(11.8) 高 —	—	橙//	胎土中に片岩?含む。体部外湾し、口縁部は僅かに内湾。	中世。
第2-18図 PL.2-12	4	火打石	埋土 完形	長 幅 4.0 2.3	厚 重 1.8 10.8	—	石英//	全面的に剥離面で構成される。表面の稜上右側に微細剥離痕とつぶれ痕が集中する。	

第2-12表 第2地点9号土坑遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 底	—	高 —			
第2-18図	5	在地系土器 皿	埋土 底部片	口 底 —	—	—	にぶい赤褐//	底部右回転糸切り無調整。体部打ち欠きか。	二次加工品か。

第2-13表 第2地点12号土坑遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 底	—	高 —			
第2-18図 PL.2-12	6	瓦 鬼瓦	埋土 破片	口 底 —	—	—	灰//	断面は黄灰色。表面周囲に猪目1カ所。裏面に龍頭1カ所貼付る。	

第2-14表 第2地点18号土坑遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 底	—	高 —			
第2-18図	7	在地系土器 内耳鍋	埋土 体部上位片	口 底 —	—	—	黒//	断面は灰黄色。残存部内面上部に緩い段差。仕上げ段階で燻し焼成。	中世。

第2-15表 第2地点21号土坑遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 底	—	高 —			
第2-18図	8	在地系土器 片口鉢	埋土 口縁部片	口 底 —	—	—	黒//	1部黄灰色。口縁部外面浅い凹線1条。口縁部は玉縁状をなす。	14世紀後半頃。

第2-16表 第2地点25号土坑遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 底	—	高 —			
第2-18図	9	在地系土器 内耳鍋	埋土 口縁部下位から 体部上位片	口 底 —	—	—	褐灰//	断面はにぶい橙色。胎土中に片岩?含む。内面段差部分の耳欠損。	中世。

第2-17表 第2地点28号土坑遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 底	—	高 —			
第2-18図	10	龍泉窯系青 磁碗	埋土 口縁部片	口 底 —	—	—	灰//	外面鑄蓮弁文。内外面青磁釉。	13世紀。
第2-18図	11	在地系土器 内耳鍋	埋土 体部上位片	口 底 —	—	—	橙//	胎土中に片岩?含む。残存部上位内面に段差。	中世。
第2-18図	12	在地系土器 内耳鍋	埋土 口縁部片	口 底 —	—	—	黄灰//	断面はにぶい赤褐色。口縁部外面小さく突き出る。口縁部正面平坦。	15世紀末～ 16世紀中頃 か。2片接合。
第2-18図 PL.2-12	13	銭貨 嘉祐通寶	埋土 ほぼ完形	縦 2.381 横 2.429	厚 0.143 重 2.1	—	//	輪の一部が欠損している。粉状に破損する劣化が見られる。面の彫は深く、字、輪、郭が明瞭。背は堀が浅い。郭は目立たず不明瞭。	
第2-18図 PL.2-12	14	銭貨 永樂通寶か	埋土 ほぼ完形	縦 2.485 横 —	厚 0.167 重 1.8	—	//	4片に破損。全体がさびに覆われている。X線写真により、上の文字が「永」を確認。	

第2章 七日市陣屋跡・七日市古墳群

第2-18表 第2地点31号土坑遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	一			
第2-18図 PL.2-12	15	在地系土器 片口鉢	埋土 口縁部から体部 1/4	口底 —	(28.0) 高	—	にぶい橙//	断面は灰色。口縁部は外反。口縁部内側に大きく突き出る。体部内面下位は使用により器表平滑。	15世紀。19図17と同一個体の可能性高い。2片接合。
第2-18図 PL.2-12	16	在地系土器 片口鉢	埋土 口縁部から体部 1/4	口底 —	(28.4) 高	—	にぶい橙、灰黄褐//	口縁部内面突き出る。口縁部横撫で。内面口縁部以下撫で。体部内面使用により器表平滑。	14世紀後半頃。2片接合。
第2-18図 PL.2-12	17	在地系土器 片口鉢	埋土 1/8	口底 —	高	—	にぶい橙//	断面は灰色。口縁部は外反。口縁部内側に大きく突き出る。体部外面下端撫で。体部内面下位は使用により器表平滑。	15世紀。19図15と同一個体の可能性高い。

第2-19表 第2地点32号土坑遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	一			
第2-19図 PL.2-12	18	常滑陶器か 片口鉢	埋土 口縁部1/6	口底 —	高	—	黄灰//	胎土中に礫多く含む。常滑片口鉢のI類。口縁部は肥厚。口縁部内面やや窪む。片口部残る。体部内面やや平滑。	13世紀前葉～中葉。3片接合。
第2-19図	19	常滑陶器か 片口鉢	埋土 高台片	口底 —	(13.8) 高	—	灰黄//	胎土中に礫多く含む。常滑片口鉢のI類。内面使用により摩滅か。	中世。2片接合。

第2-20表 第2地点33号土坑遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	一			
第2-19図 PL.2-12	20	在地系土器 皿	埋土 口縁部1/2、底部完	口底 13.8 7.4	高	3.6	橙//	胎土中に微細な片岩？多く含む。口縁部歪む。体部内面下端から底部内面周縁を凹線状に窪ませる。口縁部から体部は外反。底部内面に強い指撫で。底部外面左回転糸切り無調整で浅い圧痕残る。	15世紀後半。5片接合。
第2-19図	21	在地系土器 内耳鍋か焙烙	埋土 口縁部片	口底 —	高	—	黒褐//	断面は黄灰色。胎土中に微細な片岩？多く含む。焼成は還元炎に近い。口縁部外面は小さく外方に突き出る。端部は丸みを帯びる。口縁部上面は平坦で、端部内面は稜をなす。	16世紀。
第2-19図 PL.2-12	22	在地系土器 内耳鍋	埋土 口縁部片	口底 —	高	—	にぶい褐//	胎土中に微細な片岩？多く含む。口縁部は小さく外方に突きだし、端部は尖る。口縁部上面は平坦。口縁部内面に耳貼り付け。外面器表やや黒変。	16世紀。
第2-19図	23	在地系土器 内耳鍋か焙烙	埋土 口縁部片	口底 —	高	—	橙、にぶい黄橙//	胎土中に微細な片岩？多く含む。口縁部は若干短い。口縁部外面欠損。	16世紀。
第2-19図	24	在地系土器 内耳鍋か焙烙	埋土 底部片	口底 —	高	—	にぶい橙//	外面の器表は黒褐色。胎土中に微細な片岩？多く含む。体部外面下位から底部外面周縁削り後、体部外面下端から底部外面周縁撫で。平底であるが、底部周縁は鏡撫でにより面取り状に調整する。	20図25と同一個体か。3片接合。
第2-19図 PL.2-12	25	在地系土器 焙烙	埋土 口縁部から底部片	口底 —	高	—	にぶい橙//	胎土中に微細な片岩？多く含む。口縁部横撫で。口縁部は外反した後にやや内湾。湾曲部は外方に肥厚。体部外面は成形時の凹凸目立つ。体部外面下位から底部外面周縁削り後、粗い鏡撫で。平底であるが、底部周辺は鏡撫でにより面取り状に斜めとなる。	16世紀。20図21と同一個体か。

第2-21表 第2地点34号土坑遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	一			
第2-19図	26	在地系土器 内耳鍋か焙烙	埋土 口縁部片	口底 —	高	—	黒褐//	断面は黄灰色。胎土中に微細な片岩？含む。焼成は還元炎に近い。口縁部外面は小さく外方に突き出る。端部は丸みを帯びる。口縁部正面は平坦で内面は稜をなす。外面に煤付着。	16世紀。
第2-19図	27	在地系土器 内耳鍋か	埋土 口縁部片	口底 —	高	—	にぶい橙//	胎土中に微細な片岩？含む。酸化炎焼成。口縁部上面はやや内傾し平坦であるが僅かに中央窪む。	中世。
第2-19図	28	在地系土器 内耳鍋か焙烙	埋土 口縁部片	口底 —	高	—	にぶい橙//	胎土中に微細な片岩？多く含む。酸化炎焼成。口縁部上面は平坦で内傾し、端部内面は小さく突き出る。端部は丸みを帯びる。外面器表煤付着。	16世紀。
第2-19図 PL.2-12	29	在地系土器 焙烙	埋土 1/4	口底 —	(39.0) 高	—	橙//	外面の器表は黒褐色。口縁部横撫での後、体部外面以下削り。口縁部は小さく外反し、端部上面は平坦。端部上面は外側のみ鏡撫でにより面取り。体部外面周縁は鏡削りにより面取り状に斜めとなる。	16世紀。12片接合。

第2-22表 第2地点36号土坑遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	径			
第2-19図 PL.2-12	30	在地系土器 皿	埋土 底部1/4	口底 — (6.0)	高 —	—	橙//	胎土中に微細な片岩?多く含む。底部内面撫で。底部外面回転糸切り無調整の後に浅い圧痕。	中世か。 3片接合。
第2-19図 PL.2-12	31	在地系土器 皿	埋土 底部完	口底 — 6.8	高 —	—	橙//	胎土中に微細な片岩?多く含む。底部内面に一方方向の撫で。底部外面左回転糸切り無調整の後、内面撫でによる圧痕付着。	中世。2片接合。

第2-23表 第2地点37A・B号土坑遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	径			
第2-19図 PL.2-12	32	製作地不詳 磁器 上絵盃	埋土 口縁部1/2欠	口底 5.9 2.5	高 2.8	—	白//	内面に金色で「福壽 宝□市」、青で「戎」、黒と赤で鯛を描く。高台外面に染付。高台内呉須による不明銘。	2片接合。
第2-19図 PL.2-12	33	製作地不詳 磁器 上絵盃	埋土 口縁部2/3欠	口底 (6.4) 2.9	高 2.8	—	白//	内面に青の上絵具で松様の植物文と「七日市 高野製」、中央に大きく「茂」の文字。高台外面染付。高台内呉須による不明銘。	5片接合。
第2-19図 PL.2-12	34	製作地不詳 磁器 上絵盃	埋土 口縁部一部欠	口底 6.1 2.3	高 3.0	—	白//	内面に青の上絵具で「名酒 大定製 □□賀」の文字と松と竹筍、熊手を描く。高台外面に染付。高台内呉須による不明銘。	8片接合。
第2-20図 PL.2-12	35	製作地不詳 磁器 上絵盃	埋土 完形	口底 6.3 2.8	高 2.9	—	白//	内面に青の上絵具で「新泉亭」と大きく記し、脇に赤色ではね熨斗内に「七日市」と記す。高台外面に染付。高台内呉須による不明銘。	
第2-20図 PL.2-12	36	製作地不詳 磁器 上絵盃	埋土 口縁部1/3欠	口底 6.3 2.7	高 2.8	—	白//	内面に青の上絵具で「児玉」の文字を細く描く。他に文様や文字は確認できない。高台外面に染付。高台内呉須による不明銘。	
第2-20図 PL.2-12	37	製作地不詳 磁器 上絵盃	埋土 口縁部1/4、 底部完	口底 (9.4) 3.6	高 3.8	—	白//	大型、高台で体部が開く。内面に青の上絵具で亀を、白の上絵具で5個と7個の点、内面中央に金色の上絵具で点を描く。	4片接合。
第2-20図 PL.2-13	38	肥前磁器 染付段重	埋土 口縁部1/4欠	口底 5.0 4.0	高 2.1	—	白//	小型で化粧用具か。外面に染付。口縁部内面から上面釉剥ぎ。底部外面周縁の段差部無釉。	4片接合。
第2-20図 PL.2-13	39	瀬戸・美濃 磁器か 小杯	埋土 口縁部1/4欠	口底 5.0 3.3	高 5.4	—	白//	口縁部外面から高台外面に茶色釉。外面は茶色釉後に呉須で不明文様。口縁部は呉須で圏線を描く。高台内1重圏線内に楕円枠内に「高□」押印。呉須は酸化コバルトであろう。	6片接合。
第2-20図	40	肥前磁器か 染付小碗	埋土 1/4	口底 (7.3) (3.4)	高 5.0	—	白//	外面に軍配文と植物文を型押しした後に呉須を入れる。高台脇と高台外面に2重圏線。貫入が入り、やや焼成不良。	
第2-20図 PL.2-13	41	瀬戸・美濃 磁器か 瑠璃釉小碗	埋土 1/2	口底 6.7 (3.2)	高 4.8	—	白//	口縁部外面から高台外面に瑠璃釉。内面と高台内面から高台内に透明釉。高台端部から内面中位無釉。	
第2-20図 PL.2-13	42	瀬戸・美濃 磁器 小碗	埋土 口縁部1部欠	口底 7.0 3.0	高 4.7	—	白//	外面にやや簡略化した花と蝶を描く。釉が部分的に白濁する。	4片接合。 焼成不良。
第2-20図 PL.2-13	43	瀬戸・美濃 磁器 染付小碗	埋土 口縁部から体部 1/4欠	口底 6.5 3.8	高 5.0	—	白//	外面にやや簡略化した花卉と蝶の染付。口縁部内面2重圏線。	12と揃い。
第2-20図 PL.2-13	44	瀬戸・美濃 磁器 染付小碗	埋土 完形	口底 7.0 3.5	高 5.0	—	白//	外面にやや簡略化した花卉と扇状文、蝶の染付。口縁部内面重圏線。	11と揃い。 2片接合。
第2-20図	45	製作地不詳 磁器 染付小碗	埋土 1/4	口底 (9.2) (4.0)	高 5.2	—	白//	口縁部は外反。外面に若松文と不明文様。底部内面に不明文様。高台端部の1部に呉須付着。	
第2-20図 PL.2-13	46	瀬戸・美濃 磁器 染付小碗	埋土 口縁部1/4、 底部1/2	口底 (8.6) 3.4	高 4.3	—	白//	口鏝。内外面に草花文。	
第2-20図 PL.2-13	47	瀬戸・美濃 磁器 染付小碗	埋土 口縁部1/4、 底部1/2	口底 (8.4) 3.2	高 4.4	—	白//	端反の小碗。外面に簡略化した文様。口縁部内縁と底部内面周縁に1重圏線。底部内面不明文様。	2片接合。
第2-20図 PL.2-13	48	瀬戸・美濃 磁器 染付小碗	埋土 口縁部1/4、 底部1/3	口底 (7.0) (3.0)	高 3.4	—	白//	口鏝。外面に植物葉文。底部内面不明文様。	
第2-20図	49	肥前磁器 染付小丸碗	埋土 口縁部から体部 1/4	口底 (7.8) —	高 —	—	白//	外面に格子状の文様。釉に貫入入り、やや焼成不良。	
第2-20図	50	肥前磁器か 染付碗	埋土 口縁部1/2欠	口底 7.0 —	高 —	—	白//	外面に不明文様を染付。内面は無文。	
第2-20図 PL.2-13	51	肥前磁器 染付蓋物か	埋土 体部下位以下 1/2	口底 — 4.9	高 —	—	白//	外面染付。体部下位に焼接。高台内面焼接ぎ時と推定されるガラス質の材料による「ち」の文字。文字の色はほぼ透明。	焼接。
第2-20図 PL.2-13	52	肥前磁器 染付碗	埋土 底部	口底 — 3.4	高 —	—	白//	外面は菊花文間に氷裂文。内面は無文。	
第2-20図 PL.2-13	53	肥前磁器 染付碗	埋土 1/3	口底 (10.2) (4.0)	高 5.6	—	灰白//	外面は雪輪梅樹文。高台内1重圏線内に「大明年製」崩れ銘か。	2片接合。

第2章 七日市陣屋跡・七日市古墳群

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第2-20図 PL.2-13	54	瀬戸・美濃 磁器か 染付碗	埋土 1/2	口 底	(9.0) 3.9	高 4.7	白//	外面と底部内面は印刻に濃みを入れた不明文様。	
第2-20図 PL.2-13	55	瀬戸・美濃 磁器か 染付碗	埋土 口縁部1部欠	口 底	9.0 3.3	高 4.8	白//	外面は岩と笹文。口縁部内面は2重圏線で1箇所は笹文。酸化コバルトか。	8片接合。
第2-20図 PL.2-13	56	瀬戸・美濃 磁器か 染付碗	埋土 口縁部1/4欠	口 底	8.2 3.4	高 4.3	白//	口鏑。外面に文字と不明文様を各2箇所に描き、その間に印刻渦巻き文に濃みを入れた文様を各2段入れる。底部内面※状の染付。	
第2-20図 PL.2-13	57	瀬戸・美濃 磁器か 染付端反碗	埋土 口縁部1部、底 部1/2	口 底	(10.3) (4.0)	高 5.6	白//	外面は唐草状の不明文様。口縁部内面に不明文様帯。底部内面は1重圏線内に不明文様。	3片接合。
第2-20図 PL.2-13	58	瀬戸・美濃 磁器 染付端反碗	埋土 1/3	口 底	(10.9) (3.4)	高 5.5	白//	外面は簡略化した花卉文と笹文。口縁部内面は2重圏線間に曲線を描く。底部内面周縁に1重圏線。	2片接合。
第2-20図 PL.2-13	59	瀬戸・美濃 磁器か 染付端反碗	埋土 口縁部1/4欠	口 底	10.0 3.7	高 5.8	白//	外面に松文を大きく描く。口縁部内面は簡略化した四方禪文か。底部内面は1重圏線内に不明文様。	4片接合。
第2-20図 PL.2-13	60	肥前磁器 染付端反碗 蓋	埋土 口縁部1/3欠	口 摘	10.0 4.2	高 2.9	白//	上面に素描きによる染付。口縁部内面に雷文帯。天井部内面は2重圏線内に線描きによる三友。	
第2-20図 PL.2-13	61	製作地不詳 磁器 染付端反碗	埋土 1/4	口 底	(12.0) —	高 —	灰白//	口縁部内外面は幅広の圏線内に白抜きで如意頭文。体部外面は海浜風景を描く。底部内面周縁は2重圏線。	3片接合。
第2-21図 PL.2-13	62	大堀相馬陶 器 碗か	埋土 底部	口 底	— 4.6	高 —	灰//	内面に生地と異なる粘土で製作した馬形を貼り付け、たてがみと尾、輪郭に鉄絵具を入れる。内面から高台外面中位に灰釉。高台内に瓢箪形内に「相馬」印。器部の生地には黒色粒多く含むが、馬形部の生地には含まれない。	
第2-21図 PL.2-13	63	製作地不詳 磁器 染付碗	埋土 口縁部3/4欠	口 底	(9.1) 3.5	高 5.0	白//	外面に「福」字を大きく描く。4箇所残存するが、全体では5箇所か。高台はやや幅広い。	3片接合。
第2-21図 PL.2-13	64	肥前陶器 呉器手碗	埋土 底部	口 底	— 4.7	高 —	淡黄//	高台内の扱りは浅い。高台端部を除き透明釉。細かい貫入入る。	
第2-21図 PL.2-13	65	瀬戸・美濃 陶器 碗	埋土 体部下位以下	口 底	— 5.2	高 —	淡黄//	内面から高台脇に餡釉。高台脇以下は高台端部を除き鉄化粧。	
第2-21図 PL.2-13	66	京・信楽系 陶器 碗	埋土 底部	口 底	— 3.0	高 —	淡黄//	削り出し高台。内面から高台脇に透明釉。細かい貫入入る。	
第2-21図 PL.2-13	67	製作地不詳 磁器 上絵碗	埋土 完形	口 底	9.1 3.0	高 4.5	白//	赤の上絵具で文字と樹木、圏線を描く。中央に大きく描いた花は青の上絵具で、部分的に黄緑の上絵具を入れる。口縁部内面に2重圏線。底部内面の不明文様も赤の上絵具。	5片接合。
第2-21図 PL.2-13	68	瀬戸・美濃 陶器 腰鏑碗	埋土 口縁部3/4欠	口 底	— 4.0	高 7.0	灰白//	口径は大きい。高台径は小さい。口縁部外面に1条の凹線。外面中位を窪ませる。窪みは2箇所残るが、全体では4箇所か。高台脇に螺旋状の沈線巡る。内面から口縁部外面に灰釉。外面中位以下に餡釉に近い鉄釉。高台端部と高台内は無釉。高台内面下半は鉄釉。	5片接合。
第2-21図 PL.2-13	69	瀬戸・美濃 磁器 染付小皿	埋土 口縁部1部欠	口 底	7.8 3.7	高 2.5	白//	方形の小皿。体部内面に紗綾文、底部内面に花文を型押しで浮き出させ、呉須を入れる。外面は無文。	22図70と揃い。4片接合。
第2-21図 PL.2-13	70	瀬戸・美濃 磁器 染付小皿	埋土 口縁部1部欠	口 底	7.8 3.8	高 2.4	白//	方形の小皿。体部内面に紗綾文、底部内面に花文を型押しで浮き出させ、呉須を入れる。外面は無文。	22図69と揃い。
第2-21図 PL.2-14	71	肥前磁器 染付皿	埋土 1/2	口 底	12.6 7.3	高 3.4	灰白//	口縁部から体部内面に扇文と唐草文。底部内面は2重圏線内にコンニャク印判による五弁花。体部外面は唐草文。高台内は1重圏線内に「大明年製」崩れ銘。	4片接合。
第2-21図 PL.2-14	72	肥前磁器 染付皿	埋土 1/4	口 底	(13.8) (7.0)	高 3.8	灰白//	内面に草植物文と唐草文。底部内面にコンニャク印判による五弁花。外面は簡略化した唐草文。高台内は1重圏線内に渦福字文か。	2片接合。
第2-21図 PL.2-14	73	肥前磁器 染付皿	埋土 1/2	口 底	10.7 5.8	高 2.8	灰白//	口縁部から体部内面に扇文と花卉文。底部内面は2重圏線内にコンニャク印判による五弁花。体部外面は唐草文。高台内は1重圏線内に不明銘。	2片接合。
第2-21図 PL.2-14	74	肥前磁器 染付皿	埋土 口縁部3/4欠	口 底	(12.8) 7.7	高 4.6	白//	口縁部輪花に作る。口縁部から体部内面は簡略化したみじん唐草文。底部内面は三友。口縁部から体部内面は唐草文。蛇の目凹型高台。高台内に「成化年製」銘。	3片接合。
第2-21図 PL.2-14	75	肥前磁器 染付皿	埋土 1/6	口 底	(15.3) (9.3)	高 2.7	白//	器壁はやや薄い。内面の1部に染付残る。外面は口縁部に1重、高台外面に2重圏線。高台内は1重圏線内に不明銘。	
第2-21図 PL.2-14	76	肥前陶器 京焼風陶器 皿	埋土 底部1/2	口 底	— 7.0	高 —	淡黄に近い灰白//	底部内面に鉄絵具による山水文。内面から体部外面下位に透明釉。貫入入る。釉に白濁部多く、文様不鮮明。高台内の扱りはやや深い。	3片接合。
第2-21図 PL.2-14	77	京・信楽系 陶器 皿	埋土 口縁部欠	口 底	— 7.0	高 —	白//	無文。内面から体部外面中位に透明釉。釉に貫入入る。高台はやや幅広く、削り出し。外面の回転篋削りは丁寧。	3片接合。

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第2-21図	78	製作地不詳 軟質施釉陶器 皿か	埋土 1/4	口底 —	(10.0) —	高 —	—	にぶい黄橙//	轆轤整形。内外面薄緑色釉を施釉。釉はほとんど剥がれる。	
第2-22図 PL.2-14	79	製作地不詳 陶器 皿	埋土 1/3欠	口底 8.0 1.8	高 1.2	—	—	灰赤//	型押し成形で口縁部内面を花卉状に作り、底部内面に花と花瓶を浮き出させる。口縁端部のみ透明釉。	2片接合。
第2-22図 PL.2-14	80	製作地不詳 陶器 灯火皿	埋土 口縁部1/4欠	口底 8.5 3.6	高 106	—	—	淡黄//	内面から口縁部外面に透明釉。口縁端部に油煙付着。体部外面中位以下は回転ヘラケズリ。	3片接合。
第2-22図 PL.2-14	81	瀬戸・美濃 陶器 灯火受皿	埋土 口縁部1部欠	口底 9.6 4.2	高 2.2	—	—	淡黄//	受け部に「コ」字状の挟り1箇所。錆釉施釉後に体部外面以下を拭う。外面は口縁部以下を回転篋削り。	
第2-22図	82	瀬戸・美濃 陶器 火入か	埋土 体部下位以下 1/3	口底 — (7.5)	高 —	—	—	灰白//	底部回転篋削り後、高台を貼付。高台残存部2カ所を輪花状に内側に折り曲げる。体部外面に灰釉。	2片接合。
第2-22図 PL.2-14	83	瀬戸・美濃 陶器 染付香炉	埋土 口縁部から体部 1/4	口底 — (9.0)	高 —	—	—	淡黄//	体部外面の染付は山水文か。口縁部内面から外面に透明釉。外面に1箇所花状の貼付文。粗い貫入る。	
第2-22図 PL.2-14	84	肥前磁器 染付鉢	埋土 1部欠	口底 15.4 8.6	高 5.1	—	—	白//	口縁部輪花に作る。口縁部から体部内面は窓内に海浜風景と草文。底部内面は山水文。体部に焼接。蛇の目凹型高台。高台内に透明なガラス質物で「X」の記号。焼接時の目印であろう。	11片接合。 焼継。
第2-22図 PL.2-14	85	肥前磁器か 染付鉢	埋土 1/4	口底 (12.6) (7.4)	高 (5.5)	—	—	白//	外面は山水文。口縁端部から内面はみじん唐草内に窓絵。酸化コバルト。	
第2-22図 PL.2-14	86	肥前磁器 赤絵鉢	埋土 小片	口底 (15.3) (11.0)	高 6.7	—	—	白//	内面は赤と緑の上絵具による施文。口縁部外面は赤の上絵。外面口縁部以下は染付。蛇の目凹型高台。	2片接合。
第2-22図 PL.2-14	87	瀬戸・美濃 陶器 徳利	埋土 口縁部、体部上 位1/2	口底 3.1 —	高 —	—	—	浅黄//	焼成不良。頸部内面から外面施釉。釉は白濁し釉種不明であるが、灰釉の可能性が高い。	6片接合。23 図89と同一個 体か。
第2-22図	88	瀬戸・美濃 陶器 徳利	埋土 底部1/2	口底 — 8.2	高 —	—	—	淡黄//	内面から体部外面下位付近施釉。底部内面目痕2カ所残る。	
第2-22図 PL.2-14	89	瀬戸・美濃 陶器 徳利	埋土 体部下位以下	口底 — 7.5	高 —	—	—	浅黄//	焼成不良。外面施釉後、体部下位以下を拭う。釉は白濁し釉種不明であるが、灰釉の可能性が高い。	3片接合。23 図90と同一個 体か。
第2-22図	90	瀬戸・美濃 陶器 徳利	埋土 底部1/2	口底 — 11.4	高 —	—	—	淡黄//	外面施釉施釉後、体部下位以下を拭う。底部中央付近を外面側から打ち欠いて穿孔した可能性高い。	4片接合。 転用か。
第2-22図 PL.2-14	91	瀬戸・美濃 磁器 染付燗徳利	埋土 口縁部欠	口底 — 5.3	高 —	—	—	白//	頸部外面に雷文帯。体部外面に松鶴文。体部外面下端は面取り。底部外面は無釉。内面は施釉。	19片接合。
第2-22図	92	瀬戸・美濃 磁器か 燗徳利	埋土 体部下位以下 1/2	口底 — 5.3	高 —	—	—	白//	外面に縦位直線文。酸化コバルトか。	5片接合。
第2-22図	93	製作地不詳 陶器 燗徳利	埋土 口縁部から肩部	口底 3.0 —	高 —	—	—	にぶい黄橙//	頸部内面から体部外面灰釉施釉後、口縁部から頸部内外面鉄釉。	2片接合。
第2-22図 PL.2-14	94	製作地不詳 陶器 燗徳利	埋土 口縁部から肩部 1/2欠	口底 (2.8) 5.3	高 17.7	—	—	にぶい黄橙//	口縁部内面から外面上位に灰釉、外面下位に薄く鉄釉を斜めに掛け分ける。体部外面下端面取り。底部外面回転篋削り。	8片接合。
第2-22図 PL.2-14	95	製作地不詳 磁器 瓶	埋土 完形	口底 1.5 4.5	高 4.3	—	—	白//	肩部外面にスタンプで文様を浮き出させ、文様部分に呉須を入れる。いわゆる油徳利。	10片接合。
第2-22図 PL.2-15	96	肥前磁器 染付瓶	埋土 体部下位以下 1/2	口底 — 5.0	高 —	—	—	白//	体部外面に唐草文か。内面は無釉。	2片接合。
第2-22図 PL.2-15	97	瀬戸・美濃 陶器 澁瓶	埋土 体部1/2	口底 — —	高 —	—	—	灰黄//	器形は須恵器の平瓶に近い。上面に幅広の取っ手を貼付。口縁部は体部に開けた穴に挿入して接合。口縁部内面から外面に施釉、上面部分的に薬灰釉かかる。体部外面下端以下は釉を拭う。内面は施釉を薄く施釉。	6片接合。
第2-23図	98	瀬戸・美濃 陶器 すり鉢	埋土 口縁部片	口底 — —	高 —	—	—	浅黄//	内面に櫛目。口縁部は長く、外反する。内外面錆釉。	2片接合。
第2-23図	99	瀬戸・美濃 陶器 すり鉢	埋土 口縁部片	口底 — —	高 —	—	—	浅黄//	内面に11本一単位の櫛目。口縁部外方に折り返す。内外面錆釉。	3片接合。
第2-23図 PL.2-15	100	瀬戸・美濃 陶器 すり鉢	埋土 体部以下1/3	口底 — 12.0	高 —	—	—	灰黄//	26本一単位のすり目を左回り方向に入れる。内外面錆釉。内面使用により摩滅。	3片接合。
第2-23図	101	益子・笠間 陶器か すり鉢	埋土 口縁部片	口底 — —	高 —	—	—	にぶい黄橙//	内面12本一単位の櫛目を密に入れる。内外面柿釉で口縁部内面以下の釉は薄い。片口を作る。	

第2章 七日市陣屋跡・七日市古墳群

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口	高	厚			
第2-23図 PL.2-15	102	製作地不詳 磁器 レンゲ	埋土 先端部欠	口 底	— —	高 5.5	白//	つぼ内面と把手上面に花卉文。接地部分は無釉。	
第2-23図 PL.2-15	103	製作地不詳 磁器 赤絵急須蓋	埋土 1部欠	口 摘	6.4 —	高 —	灰白//	つまみと口縁部1部欠損。身に接する部分は無釉。上面に赤で文様を描き、金色で線描きを添える。	2片接合。
第2-23図 PL.2-15	104	製作地不詳 陶器 蓋	埋土 口縁部1/3欠	口 底	8.8 4.9	高 3.6	明赤褐//	上面緑色釉施釉するが白濁部分多い。下面無釉で下部面右回転糸切り無調整。	
第2-23図 PL.2-15	105	信楽陶器 縁系鍋か	埋土 1部残存	口 底	— —	高 —	淡黄//	裁頭円錐形の頭部平坦面に外方から切り込みを入れる。体部外面に貼付部分と考えられる。貼付部で剥がれる。外面のみ透明釉。この部分の機能は不明。	29図1と同一個体の可能性あり。
第2-23図	106	常滑陶器 甕	埋土 口縁部片	口 底	— —	高 —	明赤褐//	口縁部外方水平に開き、内側は小さく突き出る。内面白く物付着。	2片接合。
第2-23図	107	常滑陶器 甕か	埋土 体部上位片	口 底	— —	高 —	黄灰//	外面に自然釉流れる。内面は横位ナデ、紐作り痕残る。	中世。
第2-23図 PL.2-15	108	製作地不詳 ミニチュア すり鉢	埋土 3/4	口 底	6.5 3.0	高 2.6	暗赤褐//	轆轤整形。内面に5本一単位の櫛目。内面から体部外面付近錆蝕。底部右回転糸切り無調整。焼き締まりは弱くやや軟質。	5片接合。
第2-23図 PL.2-15	109	製作地不詳 軟質施釉陶器 ミニチュア すり鉢	埋土 口縁部から体部 1/2	口 底	(6.5) —	高 —	暗赤褐//	轆轤整形。内面に5本一単位の櫛目。内面から体部外面付近錆蝕。焼き締まりは弱くやや軟質。	2片接合。
第2-23図	110	在地系土器 皿	埋土 口縁部1/4	口 底	(8.5) —	高 —	橙//	轆轤調整。	中世か。
第2-23図	111	在地系土器 皿	埋土 底部1/4	口 底	— (6.0)	高 —	橙//	底部右回転糸切り無調整。	
第2-23図	112	在地系土器 皿	埋土 底部	口 底	— 4.7	高 —	橙//	底部内面指頭圧痕。底部外面板状圧痕。胎土中に微細な片岩含む。底部外面は回転糸切りであるが、回転方向不明。	中世。
第2-23図 PL.2-15	113	製作地不詳 陶器 ミニチュア 蓋	埋土 完形	口 摘	2.4 0.9	高 1.2	浅黄//	無釉。型作り。天井部外面につまみ貼付。	
第2-23図 PL.2-15	114	土器 人形	埋土 1/2	高 幅	— —	厚 —	黄橙//	虚無僧。尺八を吹く姿。前後のパーツを貼り合わせる。背中側と下部欠損。	3片接合。
第2-23図 PL.2-15	115	土器 人形	埋土 完形	高 幅	5.0 5.4	厚 3.3	黄橙//	狐。体部と左腕付近に赤色残る。前後のパーツを貼り合わせる。	
第2-23図	116	在地系土器 片口鉢か	埋土 口縁部片	口 底	— —	高 —	灰黄//	胎土中に微細な片岩？含む。口縁部は内側に折り返し肥厚。口縁部内面は摩滅して平滑。	中世。
第2-23図	117	在地系土器 片口鉢	埋土 体部下端片	口 底	— —	高 —	にぶい黄橙//	断面は灰黄褐色。内面2カ所に粗い櫛目。底部内面下端は使用により摩滅。底部外面砂付着。	中世。
第2-24図 PL.2-15	118	在地系土器 片口鉢	埋土 底部	口 底	— 9.0	高 —	黄灰//	断面は灰黄色。底部外面撫で。底部内面周縁と体部内面下位は使用により輪状に器表摩滅。底部外面周縁器表摩滅。	中世。
第2-24図 PL.2-15	119	土器 取鍋か埴塀	埋土 1/4	口 底	(8.8) —	高 2.4	暗褐//	手捏ね。高温で部分的に胎土発泡。内面から口縁部外面は黒く光沢を有しガラス状を呈する。	
第2-24図	120	在地系土器 内耳鍋か	埋土 口縁部片	口 底	— —	高 —	暗灰黄//	断面はにぶい黄色。還元炎焼成。口縁部小さく外反し、上面は沈線状に窪む。	中世か。
第2-24図	121	在地系土器 内耳鍋	埋土 口縁部片	口 底	— —	高 —	明褐//	口縁部小さく外反し、上面は平坦。内面に内耳部分の窪みあり。	中世。
第2-24図	122	在地系土器 内耳鍋	埋土 口縁部片	口 底	— —	高 —	橙//	外面器表は暗赤褐色。胎土中に微細な片岩？含む。内耳部分の窪みあり。	中世。
第2-24図	123	在地系土器 内耳鍋	埋土 口縁部下位から 体部上位片	口 底	— —	高 —	灰黄褐//	断面にぶい褐色。内面口縁部下の段差あり。	中世。
第2-24図	124	在地系土器 内耳鍋	埋土 体部上位片	口 底	— —	高 —	にぶい褐//	胎土中に微細な片岩？含む。内面に口縁部下の段差。段差部分に内耳部分の窪みあり。	中世。
第2-24図	125	在地系土器 内耳鍋	埋土 体部片	口 底	— —	高 —	黄灰//	断面はにぶい橙色。胎土中に微細な片岩？含む。外面煤付着。	中世。
第2-24図	126	在地系土器 内耳鍋	埋土 体部片	口 底	— —	高 —	暗灰黄//	断面は灰黄色。胎土中に微細な片岩？含む。外面煤付着。	中世。
第2-24図	127	在地系土器 内耳鍋	埋土 体部上位片	口 底	— —	高 —	灰黄褐//	器表は灰黄褐色。胎土中に微細な片岩？含む。内面に口縁部下の段差。外面煤付着。	中世。
第2-24図	128	在地系土器 内耳鍋	埋土 体部下位から底 部片	口 底	— —	高 —	橙//	胎土中に微細な片岩？含む。体部外面下端撫で。体部外面器表のみ赤黒色。丸底。	中世。
第2-24図	129	在地系土器 内耳鍋	埋土 体部下端片	口 底	— —	高 —	暗褐//	断面はにぶい褐色。胎土中に微細な片岩？含む。底部外面砂付着。体部外面下端撫で。平底か。	中世。
第2-24図	130	在地系土器 内耳鍋	埋土 体部下端片	口 底	— —	高 —	褐灰//	断面はにぶい褐色。胎土中に片岩？含む。体部外面下端窪削り。丸底の可能性もある。	中世。
第2-24図	131	在地系土器 内耳鍋	埋土 体部下端片	口 底	— —	高 —	にぶい褐//	断面は橙色。胎土中に微細な片岩？含む。平底の可能性高い。体部外面下端窪削り。	中世。
第2-24図	132	在地系土器 内耳鍋	埋土 口縁部片	口 底	— —	高 —	にぶい黄橙//	胎土中に微細な片岩？含む。内耳欠損。口縁部上面平坦。	中世。

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第2-24図 PL.2-15	133	在地系土器 焙烙	埋土 破片	口 底	— —	高 —	— —	橙//	胎土中に微細な片岩？含む。口縁端部に逆U字状取っ手貼付。取っ手欠損。体部外面下端窪削り。丸底。
第2-24図 PL.2-15	134	在地系土器 羽口	埋土 破片	外 内	(6.0) (3.4)	長 —	— —	黒//	内外面成形時の皺状痕明瞭。断面中央黒色、器表付近灰白色、器表黒色。一方はすべて灰白色を呈する。
第2-24図	135	在地系土器 炬形	埋土 底部から体部片	口 底	— 23.8	高 —	— —	黒//	断面はにぶい橙色。炬形土器。口縁部欠損。粘土板を貼り付けて形を作る。焼き上がり時に燻す。
第2-25図 PL.2-15	136	在地系土器 風口	埋土 下面1/2欠	長 幅	19.6 10.8	高 —	5.4 —	橙//	下面の外面は砂底状。粘土板を貼り付けて角柱状とし、風取り入れ口内面を篋で調整。奥側上面に焼成前の穴を開ける。
第2-25図 PL.2-15	137	磨石	埋土 完形	長 幅	7.0 6.6	厚 —	5.0 344.6	粗粒輝石安山岩//	表裏面の中央付近に滑らかな面が認められる。
第2-25図	138	茶臼(下)	埋土 1/2	長 幅	(24.2) (12.6)	厚 —	(10.3) 3269.8	粗粒輝石安山岩//	すり合わせ面の中央付近は非常に滑らかであり縁辺部に挽き目の痕跡が認められる。軸孔は中央付近に段差が認められ両面穿孔と考えられる。
第2-25図	139	石臼(上)	埋土 1/2	径 幅	33.0 —	厚 —	(11.4) 4917.9	牛状砂岩//	底面のすり合わせ面には挽き目の痕跡がわずかに認められる。側面に隅丸矩形の挽き手跡が一箇所認められる。下面のすり合わせ面には挽き手の痕跡が露出した状態で認められる。すり合わせ面が摩滅したことにより挽き手跡が露出したため挽き手跡をつくり直したと考えられる。
第2-25図 PL.2-15	140	板碑	埋土 不明	長 幅	(17.9) (17.6)	厚 —	3.0 1547.7	黒色片岩//	表裏面はほぼ平坦であり梵字等は認められない。
第2-25図 PL.2-15	141	板碑	埋土 1/3	長 幅	(29.5) (20.1)	厚 —	(3.3) 2588.5	緑色片岩//	表面に梵字(キリーク)と連座の一部が認められる。
第2-25図 PL.2-15	142	硯	埋土 4/5	長 幅	13.8 5.9	厚 —	(1.7) 246.7	頁岩//	全体的に丁寧に研磨形成される。左右両側面及び上下小口面には表裏面に平行する細かい線条痕が累積しており素材の切断痕の可能性ある。

第2-24表 第2地点1号墓遺構遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第2-26図 PL.2-16	1	銭貨 太平通寶	埋土 完形	縦 横	2.437 2.457	厚 —	0.139 2.5	//	面の字は摩滅しているが、字、輪、郭の彫が深く、それぞれ明瞭。背は彫が確認できない。
第2-26図 PL.2-16	2	銭貨 元豊通寶	埋土 完形	縦 横	2.486 2.469	厚 —	0.135 3.1	//	面、背ともに彫は深く、字、輪、郭は明瞭。背の上下にやや盛り上がりが見られる。月文の可能性もある。
第2-26図 PL.2-16	3	銭貨 開元通寶	埋土 完形	縦 横	2.330 2.388	厚 —	0.120 2.6	//	面の彫が深く輪、郭は明瞭。字は一部摩滅により不明瞭。面の左下に字に伴わない点が見られる。背は彫が浅く、輪、郭が一部不明瞭。
第2-26図 PL.2-16	4	銭貨 天聖元寶	埋土 完形	縦 横	2.481 2.486	厚 —	0.127 2.7	//	面の彫は深く、字、輪、郭は明瞭。背は彫はやや浅いが、輪、郭は明瞭。
第2-26図 PL.2-16	5	銭貨 祥符元寶	埋土 ほぼ完形	縦 横	2.461 2.484	厚 —	0.143 2.7	//	輪の一部が欠損している。面、背ともに彫が深く、字、輪、郭は明瞭。一部摩滅により字が見えづらい。
第2-26図 PL.2-16	6	銭貨 皇宋通寶	埋土 完形	縦 横	2.463 2.481	厚 —	0.140 2.5	//	面の彫は深く、輪、郭は明瞭。字は摩滅が見られ、全体もやや劣化が見られる。背は彫は浅いが全体に劣化が見られる。

第2-25表 第2地点2号墓遺構遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第2-26図 PL.2-16	7	銭貨 熙寧元寶か	埋土 完形	縦 横	2.406 2.411	厚 —	0.135 3.0	//	面の彫が深く、字、輪、郭は明瞭。一部の字が摩滅により判別が困難。背は彫が浅く、輪、郭が不明瞭。

第2-26表 第2地点3号墓遺構遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第2-26図 PL.2-16	8	銭貨 太平通寶	埋土 ほぼ完形	縦 横	2.486 2.583	厚 —	0.158 2.5	//	4片に破損。面の彫は深く輪、郭は明瞭。字は表面が摩滅してしまっている。背はやや彫が見られ、輪、郭は不明瞭。

第2-27表 第2地点1号柵遺構遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第2-27図 PL.2-16	1	砥石	埋土 完形	長 幅	— —	厚 —	62.2	砥沢石//	表裏面、左右両側面、上下小口面は滑らかでありいずれも砥面と判断できる。

第2-28表 第2地点1号井戸遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第2-28図 PL.2-16	1	信楽陶器 繚糸鍋か	埋土 体部から底部片	口 底	— —	高 —	— —	浅黄//	体部は開き、体部内面下位に蒸気管を貼り付ける。蒸気孔を含む内面に白濁した釉、外面に透明釉。底部外面無釉。体部外面の一部に盛り上がりが見られる。

第2章 七日市陣屋跡・七日市古墳群

第2-29表 第2地点2号井戸遺構遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	厚			
第2-28図 PL.2-16	2	常滑陶器 甕	埋土 肩部から体部上 位片	口底 — —	高 —	—	黒褐//	外面に花文の叩き1カ所。肩部外面に自然釉かかる。内面の器表は暗赤褐色で紐作り痕残る。	中世。

第2-30表 第2地点1号溝遺構遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	厚			
第2-29図 PL.2-16	1	製作地不詳 磁器 小杯	埋土 ほぼ完形	口底 6.5 2.7	高 4.3		白//	外面にクロム青磁、内面と高台内透明釉。外面に釉下彩で梅樹上に兜を描く。梅花は白とピンク、雄しべは黒色、枝は緑色。高台内も釉下彩の黒色で1重方面内に「重」銘。	
第2-29図 PL.2-16	2	製作地不詳 陶器 灯火受皿	埋土 口縁一部欠	口底 9.4 3.7	高 1.8		浅黄//	外面は口縁部以下回転斲削り。受け部1カ所に「コ」字状の切り込み。内面から口縁部外面に灰釉。	
第2-29図 PL.2-16	3	製作地不詳 陶器 灯火皿	埋土 口縁部から体部 1/2欠	口底 (11.2) 3.7	高 2.7		浅黄//	外面中位以下は回転斲削り。内面から口縁端部外面に透明釉。口縁部外面から体部外面に透明釉を化粧風に薄くかける。底部内面に目痕4箇所。口縁端部に灯芯痕、口縁端部外面に油煙付着。	3片接合。
第2-29図 PL.2-16	4	製作地不詳 陶器 灯火受台	埋土 口縁一部欠	口底 8.2 5.6	高 5.8		淡黄//	受け部1カ所に「U」字状の切り込み。脚端部上下を面取り。面取り部と脚部下面は回転斲削り。脚柱部内面から脚端部付近に灰釉薄くかける。	
第2-29図 PL.2-16	5	製作地不詳 陶器 瓶か	埋土 体部下位から底 部	口底 — 6.0	高 —		褐灰//	体部外面から底部外面は回転斲削り。体部外面に白土筒描き。体部外面から高台脇に胎釉、内面は釉を薄く施し光沢のある錆色に発色。露胎部器表にぶい橙色。	2片接合。
第2-29図	6	在地系土器 内耳鍋	埋土 口縁部片	口底 — —	高 —		褐灰//	還元炎焼成。胎土中に微細な片岩？含む。口縁端部小さく外反し、上面は平坦。口縁端部外面は丸みを帯び、端部下位の凹線状窪みもみも浅い。	16世紀。
第2-29図	7	在地系土器 内耳鍋	埋土 口縁部片	口底 — —	高 —		褐灰//	還元炎焼成。胎土中に微細な片岩？含む。口縁端部小さく外反し、上面は平坦。口縁端部外面は尖り気味で端部下位は凹線状に窪む。	16世紀。
第2-29図 PL.2-16	8	鉄製品 釘	埋土 破片	縦横 3.1 0.7	厚重 0.7		//	釘体部。2破片を接合。内部が空洞化し、錆ぶくれが見られる。	

第2-31表 第2地点2号耕作溝遺構遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	厚			
第2-30図 PL.2-16	1	在地系土器 皿	埋土 口縁部一部欠	口底 11.5 5.7	高 3.0		にぶい橙//	胎土中に微細な片岩？多く含む。体部下位内面から底部内面周縁を凹線状に窪ませ、その部分の外面は膨らみを持つ。その上位は回転横撫により外面を窪ませ、口縁部は外反。底部左回転糸切り無調整。	16世紀。

第2-32表 第2地点遺構外遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	厚			
第2-33図 PL.2-16	1	縄文土器 深鉢	胴部破片				多量の円磨度の進んだ結晶片岩や中量の珪質乳白色岩片の礫・粗砂と少量の赤色岩片粗・細砂を含むやや粗雑な胎土。//	LR縄文を横位・多段に施文。内面被熱風化・剥離。	諸磯b式
第2-33図 PL.2-16	2	埴輪 盾形か	破片				細砂から礫/良好/明赤褐	断面から器表付近は灰色。全面はへらで鋸歯状文を施す。図に於ける上部には段差が認められ、下部右側には弧状の接合部か貼付部が認められる。裏面の弧状を呈する割れ口は、円筒部との接合部の可能性がある。	
第2-33図 PL.2-16	3	埴輪 円筒	突帯部片				細砂から礫/良好/橙	幅広で低い突帯を貼り付ける。上部に透かし穴の下部が認められる。内面は斜位のナデ。	
第2-33図 PL.2-16	4	埴輪 円筒	突帯部片				細砂から礫/良好/灰黄褐	外面は縦位ハケ目の後、突帯貼付。内面は斜位ハケ目。	
第2-33図 PL.2-16	5	埴輪 円筒	破片				細砂から礫/良好/明黄褐	断面は灰褐色。外面は縦位ハケ目。内面は斜位ハケ目の後、縦位ナデ。	
第2-33図 PL.2-16	6	埴輪 円筒	破片				細砂から礫/良好/明赤褐	断面は灰褐色。外面は縦位ハケ目。内面は縦位ナデ。	
第2-33図 PL.2-16	7	埴輪 円筒	破片				細砂から礫/良好/橙	断面は灰褐色。外面は縦位ハケ目。内面は斜位のナデ。	
第2-33図 PL.2-17	8	埴輪 円筒	基部片				細砂から礫/良好/橙	外面は縦位ハケ目。内面は斜位ハケ目。	
第2-33図 PL.2-17	9	埴輪 円筒	基部片				細砂から礫/良好/橙	外面は縦位ハケ目。内面は縦位のナデ。	
第2-33図 PL.2-17	10	須恵器 壺	頸部1/3				礫微量/還元炎/灰	外面にカキ目。外面の器表は黒色で、火前部分は灰色となる。	

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第2-33図 PL.2-17	11	土製品 不詳	破片				細砂から粗砂/良好/明赤褐	上下不明であるが、端部を脚部のように測図した。内面の粘土充填や接合痕から考えてミニチュアではない。外面はヘラナデ。		
第2-34図 PL.2-17	12	瀬戸・美濃 磁器か 湯飲み	1/6	口底	(6.0) —	高	—	白//	口縁部下絵による緑色2重圏線。体部外面に青色の上絵具により「中村」か「中林」の文字。内外面透明釉。	給食用食器。
第2-34図 PL.2-17	13	瀬戸・美濃 磁器か 小杯	口縁部1/4、 底部1/2	口底	(6.2) 3.2	高	4.1	白//	内外透明釉。外面口縁部下に金色の上絵具で「口は口」と描く。「口」は判読不能。	
第2-34図 PL.2-17	14	龍泉窯系青 磁碗	体部片	口底	—	高	—	灰//	鎬蓮弁文碗。内外面青磁釉。	13世紀。
第2-34図 PL.2-17	15	肥前陶器 碗	底部	口底	—	高	—	にぶい赤褐//	内外面に白土刷毛塗り後に高台端部を除き施釉。底部内面は蛇の目釉剥ぎ。	
第2-34図 PL.2-17	16	瀬戸・美濃 磁器 染付丸碗	口縁部1/4、 底部1/2	口底	10.3 3.6	高	4.3	白//	口縁部部に呉須を塗る。外面に簡略化した菊花文。高台内の挟り深く、境に1重圏線。高台内不明銘。	5片接合。
第2-34図 PL.2-17	17	肥前磁器 染付小皿	1/2	口底	(8.2) 4.9	高	1.8	白//	口鏝。口縁部は不明瞭であるが輪花状に作る。内面に山水文。外面は無文。	
第2-34図 PL.2-17	18	肥前磁器 染付皿	体部1部、高台 完	口底	—	高	—	白//	口縁部内面に染付。内面から高台外面付近に透明釉。底部内面は蛇の目釉剥ぎ。	
第2-34図 PL.2-17	19	製作地不詳 磁器 染付皿	口縁部1部、 底部1/2	口底	(10.3) 4.6	高	2.4	灰白//	口縁部は外反。内外面に染付。底部内面に「卍」銘。高台端部のみ無釉。	
第2-34図 PL.2-17	20	瀬戸磁器 染付井	口縁部1/4、 底部1/2	口底	(16.2) 6.0	高	8.0	白//	機械轆轤成形。口縁部外面に緑色の下絵具による2重圏線。高台内に浅黄色による下絵具で「瀬」と番号。高台端部のみ無釉。	給食用食器。
第2-34図 PL.2-17	21	製作地不詳 磁器 水滴	完形	長辺短	6.0 4.5	高	1.8	白//	底部内外面布圧痕。上面は周縁に文様帯、中央穴両脇に「福」、「壽」を型押しした後、呉須を入れる。外面は側面の1カ所を除き透明釉。内面は無釉。側面無釉部に墨付着。	3片接合。
第2-34図 PL.2-17	22	製作地不詳 陶器 灯火受台	脚1/4欠	口底	8.2 5.6	高	5.7	灰白//	受け部1カ所に「U」字状の切り込み。脚端部上下を面取り。面取り部と脚部下面は回転鋳削り。脚柱部内面上部から脚端部付近に透明釉。	
第2-34図 PL.2-17	23	製作地不詳 磁器 染付瓶	口縁部1/2欠	口底	(1.5) 4.2	高	4.2	白//	体部は6角形を呈する。体部上面に染付。高台端部のみ無釉。	
第2-34図 PL.2-17	24	土製品 ミニチュア 不詳	完形	径厚	2.4 1.0			橙//	片面器表は型作りで突起と沈線を作成。もう一方の面は指押さえ痕があり、中央に円形粘土を貼り付け。両面に白色物付着。	
第2-34図 PL.2-17	25	土製品 ミニチュア 亀	一部欠	長幅	— 1.9	厚	0.7	橙//	型作りで背中側を作成。腹側は指押さえ痕。左前足と尾欠損。	
第2-34図 PL.2-17	26	土製品 ミニチュア 皿	1/2	口底	2.0 1.1	高	0.6	橙//	外型による押し型成形。外面は菊花状をなす。	
第2-34図 PL.2-17	27	土製品 菅原道真か	完形	高幅	4.4 3.5	厚	1.6	橙//	前面を型で作出し、背面を粘土板で塞ぎ側面で撫でつける。右手で笏を持つ。	
第2-34図 PL.2-17	28	土製品 犬か猫	1/3	高幅	—	厚	—	橙//	表裏を型で作り中央で合わせる。頭部欠損で表裏は合わせ目で剥かれる。尾など部分的に毛の表現あり。	
第2-34図 PL.2-17	29	在地系土器 皿	口縁部1/8、 底部1/4	口底	(9.9) (7.0)	高	2.1	橙//	胎土中に微細な片岩？多く含む。内面底部境は強い横撫により凹線状に窪む。体部中位は外反。底部左回転糸切り無調整。	16世紀。
第2-34図	30	在地系土器 片口鉢	体部下位片	口底	—	高	—	にぶい橙//	胎土中に微細な片岩？含む。内面にすり目。外面は横位鋳削り。	中世。
第2-34図	31	在地系土器 片口鉢	体部から底部片	口底	—	高	—	にぶい褐//	体部外面下端鋳削り。使用により内面器表摩滅。	中世。
第2-34図	32	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口底	—	高	—	にぶい赤褐//	胎土中に微細な片岩？多く含む。口縁部は斜め上方に小さく外反。口縁部上面は内傾し、中央がやや窪む。内面の耳欠損。外面器表煤付着。	中世。
第2-34図	33	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口底	—	高	—	にぶい褐//	胎土中に微細な片岩？多く含む。酸化炎焼成。口縁部やや内湾し、端部は内傾。端部上面中央は僅かに窪む。口縁部下端内面に段差はない。	16世紀か。
第2-34図	34	在地系土器 内耳鍋	口縁部から体部 片	口底	—	高	—	橙、灰黄褐//	口縁部やや長く、内面下部に段差。口縁部小さく外反し、端部上面は平坦。端部外面は丸みを持つ。外面器表摩滅。	16世紀。
第2-34図	35	在地系土器 内耳鍋	埋土 体部上位片	口底	—	高	—	橙//	外面の器表は黒褐色。器壁厚い。口縁部内面はごく緩い段差をもち外反。	中世。
第2-35図	36	在地系土器 内耳鍋	口縁部片	口底	—	高	—	にぶい褐//	胎土中に微細な片岩？含む。酸化炎焼成。器壁やや薄い。内面に耳貼り付け。口縁部外面は小さく外反。	15・16世紀。
第2-35図	37	在地系土器 内耳鍋	体部上位片	口底	—	高	—	にぶい赤褐//	胎土中に微細な片岩？多く含む。器壁やや薄い。	中世。
第2-35図	38	在地系土器 内耳鍋	体部上位片	口底	—	高	—	黄灰//	胎土中に微細な片岩？多く含む。還元炎焼成。口縁部内面下端段差。	中世。

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第2-35図	39	在地系土器 内耳鍋	体部上位片	口底 —	高 —	—	にぶい橙//	胎土中に微細な片岩?多く含む。内面上位に段差。外面に煤付着。	中世。
第2-35図	40	在地系土器 焙烙		口底 —	高 —	—	灰黄//	内面に幅広の内耳貼り付け。外面中位に紐作り痕。	江戸時代。
第2-35図	41	在地系土器 植木鉢か	口縁部片	口底 —	高 —	—	にぶい褐//	胎土中に微細な片岩?少量含む。口縁端部外方に肥厚し、上面は平坦。	
第2-35図 PL.2-17	42	在地系土器? 不詳	完形	径厚 1.8 0.6			浅黄橙//	おはじき状を呈する。	
第2-35図 PL.2-17	43	在地系土器 風口	1/4	長奥 — 12.2	高 6.2		橙//	胎土中に微細な片岩?多く含む。風口奥側の本体と接する部分。粘土板を組み合わせ、本体と接する部分を円形に削り抜く。	
第2-35図 PL.2-17	44	銭貨 元祐通寶	一部欠損	縦横 2.468 2.501	厚重 0.135 1.7		//	一部が欠損している。面、背ともに字、輪、郭は明瞭。一部粉状に劣化している。	
第2-35図 PL.2-17	45	銭貨 新寛永	完形	縦横 2.365 2.358	厚重 0.112 2.3		//	面、背ともに彫は深く、字、輪、郭は明瞭。背に右上から左下の方向に細かな傷が見られる。	
第2-35図 PL.2-17	46	火打石	完形	長幅 4.6 3.2	厚重 1.5 14.4		石英//	全面的に剥離面で構成される。右側辺及び上側辺の稜上に微細剥離痕とつぶれ痕が集中する。	
第2-35図 PL.2-17	47	硯	不明	長幅 (6.3) (2.1)	厚重 (1.1) 12.0		頁岩//	右側面は非常に滑らかであり丁寧に研磨整形される。正面には細かい縦方向の擦痕が多数認められる。	

第3章 小原遺跡

第3章 小原遺跡

第1節 発掘調査実施の経緯と経過

1 調査に至る経緯

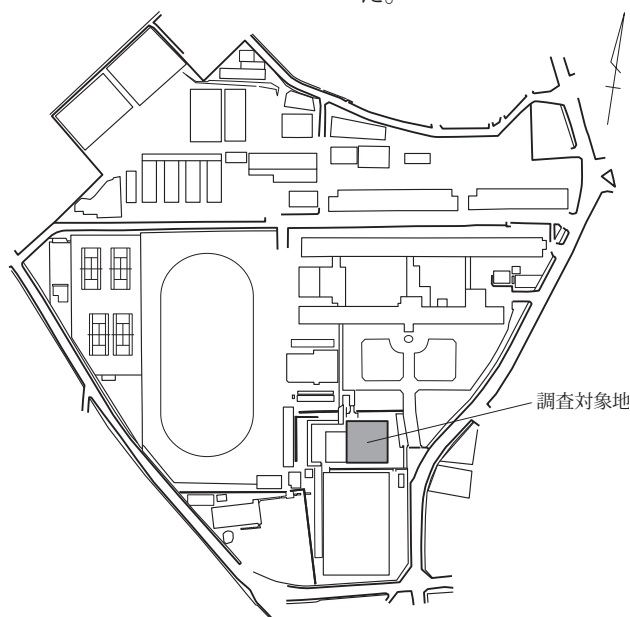
群馬県では、少子化対策及び社会の変化に対応する教育政策の一環として、高校教育改革推進計画を策定し、その実施に努めてきている。中之条高校と吾妻高校は、吾妻郡域での中核をなす県立高等学校として、長い伝統の下、地域の特色を生かした教育で有能な人材育成に努めてきた。しかし、群馬県の北西山間部にあたる吾妻郡域では少子化の流れが深刻で、生徒数の急激な小規模化が進んでいる。その一方で、各校での教育水準の維持・向上を図ることも重要な課題であった。このような問題の解決策として、各々の特色を残しつつ両高校を総合する再編案が策定され、平成30年度に吾妻中央高等学校として開校することとなった。

両校の統合に伴い、東吾妻町にあった吾妻高校は99年の歴史に幕を閉じ、中之条高校の敷地内には新たに校舎が新・増築されることとなった。建設工事は平成28年度事業として開始され、平成30年4月の開校には間に合うよう建設計画が立てられた。この校舎建設に伴い、対象地に想定された埋蔵文化財について、保存のための発掘

調査の可否を確定するための試掘調査が行われることとなった。なお、当該事業対象地は、周知の埋蔵文化財包蔵地から外れるが、近辺に「法満寺土師遺跡」の包蔵地が所在しており、これと関連する可能性があることから、試掘調査を実施することになったものである。

試掘調査は、群馬県教育委員会文化財保護課により、建設予定地である吾妻郡中之条町中之条1303地内を対象として、平成28年8月19日に実施された。その結果、表土下60～100cmで地山ローム層に達し、時期不明ながらも黒色土が堆積する土坑あるいは住居跡、ピットと推測される落ち込み遺構が確認された。この結果を受けて、建設予定地のうち、校門の西で体育館の北側に隣接する方形区画778㎡について、埋蔵文化財発掘調査が必要と確定し、県教育委員会文化財保護課から県教育委員会管理課あてに答申された。

この答申に基づき、県教育委員会の管理課と文化財保護課で発掘調査実施に当たっての協議を行い、発掘調査を平成29年4月1日から同年4月30日で実施すること、発掘調査は公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託すること、調査資料等は同事業団で別途整理事業を実施すること、報告書刊行後の資料類については群馬県埋蔵文化財調査センターに保管されること等で合意された。



第3-1図 調査位置図

発掘調査に当たっては、「平成29年度吾妻地区新高校整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査委託」として、群馬県教育委員会管理課と公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の間で平成29年4月1日付け契約書が締結されて、実施する運びとなった。

2 調査の方法と調査経過

発掘調査は、試掘調査結果で判明した遺構確認面とそれを覆う表土までの上位層に、遺物包含層や年代基準となるテフラ層が確認できなかったことから、遺構確認面まで一気に掘削することとなった。調査対象地の四周には、1～3mほどの幅で掘削しない部分を残し、掘削法面の崩落対策と発掘作業用に必要なスペース確保に努めた。なお、掘削作業上の都合により、調査区をほぼ南北に二分して発掘調査を進めた。

調査区の位置認定にあたっては5m単位のグリッドを仮設定したが、遺構分布密度が小さく遺物出土がほとんど見込めないことから、あえてグリッド標記のための数字やアルファベットは用いず、代わりに世界測地系座標値を用いることとした。従って、座標軸に沿った5m単位の想定グリッドで、南東隅を起点に東西方向をX軸座標値(66020～66050)、南北方向をY軸座標値(−88195～−88225)で表記した。

表土掘削及び遺構確認までは掘削重機を用い、遺構確認作業から遺構精査にあたっては人力によった。

測量には光波測距儀を使用し、各遺構は縮尺1/20を基本として測量を行った。等高線の単位は5cmとした。

写真撮影はデジタル一眼レフカメラを使用し、全てRAWデータとJPEGデータで保管してある。

調査日誌抄

- 4月4日 現地にて調査方法の打ち合わせ。
- 4月7日 表土掘削開始。
- 4月8日 遺構確認作業。攪乱多い。
- 4月10日 溝、ピット、土坑を確認し、遺構掘削を開始する。
- 4月12日 遺構精査と写真撮影。遺構測量を開始。
- 4月14日 1号溝の覆土から現代遺物出土。遺構写真撮影と測量を継続する。
- 4月17日 南半部調査区の表土掘削と遺構確認作業。
- 4月18日 南半部調査区での遺構精査。
- 4月20日 旧石器試掘開始。
- 4月21日 遺構全景写真撮影。
- 4月26日 旧石器試掘調査終了。遺物出土なし。旧石器本調査不要と判断する。
- 4月28日 発掘調査終了。

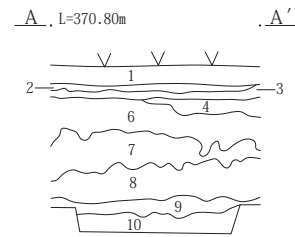


第3-2図 遺跡位置図(国土地理院5万分の1地形図『中之条』に加筆)

3 基本層序

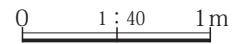
本遺跡の基本層序は、調査区の南北辺と東辺で確認しているが、全容を知り得ると判断したため、個々では南北辺の層序を掲載した(第3-3・4図)。

表土下15～60cmは学校敷地整地のための地業による客土である。これは基本層序A-A'の1～3層、B-B'では1～2層に相当する。そして、調査区北辺では標高369.90mほど、南辺では369.70mでローム漸移層に達する。南方ほど深いのは、元地形が南西向き傾斜のためである。A-A'では9層、B-B'では5層にあたる。表土下客土とローム漸移層に挟まれた黒褐色土～暗褐色土層が遺構の掘り込み面ないし確認面になるが、平面的に確認できるのはローム漸移層以下である。この黒褐色土～暗褐色土層にはロームブロックや礫を含んでいて均質ではない。ローム漸移層の下位には上部ローム層が堆積するが、酸化鉄凝集や礫の包含が著しく下位では粘土化もみられる。

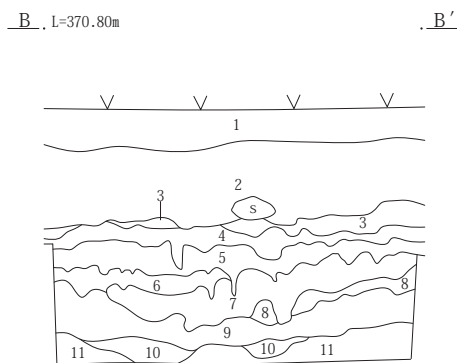


北壁基本土層 A-A'・1 溝

- 1層 バラス
- 2層 黒褐色土 緻密で転圧のかかった層。バラス下客土。
- 3層 灰褐色土 赤褐色粒を含み、緻密で転圧のかかった層。客土。
- 4層 黒褐色土 ローム粒とブロックをわずかに含むしまりの弱い層。
- 5層 黒褐色土 小礫を多量に、礫を少量含むしまりのない層。溝覆土。スレート瓦片を含む。1号溝覆土。
- 6層 黒褐色土 小礫(As-A か)を均一に含むしまりのない層。
- 7層 暗褐色土 ローム粒と小ブロックを少量含むしまりの弱い層。
- 8層 黒褐色土 ローム粒をわずかに含む、固くしまりの強い層。
- 9層 暗褐色土 ローム漸移層。
- 10層 黄土色ローム層。水性堆積か。

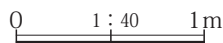


第3-3図 基本層序 A-A'



南壁基本土層

- 1層 バラス
- 2層 黒褐色土 大小礫を多量に含む客土。
- 3層 黒褐色土 ローム粒をわずかに含むしまりのある層。
- 4層 暗褐色土 淡色黒ボク土で、ロームをブロック状に含む。
- 5層 黄褐色土 暗褐色土をブロック状に含むローム漸移層。(別地点で As-YP 確認)
- 6層 黄褐色ローム 砂質で色調が明るい。
- 7層 黄褐色ローム 緻密で固く、一部に酸化鉄が凝集。
- 8層 黄褐色ローム やや砂質で柔らかい。
- 9層 赤褐色ローム 酸化鉄の凝集した層。
- 10層 黄褐色ローム 砂質で柔らかい。
- 11層 黄土色粘土



第3-4図 基本層序 B-B'

第2節 周辺の地形と歴史的環境

吾妻郡中之条町は群馬県北西部にあって、北辺を新潟県と長野県との県境で画し、西は草津町と接する。大部分が山地であり、南辺付近を東流する吾妻川の左岸には河岸段丘として形成された平坦な台地が展開する。

中之条町の町役場や居住区が密集する中央南端部は、山地に囲まれた盆地地形を呈している。これは厚い粘土層の堆積から、第四紀に形成された古中之条湖に起因するとされる。古中之条湖形成の要因として、小野子山や榛名山の火山活動によって吾妻川がせき止められたためと説明されるが、この盆地地形に走る断層が関係しているとの推説もある。古中之条湖には周辺から流下する河川堆積物によって次第に堆積が進み、乾燥して陸地化した場所は中小河川によって新たに侵食が始まり、やがて数段に及ぶ河岸段丘が形成された。この河岸段丘は、最も古く高位の段丘面から蓑原面、成田原面、中之条面、伊勢町面におおむね分類され、その北側背後には山地が迫る景観を呈している。なお、小原遺跡のある中之条段丘面には、基盤礫層の上に厚さ数mの前橋泥流(応桑泥流)層が、その上に上部ローム層が堆積する。

現在の中之条町市街区から約3kmほど北方に、古来より信仰の対象とされてきた嵩山(789m)が屹立する。ここから南東方向に丘陵地形が延び、南側に形成された段丘の中之条面と接する。小原遺跡の立地する地形は、この丘陵南端の裾部から中之条面に移行する平坦面にあたる。遺跡のある吾妻中央高校敷地のすぐ南からは、南東向き緩斜面(勾配4%強)が続き、最低位の伊勢町段丘面に至る。遺跡地の標高は370m前後で、北側の丘陵とは約80m、下位の伊勢町段丘面とは40mほどの高低差がある。南西方には、嵩山西麓から丘陵地形の南西縁に沿って胡桃沢川が南東方向に流下する。この胡桃沢川を含めて、丘陵地や段丘面を下刻して流下する河川によって形成された谷は比較的深く、傾斜地ではV字谷に近いところもある。そのため、水田可耕地として適した低湿地はあまり見られず、推測される旧地形では、傾斜が弱く最も低位にある伊勢町段丘面にほぼ限られていたと考えられる。現在は、高位段丘面での人口水利網が整備されたため、この平坦面での水田耕作が盛んにおこなわれている。

小原遺跡周辺の遺跡分布は、時代により地形環境に応じた密度の差を示している。旧石器時代は未見であり、縄文時代は早期から晩期まで吾妻川にそそぐ河川中流域の山間部に多い。弥生時代以降では河川周辺に形成された河岸段丘低位面を主分布域に展開している。

小原遺跡を中心にほぼ5kmの範囲内は、古中之条湖の盆地地形から嵩山南東部の丘陵地形が含まれるが、ここでの縄文時代の遺跡分布は非常に稀薄である。伊勢町段丘面にあたる、現JR中之条駅の南側平坦地に立地する天神遺跡で、縄文中期のヒスイ製大珠の出土が目立つ程度である。縄文時代の遺跡は、北東から中之条の盆地地形に流下してくる名久田川や、北西から流下する四万川・山田川などの比較的流域面積の広い支流域に多く分布している。それは、平坦地形というより、河川に面した山麓地形を生活拠点として好んだことをうかがわせる。

一方、弥生時代になると遺跡分布に変化が現れる。名久田川右岸の段丘上に立地する宿割遺跡では、縄文前～後期の集落とともに、弥生前期末頃の土器棺再葬墓が発見されており、北西側山地を東流する上沢渡川上流域にある有笠山遺跡からは、中期前半の墓関連(2号洞窟)と、中期後半の狩猟等キャンプ地と目される遺構(1号洞窟)

が知られている。弥生時代の集落遺跡の存在は後期から明確になり、山間部ではなく平坦な段丘面に進出してくる傾向がうかがえる。最低位にあたる伊勢町段丘面には、伊勢町地区遺跡群として川端遺跡(15)や天神遺跡(14)が知られており、後期に属する200棟以上にのぼる竪穴建物跡が検出された。詳細は未公表だが、環濠や土器棺墓などの付設遺構も確認されており、鉄剣2振や板状鉄斧、人形土器などの豊富な出土品からも、当地域の拠点的集落と考えてよい。吾妻川流域は、長野県北部の弥生社会と結ぶ主要ルートと考えられるが、利根川と合流する渋川市附近までは広い平坦地に恵まれず、この中之条に形成された河岸段丘面がほぼ唯一といってもよい。しかも盆地地形に集まる中小河川によって水利にも恵まれたようである。このことは、天神遺跡で古墳時代の極小区画水田が検出されたことでも判る。ほかにも、吾妻川沿岸や名久田川沿いの平坦地などに小規模な弥生集落が点在するが、伊勢町地区遺跡群と結びついた衛星集落的意味合いが強いのではないだろうか。

古墳時代には、弥生時代後期からの遺跡分布を継承し、さらに河川合流点などの平坦地への進出が目立つ。ただし、群馬県平野部で目立つ古墳時代前期の外來系土器群(東海西部系や北陸東部系など)の進出は見られない。安定した定着集落が形成されるのは古墳時代中期以降のようである。古墳の分布も同様で、伊勢町地区遺跡群の東端に接し、名久田川と吾妻川が合流する地点にある伊勢町只則古墳群(18)、名久田川中流域には平古墳群、西側の四万川下流域には小川古墳群(11)など6世紀以降の古墳群が形成される。また吾妻川右岸にも西から下郷古墳群、岩井西古墳群(20)、植栗中原遺跡(19)などが知られる。なお、四万川と吾妻川が合する地点にある石ノ塔古墳(12)は、竪穴系の石室をもつ5世紀末頃の築造で、当該地域では古い時期の古墳に属する。低地での水田開発も進められており、天神遺跡のほか、名久田川と桃瀬川に挟まれた七日市遺跡(7)でも6世紀初頭の榛名山噴火火山灰(Hr-FA)で覆われた極小区画水田が検出されている。小原遺跡の立地する中之条段丘面の東端では法満寺土師遺跡(2)が知られており、昭和40(1965)年の発掘調査では石組み竈が検出され、壺と甗が出土している(中之条町誌)。

律令期においても遺跡分布は古墳時代と大きく変わら

ない。郡郷制により、吾妻郡と三郷(太田郷、伊参郷、長田郷)が設置されたが、現在地との比定は確定していない。小原遺跡のある吾妻川北岸の伊勢町付近は「伊参郷」とする見解がある(中之条町誌)。また吾妻郡衙推定地については、中之条盆地の西側にあたる東吾妻町原町の大宮巖鼓神社(22)付近が有力視されている。他に天代瓦窯遺跡(5)のある伊勢町段丘の東端附近も候補とされている。大宮巖鼓神社の吾妻川を挟んだ右岸には、7世紀後半創建とされる金井廃寺跡、その西南西約1kmには下郷古墳群がある。下郷古墳群では、7世紀末から8世紀初めころと推定される東西南北方向に軸を揃えた掘立柱建物4棟と門を伴う区画柱列が発見されている。掘立柱建物は大型建物や布掘り、あるいは礎石柱穴を伴うもので、一般集落というより金井廃寺との関係性から公的施設の性格をほうふつとさせる(下郷古墳群2014)。郡衙推定地に比定するには決定的な根拠を欠くとはいえ、こ

の吾妻川右岸の金井付近も有力候補地として考えてよいだろう。律令期の集落遺跡分布は、河川流域での遺跡数が増加しつつも古墳時代からの傾向は変わらず、伊勢町地区遺跡群やその吾妻川対岸の植栗中原遺跡のように、中之条盆地中心部にある低位段丘面に多い。天神遺跡では、軸を揃えた掘立柱建物群と区画柱穴列が検出され、竪穴建物からは奈良三彩陶器や銅印が出土している。なお、『延喜式』に記された上野九牧のうち、「市代」牧は小原遺跡から約2.5kmほど吾妻川下流の中之条町市城の地が比定されている。

中世については、時期の確定できる遺跡がほとんど見られない。小原遺跡周辺では、和利宮館(4)、古城(17)、城峯城(9)などの城館が知られているが、伝承はあるものの城主や築城年代などの詳細は不明である。鎌倉から室町時代にかけて、吾妻郡城を本拠としたとされる吾妻氏(「吾妻鑑」)や飽間氏、斉藤氏について伝えられるが、



第3-5図 周辺の遺跡 ■ 本遺跡位置

現在知られている城館との関係性を実証するものはないようである。戦国時代は、上杉氏や武田氏、北条氏など有力大名らの勢力争いの渦中にあり、吾妻郡域の支配体制が目まぐるしく変わる。吾妻川上流側に位置する岩櫃城が武田配下の真田氏に攻略され、これに抗して嵩山城に籠城した斎藤氏も滅ぼされたことで、吾妻郡は武田氏支配下となる。このような戦乱の続くなかで、中之条盆地や周辺丘陵地には、支城や武家館も点々と存在したことが推測されるが、記録や発掘資料等の具体的資料は見られない。

近世についても、特記すべき遺跡は見られない。この時代の吾妻川流域における大きな歴史的事象といえば、天明三年(1783年)の浅間山噴火と泥流被害である。新暦5月から三か月にわたって続いた噴火活動であったが、8月5日に発生した岩屑なだれが北麓の鎌原村(婦恋村鎌原)を襲い、これに続く天明泥流が吾妻川に入って下流域に大きな被害をもたらした。吾妻川中流の中之条盆地付近も例外ではなく、小原遺跡のある左岸では、伊勢町段丘面の中ほどまで、高いところでは標高345m近辺まで達したと推測される(関ほか『1783天明泥流の記録』)。小原遺跡の標高は370m前後の高台なので、泥流被害は免れたらしい。

唐沢定市1976「第一部 歴史編通史 第1章 原始古代」

『中之条町誌 第1巻』

小林 勉1978「自然誌 総論」『中之条町誌 第3巻』

戸谷啓一郎1978「第1章 地質」『中之条町誌 第3巻』

関俊明・小菅尉多ほか2016『1783 天明泥流の記録』

唐沢定市1988『吾妻史帖』

群馬県吾妻郡中之条町教育委員会1997『有笠山2号洞窟遺跡』

中之条町教育委員会・中之条町歴史民俗資料館1984『特別展 出土品にみる古代の文化 伊勢町地区遺跡群埋蔵文化財展』

群馬県吾妻郡中之条町教育委員会1982『天代瓦窯遺跡』

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2014『下郷古墳群』

群馬県中之条町教育委員会1996『長岡Ⅱ遺跡』

第3節 検出された遺構と遺物

概要

面積778㎡の正方形の調査区より、溝4条、土坑10基、ピット26基が検出された。出土遺物がほとんど見られず、また時代認定の鍵層となり得るテフラ層も堆積していないことから、時期を確定できる遺構はない。また旧石器試掘坑を16カ所設定し、上部ローム層中の文化層確認に努めたが、人口遺物の出土は皆無であった。

(1) 溝

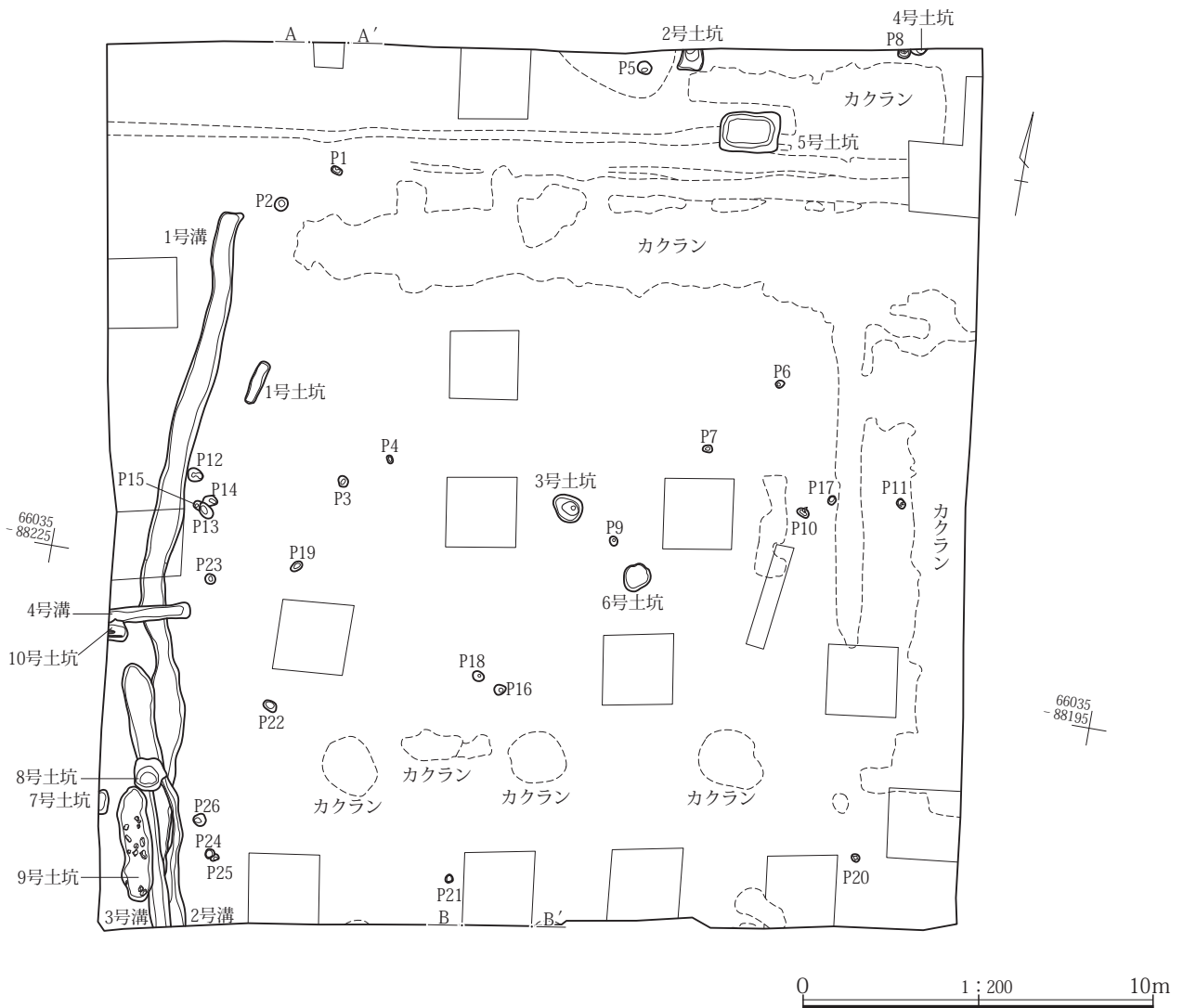
1号溝(第3-6～8図、PL.3-2・3)

調査区西端に沿って、ほぼ南北走向の溝で、検出長は約19m。ただし、北側延長方向で北壁に断面が確認されたことから25m以上の長さであったことは間違いない。

上幅は220cm、深さは64cmを測る。底面標高差は42cmで、南向きの勾配である。断面は逆台形で、底面は平坦である。平面調査で確認できたのはこの溝の底面付近であり、この部分の幅は最大で85cmを測る。埋土には礫を含む締まりの弱い黒褐色土が堆積する。出土遺物は現代の瓦片のみである。地形に沿って北から南方へ流下する水路と考えられる。時期は埋没が現代の学校用地造成以前で、開削時期は不明である。

2号溝(第3-6～8図、PL.3-2)

1号溝の南部で走向を揃えて検出された。検出長は4.28m、南端断面(G-G')では上幅2.4m以上を測るが明確ではない。深さは36cmを確認できるが、平面調査部分では4～10cmであり、底面付近のみ検出できたことになる。断面形は凹凸が著しく傾斜は緩い。覆土は締まりの弱い砂礫の多い灰褐色土である。校庭地形客土の下



第3-6図 遺構分布全体図

層であり、近代以前は間違いないが出土遺物がみられず、時期限定はできなかった。なお、3号溝は2号溝埋没後の覆土中に掘り込まれている。

3号溝(第3-6～8図、PL.3-2・3)

平面的には2号溝の西側に並走する溝として検出されているが、土層断面(G-G')で見る限り、2号溝埋没後の覆土内に掘り込まれたものである。検出長は7.56mで、断面では上幅62cm、深さ38cmを測る。断面形は箱形で底面はほぼ平坦。覆土はロームブロックを含む締まりの弱い土層で、側縁に置かれていた掘削土が一時に流れ込んだか、人為的に埋められた可能性もある。底面標高では最大18cmのレベル差がみられ、北から南へ傾斜する。時期を確定できる出土遺物はなかった。

4号溝(第3-6～8図、PL.3-2・3)

調査区西際の南寄りから東西方向に走る短い溝として検出された。東端はかなり急な勾配で立ち上がる。検出長は2.32m、断面(C-C')で上幅は55cm、深さは40cmを確認できた。断面形は逆台形で、底面は比較的平坦。覆土は下層に暗褐色粘質土、中位以上の全体にロームブロックを多量に含む。このため、人為的に埋められた可能性も考えられる。底面標高では8cmほどのレベル差がみられる。地形傾斜面に直交し、東端で閉じる短い溝であることから、水流を意図した溝とは考えにくい。なお、並走する10号土坑、直交する1号溝を切って掘り込まれている。重複関係からは最も新しい段階であるが、基本層序(A-A')の5層に相当する黒褐色土層の下位で確認される。

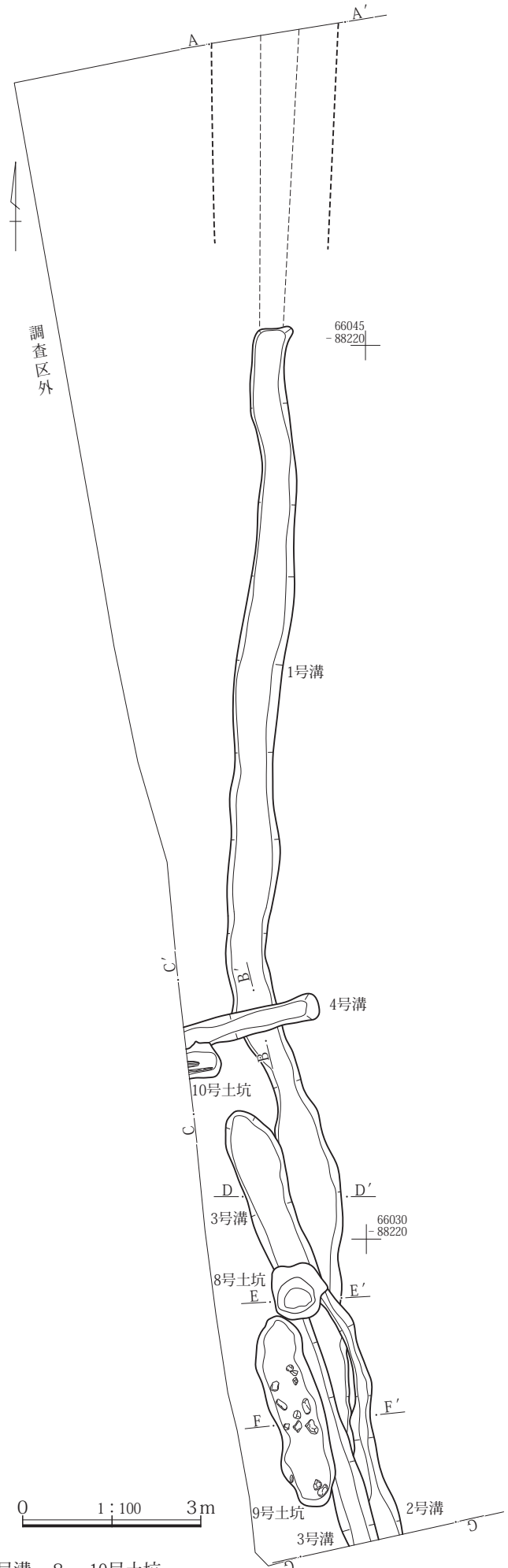
(2) 土坑

1号土坑(第3-9図、PL.3-3)

1号溝東側で軸を揃えて検出された隅丸長方形の土坑。平面形は整っているが、底面には凹凸が著しい。覆土下層には粘性を帯びた黒褐色土が堆積している。出土遺物なく、時期は確定できない。

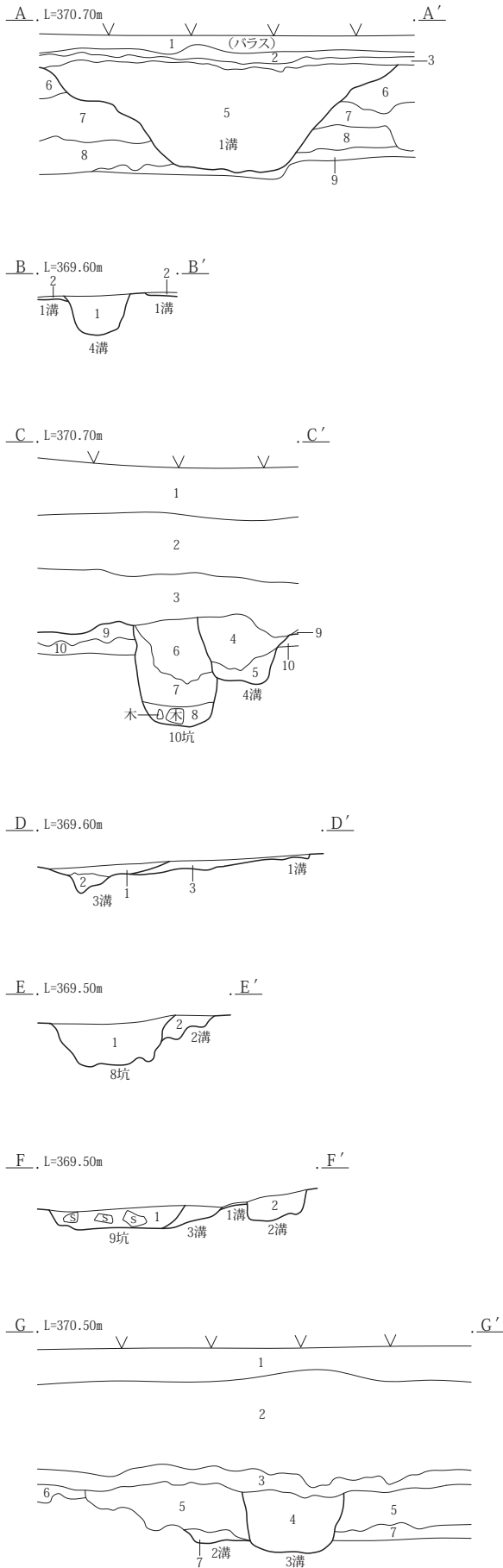
2号土坑(第3-9図、PL.3-3)

調査区北際東寄り、南端部分のみ検出された。検出部の平面では歪んだ隅丸長形状を呈する。土層断面から、上幅80cm、深さ65cmを測り、断面形はV字形に近い。覆土には1号溝と同じ黒褐色土が堆積する。断面形から、南端で閉じる短い溝となる可能性があろう。出土遺物な

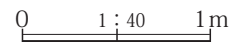


第3-7図 1～4号溝、8～10号土坑

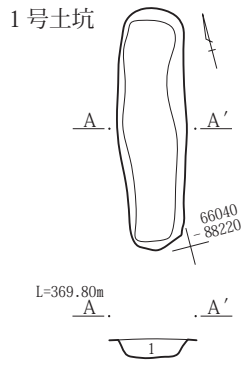
第3章 小原遺跡



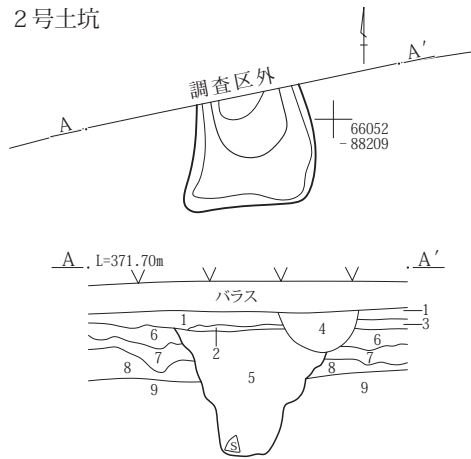
- A-A'
- 1層 バラス
 - 2層 黒褐色土 緻密で転圧のかかった層。バラス下客土。
 - 3層 灰褐色土 赤褐色粒を含み、緻密で転圧のかかった層。客土。
 - 4層 黒褐色土 ローム粒とブロックをわずかに含むしまりの弱い層。
 - 5層 黒褐色土 小礫を多量に、礫を少量含むしまりのない層。溝覆土。スレート瓦片を含む。1号溝覆土。
 - 6層 黒褐色土 小礫(As-Aか)を均一に含むしまりのない層。
 - 7層 暗褐色土 ローム粒と小ブロックを少量含むしまりの弱い層。
 - 8層 黒褐色土 ローム粒をわずかに含む、固くしまりの強い層。
 - 9層 暗褐色土 ローム漸移層。
- B-B'
- 1層 暗褐色土 ローム小ブロックと暗褐色土ブロックの混土。4号溝覆土。
 - 2層 暗褐色土 ロームブロックと暗褐色土の混土で、しまりのある層。1号溝覆土。
- C-C'
- 1層 バラス
 - 2層 黒褐色土 ローム大粒をわずかに含むしまりのある層。
 - 3層 灰褐色土 小礫を多量に含むしまりのない層。
 - 4層 暗褐色土 ローム大粒とブロック、暗褐色土の混土。
 - 5層 暗褐色土 ローム粒をわずかに含む粘質土。
 - 6層 灰褐色土 3層類似。
 - 7層 暗褐色土 ローム粒と小ブロックを多量に含む粘質土。
 - 8層 暗褐色土 ローム粒をわずかに含むしまりのある層。木質片出土。
 - 9層 暗褐色土 ロームブロックをわずかに含む粘質土。
 - 10層 ローム漸移層。
- D-D'
- 1層 灰褐色土 均質でしまりの弱い層。
 - 2層 暗褐色土 暗褐色土とロームブロックの混土。しまりなし。
 - 3層 暗褐色土 2層に類似するが、しまりがやや強い層。
- E-E'
- 1層 暗褐色土 ローム小ブロックを下層に多く含む粘質土。
 - 2層 暗褐色土 ローム小ブロックと暗褐色土の混土。2号溝覆土。
- F-F'
- 1層 暗褐色土 ローム粒をわずかに含むしまりのない層。
 - 2層 暗褐色土 ロームブロックと暗褐色粘質土の混土。2号溝覆土。
- G-G'
- 1層 バラス
 - 2層 黒褐色土 ローム大粒を含むしまりのある層(客土)。
 - 3層 灰褐色土 ローム粒と4層土の混土。
 - 4層 暗褐色土 ロームブロックを比較的多く含むしまりのない層。
 - 5層 灰褐色土 小礫を多量に含むしまりのない層(客土)。
 - 6層 黒褐色土 黒褐色粘質土主体で、わずかにロームを含む。ローム漸移層か。
 - 7層 黄褐色ローム



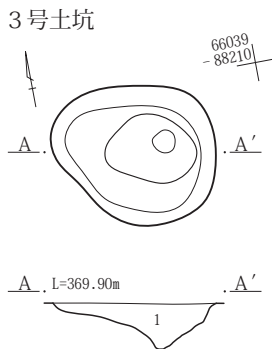
第3-8図 1~4号溝、8・9号土坑断面



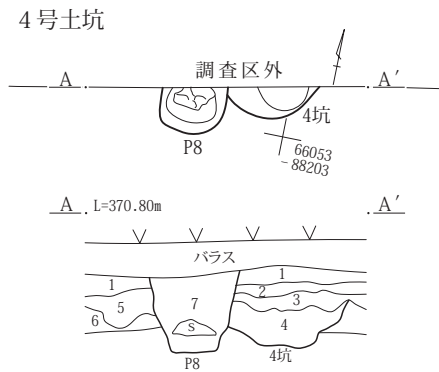
1号土坑
1層 黒褐色土 ローム粒を少量含む粘質土。



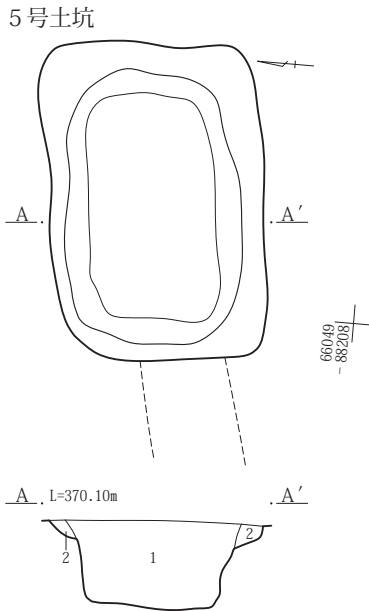
2号土坑
1層 黒褐色土 均質で粘性のない層。バラス下客土。
2層 灰褐色土 均質で粘性の強い層。客土。
3層 黄褐色土 ローム粒とブロック主体の層。
4層 暗褐色土 ローム粒と砂礫を含む粘性の強い層。ビット覆土。
5層 黒褐色土 ローム粒を少量、黒褐色土ブロックを多量に含むしまりのない層。2号土坑覆土。
6層 暗褐色土 ローム粒をわずかに含むしまりの強い層。
7層 黒褐色土 ローム粒と暗褐色土ブロックを含むしまりの強い層。
8層 暗褐色土 ローム漸移層。
9層 黄褐色ローム



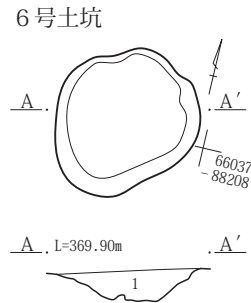
3号土坑
1層 暗褐色土 ローム粒をわずかに含むしまりの強い層。



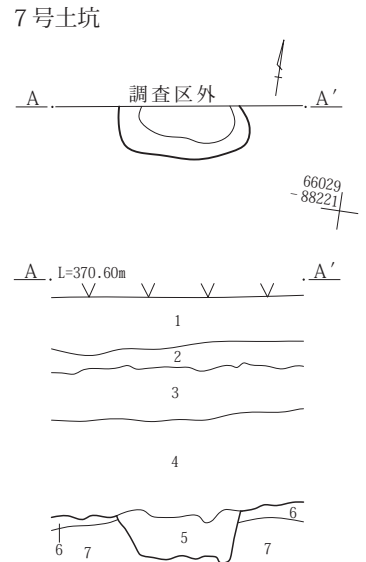
4号土坑・Pit 8
1層 暗褐色土 ローム粒・小ブロックを含む粘質土。バラス下客土。
2層 灰褐色土 均質な粘質土。客土。
3層 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む層。土坑4覆土。
4層 暗褐色土 ローム粒を少量含むしまりのない層。土坑4覆土。
5層 黒褐色土 ローム粒を少量含むしまりのある層。
6層 暗褐色土 ローム漸移層。
7層 暗褐色土 ローム粒を均一に含みしまりが無い。赤色の礫含む。ピットP 8の覆土。



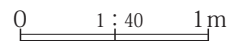
5号土坑
1層 黒褐色土 ロームブロックをわずかに含むしまりのない層。
2層 黄褐色土 ロームブロックで構成された層。土坑上半周囲に一定の厚さで貼りつけた層。



6号土坑
1層 黒褐色土 ローム粒をほとんど含まない均質な層。黒ボク土か。

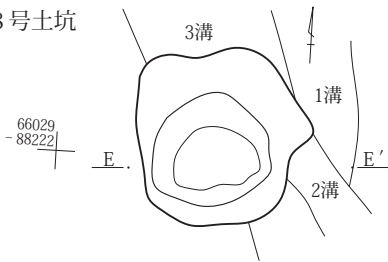


7号土坑
1層 バラス
2層 暗褐色土 ローム大粒を含むしまりのある層。(客土)
3層 黒褐色土 ローム大粒をわずかに含むしまりのない層。(客土)
4層 灰褐色土 小礫を多量に含むしまりのない層。(客土)
5層 黒褐色土 少量のロームブロックと多量の黒褐色土ブロックを含む層。(7号土坑覆土)
6層 暗褐色土 ローム粒をわずかに含む粘質土。
7層 暗褐色土 ローム漸移層。

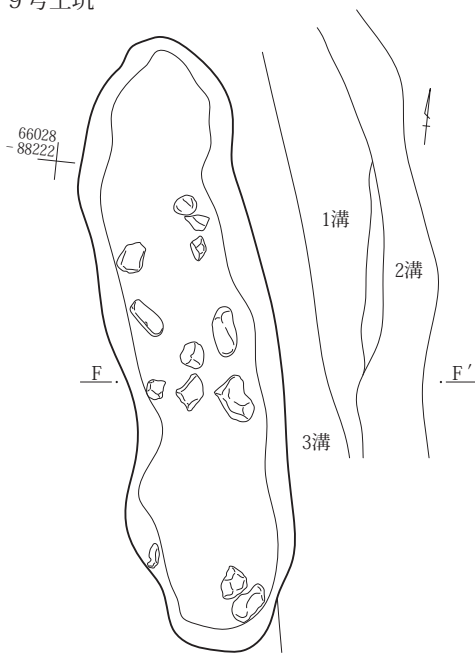


第3-9図 1～7号土坑

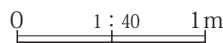
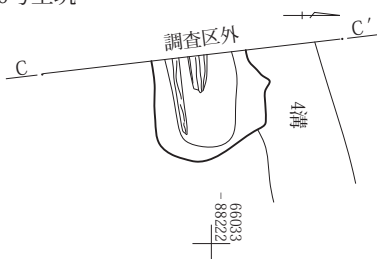
8号土坑



9号土坑



10号土坑



第3-10図 8～10号土坑

く、時期確定はできないが、覆土の共通性から1号溝と同時期と捉えておく。

3号土坑(第3-9図、PL. 3-3)

調査区中央で検出された「すり鉢」形の土坑。平面は不整楕円形で、東寄りに直径10cmほどのピット状窪みがある。このため、柱穴とも捉え得る。覆土は締まりの強い暗褐色土で、基本層序A-A'では8層に近く、1～4号溝よりは古いと思われる。

4号土坑(第3-9図、PL. 3-3)

調査区北際東端で南端部のみ検出された。全景は不明だが不整形の可能性がある。土層断面で、径60cm、深さ25cmが確認できる。覆土には締まりの弱い暗褐色土が堆積し、1～4号溝覆土に近い。隣接するピットP4に切られる。出土遺物なし。

5号土坑(第3-9図、PL. 3-4)

調査区北東部で検出された。東西軸を持つ隅丸長方形。平面は二重構造で、上辺が段状に窪み、ここにローム土を詰め込む。箱状の物体を埋めて固定するためであろうか。性格は不明。なお、ビニール管を埋置するための東西溝に切られるようである。

6号土坑(第3-9図、PL. 3-4)

調査区中央のやや南東寄りで検出された。不整形で中央が深い「すり鉢」形である。覆土には、基本層序B-B'第4層に相当する黒ボク土とみられる均質な黒褐色土が堆積する。形状や覆土の近似性から、北西に2m離れる3号土坑と関連性を持つ可能性が考えられる。出土遺物なし。

7号土坑(第3-9図、PL. 3-4)

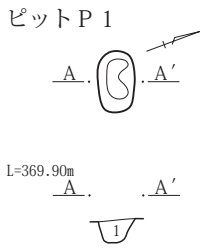
調査区西際の南端部で検出された。東半部ないし東端部のみである。全景不明。断面での上幅は68cm、深さ28cmを測る。底と法面の凹凸著しく、人為的掘り込みでない可能性もある。出土遺物なし。

8号土坑(第3-7・8・10図、PL. 3-4)

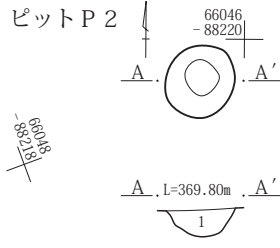
2号・3号溝と重複して検出された。不整形で、法面での凹凸が著しいが、底面は半球形に近く整っている。2号溝を切って掘り込まれるが、覆土は2号溝に非常に近い。出土遺物なし。

9号土坑(第3-7・8・10図)

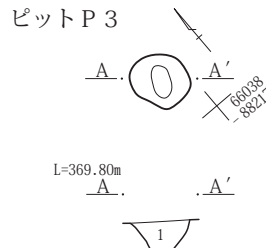
2号・3号溝に西縁に沿って検出された。検出長3.27mの不整楕円形で、上幅は89cm、遺構確認面からの深さ



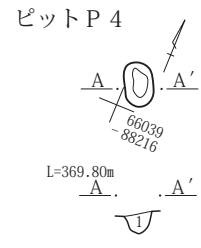
1層 黒褐色土 ローム粒を少量含む粘質土。



1層 暗褐色土 ローム大粒(1~2cm大)を下層に多く含む粘質土。

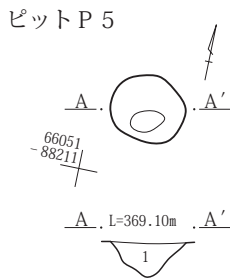


1層 黒褐色土 ローム粒をわずかに含む粘質土。

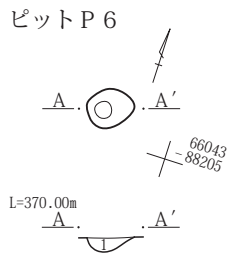


1層 黒褐色土 ローム粒をわずかに含む粘質土。

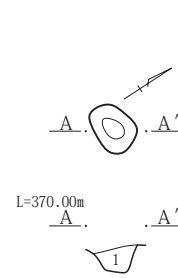
ピット P 7



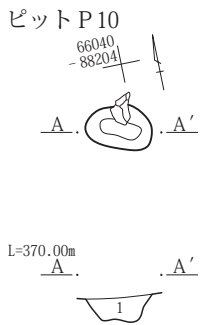
1層 黒褐色土 ローム粒をわずかに含むしまりのない層。



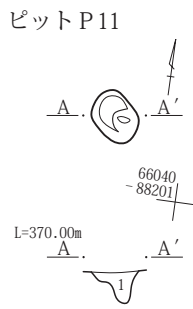
1層 黒褐色土 ローム粒をわずかに含むしまりのない層。



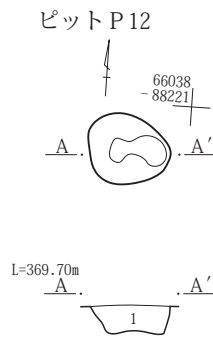
1層 黒褐色土 ローム粒をわずかに含むしまりのある層。



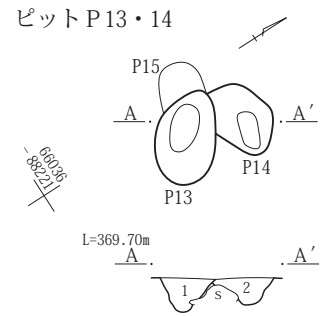
1層 黒褐色土 ローム粒を少量含むしまりのある層。



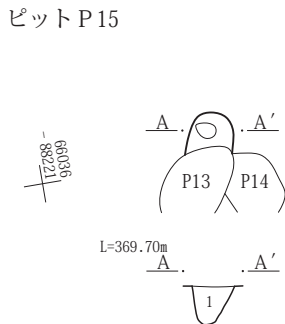
1層 暗褐色土 ロームブロックと黒褐色土ブロックの混土。



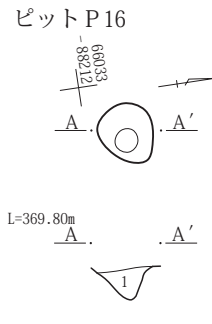
1層 暗褐色土 ローム大粒を少量含むしまりのない層。



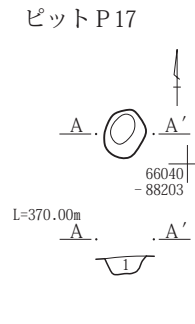
1層 暗褐色土 ローム粒・小ブロックを含む粘性の強い層。
2層 暗褐色土 ローム粒をわずかに含むしまりのない層。



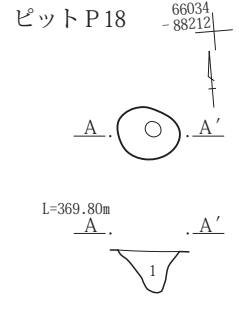
1層 暗褐色土 ローム粒・小ブロックを含む粘性の強い層。



1層 黒褐色土 ローム粒をわずかに含むしまりの弱い層。

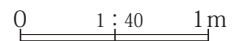


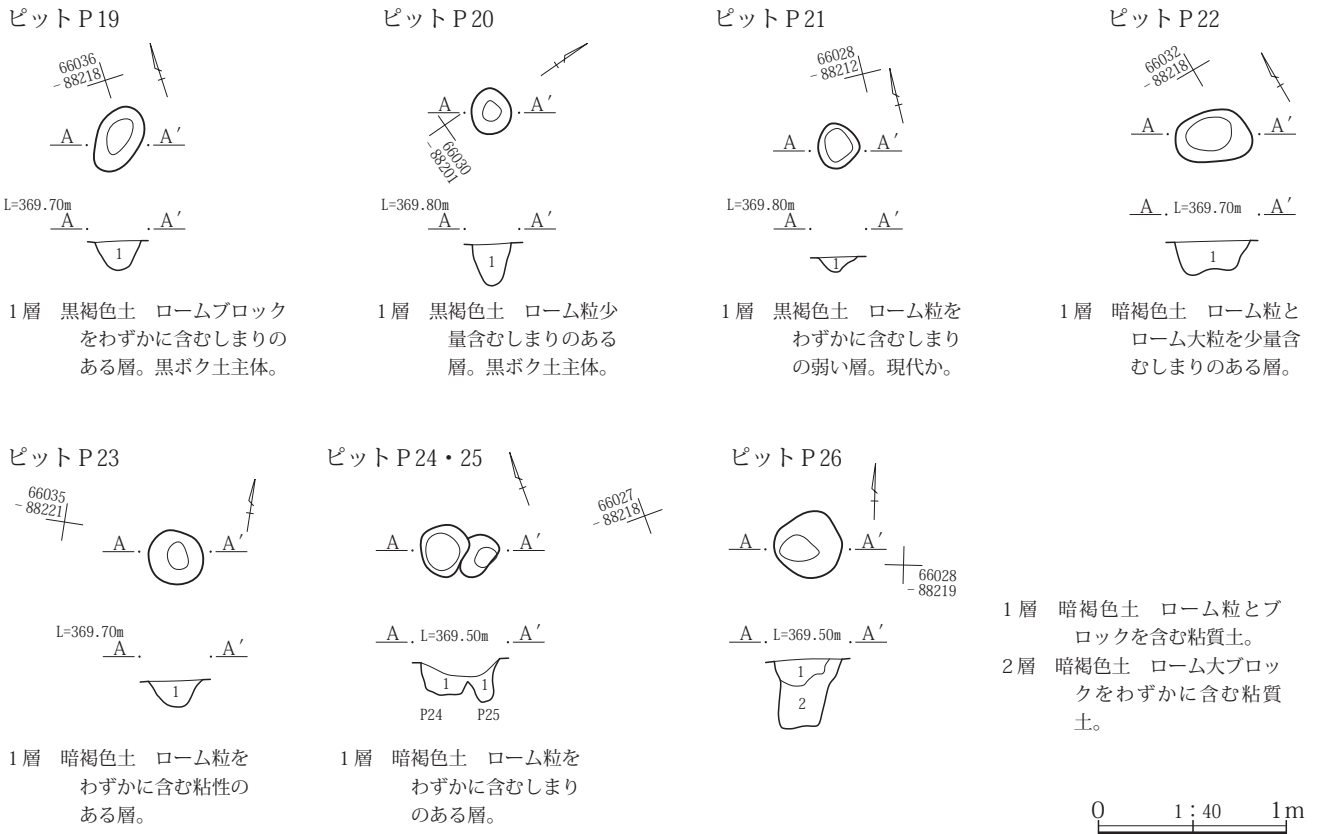
1層 黒褐色土 ローム粒をほとんど含まない均質な層。黒ボクか。



1層 黒褐色土 ローム粒をわずかに含む均質な層。黒ボク土主体。

第3-11図 ピット平面図と断面図(1)





第3-12図 ピット平面図と断面図(2)

は20cmを測る。底面に凹凸は見られるが1～3号溝ほど著しくはない。覆土が2号溝とほぼ同質であることから、部分的に深い底面部をもつ2号溝西半部との可能性を残す。底面近くから20～30cm大の角礫が十数点出土するが、人為的遺物はない。

10号土坑(第3-7・10図、PL. 3-3・4)

調査区西側の4号溝と隣接して検出された。東端部のみのため、西方に長く伸びる溝状遺構の可能性もある。土層断面での上幅50cm前後、深さは66cmを測る。底に数本の芯材を横倒しに埋め、その上を厚さ20cmほどのロームブロック土で埋め戻している。さらに上位は溝状で埋没時には灰褐色土が堆積する。4号溝に切られているため、これより古いのは間違いないが、東端で閉じる形状で、重なるように並走することから、同質の性格を持つものであったろうか。

(3) ピット(第3-11・12図、PL. 3-4～7)

ここでは、平面形状が円形か楕円形に準ずるもので、直径50cm以下の小規模な穴をピットとして記載する。調査区内からは26基のピットが検出されており、各々の

詳細記録は第3-1表に記してある。表記は「P 1…」と略す。ローム層上面の遺構確認面からの深さは10～20cmが大半であるが、本来の掘り込み面からであれば、40～50cmの深さであったろうと想定できる。ピットの断面形状は浅い「U」字形であり、P 7・10・12・17・18・22・24・26のように平坦な底面もみられる。以上の特徴から、検出されたピットの多くは柱穴の可能性が高いと考えられる。ただし、単独か2本支柱の構造物ではなく、3本以上の柱で構成される建物の配置関係は見られない。P 6・P 7・P 9・P 18は、北東から南西方向の直線上に並んでいるが(第3-4図)、2.5m・3.5m・5.0mと間隔が不定で、一連の構造物とする根拠に乏しい。覆土はP 1～4・7・9・10・13・15・17～26が、粘性を帯びるか、締まりのある土で、基本層序ではローム漸移層の直上に堆積する層に近似し、P 17～20のような黒ボク土の堆積もこれに準ずる。以上の堆積土の特徴から、縄文時代以降で近世以前という時間幅のなかに位置づけられよう。これ以外のP 5・6・8・11・12・14・16の7基は、客土直下の近代堆積土に近いことから、これらは極めて新しいと考えられる。

第4節 まとめ

小原遺跡は吾妻川流域でも最も遺跡密度が高い中之条盆地に位置している。立地地形は吾妻川左岸段丘上の南向き緩斜面という、居住地としては申し分ない場所である。しかし、発掘調査の結果、検出されたのは時期不明の散在するピット、近代の可能性のある溝や土坑群のみであった。注目されるのは、出土遺物が皆無に近いことで、溝や土坑から近現代のスレート瓦や陶器片が数点出土したのみであった。ピットについては堆積土の特徴から、縄文時代～近世以前とはなはだ長い時間幅に位置づけざるを得なかった。吾妻川流域では、天明三年(1783年)に噴火した浅間山から押し出された「天明泥流」に覆われて、少なくとも天明三年の以前以後という年代限定の与えられることが多いのだが、小原遺跡では泥流到達標高の上に立地したため、この泥流層がみられなかった。また、降下テフラについても同様である。

堆積土から比較的古いと認定したピット 19 基については、建物柱穴を想定したが、それと判定できる配列を示す例が認められなかった。遺跡内から出土遺物がみられないことから、縄文時代以降この地点に何らかの居住施設があったとは考えにくいというのが結論である。

一方、近世ないしは近代とみられる溝(1～3号溝)は調査区西辺に沿って南北に走る水路と考えられよう。平面調査では底面付近の窪みが検出されているが、調査

壁の断面では、明瞭な逆台形か箱型を呈しているのが人為的開削は間違いない。覆土の重複関係がみられるので、1・2・3号溝は埋没と開削を繰り返した結果と考えられ、南西向き緩斜面を流水する機能を果たしたものだろう。

ところで、本遺跡の立地する河岸段丘上では水田化がほとんど進んでいない。その理由として考えられるのは、背後の丘陵地からの湧水や河川は浸食によって深い谷を形成し、天水を貯める窪地や水田土壌の堆積も見られず、乾燥した台地に近いためであったろう。本遺跡の南方眼下にある比高30mほど下位の伊勢町段丘面では、弥生時代後期から平安時代にかけての大集落であり古墳時代の水田跡も発見された伊勢町地区遺跡群(天神、川端遺跡など)が知られる。ここは、集落規模や営まれた時間幅の長さからも、吾妻川流域で最も長期にわたり安定した集落遺跡であったと理解される。このことから、居住や生産域、あるいは流通ルートなどは、この伊勢町段丘面に集中し、ここから派生する集落や生産域は、中之条盆地に集まる名久田川や胡桃沢川などの河川流域上流側で展開していったようである。このことは、古墳時代以降の小規模遺跡がこれら河川流域に点在することで推測できる。以上のように推論するならば、小原遺跡の位置は集落形成に適した立地とはいえ、伝統的大規模居住地が展開する下位段丘の背後にあって、丘陵・山地に続く里山的利用が主だったのではないだろうか。

第3-1表 小原遺跡遺構一覧表

遺構名	挿図	写真 図版	位 置	検出長 (m)	規模 (cm)		底面標高値 (m)	走向	断面形	出土遺物	推定時期	備考
					上幅	深さ						
1号溝	第3-7・8	PL.3-2・3	X66025～66045 Y-88220	18.95	85	1～10	369.68～369.26	南北	逆台形	現代瓦	近代以前	2～4号溝と重複
2号溝	第3-7・8	PL.3-2・3	X66025 Y-88215・88220	4.28	(44)	4～10	369.28～369.20	南北	(逆台形)	なし	近代以前	1・3号溝、8号土坑と重複
3号溝	第3-7・8	PL.3-2・3	X66020～66030 Y-88215・88220	7.56	85.5	4～9	369.32～369.14	南北	箱形	なし	近代以前	1・2号溝、8・9号土坑と重複
4号溝	第3-7・8	PL.3-2・3	X66030 Y-88220	2.32	45	23～24	369.29～369.21	東西	逆台形	なし	近代以前	1号溝・10号土坑と重複
土 坑 ピット	挿図	写真 図版	位 置	平面形	規模 (cm)			主軸方位	出土遺物	推定時期	備考	
					上端平面	深さ						
1号土坑	第3-9図	PL.3-3	X66040 Y-88215・88220	隅丸長方形	128	37	10	N-12°-E	なし	不明		
2号土坑	第3-9図	PL.3-3	X66050 Y-88205	隅丸長方形	67	(59)	65	(南北)	なし	1号溝と同	溝か	
3号土坑	第3-9図	PL.3-3	X66035 Y-88210	不整楕円形	88.5	74.5	25		なし	1～4号溝より古い		
4号土坑	第3-9図	PL.3-3	X66050 Y-88200	不明	48	(17)	9		なし	ピットP8より古い		
5号土坑	第3-9図	PL.3-4	X66045・66050 Y-88205	隅丸長方形	167.5	116	47	N-83°-E	なし	不明		
6号土坑	第3-9図	PL.3-4	X66035 Y-88205	不整円形	82.5	74.5	16		なし	不明		

第3章 小原遺跡

土坑 ピット	挿図	写真 図版	位 置	平面形	規模 (cm)			主軸方位	出土遺物	推定時期	備考
					上端平面	深さ					
7号土坑	第3-9図	PL.3-4	X66025 Y-88220	不整楕円形	68	(28)	28		なし	不明	
8号土坑	第3-7・8・10図	PL.3-4	X66025 Y-88220	不整円形	102	94	35		なし	2号溝より新しい	
9号土坑	第3-7・8・10図	—	X66025 Y-88220	不整楕円形	327	89	20	N-18°-W	なし	不明	3号溝と重複
10号土坑	第3-7・8・10図	PL.3-3・4	X66030 Y-88220	不整長方形か	63	(56)	66	(東西)	棒材を寝かす	4号溝より古い	
ピットP1	第3-11図	PL.3-4	X66045 Y-88215	隅丸長方形	32.5	20	12		なし	近世以前	
ピットP2	第3-11図	PL.3-4	X66045 Y-88220	不整円形	40	35.5	15		なし	近世以前	
ピットP3	第3-11図	PL.3-5	X66035 Y-88215	不整円形	32.5	27	20		なし	近世以前	
ピットP4	第3-11図	PL.3-5	X66035 Y-88215	楕円形	23.5	16	13		なし	近世以前	
ピットP5	第3-11図	PL.3-5	X66050 Y-88210	不整円形	39	35.5	22		なし	近代か	
ピットP6	第3-11図	PL.3-5	X6604 Y-88205	不整円形	25	19.5	8		なし	近代か	
ピットP7	第3-11図	PL.3-5	X66040 Y-88205	楕円形	28.5	21.5	15		なし	近世以前	
ピットP8	第3-11図	PL.3-3・5	X66050 Y-88200	隅丸長方形か	34.5	(24.5)	43		なし	近代か	4号土坑と重複
ピットP9	第3-11図	PL.3-5	X66035 Y-88205	楕円形	27	21.5	13		なし	近世以前	
ピットP10	第3-11図	PL.3-5	X66035 Y-88200	楕円形	35	23.5	13		なし	近世以前	
ピットP11	第3-11図	PL.3-6	X66040 Y-88200	不整楕円形	29	21	16		なし	近代か	
ピットP12	第3-11図	PL.3-6	X66035 Y-88220	不整円形	43	37	15		なし	近代か	
ピットP13	第3-11図	PL.3-6	X66035 Y-88220	不整楕円形	51	32	20		なし	近世以前	ピットP14・15 と重複
ピットP14	第3-11図	—	X66035 Y-88220	不整楕円形	41	30	20		なし	近代か	ピットP13・15 と重複
ピットP15	第3-11図	—	X66035 Y-88220	隅丸長方形か	(25)	24.5	22		なし	近世以前	ピットP13・14 と重複
ピットP16	第3-11図	PL.3-6	X66030 Y-88210	不整円形	33.5	28.5	20		なし	近代か	
ピットP17	第3-11図	PL.3-6	X66040 Y-88200	楕円形	26.5	20.5	12		なし	近世以前	
ピットP18	第3-11図	PL.3-6	X66030 Y-88210	楕円形	33.5	27	23		なし	近世以前	
ピットP19	第3-12図	PL.3-6	X66035 Y-88215	不整楕円形	36.5	23.5	16		なし	近世以前	
ピットP20	第3-12図	PL.3-6	X66030 Y-88200	楕円形	24	21	23		なし	近世以前	
ピットP21	第3-12図	PL.3-7	X66025 Y-88210	不整円形	23.5	22	9		なし	近世以前	
ピットP22	第3-12図	PL.3-7	X66030 Y-88215	不整楕円形	40	27	18		なし	近世以前	
ピットP23	第3-12図	PL.3-7	X66030・66035 Y-88220	円形	30	28.5	16		なし	近世以前	
ピットP24	第3-12図	PL.3-7	X66025 Y-88215	不整円形	27	25.5	19		なし	近世以前	ピット25と重複
ピットP25	第3-12図	—	X66025 Y-88215	不整楕円形	24	17	26		なし	近世以前	ピット24と重複
ピットP26	第3-12図	PL.3-7	X66025 Y-88215	不整円形	36	34.5	37		なし	近世以前	

第4章 上佐烏明神前遺跡(前橋市0934遺跡)

第4章 上佐鳥明神前遺跡

第1節 調査に至る経過

平成29年6月6日群馬県教育委員会管理課(以下、県教委管理課)から、当該地における埋蔵文化財について群馬県教育委員会文化財保護課(以下、県教委文化財保護課)あてに試掘依頼書が提出された。これを受けて県教委文化財保護課は、同年6月15日に試掘調査を実施した。試掘ではAs-B下水田が検出されその結果、事業地の一部の埋蔵文化財に与える影響が大きいと予想されることから、工事への対応としてその区域の発掘調査が最も適切であることを6月21日に県教委管理課あてに通知した。また、試掘の結果を受けて事業地周辺は包蔵地化され、周知の遺跡として前橋市の遺跡台帳に包蔵地「前橋市0934遺跡」として登録されている。

県教委管理課は平成29年11月6日に、前橋市教育委員会あてに文化財保護法94条に基づく届け出及び添付書類を提出し、前橋市教育委員会は同日付けで県教委文化財保護課あてに進達した。

これにより、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を実施することになった。

[調査期間]

平成29年1月1日から同年1月31日まで

[事業地住所]

前橋市上佐鳥町428及び429-2番地

[発掘調査面積]

426m²

第2節 立地と環境

1 立地

上佐鳥明神前遺跡は、直線距離にしてJR前橋駅の南東約3.6Km、関越道高崎ICの北東約3.3Kmに位置する。遺跡西側の道路を南下すると、約1Kmで県道27号線(高崎駒

形線)に至る。

第4-1図は前橋から高崎付近の地形を示したもので(註1)、遺跡は浅間山の山体崩壊によって押し出された前橋泥流が形成する「前橋台地」の東端付近にある。その東側にはかつての利根川流路であった広瀬川低地帯があり、低地帯の東側は赤城山麓の末端に相当する崖端に接する。前橋台地のほぼ中央部を現利根川が南流し、西側の「高崎台地」との間には榛名山を水源とする井野川が南東流する。広瀬川低地帯を流れていた利根川は、天文年間(1532～1554年)の洪水によって流路を変えたと考えられている(註2)。

上佐鳥明神前遺跡は西側約1.3Kmに利根川が南流し、東側は数十mで端気川^{はげがわ}に接する。端気川は旧利根川から分流した河川で、用水路としての開削は古代に遡る可能性が指摘されている(註3)。遺跡付近は市街地の南郊外に相当し遺跡南西部は広く水田地帯であり、微高地上に集落が展開する。第4-2図は明治18年に測量された陸軍の地形図(註4)で、水田範囲に網掛けしたものである。図中に遺跡をプロットすると、周辺一帯は測量時も水田地帯であることが読み取れる。また、第4-3図は昭和43年の前橋市都市計画図に加筆したもので、端気川改修以前の状態である。遺跡西側は南北軸の地割りが良く残っている(註5)。

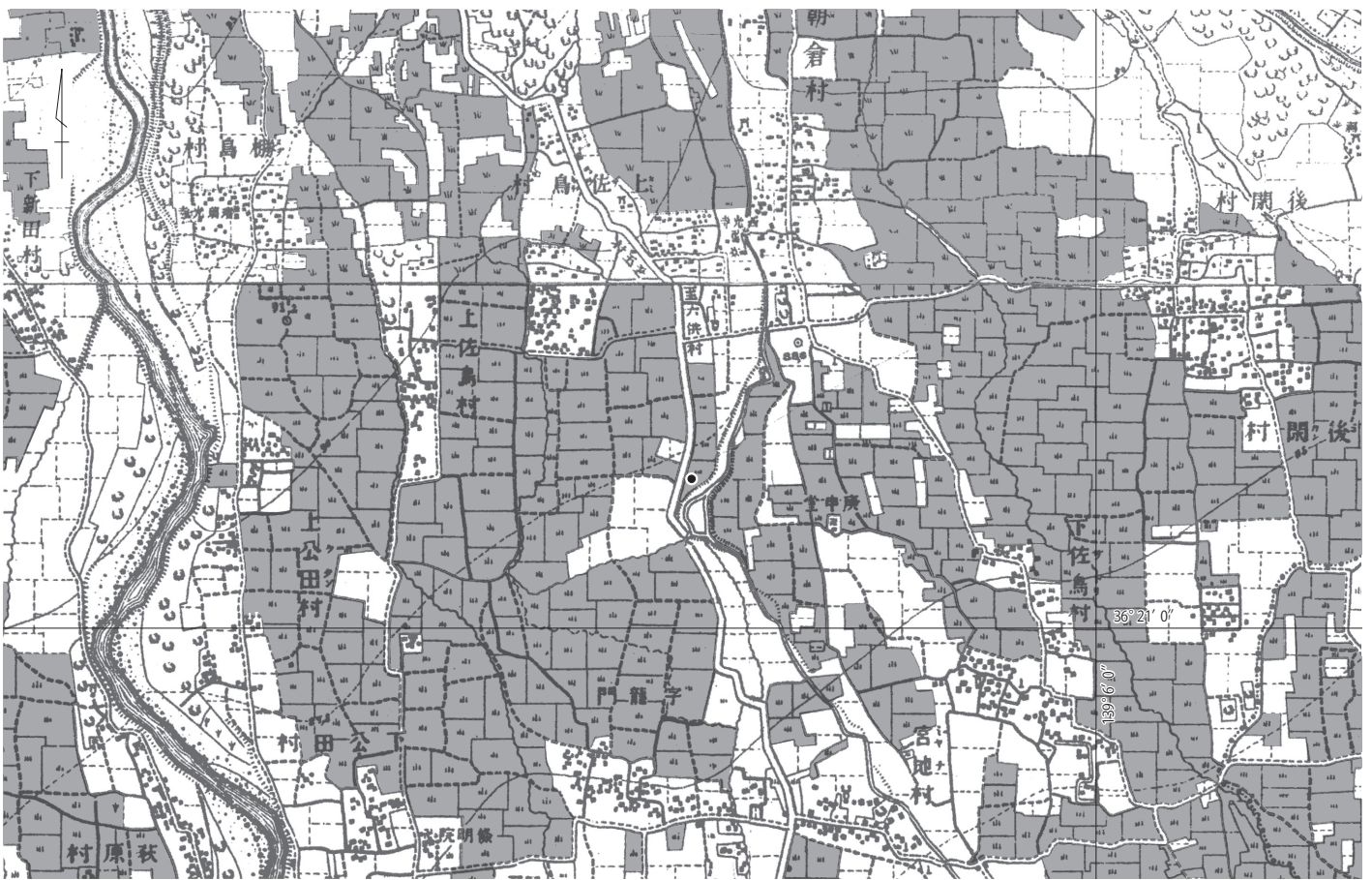
2 歴史的環境

近傍では縄文時代・弥生時代の遺跡は少ない。掲載地図の外であるが、徳丸仲田遺跡(遺跡南東約3Km)で縄文時代草創期の土器が発見されている。弥生時代の前期・中期の遺跡は現在までに調査されておらず、後期の集落が鶯島川端遺跡や徳丸仲田遺跡で調査されているのみである。

古墳時代以降の遺跡は多くなる。第4-6図は上佐鳥明神前遺跡のごく近傍の遺跡を1/2.5万地形図(註6)にプロットしたものである。古墳時代前期の集落は徳丸仲田遺跡・横手湯田遺跡(地図外、遺跡南西2.3Km)、後期の集落は下佐鳥遺跡・川曲遺跡・公田池尻遺跡・朝倉工



第4-1図 高崎—前橋附近の地形区分



第4-2図 陸軍迅速図 明治18年

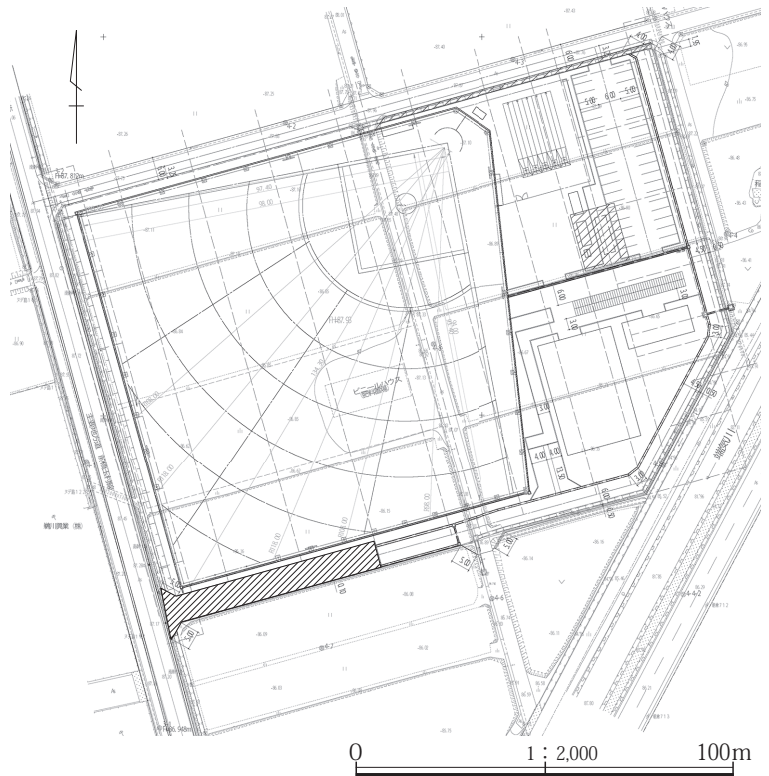
第4章 上佐鳥明神前遺跡



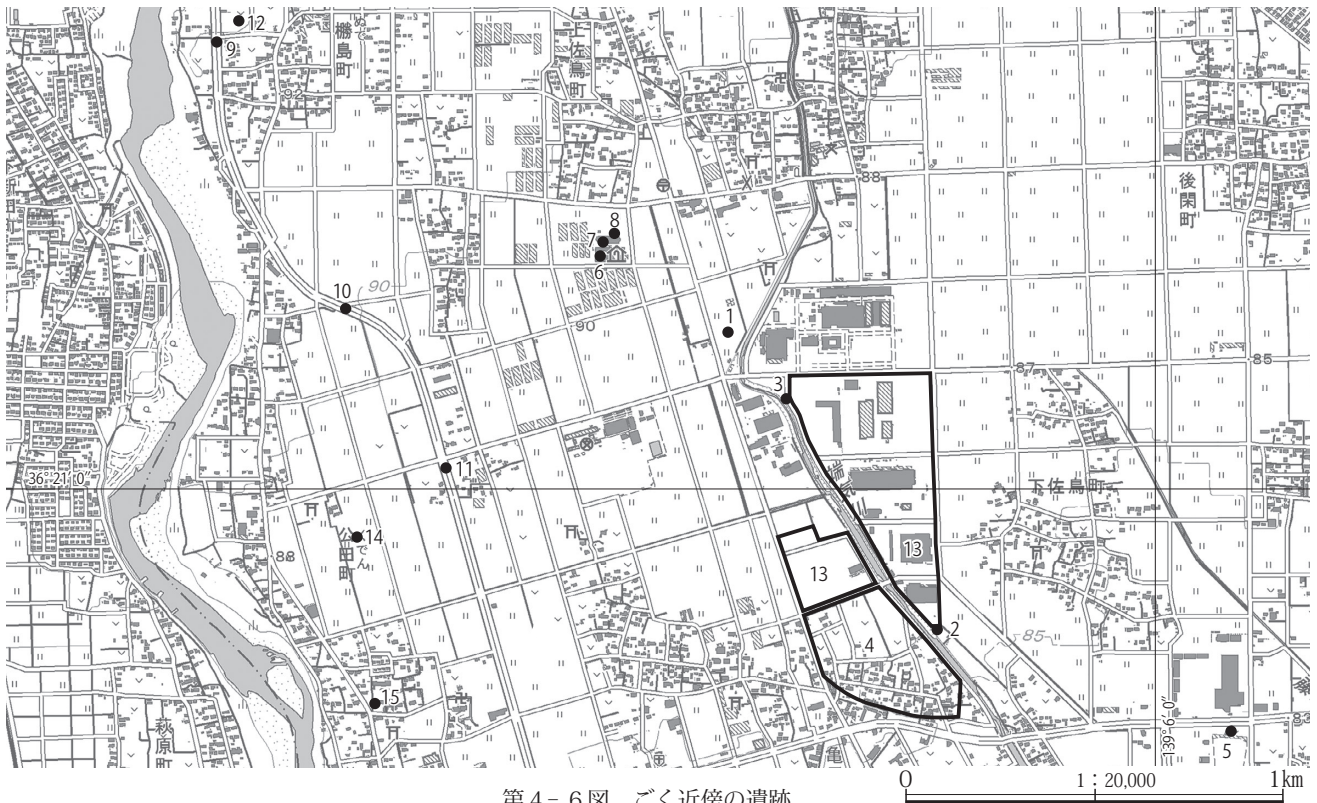
第4-3図 前橋市都市計画図 昭和43年 0 1:10,000 500m



第4-4図 開発区域図



第4-5図 調査区域図



第4-6図 ごく近傍の遺跡

第4-1表 ごく近傍の遺跡一覧表

●=遺物主体、○=遺構伴う、「飛鳥」は古墳に含まれる場合がある。

番号	遺跡名	旧石器	縄文					弥生		古墳		飛鳥		奈良～平安		中世	近世	備考(その他の遺構)	文献	
			草	早	前	中	後	晩	中	後	住	墓	生	住	墓					住
1	上佐鳥明神前遺跡																			本書
2	川曲遺跡									○									端気川河川改修、緊急調査	県教委緊急s56
3	下佐鳥遺跡									○				○?					端気川河川改修、緊急調査	県教委緊急s58
4	宿阿内城														○?				端気川河川改修、緊急調査	県教委緊急s58
5	宮地中田遺跡														○				As-B下水田、高崎駒形線の南	前橋市調査団
6	上佐鳥中原前遺跡														○				As-B下水田	前橋市調査団
7	上佐鳥中原前Ⅱ遺跡														○				As-B下水田	前橋市調査団
8	上佐鳥中原前Ⅲ遺跡																		As-B下水田	前橋市教育委員会
9	勝島川端遺跡								○	○	○	○			○	○	○		弥生後期～近世	GMB225集
10	公田東遺跡									○	○	○			○	○	○		古墳前期～中世	GMB225集
11	公田池尻遺跡									○	○	○			○	○	○		古墳前期～中世	GMB225集
12	勝島川端Ⅱ遺跡														○				古墳時代住居、平安末溝	前橋市調査団
13	朝倉工業団地遺跡群									○	○	○			○	○	○		古墳～近世	前橋市教育委員会
	朝倉工業団地遺跡群2														○	○	○		FA下畠、平安、中世の溝等	前橋市教育委員会
	朝倉工業団地遺跡群3														○	○	○		FA下水田	前橋市教育委員会
	朝倉工業団地遺跡群4														○	○	○		As-B下水田	前橋市教育委員会
	朝倉工業団地遺跡群5										○	○			○	○	○		C混土上水田、FA下水田、B下水田	前橋市教育委員会
	朝倉工業団地遺跡群6										○	○			○	○	○		FA下水田・畠、As-B下水田	前橋市教育委員会
	朝倉工業団地遺跡群7														○	○	○		As-B下水田	前橋市教育委員会
14	公田東遺跡														○	○			As-B下水田、館跡の堀・橋・門	警察宿舍調査会
15	下川淵3号古墳										○								前方後円墳 神社境内	前橋市史

- 1 本書
- 2 「川曲遺跡」『緊急文化財調査報告書』群馬県教育委員会,1982
- 3 「下佐鳥遺跡」『緊急文化財調査報告書』群馬県教育委員会,1983
- 4 「宿阿内城跡」『緊急文化財調査報告書』群馬県教育委員会,1983
- 5 『宮地中田遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団,1997
- 6 『上佐鳥中原前遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団,1998
- 7 『上佐鳥中原前Ⅱ遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団,2003
- 8 『上佐鳥中原前Ⅲ遺跡』前橋市教育委員会ほか,2013
- 9 『勝島川端遺跡 公田東遺跡 公田池尻遺跡』GMB225集,1997
- 10 『勝島川端遺跡 公田東遺跡 公田池尻遺跡』GMB225集,1997
- 11 『勝島川端遺跡 公田東遺跡 公田池尻遺跡』GMB225集,1997

- 12 『勝島川端Ⅱ遺跡』前橋市埋蔵文化財発掘調査団,1998
- 13 『朝倉工業団地遺跡群』前橋市教育委員会,2012
- 『朝倉工業団地遺跡群No.2』前橋市教育委員会,2013
- 『朝倉工業団地遺跡群No.3』前橋市教育委員会,2012
- 『朝倉工業団地遺跡群No.4』前橋市教育委員会,2013
- 『朝倉工業団地遺跡群No.5』前橋市教育委員会,2013
- 『朝倉工業団地遺跡群No.6』前橋市教育委員会,2013
- 『朝倉工業団地遺跡群No.7』前橋市教育委員会,2015
- 14 『公田東遺跡』警察宿舍遺跡調査会,1998
- 15 「下川淵 3号」『前橋市史 第1巻』前橋市史編さん委員会,1971

業団地遺跡群で調査されており、浅間山の噴火に伴うAs-Cテフラ混土で埋没した水田跡は公田東遺跡・公田池尻遺跡で検出されている。榛名山二ツ岳噴火に伴う降下テフラは6世紀初頭と6世紀半ばの二回が本遺跡近傍で検出されており前者は二ツ岳洪川テフラHr-FA、後者は二ツ岳伊香保テフラHr-FPと呼ばれる。平野部ではHr-FAの堆積が広く認められ、公田東遺跡・朝倉工業団地遺跡群等でHr-FA下の水田が、朝倉工業団地遺跡群No.2ではHr-FA下畠が、横手早稲田遺跡(地図外、遺跡南西2.4Km)等でHr-FP泥流下の水田が検出されている。方形周溝墓は公田東遺跡で検出され、近傍の古墳としては下川淵3号墳がある。遺跡東側約2.3Km付近(地図外)の広瀬川低地帯を望む台地縁辺上の北西から南東にかけて、朝倉・広瀬古墳群が分布する(註7・註8)。昭和10年の調査では前橋市15基・旧上川淵村113基・上陽村41基が数えられた古墳群である。東国最大規模の前方後方墳である前橋八幡山古墳(3世紀末)をはじめ、前橋天神山古墳(前

方後円墳、4世紀前半)等の大小の古墳が造られる。

奈良・平安時代でも微高地上に集落が占地し、公田東遺跡・公田池尻遺跡が調査されている。朝倉工業団地遺跡群(No.1)は7世紀後半の住居跡を多く検出した特異な遺跡である。低地には平安時代の洪水層下水田、浅間山As-Bテフラ直下の水田跡(平安時代末期)が多数検出されていて、検出された畦畔・水路から、いわゆる条里制水田の区画が推定されている(註9、註10)。

中世から近世にかけて、遺跡近傍でも環濠居館が検出されている。宿阿内城は力丸城の属城とされ、力丸城(地図外、遺跡南東3.5Km)は那波郡を支配した那波氏の居館という。公田東遺跡(調査会)では、館跡の堀や橋跡(木橋→土橋に造り替え)・門跡が検出され、14世紀以降の単郭方形館が推定されている(註11)。また、朝倉工業団地遺跡群では、環濠屋敷跡が検出され、15世紀後半と位置づけられている(註12)。

[註]

- 註1 『群馬県史 通史編1 原始古代1』群馬県,1990,付図2「群馬県内主要地域の地形分類図」を改変した。
- 註2 「第1章第5節 前橋台地と広瀬川低地帯」『群馬県史 通史編1 原始古代1』群馬県,1990
- 註3 梅沢重昭「前橋台地」『日本の古代遺跡 群馬東部』保育社,1987
前原豊ほか「利根川からの引水遺構である『女溝』の意義」『群馬文化』266,群馬県地域文化研究協議会,2001
- 註4 『第一軍管地方迅速測図』「前橋」明治18年、「高崎」明治18年の図のうち、「水田」範囲に網掛けした。
- 註5 「前橋市都市計画図 1/2500」No.75とNo.83を合成して加筆した。
- 註6 国土地理院1/25,000地形図を125%拡大し1/2万とした。
- 註7 「第5章第3節毛野地域圏の発展」『群馬県史 通史編1 原始古代1』群馬県,1990
- 註8 『前橋市史 第一巻』前橋市,1971
- 註9 『南部拠点地区遺跡群No.6』前橋市教育委員会,2011
- 註10 『朝倉工業団地遺跡群No.5』前橋市教育委員会,2013
- 註11 『公田東遺跡』警察宿舍遺跡調査会,1998
- 註12 『朝倉工業団地遺跡群No.2』前橋市教育委員会,2013

第3節 調査の方法と経過

1 調査の方法

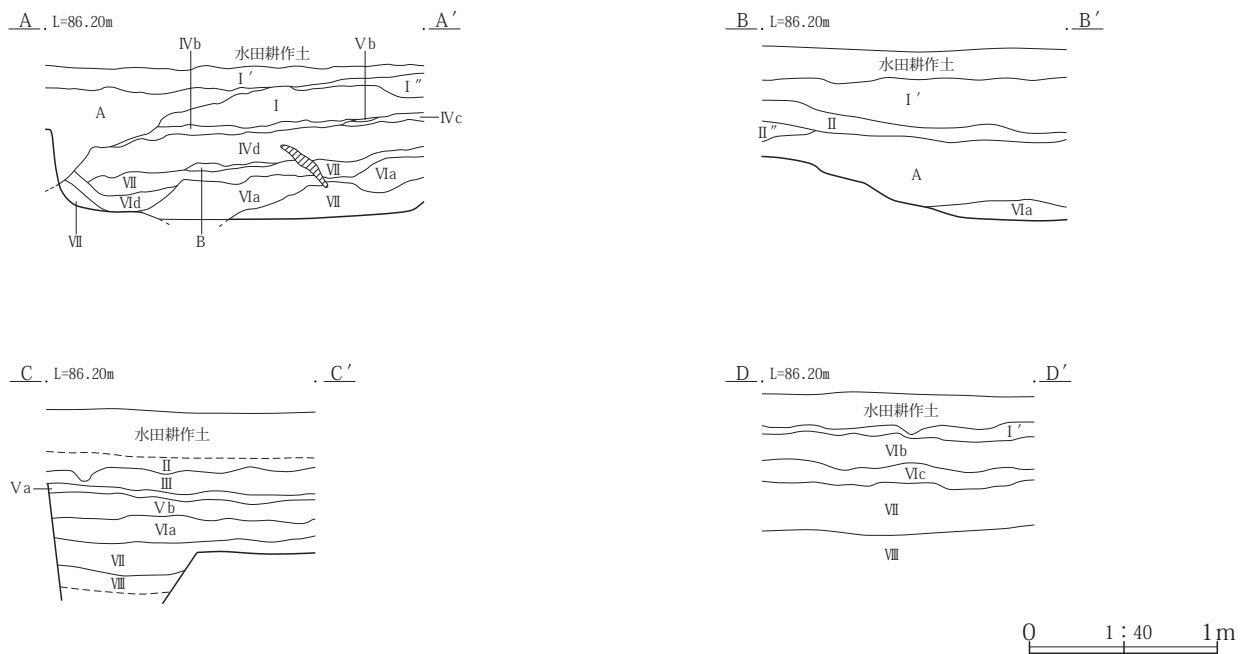
試掘の結果をもとに、重機による表土掘削を行い、作業員による遺構確認を進めた。確認した遺構は、人力により遺構埋土を掘削し、検出遺構や出土遺物の測量・写真撮影などの記録を保存しながら調査を進めた。

調査で検出した遺構の記録図は、測量業者に委託して

デジタル図面を作成した。記録写真は、調査担当者がデジタルカメラを用いて撮影した。

2 調査の経過

第1面は天仁元(1108)年に浅間山の噴火に伴って降下したテフラ浅間As-B軽石(As-B)を除去し、その直下の面



基本土層(A～D共通)【土層採取位置は第4～10図に示した。】

- I 暗褐10YR3/4 土地改良前の水田耕作土と思われるしまり強い層。As-Bの混入多く、ややザラザラした感触。鉄分凝集の影響で橙色味をおびている。
- I' 土地改良時に攪拌を受け、ブロック状の粘性土(A土)が混じるがI層とは土質・しまり等同じで区別の難しい部分もある。
- II 暗褐11YR3/3 いわゆるB混土で多量のAs-Bを含む非粘性土層。
- II' ブロック状の粘性土(A土)の混じる土地改良で攪拌された層。
- II'' 黄褐色粗粒土(Hr-FAが混じる可能性)が混入する層。
- IIIa As-B層上層に見えるピンク色味をおびた火山灰層。
- IIIb As-B層の大半を占める軽石層。
- IVa 黒褐10YR3/2 As-B水田下の粘性土。水田耕作土としては粘性強く、斑鉄も少ない。FAの可能性のあるパミス混じるが不明瞭。
- IVb 暗オリーブ褐2.5Y3/3 土質はIVaに同じ。粘性・しまりとも強い。
- IVc・IVd しまり欠く層で、IVcには粗砂が、IVdには黒色度の混入多い。
- V Hr-FA層 基本土層部分では不明瞭だが、水田C断面などで顕著。Hr-FPと思われる軽石がわずかに混じり、水の影響を受けているようにも見え、プライマリーな堆積状態とは若干異なる可能性。VbにはFAの可能性のある黄色土を含むが不明瞭。
- VIa 黄2.5Y4/2 しまり強い粘性土層。上面に風化したようなパミスの混入多い。炭化物混じる。
- VIb きわめてしまり強く、鉄分凝集もやや多い。
- VIc VII層土と漸移層の層が、ブロック状にVIII層土が混じる。
- VII 暗オリーブ褐2.5Y3/3 粘性あるやや砂質土。しまりあり。灰・シルト等の混入ありネットリした感触。透水層。
- VIII 灰オリーブ5Y6/2 基盤層のきわめてしまり強い粘土層。風化したパミス混じるかややザラザラした感触。
- A 土地改良時に埋土された粘性土。生木の混入多い。
- B 粗粒の川砂層。黒色味をおびている。

第4-7図 基本土層

を調査面とした。第2面は、第1面の下位にある粘土質の黒褐色土を除去した面に相当し、一部に6世紀初頭の榛名山の噴火による降下テフラHr-FAが残っていたが、このHr-FAは水性堆積の可能性がある。この面では第1～第4トレンチを設定して掘り下げ、Hr-FA下の遺構の有無の確認と、さらに下層の遺構の確認を行なった。

調査は1月4日に現地入りし、平成30年1月31日に終了した。

第4節 検出された遺構と遺物

検出した遺構は、第1面と第2面とに分けられる。

[第1面]

天仁元(1108)年に浅間山の噴火に伴って降下したテフラである浅間As-B軽石(As-B)の下の面で検出した遺構である(第4-8・9図)。第1面では乱れた畦畔をもつ不明瞭な水田面と、その上位から切り込む溝2条を検出した。1面から土師器杯の破片(第4-8図1、PL.4-4)が出土している。土器は周囲の地山から3cm浮いた状態で出土した。

1溝(第4-9図左、PL.4-1)は北西から南東に延びる溝で、長さ11.6mを検出した。走行はN77°Wで、上面幅0.8～1.0m・下面幅0.26～0.35mである。遺物は出土しなかった。

2溝(第4-9図右、PL.4-2)はやはり北西から南東に延びる溝で、長さ6.6mを検出した。走行はN67°Wで、上面幅1.2～1.9m・下面幅0.22～0.44mである。須恵器壺形土器の頸部破片(第4-8図2、PL.4-4)が出土した。土器は溝底面から7cm浮いた状態で出土した。

水田は調査区西部でごく低い状態、かつ不明瞭な畦畔を検出した。水田面との比高差は1～4cm程度である。一部に南北軸の高まりも見られるが不明確で、自然地形を反映しているように見える。調査区の西半部は、旧流路による浸食や土地改良事業による削平を受けて、As-B軽石は残存していなかった。

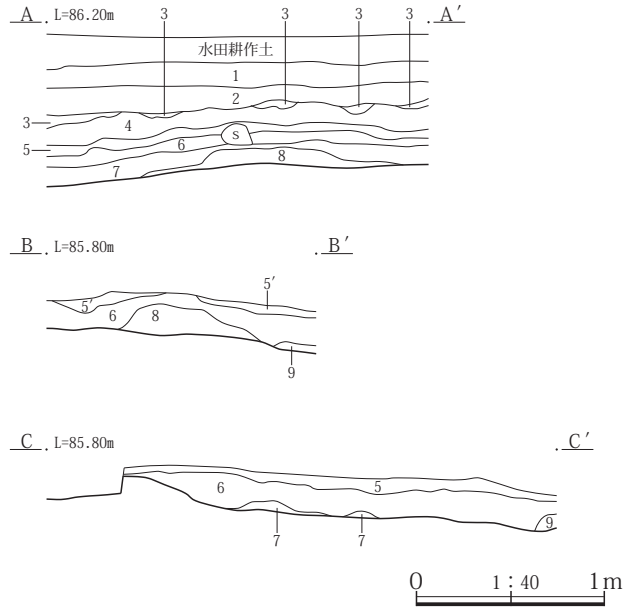
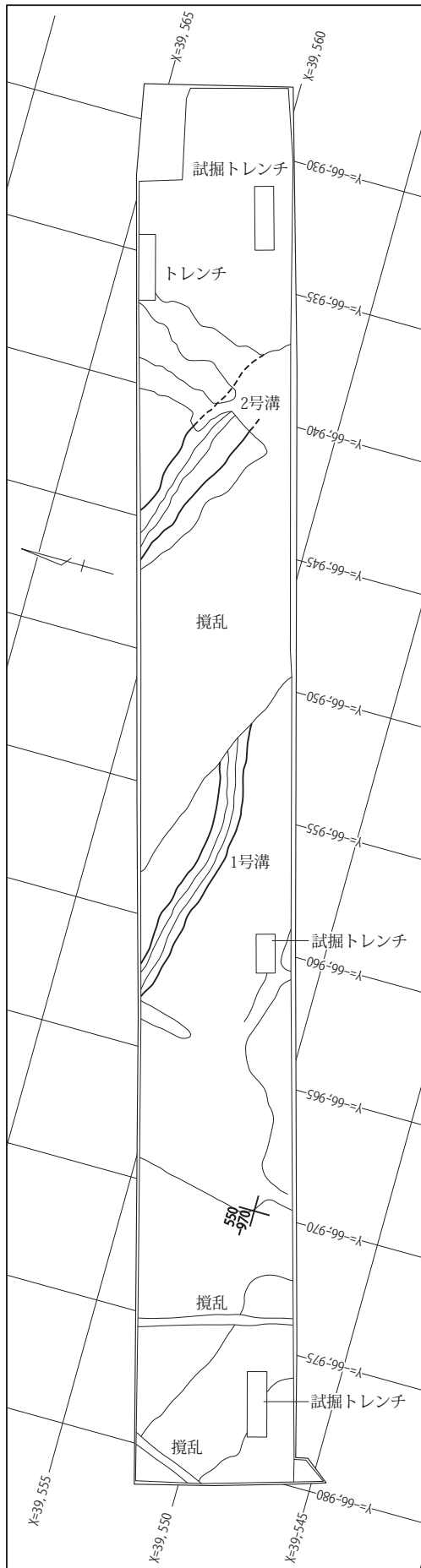
[第2面]

第1面の下位の黒褐色土を除去した面で、6世紀初頭の榛名山の噴火に伴う降下テフラHr-FAが部分的に検出されたが、水田面の確認はできなかった(第4-10図)。

西から第1～第4トレンチを設定して調査した。Hr-FAを確認したのは第3トレンチである(第4-10図右上)。

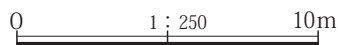
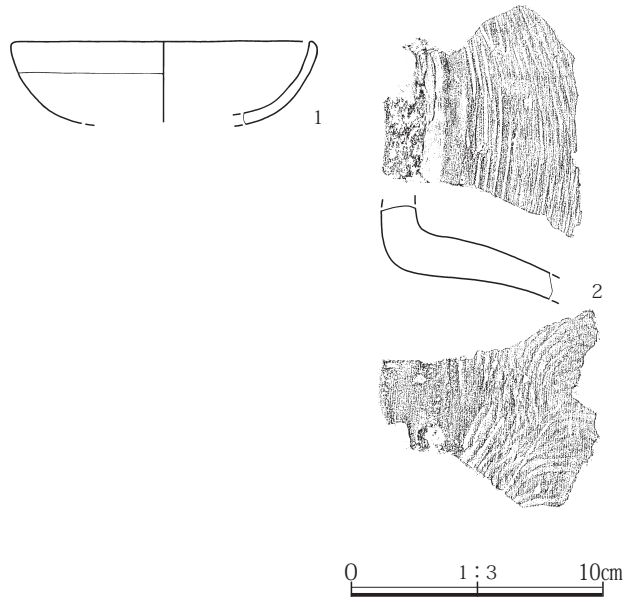
第1トレンチから、弥生土器の破片が1点出土した(第4-10図3、PL.4-4)。弥生時代中期末から後期初頭の所産とみられるが、遺構に伴うものではなく、流入した破片と考えられる。土器片はトレンチ底面から出土した。

第4節 検出された遺構と遺物

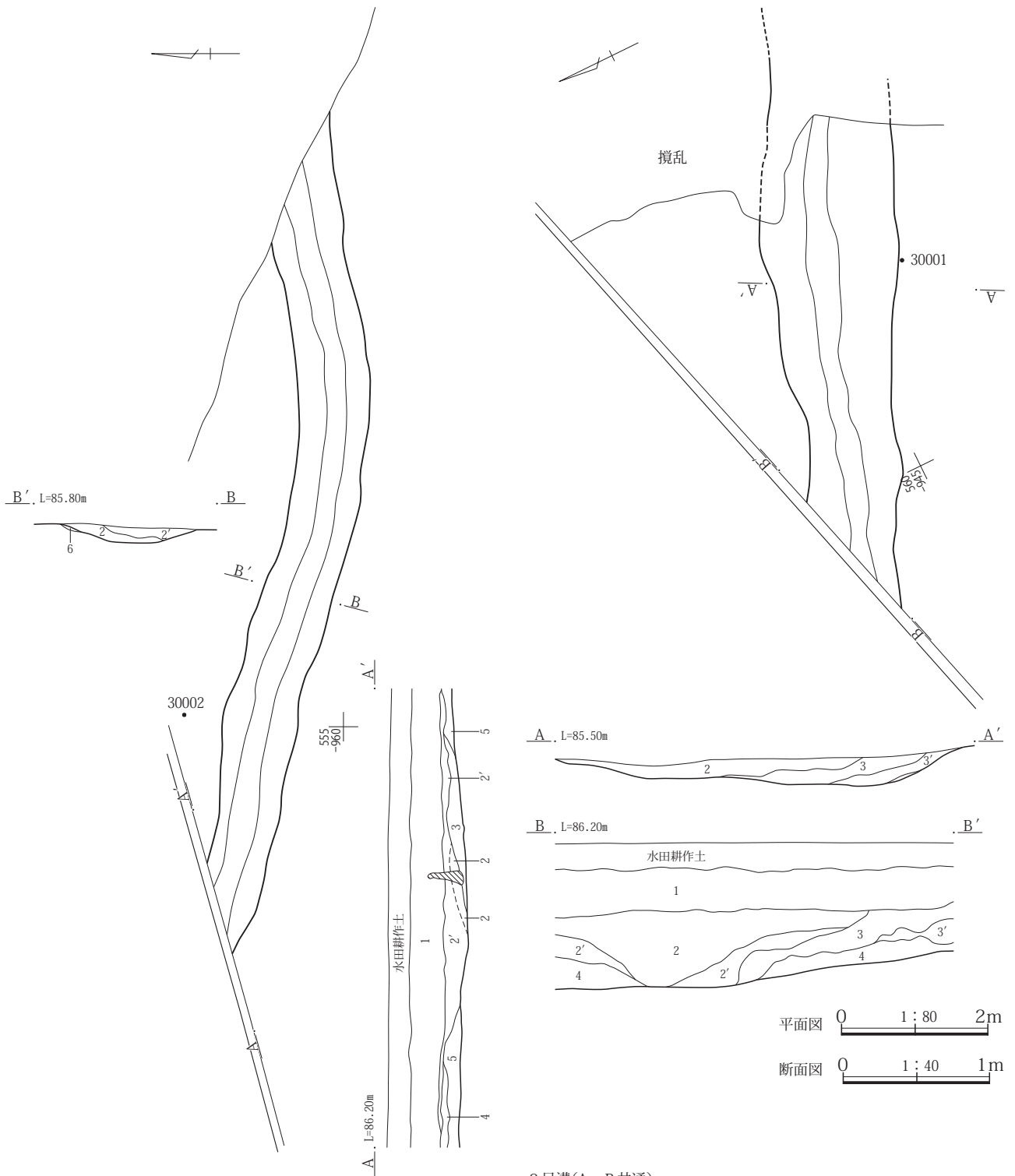


水田 (E・F・G 共通) [土層採取位置は第4-10図に示した。]

- 1 暗褐10YR3/4 基本土層のIおよび1'に同じ。
- 2 暗褐11YR3/3 基本土層のIIに同じ。
- 3 基本土層のIIIa層。
- 4 基本土層のIIIb層。
- 5 基本土層のIVa層。
- 5' As-Bが一部すぎ込まれたように混入する。
- 6 基本土層のIVb層。
- 7 基本土層のVIa層。
- 8 灰黄褐10YR4/2 基本土層のVII層に類似するやや砂質土。上面水田畦畔の芯部分と想定される。
- 9 黒褐10YR2/2 しまり強い黒色粘性土。層序的にAs-Cの混入する黒色土が想定されるが、軽石の混入はほとんど見られない。



第4-8図 1面全体図、水田土層、出土遺物



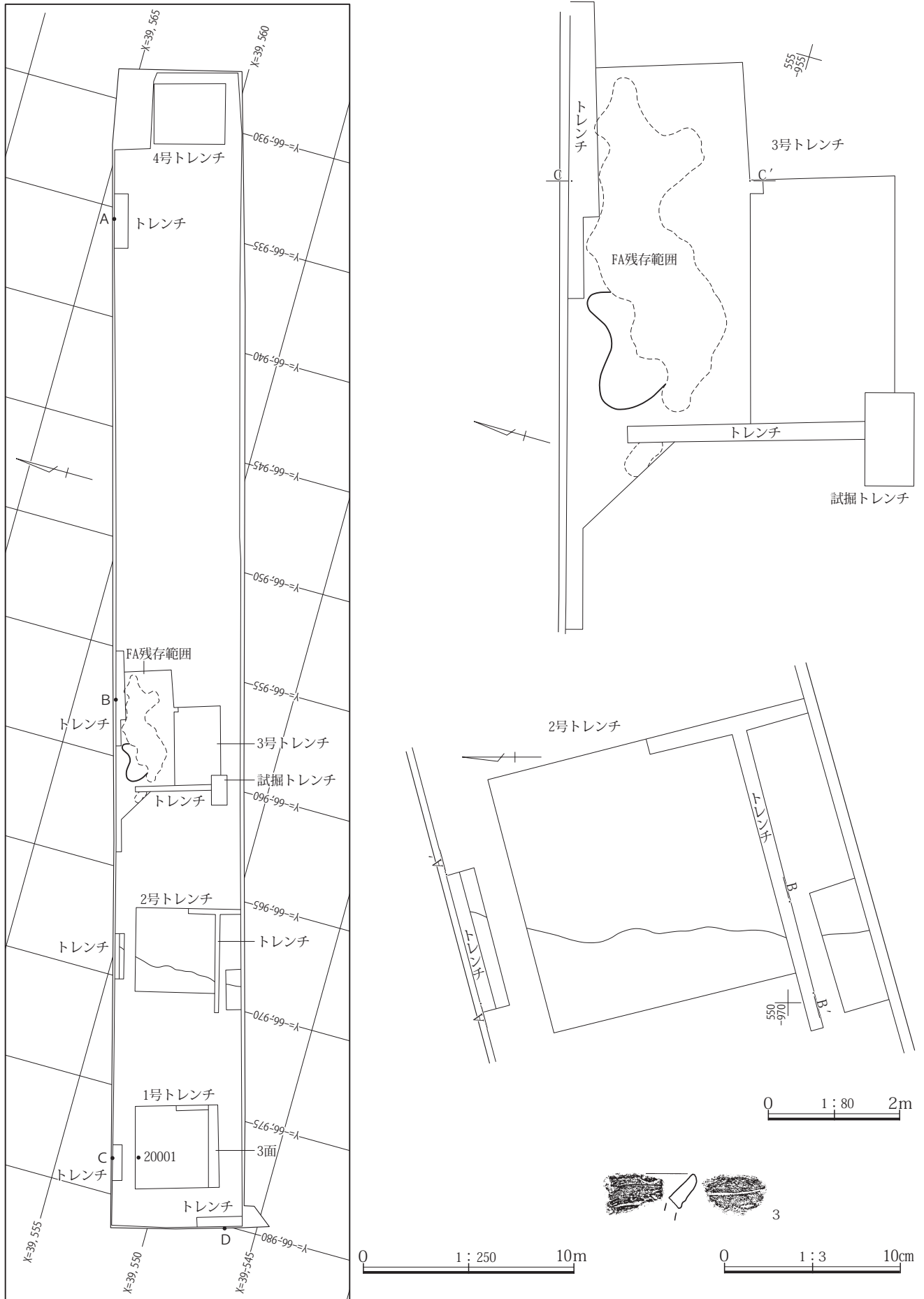
1号溝(A・B共通)

- 1 暗褐10YR3/4 As-Bを含むしまり強い層。基本土層IおよびI'層の土。
- 2 黒褐10YR3/2 As-Bを多量に含む、基本土層II層の土。
- 2' 川砂やパミスの7混入やや多い。
- 3 灰黄褐10YR4/2 As-Bの流れ込み部分。
- 4 As-B上面の灰層。
- 5 As-B軽石層。
- 6 暗褐10YR3/3 基本土層IVa層のしまりある粘性土。

2号溝(A・B共通)

- 1 暗褐10YR3/4 As-Bを含むしまり強い層。基本土層IおよびI'層の土。
- 2 灰黄褐10YR4/2 As-Bの混入多い砂質土層。上側で暗褐色、下側で赤色味をおびた斑鉄多い。ややしまり欠く。
- 2' 粘性土の混入多く、しまり欠く。
- 3 暗褐10YR3/3 2層土と粘性土の不均等な混土。一部でブロック状に混じる。
- 3' 黒色味の強い粘性土。
- 3'' 白色粘土の混入増え、どちらもしまりやや強い。
- 4 黒褐10YR3/2 基本土層IVa層のしまりある粘性土。

第4-9図 1面 1・2号溝平面図、断面図



第4-10図 2面全体図、第2・3トレンチ図、出土遺物

第4章 上佐鳥明神前遺跡

第4-2表 遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口	11.6				
第4-8図 PL.4-4	1	土師器 杯	口縁部1/8				細砂/橙色/良好	器表は摩滅し整形痕はほとんど観察不可能。器壁は薄めで口縁部は内湾気味に立ち上がる。	
第4-8図 PL.4-4	2	須恵器 甕	肩部片				暗灰色粒、細砂少量/灰白色/還元炎	外面は叩き目、内面は同心円状当て具痕残る。頸部の割れ口は、擦って平坦に加工。頸部内面の器表も平滑。	二次加工。
第4-10図 PL.4-4	3	弥生土器 甕	口縁部破片				中量の円磨度の進んだ珪質乳白色岩片・長石・角閃石や少量の赤色・灰白色岩片および輝石・石英の粗・細砂を含むやや緻密な胎土//	幅狭の口縁部がく字状に強く外折し、括れ部に横位の沈線文を施す。また口縁部内面にも同様の横位沈線文を施文。内外面共にやや風化、外面一部に煤状炭化物付着。	弥生中期末～後期初頭

第5節 まとめ

今回の調査で判明したことを列挙して、まとめとしたい。

[近世]

調査区内では土地改良により削平されているが、水田が広がっていたと思われる。江戸時代の肥前磁器が1片出土した。

[中世]

明確に中世とみられる遺構は確認できなかった。As-B軽石の残存状態が良く、該期の生産活動は行なわれていなかったと推定される。2条の溝はAs-B下水田を切って掘られており、中世の所産と考えられる。2号溝出土の須恵器破片は、流れ込みの遺物であろう。

[平安時代末期]

天仁元(1108)年の浅間B軽石(As-B)に覆われた水田跡が西半部で確認されている。畦畔は低く不鮮明で、地形に制約された畦畔とみられる。

[古墳時代]

該期の遺構は確認できなかった。第3トレンチでHr-FAの堆積層を確認したが、水田耕作地となりうる平坦面上での確認ではなく、また水田土壌の確認もできなかった。遺物は摩滅した古墳時代の土師器数片が出土した。

[弥生時代]

わずかに1片であるが、第2面の第1トレンチ内から弥生土器破片が出土している。本遺跡の近傍では北西約1.6kmの鵜島川端遺跡で弥生時代後期の集落が確認されており、本遺跡のごく近くに該期の集落が存在するか、北方の微高地上に営まれた集落から流入した可能性がある。

本遺跡の調査区域の周辺は奈良平安時代の条里水田が広がる地域であるが、調査範囲は端気川に注ぎ込む埋没谷が存在した地点とみられ、比較的起伏のある地形であった。確認した水田も自然地形を利用した谷地水田的なものであった。このことは、河川改修前の端気川右岸(西岸)にある調査地点の位置(第4-3図)からみても、うなづけることである。下層の古墳時代では、明確な水田の痕跡はみられなかった。中世以降、本遺跡近傍は水田耕作が続く地域と推測されるが、土地改良事業によりそれらの痕跡は削平されていた。

報 告 書 抄 録

書名ふりがな	なのかいちじんやあと・なのかいちこふんぐん こばらいせき かみさとりみょうじんまいいせき(まえばししぜろきゅうさんよんいせき)
書 名	七日市陣屋跡・七日市古墳群 小原遺跡 上佐烏明神前遺跡(前橋市0934遺跡)
副 書 名	県立学校施設整備事業(富岡・甘楽地区新高校整備、吾妻地区新高校整備、 前橋商業高等学校第二グラウンド移転整備)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻 次	
シ リ ーズ 名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	653
編 著 者 名	谷藤保彦／大木紳一郎／関晴彦
編 集 機 関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発 行 機 関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20190320
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住 所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2

遺跡名ふりがな	なのかいちじんやあと・なのかいちこふんぐん
遺 跡 名	七日市陣屋跡・七日市古墳群
所在地ふりがな	とみおかし なのかいち
遺跡所在地	富岡市七日市1003、1454-1、1456、1509、1526-1番地、無籍地
市町村コード	10210
遺跡番号	T002・T198
北緯(世界測地系)	361521.911
東経(世界測地系)	1385225.163
調査期間	20160816-20160831、20170401-20170531
調査面積	79㎡、1858㎡、計1937㎡
調査原因	学校建設
種 別	生産／集落
主な時代	古墳／中世／近世
遺跡概要	縄文-土器・石器／古墳-周溝1／中・近世-掘立柱建物2＋土坑40＋墓3＋柵列1＋ ピット134＋井戸2＋溝1＋耕作溝17
特記事項	七日市古墳群の古墳数が新たに1基追加。
要 約	鐙川左岸段丘面に位置する、旧七日市藩陣屋跡内の調査。また、富岡5号墳を含む七日 市古墳群の一画でもあり、新たに古墳1基(周溝)を確認。

遺跡名ふりがな	こばらいせき
遺 跡 名	小原遺跡
所在地ふりがな	あがつまぐん なかのじょうまち おおあざなかのじょう
遺 跡 所 在 地	吾妻郡中之条町大字中之条1303
市町村コード	10421
遺 跡 番 号	1368
北緯(世界測地系)	36.591091
東経(世界測地系)	138.847561
調 査 期 間	20170401-20170430
調 査 面 積	778m ²
調 査 原 因	学校建設
種 別	生産
主 な 時 代	近世～近代
遺 跡 概 要	近代－陶器／近世～近代－溝 4／時期不明－土坑10＋ピット26
特 記 事 項	
要 約	中之条盆地の左岸段丘伊勢町面に掘削された灌漑水路。開削は近世か。

遺跡名ふりがな	かみさとりみょうじんまいいせき(まえばししぜろきゅうさんよんいせき)
遺 跡 名	上佐鳥明神前遺跡(前橋市0934遺跡)
所在地ふりがな	まえばしし かみさとりまち
遺 跡 所 在 地	群馬県前橋市上佐鳥町428、429-2
市町村コード	10201
遺 跡 番 号	前橋市0934
北緯(世界測地系)	36° 21′ 14.87925″
東経(世界測地系)	139° 05′ 13.75725″
調 査 期 間	20180101-20180131
調 査 面 積	426m ²
調 査 原 因	学校建設
種 別	生産
主 な 時 代	平安／中世
遺 跡 概 要	弥生－土器／古墳－土器／平安－水田 1 面／中世－溝 2
特 記 事 項	自然地形を反映した水田跡。
要 約	天仁元(1108)年の浅間山噴火に伴う降下テフラ浅間B軽石(As-B)に覆われた水田跡を検出した。畦畔は不鮮明で、谷地形に制約された水田であった。下層の第1トレンチから弥生土器1片が出土し、第3トレンチでは榛名山Hr-FAテフラを検出したが遺構は確認できなかった。